

熊本城跡発掘調査報告書 2

－本丸御殿の調査－

第1分冊

2016

熊本市熊本城調査研究センター

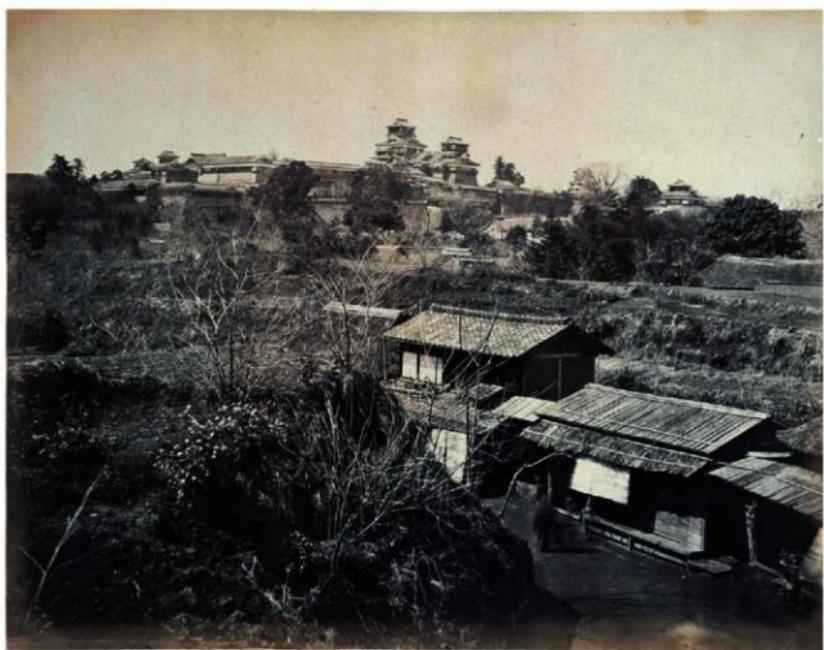
熊本城跡発掘調査報告書 2

－本丸御殿の調査－

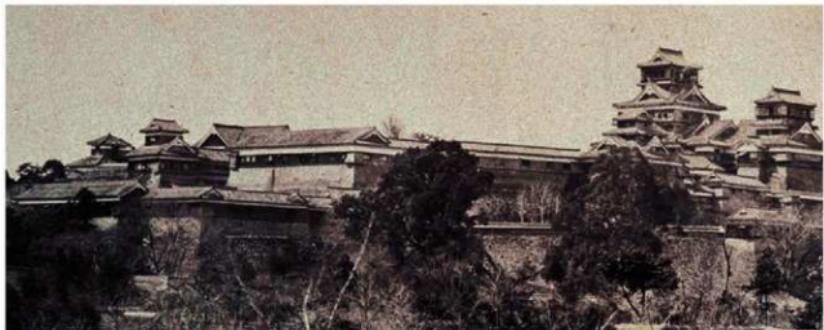
第1分冊

2016

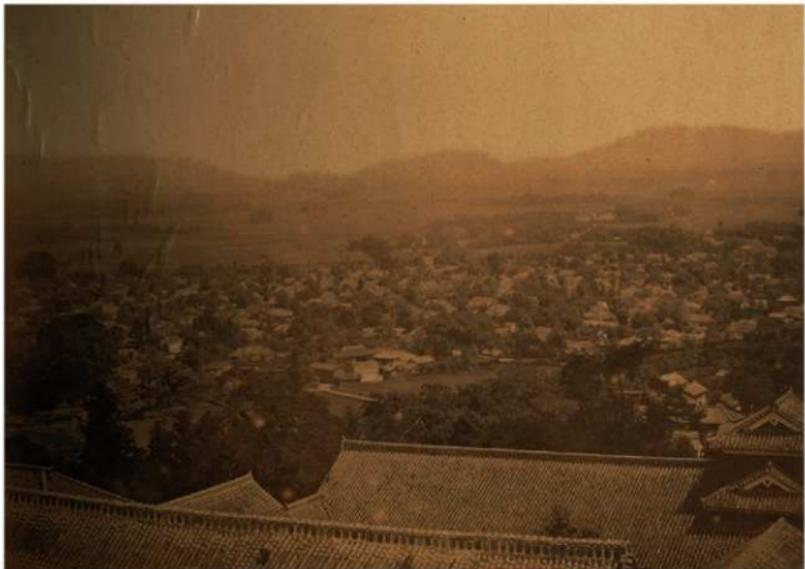
熊本市熊本城調査研究センター



熊本城遠望（長崎大学附属図書館蔵）



御殿部分拡大



熊本城からの景色（1）（長崎大学附属図書館蔵）

※大天守からみた大広間・小広間



復元された本丸御殿

序 文

このたび、熊本城本丸御殿復元整備事業にともなう発掘調査の報告書を刊行いたしました。熊本城調査研究センターが昨年まとめました『熊本城調査研究センター第1集 熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』に次ぐものです。

熊本城は、廃藩置県後の西南戦争では城跡内の建造物の多くが焼失するなどの憂き目に遭いましたが、壮大な石垣群とともに宇土櫓をはじめとする櫓や門、堀などが残る歴史遺産です。学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるものとして評価され、特別史跡熊本城跡として指定を受けており、13の建造物も重要文化財となっています。

石垣・櫓群の保存修理は、西南戦争後も続けられてきました。昭和35年には市民の熱意があつて天守外観が復元され、その後も熊本城跡をより一層理解し易いよう、失われていた歴史的建造物が復元されてきました。現在では、市民や県民に止まらず国内外を問わないう多くの人々が訪れるところとなっております。

言うまでもなく、文化財は保存・整備・活用の三位一体が相まって国民の財産として認識され後世に継承していくものです。修理や整備事業に際しては遺構の埋没状況確認のため発掘調査などの実施が必須であり、学術的な根拠を明らかにするとともに、保存活用のあるべき姿を求めて慎重に進めていく必要があります。

このため、熊本市では平成25年10月に「熊本城調査研究センター」を設置し、当該特別史跡の保存・整備・活用の前提に必要となる基礎的な調査と研究を進めていくこととしております。今年度は別途、石垣保存修理事業にともなう調査の成果も刊行いたします。今後も、縄張り、石垣、歴史的建造物、出土品、古文書、絵図、古写真など、多面にわたる資料を集めて総合的に解析します。熊本城跡の価値をより高めていく作業を積み重ねて後世に継承し、名実ともに日本を代表する歴史遺産として遡く周知ができるように努めていく所存です。

平成28年3月

熊本城調査研究センター

所長 渡辺 勝彦

例　言

1. 本書は、特別史跡熊本城跡復元整備事業の一環である本丸御殿における石垣保存修繕・建造物復元整備事業に伴って実施した発掘調査報告書である。
2. 発掘調査（現場作業・整理作業）は熊本市教育委員会が行なった。報告書作成作業は、平成25年度は熊本市教育委員会の補助執行機関である熊本市観光文化交流局文化振興課が、平成26・27年度は同局熊本城調査研究センターが行なった。
3. 発掘調査期間（現場作業）は、平成11年5月10日～平成18年3月31日である。
4. 発掘調査（現場作業）は金田一精・國武（松村）真紀子（熊本市教育委員会文化財保護主事）が担当した。
5. 整理作業・報告書作成は、熊本城調査研究センター内の作業室において行なった。
6. 現場作業における実測図作成は、金田・國武と、金田・國武の指示のもと調査作業員が行なった。現場における写真撮影は金田・國武が行なった。整理作業における出土遺物の1次分類は、國武の指示のもと整理作業員が行なった。
7. 現場作業における土層の色調表記は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。
8. 座標数値は、国土調査法第II座標系数値である。
9. 整理作業・報告書作成作業における遺構図面・遺物実測図作成は、熊本城調査研究センター職員・文化振興課埋蔵文化財調査室職員・熊本城調査研究センター嘱託職員（竹田知美・村田理恵）と作業員が担当し、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム・株式会社九州文化財研究所・株式会社大信技術開発に業務委託した。
10. 遺物写真は、主として熊本城調査研究センター職員が撮影し、一部を小多信幸（同センター嘱託職員）が撮影した。
11. 出土品のうち動物遺存体の分析を、土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムの沖田絵麻氏に依頼した。出土貝類・植物分析を株式会社パリノサーベイに委託した。出土布類の分析を株式会社吉田生物研究所に委託した。各分析結果を第3分冊に付録として掲載した。
12. 金属製品・炭化材の保存処理は、公益財團法人元興寺文化財研究所・株式会社吉田生物研究所・株式会社葵文化・株式会社イビソクに業務委託した。
13. 図面・写真・出土品は熊本城調査研究センターに保管している。
14. 本書の執筆分担は下記の通りである。

第1章、第3章、第4章、第5章3・4：國武真紀子（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
第2章1・2、第4章、第5章1瓦・6・11：金田一精（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
第2章3、第5章1瓦刻印：木下泰葉（熊本城調査研究センター文化財保護主任）
第2章4、第6章1：鶴嶋俊彦（熊本城調査研究センター文化財保護主幹）
第5章2・7～10・12、第6章2：美濃口雅朗（熊本城調査研究センター文化財保護主幹兼主査）
第5章5：山下宗親（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
第6章3：渡辺勝彦（熊本城調査研究センター所長）
15. 本書の編集は熊本城調査研究センター職員が行なった。
16. 調査に際し、下記の方々・機関よりご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げる（50音順）。

現地調査指導：大田幸博、北垣総一郎、北野 隆、高妻洋成、五味盛重、坂本重義、澤田正昭、島田真祐、
鈴木 翔、高瀬哲郎、坪井清足、服部英雄、平井 壽、水野哲郎、宮崎博司、宮武正登、本中 真
絵図・古写真等の調査・掲載許可：熊本県立図書館、熊本市総務厚生課歴史文書資料室、熊本市立熊本博物館、
熊本大学附属図書館、公益財團法人永青文庫、国立科学博物館、しきはく古地図と城の博物館 富原文庫
富原道晴、長崎大学附属図書館、山口県文書館
報告書作成指導：淺川道夫、天野賢一、石崎俊哉、宇土市教育委員会文化課、牛鶴 茂、及川吉生、扇浦正義、
小川 望、東本雅之、佐賀県立九州陶磁文化館、狹川真一、佐藤浩司、鶴谷和彦、下関市教育委員会、
東京工業大学百年記念館、東坂和弘、富田紘一、乗岡実、道家達将、山崎信二、吉田 寛、渡辺芳郎

（以上敬称略）

目 次

本文

第1章 序説

1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査組織	1
3. 調査の経過	2

第2章 位置と環境

1. 地理的環境	6
2. 歴史的環境	10
3. 文献資料による熊本城跡本丸御殿	17
4. 本丸の曲輪と石垣	45

第3章 調査の方法

1. 調査の方法	66
2. グリッドの設定	66
3. 基本層序	70

第4章 調査の成果 1 遺構

第1分冊（本書）

第5章 調査の成果 2 遺物

1. 瓦	1
2. 陶磁器類	97
3. 建築金物・調度金物・その他 1	181
4. 近世武器	182
5. 近代武器・軍用品	239
6. 有機質製品	264
7. ガラス製品（容器）	267
8. 板（窓）ガラス	274
9. 石製品	279
10. 中世石造物	294
11. 動物遺存体	296
12. 銭貨	297

第6章 まとめ

1. 遺構	340
2. 遺物	343
3. 本丸御殿の建築史的評価	368

第2分冊

付編

1. 熊本城跡（飯田丸・本丸御殿）出土動物依存体の分析	1
2. 熊本城跡本丸御殿出土遺物の自然科学分析調査	21
3. 熊本城跡本丸御殿出土布の材質調査	49
写真図版	65
報告書抄録	141

第3分冊

挿図目次

第1図	復元・整備建物の概要	3	第40図	遺構実測図6	大広間断面図4	83
第2図	熊本市全図	4	第41図	遺構実測図7	大広間平面図3	84
第3図	熊本市周辺の地質図	5	第42図	遺構実測図8	大広間断面図5	84
第4図	金峰火山の地質と採石推定地	7	第43図	遺構実測図9	大広間断面図6	85
第5図	熊本市域の山地分布図	7	第44図	遺構実測図10	大広間立面図1	86
第6図	熊本城周辺図	8	第45図	遺構実測図11	大広間平・断面図1	87
第7図	熊本城築城以前の景観推定図	9	第46図	遺構実測図12	大広間平・断面図2	88
第8図	「茶臼山ト隈本之絵図」	10	第47図	遺構実測図13	二様石垣トレンチ位置図	89
第9図	周辺遺跡位置図	12	第48図	遺構実測図14	二様石垣トレンチ	90
第10図	城内調査地点	13	第49図	大広間北側全体図		91
第11図	「肥後筑後城図」	20	第50図	遺構実測図15	大広間北側平面図1	92
第12図	「熊本屋舗割下絵図」	21	第51図	遺構実測図16	大広間北側断面図1	93
第13図	「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」	22	第52図	遺構実測図17	大広間北側平面図2	93
第14図	「御城内御絵図」	23	第53図	遺構実測図18	大広間北側断面図2	94
第15図	昭和36年写「御城内御絵図」	26	第54図	遺構実測図19	大広間北側平・断面図1	94
第16図	「御城図」	28	第55図	遺構実測図20	大広間北側平面図3	95
第17図	「御城御玄関之図」	32	第56図	遺構実測図21	大広間北側断面図3	96
第18図	「旧熊本城間ガリ 第六師団本部石垣崩壊之景」		第57図	遺構実測図22	大広間北側断面図4	97
		36	第58図	遺構実測図23	大広間北側平・断面図2	97
第19図	本丸主要石垣の位置図	48	第59図	遺構実測図24	大広間北側平・断面図3	98
第20図	本丸主要石垣写真（1）	55	第60図	遺構実測図25	九曜之間地下平面図	99
第21図	本丸主要石垣写真（2）	56	第61図	遺構実測図26	九曜之間地下断面図	100
第22図	本丸主要石垣写真（3）	57	第62図	遺構実測図27	九曜之間地下石垣立面図1	
第23図	本丸主要石垣写真（4）	58				101
第24図	本丸主要石垣略図（1）	59	第63図	遺構実測図28	九曜之間地下石垣立面図2	
第25図	本丸主要石垣略図（2）	60				102
第26図	調査区（主要部）位置図	66	第64図	大御台所全体図		104
第27図	「御城内御絵図」	67	第65図	遺構実測図29	大御台所平面図（近世）	105
第28図	遺構復元図	67	第66図	遺構実測図30	大御台所平面図（近代以降）	106
第29図	広域グリッド配置図	68	第67図	遺構実測図31	大御台所断面図1	107
第30図	調査区・グリッド配置図	69	第68図	遺構実測図32	大御台所断面図2	108
第31図	土層模式図	70	第69図	遺構実測図33	大御台所断面図3	109
第32図	調査区全体図	71	第70図	遺構実測図34	カマド実測図	110
第33図	調査区名と掲載順序及び遺構名	72	第71図	遺構実測図35	南西石階段第1面	111
第34図	大広間全体図	77	第72図	遺構実測図36	南西石階段第2面	111
第35図	遺構実測図1 大広間平面図1	78	第73図	遺構実測図37	南西石階段第3面	112
第36図	遺構実測図2 大広間平面図2	79	第74図	御小姓部屋全体図		116
第37図	遺構実測図3 大広間断面図1	80	第75図	遺構実測図38	御小姓部屋平面図1	117
第38図	遺構実測図4 大広間断面図2	81	第76図	遺構実測図39	御小姓部屋断面図1	118
第39図	遺構実測図5 大広間断面図3	82	第77図	遺構実測図40	御小姓部屋断面図2	119

第78図	遺構実測図41 SKⅢ104 SJⅢ021・022	120	第112図	遺構実測図71 間り通路南北断面図	2
第79図	遺構実測図42 SJⅢ023～026	121		151
第80図	遺構実測図43 御小姓部屋平面図	2	第113図	遺構実測図72 間り通路南北断面図	3
第81図	遺構実測図44 御小姓部屋断面図	3	第114図	遺構実測図73 間り通路南北断面図	4
第82図	遺構実測図45 御小姓部屋断面図	4	第115図	遺構実測図74 間り通路南北断面図	5
第83図	遺構実測図46 旧石垣立面図	124	第116図	遺構実測図75 間り通路南北立面図	1
第84図	耕作柵御門・間柵御門間平面図	125	第117図	遺構実測図76 間り通路南北立面図	2
第85図	遺構実測図47 瓦敷き遣構	126	第118図	遺構実測図77 間り通路南北立面図	3
第86図	遺構実測図48 耕作柵御門・間柵御門間断面図	127	第119図	遺構実測図78 間り通路南北立面図	4
第87図	間り通路全体図	132	第120図	遺構実測図79 間り通路南北立面図	5
第88図	遺構実測図49 間り通路土層図	132	第121図	間り通路東側全体図	
第89図	遺構実測図50 間り通路(西側)平面図	133		160
第90図	遺構実測図51 炭化材出土状況	1	第122図	遺構実測図80 間り通路東炭化材等出土状況	1
第91図	遺構実測図52 炭化材出土状況	2	第123図	遺構実測図81 間り通路東炭化材等出土状況	2
第92図	遺構実測図53 間り通路基礎石検出状況	1	第124図	間り通路東土層断面図	135
第93図	遺構実測図54 間柵御門周辺	136	第125図	遺構実測図82 遺物出土状況	136
第94図	遺構実測図55 間柵御門断面図	1	第126図	遺構実測図83 間り通路東平面図	1
第95図	遺構実測図56 間り通路立面図	1	第127図	遺構実測図84 間り通路東断面図	1
第96図	遺構実測図57 間り通路平面図	1	第128図	遺構実測図85 間り通路東平面図	2
第97図	遺構実測図58 間り通路断面図	2	第129図	遺構実測図86 間り通路東断面図	2
第98図	遺構実測図59 間り通路平面図	2	第130図	間り通路東立面図位置図	138
第99図	遺構実測図60 間り通路断面図	3	第131図	間り通路東立面図	1
第100図	遺構実測図61 式台平面・断面図	140	第132図	遺構実測図87 間り通路東立面図	2
第101図	遺構実測図62 式台断面図	141	第133図	遺構実測図88 間り通路近現代排水溝	142
第102図	遺構実測図63 御玄関平面図	142	第134図	長之間全体図	143
第103図	遺構実測図64 四辻開御門炭化材出土状況		第135図	遺構実測図89 長之間平面図	144
	143	第136図	遺構実測図90 長之間断面図	145
第104図	炭化材実測図	143	第137図	遺構実測図91 長之間断面図	2
第105図	遺構実測図65 C面立面図	144	第138図	遺構実測図92 長之間立面図	1
第106図	遺構実測図66 D面立面図	145	第139図	遺構実測図93 長之間立面図	2
第107図	間り通路南北平面図	1	第140図	露地全体図	146
第108図	遺構実測図67 間り通路南北炭化材出土状況	147	第141図	遺構実測図94 露地上坑群(近代以降)	
第109図	遺構実測図68 間り通路南北平面図	2		148
	149	第142図	遺構実測図95 露地建物群(近代以降)	
第110図	遺構実測図69 間り通路南北平面図	3		177
	149	第143図	遺構実測図96 SXⅡ002・SXⅢ078	178
第111図	遺構実測図70 間り通路南北断面図	1	第144図	西廊下全体図	
	150	第145図	遺構実測図97 西廊下断面図	1
			第146図	遺構実測図98 西廊下断面図	2
					181

第147図	小広間全体図	185
第148図	遺構実測図99 小広間遺構配置図	186
第149図	遺構実測図100 小広間断面図1	186
第150図	遺構実測図101 小広間断面図2	187
第151図	遺構実測図102 小広間遺構配置図2	188
第152図	遺構実測図103 小広間断面図3	188
第153図	遺構実測図104 小広間断面図4	189
第154図	小広間穴蔵	190
第155図	遺構実測図105 小広間断面図5	191
第156図	遺構実測図106 SJⅢ001・002	192
第157図	遺構実測図107 SXⅢ049周辺	193
第158図	遺構実測図108 小広間断面図6	194
第159図	遺構実測図109 三階御槽付近	195
第160図	遺構実測図110 三階御槽断面図1	196
第161図	遺構実測図111 三階御槽平面図	197
第162図	遺構実測図112 三階御槽断面図2	198
第163図	遺構実測図113 三階御槽揮石撤去後	198
第164図	遺構実測図114 三階御槽断面図3	199
第165図	遺構実測図115 石垣立面・断面図	199
第166図	遺構実測図116 SDⅢ027	200
第167図	長局御槽全体図	202
第168図	遺構実測図117 長局御槽平面図(北)	203
第169図	遺構実測図118 長局御槽平面図(南)	204
第170図	遺構実測図119 長局御槽断面図1	205
第171図	遺構実測図120 長局御槽断面図2	206
第172図	遺構実測図121 長局御槽炭化材出土状況1	207
第173図	遺構実測図122 長局御槽炭化材出土状況2	208
第174図	刀剣類出土状況	209
第175図	遺構実測図123 長局御槽立面図	210
第176図	遺構実測図124 SBⅢ01・014, SKⅢ05・076	211
第177図	御天守廊下 調査区位置図	213
第178図	遺構実測図125 御天守廊下平面・断面図	214
第179図	月見御台所トレンチ	215
第180図	遺構実測図126 月見御台所断面図	216
第181図	遺構実測図127 トレンチ位置図	219
第182図	遺構実測図128 F81-66トレンチ	220
第183図	遺構実測図129 F82-63トレンチ	221
第184図	遺構実測図130 F86-63トレンチ	222
第185図	遺構実測図131 F87-63トレンチ	222
第186図	遺構実測図132 F89-63トレンチ	223
第187図	遺構実測図133 F93-63トレンチ平面図	223
第188図	遺構実測図134 F93-63トレンチ断面図1	224
第189図	遺構実測図135 F93-63トレンチ断面図2	225
第190図	本丸一帯焼失状況	226

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	11
第2表	熊本城年表	37
第3表	本丸主要石垣観察表	54
第4表	小穴一覧表	221
第5表	遺構一覧表	227

第1章 序説

1. 調査にいたる経緯

熊本城跡では、昭和25年に現存する宇土櫓を含む13棟の建造物が国の重要文化財に（昭和8年には旧法による国宝指定済み）、昭和30年には城域約98haのうち約51.2haが特別史跡に指定されている。史跡指定範囲の大部分は昭和43年に計画決定された都市公園区域（56.3ha）とも重なるため、史跡内の保存整備事業は文化庁、国土交通省（旧建設省）、熊本県教育庁の指導・補助を受けて実施している。

史跡の保存管理については、昭和57年度に「特別史跡熊本城跡保存管理計画」を策定しており、城域内の環境整備は特別史跡としての熊本城跡を良好な状態で保存していくことを最優先に考え、残存する遺構の維持保存だけでなく、城域の境界を明確にするために石垣や堀の積極的な復元なども行うべきであるとまとめている。また、平成9年度には「熊本城復元整備計画」を策定し、地域の貴重な歴史遺産であり文化の象徴でもある熊本城跡の価値をより一層高めるため、歴史的建造物の保存と復元、都市のうるおい空間としての環境整備、サービス空間の創出、この3つを基本方針として、城域全体を対象に史実に基づいた建造物・遺構の復元・修理を行うことを決定した。この「復元整備計画」は短期・中期・長期に分けて進められており、短期スケジュールの第1期では西出丸（奉行丸）一帯を対象に復元整備工事と事前の発掘調査が実施された。続く短期スケジュール第2期の整備対象地区は飯田丸一帯で、五階御櫓の復元と共に石垣の孕みが著しい箇所や明治初期に撤去された部分の石垣解体修理および復元整備工事が行われている。

今回報告する発掘調査は、短期スケジュールの最終段階となる第3期の本丸御殿一帯復元整備事業に伴うものである。本丸中枢部の規模及び景観を再現するため、本丸御殿一帯の発掘調査を実施した。発掘調査後、石垣保存修理を行い、大広間・大御台所・数奇屋等の建造物復元を中心として残存遺構の保存修理及び平面表示等の環境整備を実施している。

2. 調査組織（平成11～27年度）

市長 三角保之（～平成14年）
幸山政史（平成14年～26年）
大西一史（平成26・27年）

○経済振興局 熊本城総合事務所（平成22年度まで）

所長 今村克彦 岡本 央 重村和征 古川泰通 濱田裕介 中島博幸 落合 健
整備振興課（平成15年度まで）

課長 藤山正文 田代 裕

復元整備班

技術主幹・参事	宮川秀樹	坂哉隆史	西川公夫	下田誠至
庶務担当	吉村直敏	金子孝子	橋本繁	

復元班（平成16年度）

主査	下田誠至
技師	大津仁哉

整備振興室（平成17～19年度）

室長	津曲俊博
技術主幹	西川公夫
主査	下田誠至
技師	大津仁哉

整備班（平成20～22年度）

主査	下田誠至
技術参事	古賀丈晴
教育長	永山 博 小牧幸治 廣塚昌子
○教育委員会文化財課（平22年度まで）	
課長	鶴野 敬 富田紘一 今村康彦 河田日出男
技術参事	西川公夫
埋蔵文化財係長	村田忠久 米田 修 宮崎由之
庶務担当	國武雅春 竹田理恵 江津千津子 山田紀枝 石田雄一郎 鬼塚直子
発掘調査・整理作業担当	金田一精 國武真紀子

○觀光文化交流局（平成23年4月1日より）

局長	坂本 純 西島徹郎
次長	多野春光 木下修一 中原裕治 田上聖子 津曲俊博
文化振興課長	河田日出男 松石龍太郎 濱田安拡
副課長	網田龍生
技術主幹	西川公夫

熊本城総合事務所（平成23年度より）

所長	松本祐一 勝谷仁雄 岩岡博文
整備班	
主査	古賀丈晴
技術参事	源 健二
主任技師	本田宗之 中田道夫
埋蔵文化財調査室長	宮崎由之 清田 稔
庶務担当	石田雄一郎 堀坂太朗
発掘調査・整理作業担当	國武真紀子

熊本城調査研究センター（平成25年10月1日発足）

所長	清田 稔 田上聖子 渡辺勝彦
副所長	河田日出男
文化財保護主幹	鶴嶋俊彦
文化財保護主幹兼主査	美濃口雅朗
主査	古賀丈晴
主任主事	益田知子（庶務担当）
主任技師	田代純一
報告書作成担当	金田一精 國武真紀子 山下宗親 木下泰葉

3. 調査の経過

(1) 発掘調査

平成11年5月10日	本丸御殿大広間より発掘調査開始
平成12年4月～	西廊下（小広間）
平成13年1月～	小広間

9月～	大御台所・御小姓部屋
11月～	小広間三階御櫓
平成14年3月～	長之間
5月25・26日	現地説明会
7月～	月見御台所
10月～	間り通路
平成17年6月～	長局御櫓
平成18年3月31日	発掘調査終了
(2) 整理作業	
平成11年5月～	西出丸作業室で作業開始
平成17年12月～	三の丸作業室で作業開始
(3) 報告書作成作業	
平成27年1月～	遺構・遺物実測図選別・トレース
平成27年4月～	原稿執筆
平成27年12月	編集
平成28年3月31日	刊行

熊本城復元整備の概要

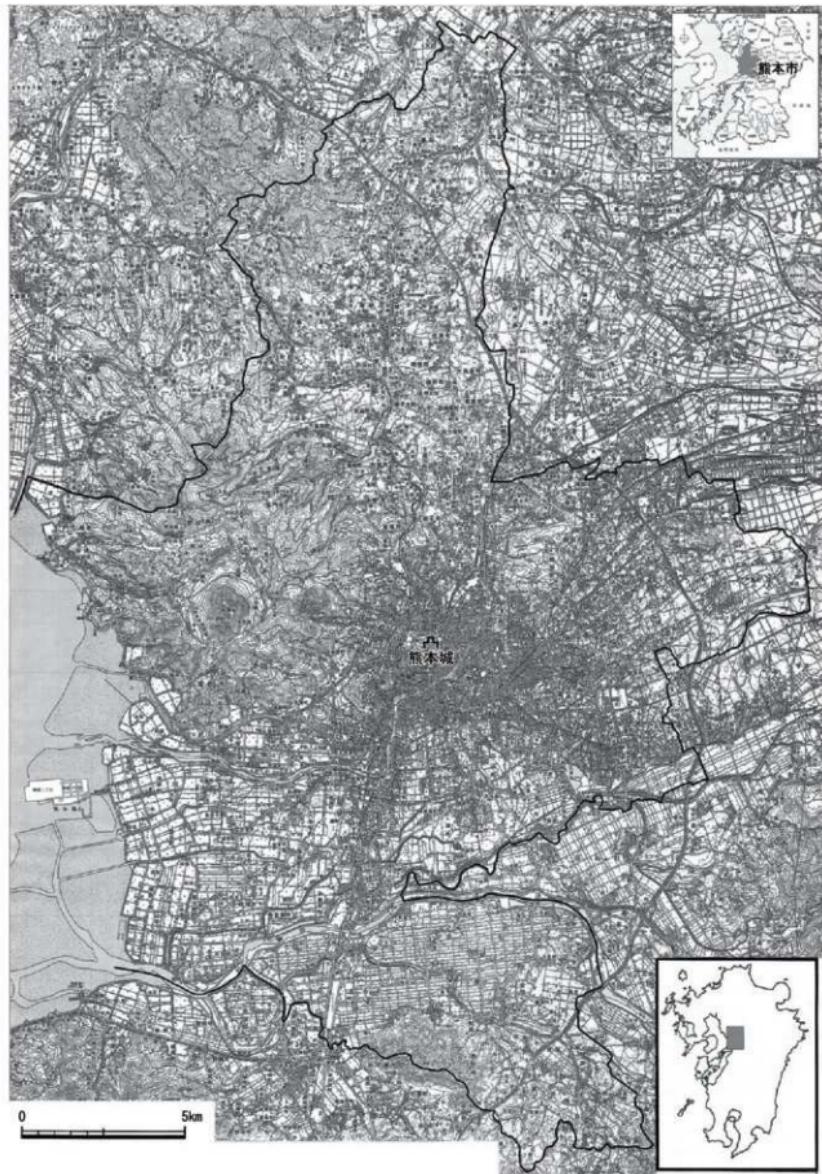
熊本城復元整備計画は、現期・中期・長期に分けて進められており、短期的には、復元400年にあたる平成19年(2007)を目指して、本丸御殿大広間をはじめ、西出丸一帯の建造物(虎ま縁、元太群縁、表中縁、南大手門、堀)喜田丸五輪塔の整備を行った。中でも、本丸御殿大広間の復元整備は短中期計画における大きな節目となるものである。



大広間棟	一重一階、木造、入母屋造、本瓦葺	宇土櫓	北十八間櫓
大台所棟	一重一階、木造、入母屋造、本瓦葺	源之進櫓	五間櫓
数寄屋棟	一重一階、木造、入母屋造、本瓦葺	四間櫓	不開門
小姓部屋裏下棟	一重一階、木造、切妻造、本瓦葺	十四間櫓	平櫓
玄関棟	一重一階、鉄骨造、數寄造、漆板葺	七間櫓	監物櫓(二の丸監物台根木内)
多目的便所棟	一重一階、木造、片流れ、漆板葺	田子櫓	長櫓
		東十八間櫓	

第1図 復元・整備建物の概要

第2章 位置と環境



第2図 熊本市全図（1／15,000）

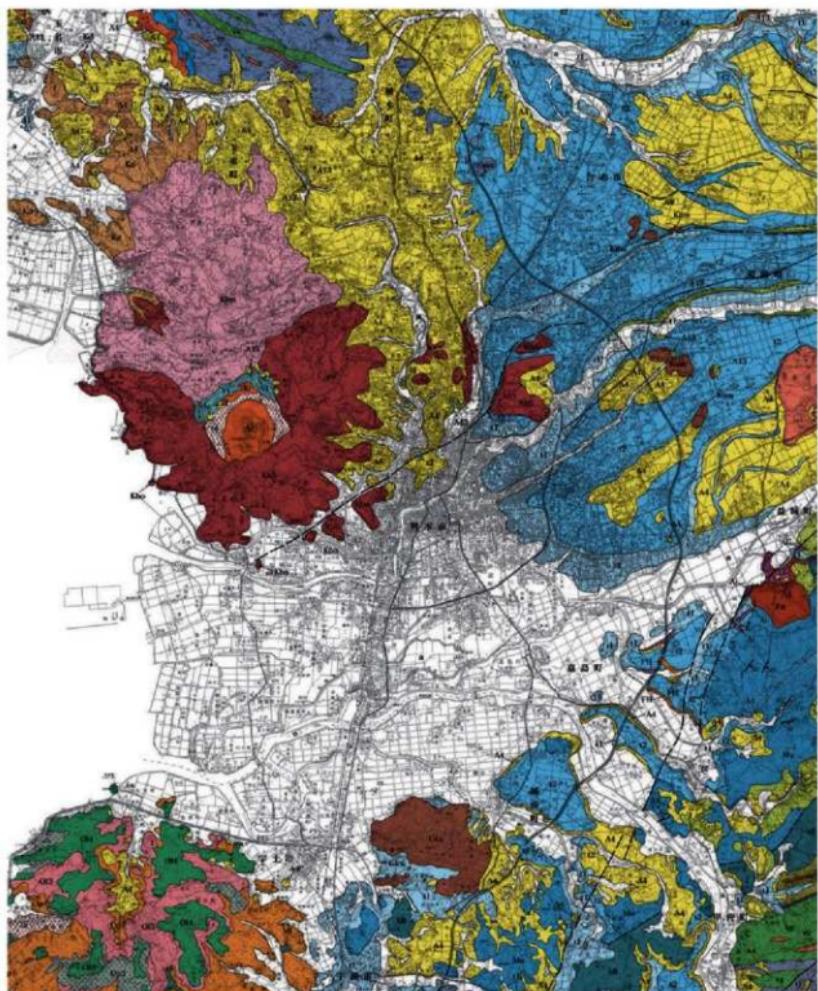


Fig. 熊本市周辺の地質図 熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

A4：阿蘇-4火砕流堆積物 Kbo：金峰火山古期噴出物 A13：阿蘇-1～3火砕流堆積物 II：低位段丘堆積物 I2：中位段丘堆積物
 IG：金峰火山新期堆積物 Ys：芳野層 ta：麗鍊堆積物 Kbm：金峰火山中期噴出物 Kum：熊本層群 A1：赤井次山（鏡川溶岩）
 Mu：御船層群上部層 FH：布田層・花房層 M1：御船層群下部層 vg：苦鉄質火山岩類 cc：結晶質チャート um：粗苦鉄質岩類
 Gks：雁田山層 O11：大岳古期輝石安山岩溶岩 O13：大岳新期角閃石安山岩溶岩 O14：大岳新期輝石安山岩溶岩
 Opl：大岳新期角閃石安山岩火砕岩 Opl2：大岳新期輝石安山岩火砕岩

第3図 熊本市周辺の地質図

1. 地理的環境

(1) 概要

熊本市は、熊本県の県庁所在地として発展し、平成20年に富合町・平成22年に植木町・城南町と合併した結果、人口が73万人に達し政令指定都市となった。この合併により市域は格段に拡大し、面積は、熊本県の5.3%にあたる約390km²を占めている。以下に、熊本城跡周辺を中心に熊本市域の地勢について概観する。

市域は大きく分けて、有明海と内陸部を隔てている中央西側の金峰山塊、市域南西側にあって有明海に望み、台地と山地で縁どられた広大な熊本平野、北部・東部・南部にかけての台地（火碎流台地・河岸段丘）、で構成される。市域には、東西に貫流する白川、南東から東西に貫流する緑川の水系があり、熊本平野に望む台地は両水系によって開析され、活発な沖積作用により熊本平野は形成された。

東部の台地は、先端の熊本平野から東方へ向かって高度を増し、阿蘇外輪山西側斜面へと続く。北側の台地も熊本平野から北へ向かってやや高度を増しながら続き、国道208号線・県道30号線付近を境に高度を下げて、山鹿盆地・玉名平野に望む。先の道路付近が分水境界となり、境界から北側は木葉川や合志川などの菊池川水系の河川に開析されている。

熊本城跡遺跡群は、通称京町台地先端の茶臼山に立地する。この台地は、阿蘇火山起源の火碎流堆積物が基盤をなす。阿蘇火山からの大規模な火碎流は、数万年の間隔をおいて4回起り、最大規模であった約9万年前といわれる最後の火碎流（Aso-4、以下Aso-4）が熊本平野周辺を覆っている。京町台地より東側の台地は、さらにAso-4以後の砂礫層に覆われているが、この砂礫層は京町台地までは到達していない。このため、京町台地を含めて金峰山塊までの間はAso-4の端部の様相を呈し、火碎流が金峰山塊にのし上げた格好になるため、噴出源である阿蘇火山に対して逆傾斜になる。火碎流は花岡山にも到達し、その先是沖積平野の下に潜っている。この火碎流による堆積物は、深い部分では溶結し硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分は溶結が進まず軟質の非溶結凝灰岩となる。

Aso-4の後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、熊本市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰に覆われる。火山灰層の上部は腐食の集積した黒土層で、黒ボクと呼ばれ現在の表土となる。下部は粘性の強い褐色土で赤ボクと呼ばれる。黒ボクの下位には、約29000～26000年前とされる鹿児島湾の始良大噴火に起因する始良Tn火山灰が混入し、肉眼でもガラス火山灰を観察できる。その上には、明るい色調が特徴の鬼界カルデラの噴火に起因するアカホヤ火山灰（約7300年前）もみられ、遠隔地の火山活動による火山灰が人類史を区分する鍵層となっている。

火碎流堆積物と火山灰によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芹川とその支流により開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びる。河川の浸食は、非溶結凝灰岩だけでなく溶結凝灰岩も樹枝状に解析し、京町台地は急崖に縁どられる特徴的な地形を呈している。台地の表面の起伏は弱く、基盤である火碎流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至る。

(2) 金峰山塊の岩質（第4・5図）

熊本城跡の石垣の大半は輝石安山岩である。これは金峰山塊で産出される安山岩の一つで、立地も含めて考慮すれば金峰山塊が主産地であることは容易に想定される。実際に、矢穴の痕が残る転石も確認されている。以下に石垣石材の生成に絡む金峰山塊について記す。

金峰山塊は、一つの大きな成層火山ではなく、多くの火山の集合体である。火山の活動は2期に大別され、古期噴出物としては、80～120万年前の活動による松尾山火山岩類・古期金峰火山岩類・石神山火山岩類があり、新期噴出物としては、三ノ岳火山岩類・二ノ岳火山岩類・カルデラ形成後に成長した一ノ岳（中央火口丘）火山岩類がある。古期噴出物の岩質は、玄武岩・輝石安山岩・角閃石安山岩など多様であ

り、うち、角閃石を少量含む輝石安山岩が主体をなす。これは、粘性の強い溶岩噴出によつて生成されたもので、肌理が細かく、また割るのにも適していることから、加工石材として現在も広く利用されている。現在の安山岩類の採掘場は、古期噴出物から形成される地域、すなわち外輪部の南東・南・西側で数箇所が知られる。

外輪部とはやや離れるが、地質的に同質の火山噴出物で構成された丘陵がみられる（第5図）。岩倉山・立田山・花岡山・万日山・独鉛山・城山・御坊山で、北東・南西方向に並び、南西になるにつれて、順次、面積・高さ度が小さくなる。この丘陵群は、西側・北東側斜面が急であるのに対して、東側・南西側斜面が緩やかな非対称な断面形を呈する傾向を示す。これは丘陵群にそって立田山断層が存在することに起因しており、本来、外輪部であった丘陵群が断層活動によって金峰山塊から切り離されたためと考えられている。熊本城が立地する茶臼山もこの並び上に当たる。現状では安山岩の露頭はみられないが、昭和35年の天守閣復元工事に先立つボーリング調査で、天守東側地下約36mに安山岩層が存在することが確認されている。先述の丘陵群と同様に金峰山塊から切り離された後で火碎流に覆われ小高い地形になった可能性もある。

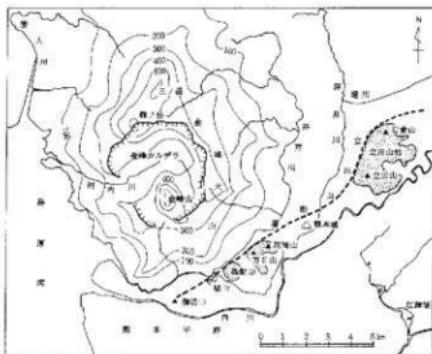
立田山断層は、熊本城の北側付近を走ると想定されている。城内と京町を分ける新堀も、立田山断層に起因する丘陵の陥没部を利用したとされ、京町台地と茶臼山丘陵を分ける高低差もこの断層によるずれとも考えられている。なお、地質図（第3図）によれば津浦・高平・徳王付近にも同質の噴出物が表示されている。

熊本城石垣の石取場の推定については、富田敏一氏の研究がある。これによれば、石垣採石により地形が大きく変化している可能性が高いことから、大量の熊本城石垣の供給を賄い得た場所として、坪井川河口付近の要江・近津を主要採掘地の有力候補としている（富田2007）。この他、岩石学的成果の援用、「肥後国誌」等の伝承、矢穴の痕跡を認める転石などの存在から、石神山・花岡山・独鉛山・百貫石付近などを採石地として紹介している。



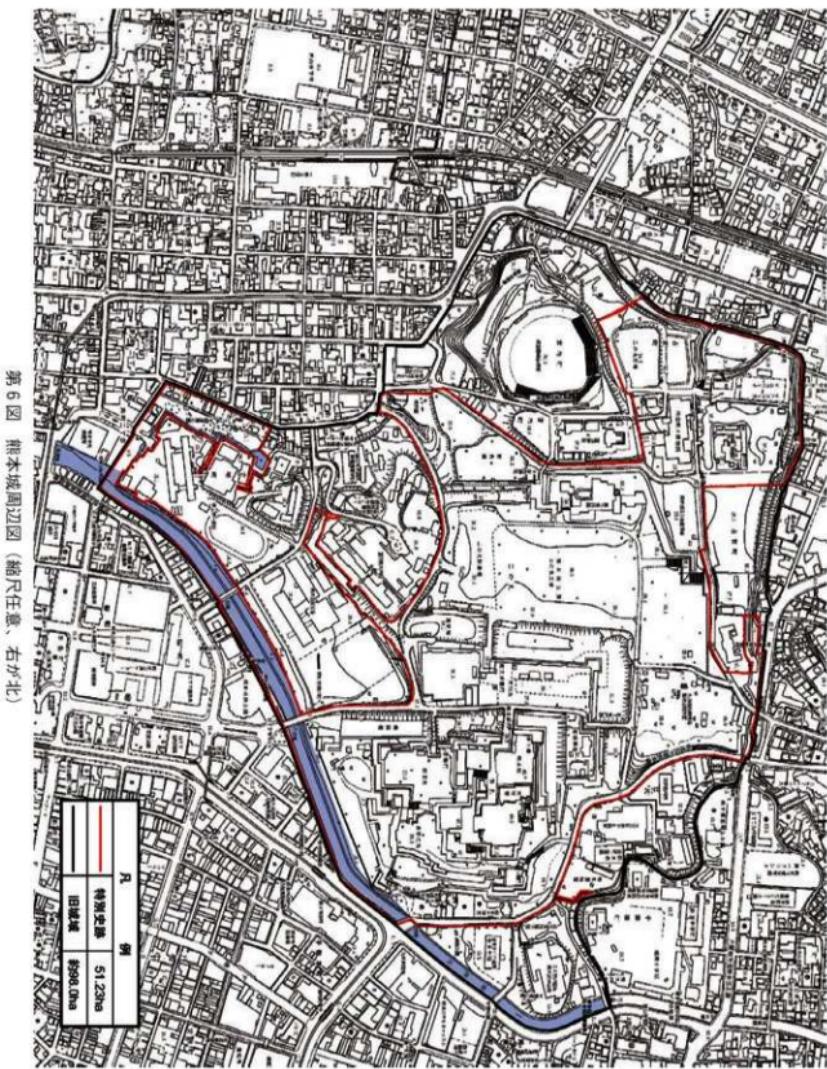
第4図 金峰火山の地質と採石推定地図（縮尺任意）

※渡邊一郎（熊本市1998）より加筆転載



第5図 熊本市民域の山地分布図（縮尺任意）

※渡邊一郎（熊本市1998）より転載



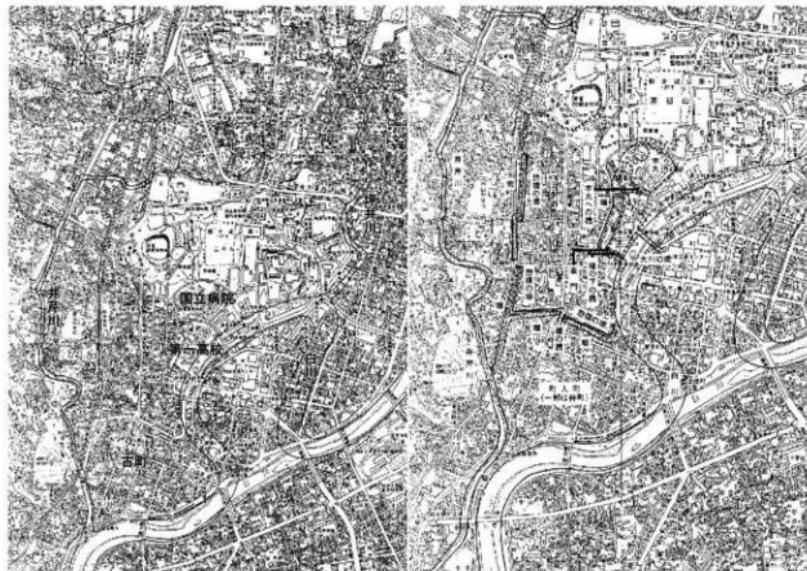
第6図 熊本城周辺図（縮尺任意、右が北）

(3) 熊本城跡の地形（第7図）

京町台地の先端は、現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなり、古来から茶臼山とも呼ばれていたように独立丘陵状を呈する。平面形は、解析による大小の弧の連続で構成されており、全体としては現在の熊本県立第一高等学校（以下、第一高校）を要とし、東の千葉城、西の段山を両端とした扇形の地形を呈する。京町台地の特徴的な崖地形が随所にみられ、第一高校グランド、藤崎台球場南側、清爽園などの崖面にAso-4火碎流堆積土の非溶結凝灰岩露頭がみられる。

崖面の形成は、河川により削られたものだが、富田紘一氏の研究成果（富田1996）によれば、熊本城築城時、白川も京町台地に接して流れていたとされる（第7図）。氏は、慶長国絵図などをもとに、現在熊本城跡の南を流れる白川が、世継橋から北側へ大きく蛇行し、市役所付近で坪井川と合流していく、これを17世紀初頭に加藤清正が白川を直線化し、現在の流路に付け替えたとする。氏の旧白川跡想定地には、現在でも崖地がみられる。この河川の流路変化と合わせて城内の南崖面を概観すると、第一高校のグランドに面した崖面、国立病院機構熊本医療センター（以下、国立病院）と熊本西税務署の間の段差、桜の馬場と奉行丸の間の段差、東竹之丸の高石垣と連続した高低差の大きい弧状の地形は、白川・坪井川の浸食面であった可能性を想定できる。実際、桜馬場の発掘調査や第一高校校長官舎建設に伴う発掘調査の際に、流路であった部分を2~5mほどの厚さで埋め立てていることが確認されている。本来は、白川に削られた崖面が連続していたのであろう。飯田丸は、浸食面と思われる地形の一部に当たると思われるが、郭はやや南へ突出した地形となっている。

築城前の旧地形を知る資料としては、「茶臼山ト隈本之絵図」（第8図）がある。築城前の地形が独立丘陵状に描かれ、「クワンノン堂」など築城前の土地利用状況を示している。しかし、先の白川の蛇行の表



河川の原流路推定

（富田紘一（2000）より転載）

第7図 熊本城築城以前の景観推定図（縮尺任意、上が北）



第8図 「茶臼山ト隈本之絵図」

現も無く、この絵図がいつ頃に描かれたものかわかつてない。ただ旧地形は、この絵図にあるように、現在の本丸付近を最高所として東には急に、西へは緩やかに下がる地形であった。

2. 歴史的環境

(1) 周辺遺跡の概要（第9図、第1表）

熊本城跡の土地利用の概略としては、古代から中世に国府所在地である二本木遺跡群と各所へ向かう官道などの交通の要所、中世の寺院、戦国期の城を経て、近世城郭の築城となり、近代の軍用地を経て現在に至る。城下町は、中世までの国府を核とした二本木遺跡群の町屋・寺院を、加藤清正が古町に移して隈本城時代の城下町と融合し、現在に至る。

以下に、熊本城跡群周辺の旧石器時代～中世について、時代ごとに記す。

市域における旧石器時代の遺跡は、金峰山麓・立田山麓にみられ、山麓から派生する丘陵裾部でも近年出土例が増加している。第9図に示した熊本城周辺ではまだ出土例がない。

縄文時代の遺跡は、金峰山丘陵裾部に濃密に分布する。特に後晩期の遺跡が多く、井岸川上流には太郎追遺跡や四方寄遺跡など著名な遺跡もある。熊本城跡遺跡群周辺では、二本木遺跡群で中期から晩期の土器・石器、京町台遺跡で晩期の遺物、熊本城跡遺跡群の西縁部に当たる段山遺跡で打製石斧や磨製石斧が採集されている。また、今回報告の調査で、熊本城天守閣南の地蔵門の脇から縄文時代後期の土器片がまとまって出土している。

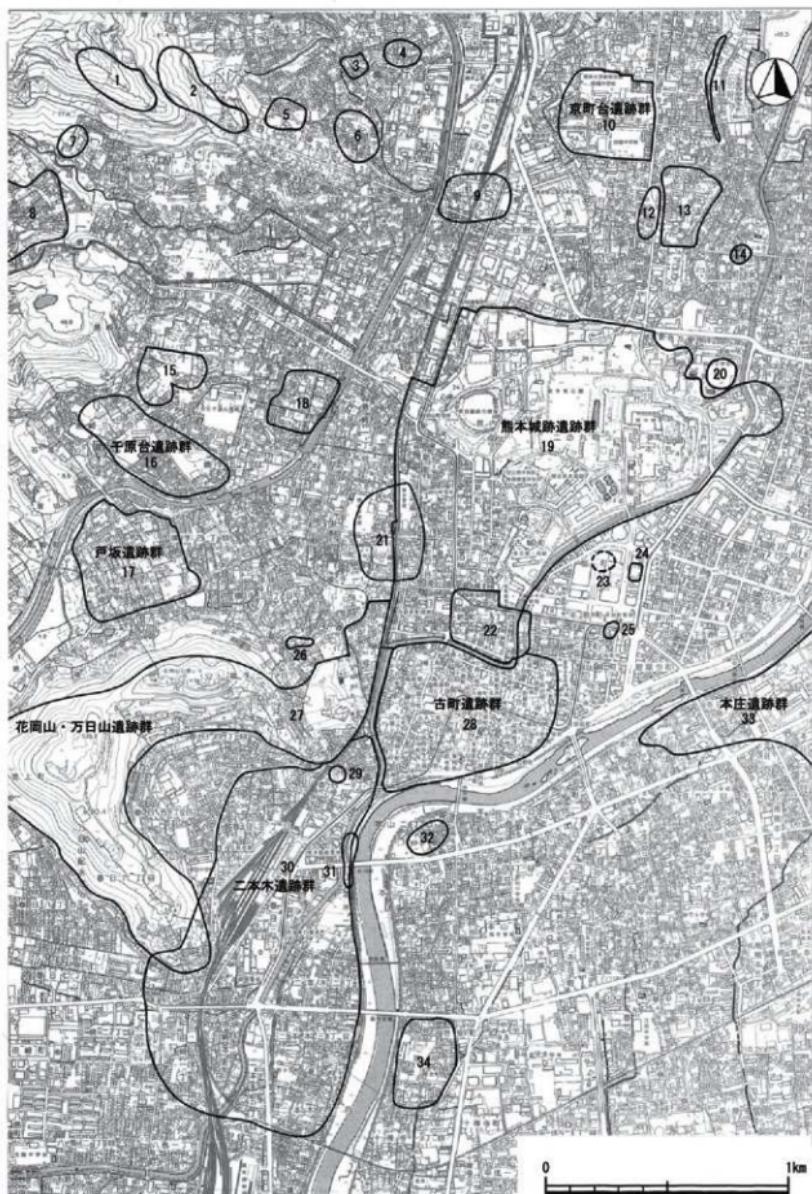
弥生時代の遺跡は、市域全体で早・前期は少なく、中期から急増する傾向がある。早・前期の資料は、二本木遺跡群から出土している。縄文時代晩期で途切れで弥生時代に連続しない遺跡が多い中で、この二本木遺跡群は、縄文時代晩期から継続して弥生時代早・前期の資料がみられる希少な遺跡である。扇状地と低地の境界に立地している点など、縄文時代から弥生時代への過渡期を考える上で注目される。弥生時代中期の甕棺も出土し、後期には塚や多数の堅穴住居群が出土している。銅鏡の出土例もあり有力な集落が形成されていたようである。後に城下町が形成された白川右岸の京町台地の先端から南南西に伸びる緩扇状地・自然堤防上は、船場町遺跡の中期の甕棺、古町遺跡の中期の甕棺（唐人町遺跡）や、後期の堅穴住居群が出土しており、弥生時代中期頃から本格的な土地利用が始まったようである。後期には、古町遺跡・二本木遺跡群・八島町遺跡・南新宮遺跡など、数百mから1km程度の距離をおきながら集落が営まれており、各集落間の関係性が注目される。他にも井岸遺跡・牧崎遺跡・藤園中学校校庭遺跡で中期の甕棺

が出土している。

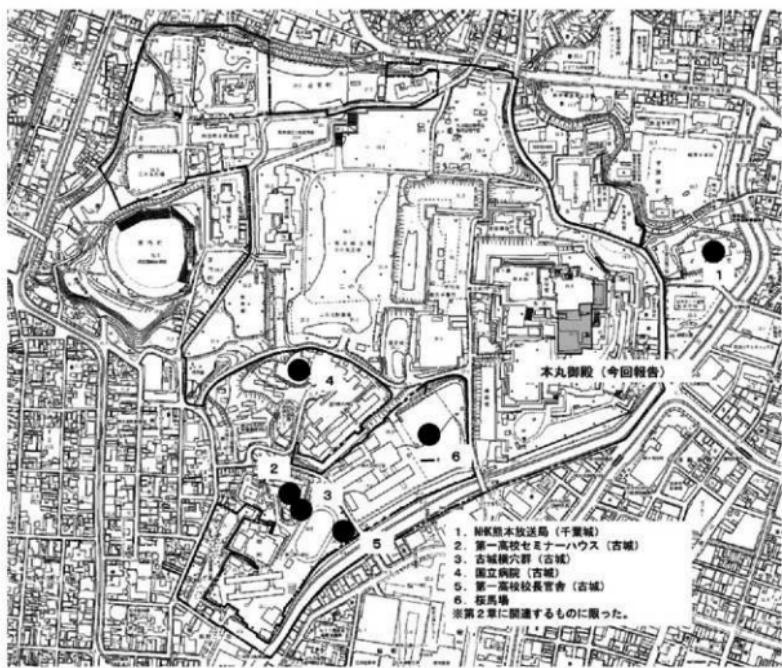
古墳時代の熊本城跡遺跡群周辺については、前期・中期は不明瞭だが、後期には京町台地に特徴的な崖地形に多数の横穴墓が造られている。熊本城跡遺跡群内にも古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群がある。さらに北には、寺原横穴群や、津浦一の谷横穴群などがあり、熊本市域の横穴墓集中地の一つである。古城横穴群は、崖面に3段にわたって築かれ、数回の発掘調査で53基の横穴墓が確認されている。そのうち39号には「火守」あるいは「火安」と読める文字が刻まれた閉塞石があり、墓室からは鉄滓が出土している。被葬者の職制を反映したものと想定されている。千葉城横穴群は、昭和37(1962)年にNHK熊本放送局建設の際に発掘調査が行われ、10基の横穴墓が出土した。横穴墓の配置は、「コ」字状に前庭部を開むようで、前庭部を共有した横穴群であった可能性もある。これらの横穴群の集中に対して、墳丘を持つ古墳の分布は少ない。緩斜状地上にあった船場山古墳・長迫古墳・山崎古墳は、開発によって消滅し位置も不明瞭である。その中で山崎古墳は、長瀬真幸の調査記録により、寛政8(1796)年に主体部が発見されたことが知られる。発見の経緯と人骨や遺物の良好な出土状況は、長瀬の知友であった伴信友の『信友隨筆』などに収録されて今日に伝えられている。

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	主要な時代	備考
1	本妙寺B箱式石棺群	古墳時代	
2	本妙寺A箱式石棺群	古墳時代	
3	井岸城跡	中世	
4	井岸遺跡(井岸壺棺遺跡)	弥生中期	
5	本妙寺北遺跡		
6	中尾丸城跡	中世	
7	小山田遺跡		
8	島崎遺跡	繩文	
9	牧崎遺跡(牧崎壺棺遺跡)	弥生中期	1966年、壺棺14基出土。
10	京町台遺跡群	繩文～近代	伝赤尾丸城跡
11	寺原横穴群	古墳	
12	京町2丁目遺跡	近世	
13	伝大道寺跡遺跡群	弥生～近世	
14	内坪井遺跡	弥生	
15	石神原遺跡	繩文	
16	千原台遺跡群	繩文	
17	戸坂遺跡	弥生・古代	
18	迎田遺跡		
19	熊本城跡遺跡群	繩文～近代	国指定特別史跡熊本城跡・段山遺跡・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群・古城横穴群・茶臼山魔寺・藤崎宮跡
20	藤園中学校校庭遺跡	弥生中期	壺棺出土
21	新馬借遺跡	古代・中世	
22	船場町遺跡(新町2丁目壺棺遺跡)	弥生中期	1977年、下水道工事中に壺棺出土。
23	山崎古墳	古墳	消失、位置不明瞭。
24	花畠跡	中世・近世	加藤・細川時代の藩主邸宅の一部、世継神社跡地
25	辛島町遺跡		
26	吉祥寺横穴群	古墳	
27	花岡山・万日山遺跡群	古墳・近世	花岡山箱式石棺群・万日古墳・万日山東古墳・万日山山頂古墳・妙解寺跡
28	古町遺跡	弥生～近世	
29	北岡神社境内古墳	古墳時代	
30	二本木遺跡群	繩文～近世	北岡神社古墳・北岡神社横穴群・春日町遺跡・古町小学校校庭遺跡・飽田国府推定地
31	石塘遺跡(白川橋遺跡)		
32	本山城跡(本庄城跡)	中世	
33	本庄遺跡(熊大病院敷地遺跡)	繩文～近代	
34	平田町遺跡	弥生～中世	



第9図 周辺遺跡位置図



第10図 城内調査地点（縮尺任意、上が北）

京町台地から離れたところでは、花岡山・万日山遺跡群や二本木遺跡群で墳墓がみられる。古墳についてはいずれも現存していないが、注目事例を記す。花岡山箱式石棺群（花岡山・万日山遺跡群）では、箱式石棺群の近くから中期の土師器壺が出土している。この壺には、中に碧玉製勾玉2個・碧玉製管玉1個・ガラス玉26個が納められており、地鎮行為に伴い埋納されたものと考えられている。万日山古墳（花岡山・万日山遺跡群）は、石室の構造、出土遺物から7世紀前半に比定される。全長12.3mの特異な構造の横穴式石室は、玄室の左右に石屋形を設け、奥壁には矧り貫き敷きの家形石棺を設置している。家形石棺については畿内の要素がみられる。これらの点から、本古墳は当該地域における首長墳と捉えられ、安閑2(535)年に当該地域に設置されたとされる春日部屯倉との関連も考慮される。北岡横穴群（二本木遺跡群）は、火碎流堆積物の南端に立地する横穴群で、上下3段に展開しており、下段の横穴群においては、枝分かれ状に伸びる長い前庭部が設けられている。前庭部を派生させて新たな造墓を行ったもので、県下には例は少なく、北部九州、特に遠賀川流域に認められる要素である。

墳墓に対して、集落の様相は調査例が少なく不明瞭で、京町台遺跡群・古町遺跡・本庄遺跡で古墳時代の堅穴住居、二本木遺跡群で井戸などが出土している。

古代において最も注目されるのは二本木遺跡群で、7世紀後半～10世紀代の埋蔵文化財が認められる。特に8世紀後半～9世紀前半において充実している。これまでの発掘調査で、大規模な建物を含む規格的な配置の建物群や、陶鏡・瓦の大量出土から官衙施設と想定される遺構が出土している。少なくとも都衙以上の規模と内容を持った施設で、国府の可能性も指摘されている。官衙施設の周辺には、堅穴住居や掘立柱建物で構成される大規模な集落が広がっており、輸入陶器・国産陶器や腰帶具・文字土器などの希

少遺物も大量に出土している。特に集落の端にある村落内寺院付近で出土した唐三彩は注目される。二本木遺跡群以外に、古代飽田郡の施設とみられるのが京町の伝大道寺遺跡群である。京町一帯は近世に武家屋敷・町人町として開発され、そのまま現代の市街地になっているため、近世以前の様相はわかりにくいかが、本遺跡からは7世紀後半～9世紀の瓦が出土している。この期間の瓦が継続して出土する遺跡は、熊本市域では今のところ本遺跡だけである。伝大道寺遺跡群付近には、養蚕駅から西へ延びた官道が想定されており、飽田郡の重要な地点に造られた施設であった可能性もある。なお、熊本城跡内でも二の丸・三の丸・監物台で古瓦や土師器・腰帶具が出土している。

中世においても遺物や遺構の集中は二本木遺跡群にあり、11～16世紀代にかけての資料が途切れなく認められる。10世紀代に当該城に国府が移転・設置され、これに連動して肥後國の中心として周辺域が発展したことによるとみられる。遺構・遺物ともに膨大・多様であり、溝による半町単位の矩形土地区画がみられるなど都市的な様相を呈する。資料数・範囲は、10世紀後半～11世紀代においては限られるが、12世紀代には急増・拡大してピークを見る。その後多くの資料が認められ、都市として繁栄したことが窺われるが、17世紀前半には急減・衰退する。これは加藤清正入城により、熊本城下（古町遺跡）に町屋・寺院が移転したことによるものと想定されている。古町遺跡にも中世の資料があるが、これは二本木遺跡群における都市の拡大・伸張に伴うものと想定される。

中世城としては、国衆といわれる在地土豪の居城とされる隈本城跡（千葉城跡・古城跡－いずれも熊本城跡遺跡群内）、鎌倉御家人詫磨氏の居城とされる本山城があげられる。古城跡の現第一高校セミナーハウスでは、発掘調査により散兵線とされる溝や版築土塁を検出している。本山城跡は、字名から城域が想定されているが、現況の地形や試掘確認調査の成果からは城の存在は不明瞭である。中世の石造物資料は、熊本城内（熊本城跡遺跡群）や古町遺跡内の寺院に分布している。熊本城内のものとしては、地蔵門脇の大永2（1522）年銘「釈迦立像線刻板碑」、本丸御殿南に大永4（1524）年銘「如意輪觀音像線刻板碑」、天文5（1536）年銘「阿弥陀三尊種子板碑」など、銘があるだけで12基確認されている。五輪塔地輪も礎石や石垣の一部に転用されており、熊本城築城以前の茶臼山には中世寺院（茶臼山廃寺）が存在したと想定されている。古町遺跡の寺院内には、善教寺境内の建長2（1250）年銘宝塔塔身が最古例としてあり、15世紀末から16世紀前半の板碑が多くみられる。

（2）熊本城と城下町の変遷

熊本城や城下町について、発掘調査等で考古学的所見が得られた点について、時代を追いながら記述する。文献資料からの所見は次節で詳述する。

熊本城が文献に登場するのは、南北朝時代である。肥前国松浦の大島堅と大島政の永和三年（1377）の軍忠状にみえる「隈本城」が初出で、位置の特定はされていない。

熊本城跡遺跡群内の端緒は、応仁年間に出来秀信が茶臼山の東側に迫り出した千葉城と呼ばれる一帯に城を築いたとされる。地名としての千葉城は熊本城跡遺跡群の東端台地にあるが、地形等の改変が大きく詳細は不明である。先述のNHK熊本放送局建設の際の発掘調査でも城跡としての確証は得られていない。その後、「肥後国誌」によれば、明応5（1496）年に鹿子木親員（寂心）が築き、城親冬が天文19（1550）年に入城したという隈本城の城域は、第一高校から国立熊本病院敷地内（以下、国立病院）一帯と想定されている。現在でも古城という地名が残り、第一高校周辺には城内最古の石垣が良好な状態で残存している。発掘調査としては、第一高校セミナー・ハウス建築に伴う調査で15世紀半ばから16世紀後半の陶磁器が出土し、国立病院の看護学校建設に伴う調査で16世紀前葉からの掘立柱建物群が出土している。この掘立柱建物群は堀・櫓・櫓で構成された防御施設で、鹿子木氏・城氏の在城時期と合致することから、当時の城域を考える上で重要な調査成果となった。

隈本城には、天正15（1582）年に佐々成政が、翌天正16年には加藤清正が入城し、清正是中世の城を織豊城郭に改修を進めている。その後、加藤清正是隈本城を拡大して、京町台地南端の茶臼山一帯に熊本城を築城した。出土資料としては、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦がしており、少なくとも慶長4（1599）年から何らかの工事が行われていたと考えられる。本城整備に伴って、白川・坪井川の改修、城下町の再編成も行われた。先述のように、大きく蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路と隈本城惣堀を利用して坪井川を開削したと考えられている。これにより、熊本城南側の防御線は、坪井川が内堀、白川が外堀に相当することで強化され、同時に城下の洪水解消、武家屋敷の面積拡大、船運路の整備につながった。

旧白川の流路にあたると想定される桜馬場での発掘調査でも、17世紀初頭に埋め立てられた流路が確認されている。同じ旧流路の下流にあたると想定される第一高校の校長官舎建築に伴う発掘調査でも、厚さ5メートルにわたる版築層が検出され、その下位に河道を示す砂地が確認されている。いずれも旧白川の埋め立てを証明する調査成果である。国立病院の看護学校建設に伴う調査では、加藤期と想定される道路が出土しており、築城に際した資材運搬用の修羅道の可能性が指摘されている。

城下町は、加藤清正が古府中（二木本遺跡群）から、古町（古町遺跡）へと町屋や寺院の移転を行い、新町部分を当初は侍町（武家地）とした城下町をつくった。

加藤治世期の末、寛永6～8（1629～1631）年頃の作と推定される「熊本屋舗割下絵図」（第12図）は、拡大・再編された城下町の様子を知る最古の資料である。この絵図にみえる城下町の範囲は、東から南は白川、北は出京町、西は段山から新町の高麗門・古町西側の坪井川・井芹川・石塘までである。北側の京町は、京町台地の東側・西側が急崖で囲まれており、北端に空堀と土塁を設けていた。

現在の新町は、隈本城時代の侍町として始まり、その後惣構として整備された。惣構は、西側には新町西側の水堀と、堀の東側に土塁を設け、南側は新たに掘削した坪井川で区切った。惣構と城内を区切るのは、「新一丁目御門」で、現在の法華坂の清爽園付近にあった。枱形を作う櫓門であったが、枱形を含めて現存しない。門の前は広場となり、高札が掲げられられ札ノ辻と呼ばれ、各方面に伸びる街道の基点となつたとされる。惣構の西側は城の裏鬼門にあたるため寺町を整備し、惣構との連絡に「こうらい（高麗）門」が設けられた。鉄道高架化事業に伴う「高麗門」・「御成道」の調査がある。この調査で、高麗門跡からは「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土している。高麗門は、いわゆる高麗門形式から絵図や古写真にみられる櫓門形式に変更したと指摘されている。御成道は、高麗門から細川家菩提寺である妙解寺への参道である。先の鉄道高架化事業に伴う発掘調査で、御成道の路面であった硬化面が確認されている。

妙解寺は寛永19（1642）年に細川光尚によって建立された寺院である。細川忠利以来の歴代藩主の墓や、殉死者の墓が良好な状態で保存されており、「熊本藩主細川家墓所」として国指定史跡になっている。この妙解寺の四塔頭の一つである智照院には細川尚房一族が葬られていたが、九州新幹線側道工事に伴い発掘調査が行われ移築された。大名一族の墓所をまとめて調査した稀有な事例である。上部構造にみられる当主との近縁性や、墓室構造の階層性、人骨にみられる形質など、得られた情報の影響は大きい。寺町として整備された現在の横手界隈は、加藤清正が母親の供養のために建立了妙永寺や、加藤清正閑室の本覚院が葬られた本覚寺六角堂など日蓮宗の寺院が、地割を維持して今も建ち並ぶ。本覚院墓所は、改葬に伴う発掘調査で棺の装飾と思われる大量の金銅製の金具や副葬品が出土している。寛永期の加藤家の墓制を知る上で希少な調査事例で、出土品は市指定有形文化財になっている。

惣構の南側の古町には、古府中から移転した町屋が整備された。古町遺跡の発掘調査資料は、このことを反映しており、16世紀末～17世紀初頭から増加する。惣構内の新町が短冊形の町割で、「T」「L」字状の道が多いのに対して、古町は方一町の碁盤目状の区画の中央に寺院を配置するという特異な町割が形成された。町割形成当初の武家地と町屋の違いと考えられ、その間は坪井川で明確に区切られている。惣構

と町屋の連絡には、惣構側に「新三丁目門」と坪井川に現明八橋が設けられた。新三丁目門は、絵図では桁形を伴う櫓門であることが分かっていたが、近年発見された長崎大学図書館所蔵の古写真で、城内の櫓門に匹敵する規模の櫓門であったことが分かった。古町の一角の阿弥陀寺周辺に土塁の残存がみられ、惣構のように戦略上の配慮や水害対策が施されていた可能性もある。

明治維新の後、明治4（1871）年に、城内に鎮西鎮台が設置され、その後熊本城は第2次世界大戦終了まで陸軍の管理下に置かれた。明治初期には、各地の城郭と同じように熊本城でも櫓・堀・石垣の解体や改修が行われ、明治10（1877）年には西南戦争の主戦場の一つとなり天守をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失した。本丸御殿の発掘調査では、焼失した御殿の建築材、金具などが焼損した状態で焼土とともに多量に出土している。西南戦争では城下町も戦場となり、「射界の清掃」戦略で意図的に火が放たれ、大半が焼失した。その痕跡は新馬借遺跡での確認調査や、古町遺跡での発掘調査で確認されている。古町遺跡の発掘調査では、江戸期の表土を広範に覆う焼土層が確認され、この焼土を含む遺構出土の陶磁器が明治初期に限定できることから、西南戦争時の焼土層と判断された。

西南戦争の後、軍施設はさらに整備され、明治21（1888）年には第六師団となる。軍の組織が整備されるに伴い、城内各所に新たな施設が建てられ、現在の天守前広場には大正6（1917）年に師団司令部が置かれた。桜馬場地区は、西南戦争以前から砲兵隊が置かれ、その後兵器工廠となった場所で、平成20・21（2009・2010）年に行われた同地区的確認調査で、大正年間に造られた工廠のレンガ造り建物の基礎が確認されている。西南戦争で焼失した城下町にも、戦後、山崎練兵所など軍関係の施設が整備されていく。

明治22年に就任した第3代熊本市長辛島格は、熊本市を九州地方の中核管理都市にすべく尽力し、周辺町村との合併や三大事業と呼ばれる上水道・市電の整備、二十三連隊の移転を推進した。旧城下町にあたる山崎練兵所などの軍施設の移転は、当時の時代性もあり難航を極めたが、飽田郡大江村（現在の熊本市中央区大江）に移転することで同意がなされた。移転は明治33（1900）年に行われ、市街地を分断していた格好の練兵所跡地は新市街となり、現在につながる市街地形成が行われた。山崎練兵所が移転した先の大江遺跡群では、移転後、軍による大規模な造成が行われ、土地が平坦化されるとともに多くの遺跡が失われた。発掘調査では、三角兵舎の柱穴跡や塹壕跡がしばしば確認され、第2次世界大戦頃の軍用品が出土することも少なくない。

熊本城は、大正末期から城跡の保存・顕彰が叫ばれるようになり、熊本城跡保存会が発足した。この会が中心となって、昭和2（1927）年、宇土櫓を解体・修理、長堀を改築している。昭和8（1933）年には、熊本城全城が史跡となり、残存していた建造物が国宝に指定されている。昭和25（1950）年、文化財保護法により、国宝建造物が重要文化財に指定され、昭和30（1955）年には城内の主要部分が特別史跡に指定されている。昭和35（1960）年には、天守閣が小天守とともに鉄筋コンクリートで再建された。昭和50（1975）年には、西出丸戊亥櫓跡から西大手櫓門跡の石垣を復元。昭和57（1982）年には、「保存管理計画書」がまとめられ、保存と整備の方針が決まる。昭和56（1981）年には西大手櫓門の再建が行われる。平成元（1989）年には、宇土櫓の修復と数奇屋丸二階御広間の復元を行う。平成3（1991）年、台風19号の襲来により、長堀中央部分が倒壊。平成5（1993）年には、熊本城三の丸一帯を熊本市が買収し、東子爵町にあった旧細川刑部邸を移築復元している。平成11（1999）年、台風18号により、西大手櫓門が倒壊する。平成14（2002）年に南大手櫓門の復元をはじめ、平成15（2003）年には戊亥櫓、未申櫓、元太鼓櫓、平成16（2004）年には、西大手櫓門と西出丸一帯の復元が完了した。平成17（2005）年には、飯田丸五階櫓の復元が完成する。平成19（2007）年は、熊本城築城400年を記念して本丸御殿大広間を復元し、平成20（2008）年から公開している。

3. 文献資料にみる熊本城跡本丸御殿

(1) 南北朝～戦国時代の隈本城

貞治6年(1367)、足利義満が室町幕府三代將軍に就任すると、応安3年(1370)に幕府管領である細川頼之の推挙を受けて、今川貞世(了俊)を九州探題に任じた。応安4年(1371)、貞世は九州へと向かい、翌5年(1372)8月には大宰府の征西府攻略を果たす。この後、今川軍は肥後の侵攻を開始する。隈本城の存在を確認できる最も古い史料は、南北朝時代後期となる永和3年(1377)9月の「大島堅軍忠状」・「大島政軍忠状」¹⁾とされる。大島堅と政の軍忠状は、この2名が肥後侵攻と「隈本城」攻撃にあたって忠節を尽くしたことを記し、貞世の息子である今川義範が証判を加えたものである。また、同年9月30日付の「宗金書状」²⁾でも、今川氏が「肥後隈本城」に侵攻してきたが、数百人の負傷者を出しながらも防いだと記されている。隈本城は南朝側の城であった。しかし、この隈本城の具体的な場所については明らかでない。

従来、南北朝期の隈本城の場所については、藤崎台説と詫磨氏居城である本山城説があるが³⁾、永和4年(1378)の「安芸大朝荘一分地頭虎熊丸代市原経顯忠状」⁴⁾に「隈元敵城」に対抗する城として「藤崎城」が存在していたことが記される。藤崎台に存在した城は藤崎城と呼ばれており、隈本城と同一のものとは考えられない。また、本山城=隈本城であれば今川軍の攻撃対象になっていることから、北朝方の詫磨氏の居城とするのは成り立たず、「隈本城」は藤崎城ならびに本山城とは別に存在した城である⁵⁾。

隈本城の位置について、17世紀後半の肥後の儒学者である辛島道珠が記した「肥後古城主考」には、「菊池四代藤原経宗の甥ニ出田経信アリ、十四代ノ孫、出田秀信始メテ隈本ノ城に居住スト菊池家譜ニ見エタリ」とある。次に、熊本藩士である森本一端の手によって明和9年(1769)に成立した「肥後国誌」⁶⁾には「出田筑前守秀信所領八十町ヲ領シ初メテ隈本在城云今千葉城ナリ」とある。隈本城が千葉城に存在したとする根拠は示されていないが、18世紀後半には出田氏の居城が千葉城に存在したとする認識が定着していたと見える⁷⁾。

文明年間(1469～1489)とみられる「菊池重朝書状」⁸⁾では、出田山城守が藤崎宮の遷宮祝儀を宮内莊給人に催促することを守護である菊池氏が認めている。また、文明4年(1472)の「藤崎宮宮番次第」⁹⁾の裏書には「惣政所出田山城守御代番帳御うつし」と記されており、文明頃に出田山城守は藤崎宮の惣政所職、つまり行政実務担当者である所司・政所・本司といった人々を統括する立場にあったことが判明する。以上の2点の史料は、出田山城守が實質的に藤崎宮領の宮内莊をはじめとする茶臼山周辺の土地を治めていたことを示す。隈本城は出田氏の拠点として機能していたと考えられる。

この時期の隈本城の様子を示すのが文亀2年(1502)4月23日付の「菊池武運(能運)書状」¹⁰⁾である。この頃、菊池能運は守護の座を追われ島原半島に亡命していたが、相良氏の協力を得ながら地位回復を狙って挙兵した。史料中には、能運と小山右京亮や立田伊賀守などの地域の武士団およそ730名が隈本城に在城し守りを固めていたが、11日に中条対馬守が裏切り隈本城を出奔し、続いて小山・立田氏も居所に帰ってしまったことが記されている。出田刑部少輔父子3名と親類20余名、そして能運の側近の者たちは城に残ったが、「城内指所々役所」などの持ち場を守りきれなくなり、出田氏と共に島原に退却することになった。その後、能運は守護職回復に成功したとみえるが、永正元年(1504)3月に死去したことにより、再び守護職の後継をめぐって阿蘇氏や大友氏らが介入し、混乱が起きた。

その後、守護として隈本城に入城したのは、大友義長の息子である菊池義武とされる。大友氏の初代は鎌倉幕府に仕えた貴族である中原氏であり、同じ中原氏の系譜をひく鹿子木氏も政治的立場を高めるために大友氏の肥後支配に協力したと考えられる。鹿子木氏は鎌倉時代より飽田郡北部の地頭であった。その後、鹿子木親員(寂心)が、永正17年(1520)の義武の肥後入国以前には飽田・詫磨両郡を治める国人領主となっていたようである。永正16年(1519)の「鹿子木親員書状」¹¹⁾では藤崎宮の社役について百姓役を定めていることからも、社領だけでなく郡内の支配を行っていたと考えられる。

永正17年(1520)に肥後に入国し、隈本を拠点に肥後の支配を行った義武は、天文2年(1533)に大内氏

と結び筑後国に出兵した。これにより、翌年大友氏は肥後に出兵し、義武は島原まで退去することとなった。この間、寂心は大友方に属していたため、天文18年（1549）に死去するまで隈本城に留まると考えられる。その後、義武は相良氏の協力を仰ぎながら肥後奪還に臨むが、天文12年（1543）に義武の兄である大友義鑑が室町幕府より肥後国守護職を与えられる。しかし、天文19年（1550）に義鑑が家臣に殺害される事件が起きると、義武は鹿子木氏・田嶋氏を味方につけ、再び隈本城に入った。これに対し、義鑑のあとを継いだ義鎮は隈本城を攻め、義武は再び島原へ亡命した。これにより鹿子木・田嶋氏は没落し、隈本城には城親冬が入ることとなった。

城氏は菊池氏の一族で、赤星・隈府氏と並ぶ老者（家老）の地位にあった。親冬が隈本に入ったのはおそらく天文19年の義武と義鎮の合戦の論功行賞によるものであろう。鹿子木氏に替わって飽田・詫磨の二郡を領することとなったと考えられる。親冬のあとを親賢が繼ぐが、その年代は明らかでない。

天正6年（1578）、大友氏が日向耳川の戦いで島津氏に敗れると、大友氏の領国の国人たちは独自の動向を見せるようになった。城氏もその一人で、大友氏から自立する動きを示す。これに対し、大友方の御船城主甲斐宗運が出兵し、天正8年（1580）に旦過瀬の地で城・名和氏らと合戦した。城親賢は島津氏に救援を要請し、島津の軍勢が隈本城に入城している。

その後、天正9年（1581）12月に親賢が死去すると、嫡子である十郎太郎（久基）が跡を継いだが、若年のため出田親基を後見人とした。親基は親賢の弟であり、出田氏の養子となっている。このほかにも、城親冬の弟である政冬や、親賢の次男武房が出田家の養子となっているように、出田氏と城氏は深い関係にあった。

その後、島津氏は肥後侵攻を進め、天正13年（1585）には島津義弘が肥後國の守護代となる。さらに、大友方の甲斐宗運が死去すると阿蘇氏も降伏させ、島津氏は本格的な肥後支配と肥後侵攻を開始した。天正15年（1587）4月、島津攻めのため豊臣秀吉が隈本城に入城する。秀吉の右筆が記した「九州御動座記」¹²には、隈本城について「城十郎太郎と云者相踏候、数年相持たる名城也」と賞賛している。さらに続けて、「五千計の大将、さしも鷲津一方之かためを為頼待といへとも、就御動座無一支、居城に降参申、證人を出、御味方參候」とあり、城氏は島津氏にも信頼の置かれていた武将であったが、秀吉に対して抵抗することなく降参し味方になったと記されている。同年6月、肥後國は佐々成政に与えられ、成政は隈本城に入城した。しかし、成政による国人たちの知行の削減と検地の断行により、7月には国衆の一揆が発生する。

（2）加藤清正の入国と古城・新城

肥後国衆一揆を招いた佐々成政は、天正16年（1588）閏5月14日に切腹させられる。成政に代わって肥後北半国を加藤清正、南半国を小西行長が治めることとなった。清正是戦国期の領主たちが居城とした古城の隈本城に入ったと考えられ、その後隈本城の普請・作事を行なっていることが史料より判明する。居城の普請に関する具体的な指示を出している史料で最も古いものは、天正19年（1591）と考えられる2月26日付の「加藤清正書状」¹³である。これによれば、清正是重臣たちに堀（石垣）・堀の普請を指示している。その後、天正から文禄年間にかけて居城の普請に関する具体的な指示がなされている。この時普請しているのは、現在の第一高校にあたる古城と推測されている。同年4月には、本丸に「おうへ」を建てるための材木の準備や、「てんしゆへはし」が架設されている。なお、天正20年（1592）9月21日の「加藤清正覚書案」には「其元さぶらいまち、さうかまへのへいかけさせ、よろつ丈夫ニ可申付候」とあるよう、武家屋敷や憩構の廓を含めた城下一帯の整備も進められている¹⁴。

一方、茶臼山での熊本城の築城時期は、通説では「続撰清正記」の記述から慶長6年（1601）の着工とされているが、近年の研究ではその説に疑問が呈されている¹⁵。茶臼山に形成された熊本城に関して、残されている史料で最も古いものは、慶長5年（1600）10月26日付の加藤喜左衛門・下川又左衛門宛の清正書状とされる¹⁶。これによると、「如水其元被通候者、新城ニ而振舞候て可然候間、得其意、天守之作事

差急、疊以下可取合候」とあり、島津討伐のために熊本を通過する黒田如水を「新城」で歓待するために天守の作事を急がせている。この時点で天守は疊を敷く段階まで作事が進んでいた。

のことから、熊本城の着工の時期は清正が朝鮮出兵から帰国した慶長3年（1598）末から翌4年頃と想定される。なお、熊本城内から「慶長四年八月吉日」銘の瓦が出土している。また、小山の瓦職人であった福田家の先祖附には、初代五右衛門が慶長3年の熊本城造営の際に瓦師棟梁職に任じられたと記されている¹⁷。この時期には建物に葺く瓦を準備する段階にまで城の普請・作事が進んでいたとみることができる。

熊本城の完成時期については、乃美家蔵とされる文書に「限本之文字之事、今度御城出来候ニ付御改候而、熊本と御書被成候」とあることから、慶長12年（1607）とされてきた¹⁸。なお、慶長12年4月24日付の並河金右衛門宛の清正書状¹⁹では「其地普請如何申付候哉、漸出來之時分ニ候」と述べられており、完成間近の状態であった。慶長15年の清正書状では本丸御殿の存在及び花畠屋敷の作事を指示しており、この頃には天守や櫓などが完成し、居住空間である御殿の作事が行われていたとみられている。

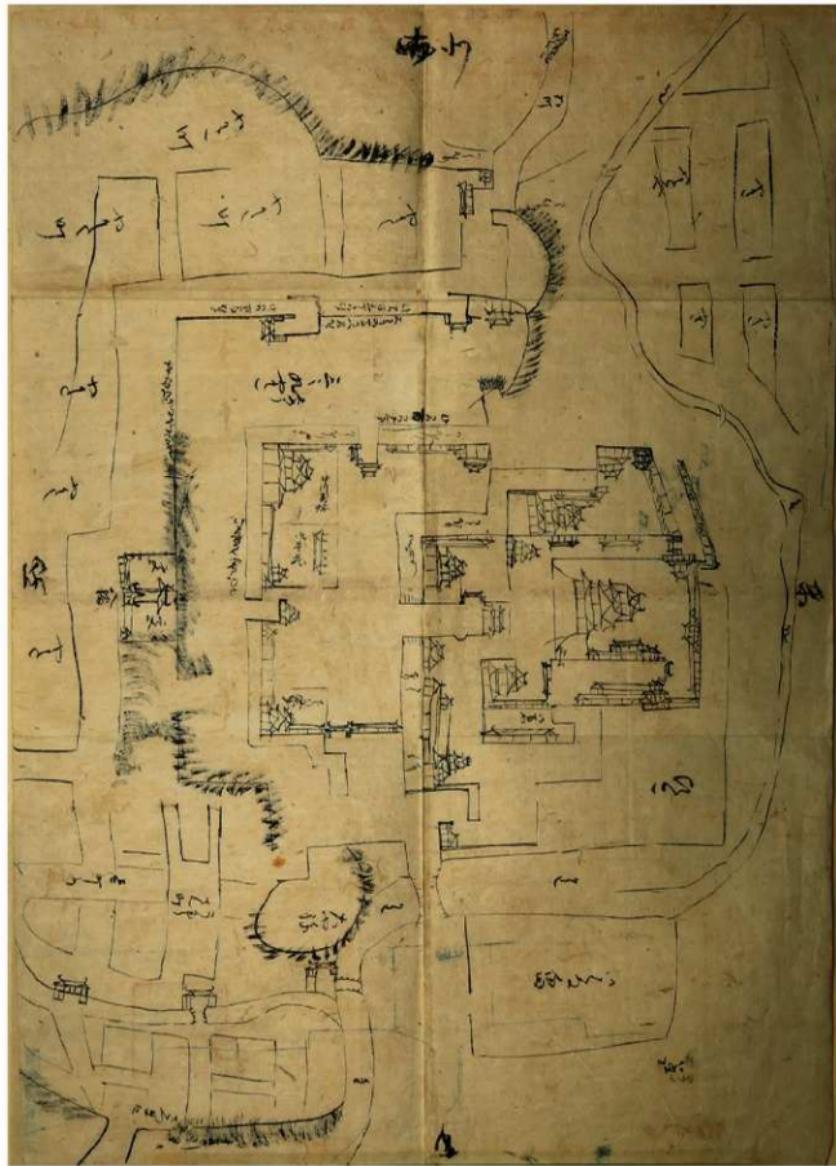
（3）加藤期の本丸御殿

加藤清正による本丸御殿作事に関する史料は、現在3点ほど確認できる。まず、慶長15年（1610）に比定される4月15日付の書状に「広間作事之儀、先書に具に如申造候、無油断仕舞可申越候」とあるように、本丸御殿の広間作事を指示している²⁰。また、同年と考えられる7月22日付の書状には「本丸広間之絵」について、国許の絵師だけでは完成が遅くなるということから、平右衛門という人物を頭取とし、上方より手代を呼び寄せて描かせることとしている²¹。4月頃に行なわれていた本丸御殿広間の作事は7月にはほぼ完了し、障壁画などの装飾が行なわれていたと見ることができる。また、年代が確定できないが、2月8日付の加藤清正書状には、本丸の作事について油断なきよう指示するとともに、「女房達へやの疊おもてかへのなり候やうに、下地ニ念を入候へ」と命じており、本丸内の「女房達へや」の存在も知られる²²。

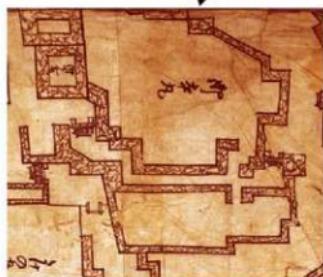
慶長16年（1611）、二条城の会見から熊本に戻った清正是、5月27日の朝大広間で病に倒れ、6月24日に死去した。毛利家の密偵が、清正死去後の7月10日に熊本の様子を調査し作成した「肥後國熊本様子聞書」には、清正の急死で混乱する家中の様子が記されている²³。この文書には熊本城の規模も記されている。「石かき惣別から堀まわり」の高さは20間ほどであり、「天主本丸まわり」の石垣の高さは30間ほど、と記されている。また、「から堀まわり門」は6つあり、「堀ノ内門」は4つあった。この4つの門のうち、「堀内三方ふさき、北門計明事」とあり、通常は北門のみを使用していたようである。建築物については「矢蔵數天主共ニはしかかり廿三間有之事」とある。翌慶長17年（1612）頃に同じく毛利家の密偵が描いた「肥後筑後城図」²⁴（第11図）では、現在の櫓方門、類当門、不開門とみられる場所に門が描かれている。本丸には天守が描かれているが、小天守は描かれていない。御殿付近には多層の矢蔵と、細長い櫓のようなものが描かれるが、これが御殿を指す描写であるのか明確でない。寛永6～8年（1629～1631）頃と推定される「熊本屋舗割下絵図」（第12図）では二ノ櫓御門、耕作櫓御門の部分に門と、間通路の四ツ辻が描かれている。

（4）細川期の本丸御殿

寛永9年（1632）12月に熊本城に入城した細川忠利は、息子光尚に「事外ひろき間にて候、城も、江戸之外ニハこれほとひろき見不申候」²⁵と書き送っている。翌10年（1633）、熊本で地震が発生したとみられ、翌11年（1634）正月には「肥後熊本城中家迄ニ面少も明地無御座候、左様ニ御座候へハ、去年も切々地しんゆり申候、左様之時可罷出明地無御座候ニ付、城中之家少々くづし候へ」²⁶と指示している。また、同年2月には「熊本城本丸家多候故、矢蔵ニ無構中之家をのけ、我々不下前ニ地震屋を一つ立候へと申付候」²⁷とあり、「中之家」解体後に、新たに「地震屋」と呼ばれる建物の建設を指示したことが知られる。寛永10年頃に隣国臼杵藩中川家が熊本藩の様子を探査した「隣国様子聞合帳」²⁸には、「御しろ内ニまへかと御座候げんじま、



第11図 「肥後筑後城図」(山口県文書館蔵) 熊本城部分



(本丸部分)

第12図 「熊本屋鋪割下絵図」(熊本県立図書館蔵)



(本丸部分拡大)

第13図 「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)



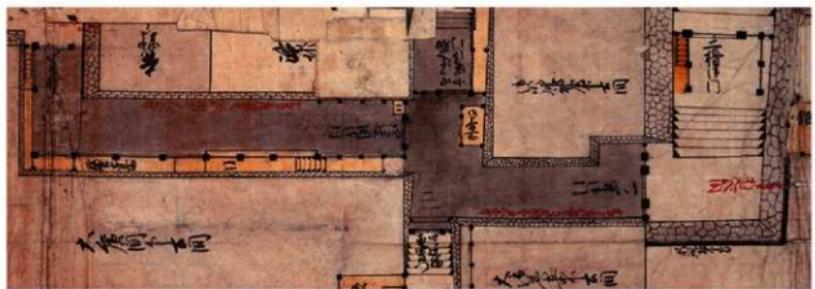
第14図－1 「御城内御絵図」（熊本市蔵）



第14図-2 「御城内御絵図」(本丸部分)



第14図－3 間り通路



第14図－4 間り通路（四ツ辻開御門）



第15図－1 昭和36年写「御城内御絵図」(しろはく古地図と城の博物館富原文庫蔵) 本丸御殿部分拡大
＊図の左が北



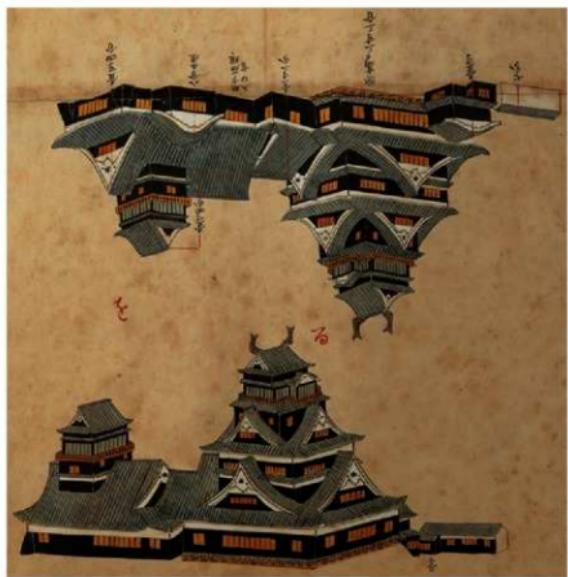
第15図-2 大広間・大御台所拡大



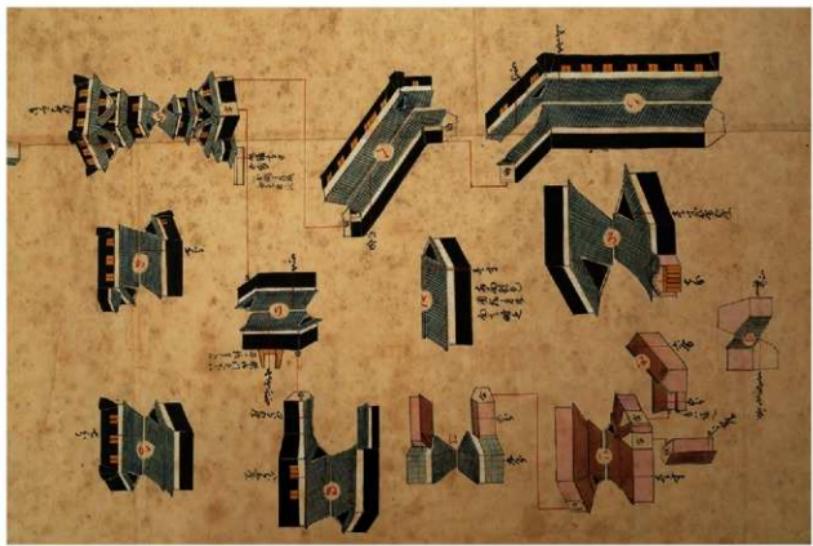
第15図-3 大御台所一階



第16図－1 「御城図」(公益財団法人永青文庫蔵) 本丸平面



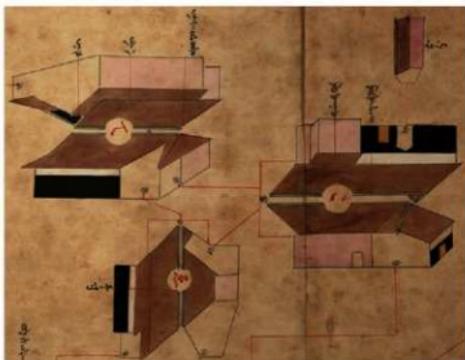
第16図－2 大小天守・御天守廊下



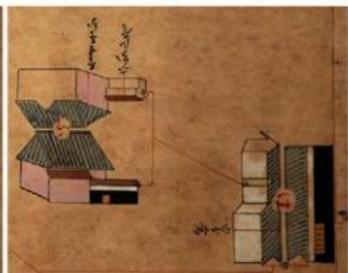
第16図－3 長局御櫓・御居間・御宝藏



第16図一4 大広間・大御台所



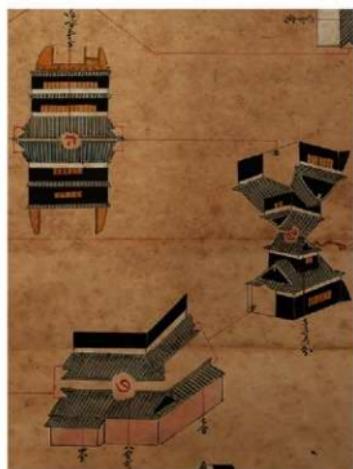
第16図一5 九曜之間・吉野之間



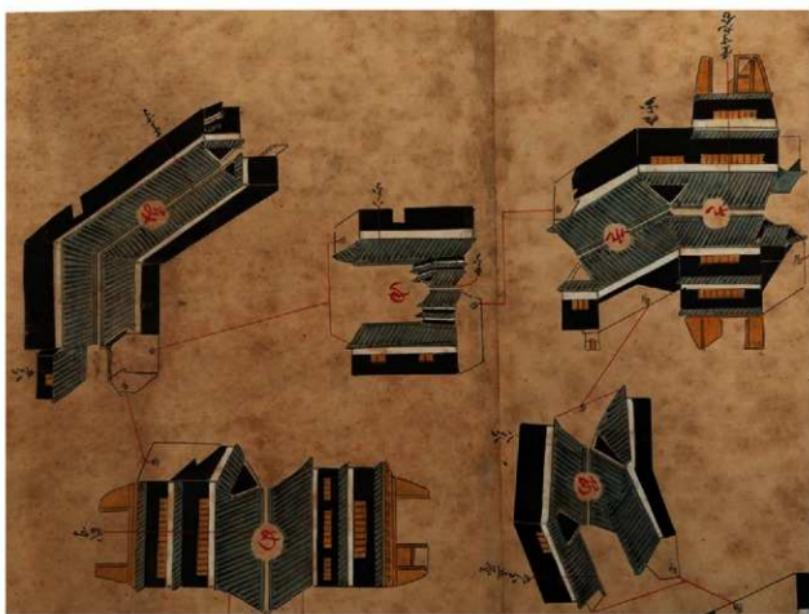
第16図一6 御小姓部屋廊下・御祈祷所



第16図一 7 長之間・小広間・西廊下

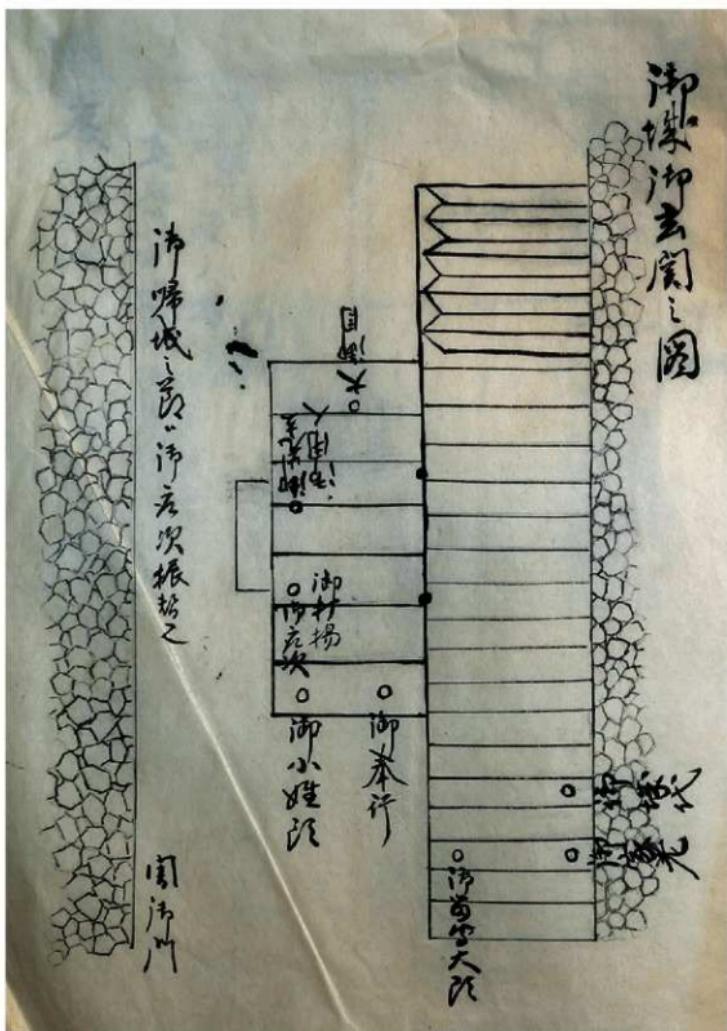


第16図一 8 二ノ櫓御門・三階御櫓



第16図一 9 耕作櫓御門・猿奉之間・数寄屋

御城御玄関之図



第17図 「御城御玄關之図」(後藤是山記念館蔵)

御座りノま、皆々うちこわし被成、新敷七間十五間ほどノ家ニツ出来申由」とあり、この時期に建物の改修がなされたことを示す。

また、寛永11年3月に忠利は、熊本城の普請・作事を実施するため、幕府へ普請伺の絵図を提出した。現在、熊本県立図書館に残されている控絵図（第13図）によれば、その普請・作事は石垣27箇所、土手5箇所、堀4箇所、水通し1箇所、堀4箇所、櫓28箇所、門12箇所にのぼる。申請した箇所のすべてが実施されたわけではなかった。しかしながら、申請箇所が城郭の周辺部分が大多数であることからも、忠利は加藤家から引き継いだ熊本城の防衛を、三の丸の強化という形で実施しようとしていたことが見て取れる。本丸御殿周辺に関しては、石垣普請や櫓・堀等の作事について申請したものは史料中には見えない。

熊本城の本丸御殿は、全国の城郭のなかでも地下通路を持ち、そこに御殿に入る正式な門が設けられるという点で、特異な形式をしている。以下に御殿の構成について、細川氏時代の絵図によってみていく。

本丸御殿の平面を確認できるものとしては、まず明和6年（1769）頃に描かれた「御城内御絵図」（第14図）がある²⁹。この絵図は、現在熊本市が所蔵している原本と、昭和9年（1934）の写（熊本博物館蔵）³⁰、昭和36年（1961）の写（しろはく城と古地図の博物館富原文庫蔵、第15図）³¹、書写年代不明の絵図の写真（奈良文化財研究所蔵ガラス乾板）³²がある。「御城内御絵図」は、建物の配置を描いた書絵図であるが、上の階の平面を貼付けて表現している。現在、原本の本丸御殿の貼付けは失われているが、3枚の写によつて欠失部分を確認することが出来る³³。なお、本報告書では、建物及び部屋の名称は、特に断らない限り「御城内御絵図」の表記に準じた。

「御城内御絵図」及びその写によれば、間櫓御門から大広間下の通路に入る。「御城内御絵図」には記載がないが、本報告書では間櫓御門から入ったこの地下通路を「闇り通路」と呼称する。闇り通路の内部は、間櫓御門から通路なかほどの四ツ辻まで、南側の石垣に沿って警固所が続く。四ツ辻には門と番所が置かれており、御殿内部へは、警固所から連続している階段を上る。階段の先は、御殿の正式な入口である御玄関で、闇り通路と大広間一階の間にある中二階のような形になっている。御玄関からさらに階段を上れば、御殿内部の廊之間に出る。一方、階段から中段を通り、右手の階段を上れば式台之間へと出る。

大広間は二列の構成となっており、南側は式台之間から西に向って靄之間・梅之間・桜之間・桐之間・若松之間が続く。桐之間部分は三階建てである。広間で最も格式の高い部屋である昭君之間が若松之間の北に位置する。昭君之間の東には帳台之御間、御家老間、雪之間を置く。また、昭君之間の北側には蘇鉄之間があり、西には御教寄屋（茶室）と猿楽之間、火打之間を通って耕作櫓御門へ続いている。東には團扇之間があり、中奥にあたる吉野之間・九曜之間・波之間・松之間へと続いている。

大広間棟の東側には、大御台所や御膳立之間が位置する。大御台所にはイロリ・竈があり、上部は煙出しの吹き抜け構造、一部は二階が設けられている。また、「御城内御絵図」には描かれていないが、建物の立面を表した「御城図」（永青文庫蔵、第16図）には、大御台所から三階御櫓へ繋がる瓦葺の建物（第16図-8「の」）が描かれている。「御城内御絵図」が作成される以前に解体されたと考えられる。

大御台所の北側には御小姓部屋・御小姓部屋廊下があり、さらに北側の御祈祷所に廊下で繋がっている。御祈祷所から北には御居間・御風呂屋・御裏御台所などが続き、藩主の居住空間としての性格が強い。「御城図」では御居間の北側に瓦葺の建物（第16図-3「と」）が描かれているが、これものちに解体されたとみえる。また、「御城図」では御居間と御宝蔵（第16図-3「に」・「ほ」）は廊下続きとなっているが、「御城内御絵図」では堀の表現であり、堀の内側は樹木や溜水のある露地となっている。

御居間から廊下を南に向うと遺炉裏之間があり、西に九曜之間がある。中奥の上段の間である松之間の西奥の階段を上ると御札之間があり、ここを通ると天守へと続く御天守廊下に出る。天守へ向うルートは松之間から御札之間を通るものほかに、火打之間から階段を上り御家老間から耕作櫓御門内の御天守廊下、御札之間を通るもの、御弓蔵（現在の本丸売店付近）の御天守方入口多門を通った先の階段から御

天守方口之間に至り、御家老之間、御天守廊下、御札之間を通るもの、御数寄屋丸櫓御門から入り長御櫓の中を通て数寄屋丸の五階御櫓、御広間、地蔵御櫓御門から御天守方口之間に至り、前述した御家老之間、御天守廊下、御札之間を通るもの等、複数のルートが存在するが³⁰⁾、御札之間から御天守廊下を通り大天守に至るという点はいずれも共通している。小天守の地階に入る階段が、現在外觀復元されている天守への入城口の下にあるが、ここは天守に入る正式なルートではなかった。

小天守の階段を下ると北側の石垣上に平御櫓、南側の石垣上にはトキ御櫓が立つ。平御櫓は御裏五階御櫓と建物続きとなっている。平御櫓の下は石門と呼ばれる、隧道となった矮小な石垣内の通路がある。御裏五階御櫓から東に向って、石垣の上に多聞櫓が「長局御櫓」まで続く³¹⁾。

大広間の南側は中庭となっており、中庭の東に麒麟之間が建つ。「御城内御絵図」では麒麟之間の名称しか見えないが、この絵図とそう時期を経ずに作成されたと考えられる「御天守密書」には「麒麟御間」24畳、「長御間」48畳と記される。部屋の大きさから、壁で仕切られた北側が麒麟之間、南側が長之間である³²⁾。中庭の南に小広間、三階御櫓、そして西廊下が西に続く。長之間の東には月見御台所があり、ここには月見櫓と呼ばれる建物があった。古写真では通常の櫓と異なり、方形造の特徴的な形をしている。

本丸御殿の部屋の名称は、描かれていた障壁画がその由来となっているものが多い。「御天守密書」³³⁾には、作事所において調査された天守・本丸御殿の畳数と、御用絵師である矢野雪叟が比定した障壁画の作者が記される。史料中の貼札に、「清正御代、狩野源四郎・狩野外記、其外京絵師一人罷下相調候由御座候」とあり、加藤期に狩野派の絵師たちによって障壁画が描かれたとされる。「御天守密書」によると、本丸御殿の昭君之間・若松之間・桐之間・桜之間・蠶之間・雪之間・团扇之間・猿牢之間・御小姓部屋・麒麟之間などの障壁画、杉戸絵を狩野派や京絵師たちが描いている。細川氏入国後は矢野三郎兵衛が豊前より熊本に移っている。中奥にあたる九曜之間・松之間・吉野之間・波之間の障壁画等は矢野三郎兵衛が描いており、忠利入国後に中奥の整備が進められたようである。

忠利は上記のように本丸御殿の改修を行なっているが、その後日常の生活の場を花畠屋敷に移した。寛永13年（1636）に本丸御殿に落雷しているが、忠利は花畠に居たため被災を免れている³⁴⁾。落雷があったのは、本丸御殿のうち「居間」・「奥」・「金の間」という部屋で、柱・梁や長押が碎けるといった状況だったが、屋根に穴ではなく畳に傷もなかったという。

細川氏の時代には本丸御殿は居所としての性格が薄れ、儀礼の場として用いられた。藩主が帰国して最初に登城する際の家の配置を示した絵図等が数点確認されているが、いずれも間通路から御玄関を通りいる。江戸後期頃と見られる御小姓組の「勤棲手扣」（後藤是山記念館蔵）によれば、藩主登城の際は西大手門から入り、頬当御門・数寄屋御門（御数寄屋丸櫓御門）を通過すると、左半分が石段、右半分が坂となっていた場所に出、右側の坂を上る。その後、耕作櫓御門・間櫓御門を入ると、北向に御玄関がある。御玄関の入口は「御城内御絵図」でも確認できるが、階段の上がり口部分は「御城御玄関之図」（後藤是山記念館蔵、第17図）に詳しい。御玄関からは蠶之間に入り、梅之間・桜之間・桐之間・若松之間・昭君之間・蘇鉄之間・团扇之間・波之間・吉野之間・九曜之間・御竈之間（遺炉裏之間カ）の順に通り、御居間で御式を行なった³⁵⁾。その後、竈之間・九曜之間・松之間を通って天守に至り、天守上段にて御祝の儀礼を行なった。

儀礼の場として利用されていた本丸御殿であったが、慶応3年（1867）に藩庁を奉行所から大広間へと移したことにより、再び政治の中心部となった。慶応3年の機密間日記によれば、本丸御殿に藩庁が移されたのは、藩主在國中の奉行所・花畠屋敷間の政務の滞りを改善するためで、一門衆・家老衆ならびに奉行所の部局は本丸御殿の座敷内に割り振られた³⁶⁾。座敷内の部屋の割り振りの詳細は現段階で確定しないが、同年の小物成方の覚帳によれば、月見櫓下の部屋には御郡方御米銀方・寺社方御米銀方・小物成方の三局が置かれている³⁷⁾。その後、藩庁は明治3年7月18日、花畠屋敷へと移された³⁸⁾。

(5) 废藩置県後の熊本城

明治4年（1871）、廢藩置県により熊本県庁は旧藩主の邸宅であった花畠邸に置かれた。同年8月20日、鎮西鎮台の設置が決定すると、本営を熊本県庁に置いた。これにより、県庁は二の丸の有吉邸へと移ることとなった。鎮西鎮台に花畠邸が引き渡されたのは明治5年（1872）4月3日のことである。明治6年（1873）、鎮西鎮台は熊本鎮台へと改称し、鎮台は熊本城に置かれた。この年3月に二の丸の操練場の兵営の建設が始まる。その後、明治7年（1874）6月に熊本城は陸軍用地に編入され、熊本城本丸に鎮台本営が移転する。さらに明治8年（1875）4月15日、歩兵第十三聯隊が編制され、二の丸に屯営した。同年4月には砲兵第六大隊が発足し、現在の熊本市民会館付近に仮営していたが、翌年には新兵舎が備前屋敷跡（現在の合同庁舎付近）に落成し、移転した。また、同年に編成された予備砲兵第三大隊も砲兵第六大隊の兵舎へ同居した。さらに、同年4月17日には工兵第六小隊が発足、花畠邸内に兵舎が置かれていたが失火のため全焼し、棒庵坂下仮兵舎へ移転している。

以上のように、廢藩置県から鎮台の設置によって熊本城内は様々な変化が行われた。明治6年9月には、「月見櫓取附堀已下何レモ大破、巳ニ崩落ノ个所モ有之」という状況で、堀を解体している⁴³。明治初年に撮影された古写真によると、飯田丸の百間御櫓や數寄屋丸の五階櫓、広間が撤去されている⁴⁴。

明治10年（1877）に入ると、明治政府を下野していた西郷隆盛と、彼を支持する私学校党は、2月5日に挙兵した。明治15年（1882）に刊行された『熊本鎮台戦闘日記』⁴⁵には、明治10年2月14日から10月6日までの西南戦争の戦闘の景況等がまとめられている。これによれば、2月14日より熊本城郭内外の籠城の準備に取り掛かっていることが記されている。竹之丸では炊事場を設置し、糧米500石と薪・炭などを貯蔵した。また、職人を雇い「地雷火」を製造させている。15日には竹之丸と櫓方の両所に火薬庫を設け、敵弾による爆発を避けるため数箇所に分けて貯蔵した。16日に棒庵坂上から空堀へ降りる道を開通させ、17日には新堀門から法華坂にいたる道の一般人の通行を禁じ、翌18日、地雷火や橋の設置、砲壘の築造を行った。また、元薩摩藩士であり、西南戦争では歩兵第十三聯隊第一大隊第三中隊長として熊本城に籠城した隈岡長道の戦闘日誌によれば、第三中隊の守備地では地雷火を古城坂・鞍掛坂・法華坂の三ヶ所に埋設している⁴⁶。

そして19日、熊本城の天守をはじめ、大多数の建物が炎上する。この火災の原因については官軍の自燃説、薩軍の放火説、失火説、市中の火事の類焼説など様々ある⁴⁷。出火の場所は、籠城を体験した児玉源太郎や出石歓彦、杉原歩兵大尉の口述によれば、「天守と書院との渡り廊下」とされるが⁴⁸、城内の状況との矛盾も指摘されている⁴⁹。このほか、具体的な出火場所について述べたものとしては、陸軍中将中井広義の日記に「午前十一時本台応接所ヨリ出火」⁵⁰とある。また、「熊本鎮台会計部従征中日誌」には「本台文庫ノ近傍ヨリ俄然出火」とある⁵¹。「応接所」や「文庫」の位置は不明で、火元は定かではない。この火災によって本丸御殿も焼失した。「熊本鎮台戦闘日記」によると、御殿焼失後は、3月9日に「此日天幕ヲ暗道ニ移シ以テ本營皆茲ニ転ス」とあり、石垣で囲まれた闇り通路は安全上の理由から、本営を置く場所として利用されたと考えられる。さらに、熊本の市中は、城下の民家などが薩軍の隠れ家や陣地となることを防ぐために、鎮台によって戦略的に焼き払われた。なお、家屋だけでなく、下馬橋をはじめとする主要な橋も薩軍の侵入を防ぐために官軍によって撤去された。

2月21日、薩軍が城下に侵入し熊本城での戦闘が開始する。午後1時20分に熊本電信分局より伊藤博文參議宛に「唯今戦争始め候、大砲しきりに放つ」との電報が打たれている。籠城の際、鎮台は守備隊を①千葉城付近守備隊、②下馬橋付近守備隊、③古城付近の守備隊、④藤崎台付近の守備隊、⑤京町方面の守備隊の五大地区に分割し、予備隊を西出丸北地区に分置、本営を宇土櫓に置いた。

鎮台兵の主要武器としてはスナイドル銃が使用された。熊本鎮台には他鎮台に先駆けて明治9年（1876）秋にスナイドル銃が支給されている⁵²。なお、スナイドル銃の弾薬の欠乏を防ぐため、夜間の探偵射撃に

はエンフィールド銃を使用することとした。そのため、エンフィールド銃や弾薬は各堡壘に供給されていた。

熊本城に設置されていた電信分局は21日午後3時40分に断線したが、鎮台より4月8日に川尻方面に出発した突撃隊が征討軍と連絡を通じるのによく成功する。その後、川尻方面の官軍が15日に熊本城に入城し、2ヶ月に及ぶ籠城戦は終了した。

西南戦争後も、熊本城は陸軍によって管理され、改変を受けた。明治12年5月に編集された「熊本城郭及市街之図」（国立国会図書館蔵）の市街図部分には、天守台に倉庫、天守台の前にはコの字型の建物が描かれている⁵³。このコの字型の建物は明治11年に建築された熊本鎮台本営である。

明治18（1885）年5月には第十一旅団の本部が千葉城に置かれた。同21年（1888）5月には、熊本鎮台は第六師団となり、師団司令部が本丸に置かれた。歩兵第十一旅団は本部を千葉城から飯田丸へと移す。また、歩兵十三連隊が二の丸に、歩兵第二三連隊が花畠旧藩邸と監物台に分屯した。騎兵第六大隊は山崎町に、砲兵第六連隊は城内備前屋敷に、輜重第六大隊は古京町に置かれた。工兵第六大隊は千葉城に置かれたが、明治22年（1889）6月に大江渡鹿村の新兵営に移転している。明治27年（1894）には花畠旧藩邸の新築兵舎が完成し、歩兵第二三連隊はすべて花畠に移った。その後、師団のほとんどの兵営は大正14年（1925）頃までに城内から移転し、終戦後まで同じ位置にあったのは輜重第六大隊のみであった。

明治22年7月28日、熊本地方でマグニチュード6.3と推定される強い地震が発生した。震源地は金峰山東麓付近であったことから、金峰山地震と呼ばれる。この地震によって熊本城内も大きな被害を受けた。白川新聞の発行者である水島貴之は、「熊本明治震災日記」に被災状況を記している。師団営内の石垣の崩壊箇所は頬当門より数寄屋丸・間門入口及び間門内の左右の石垣、元飯田丸跡、軍法会議所北、同会議所内（元櫓方）及び衛戍兵営弾薬庫内、百間石垣、東竹の丸石垣など、29箇所に及んだ。本丸御殿周辺の石垣は、間御門入口西外の石垣、間通路門内四ヶ所、間通路より東の入口北側一ヶ所の被害があった。日本地震学会が調査のために撮影した古写真（第18図）は、西南戦争で被熱した石垣から、一ノ門御門に近い大御台所の石垣上から間御門に向って写したものと考えられる。崩落した石垣は、軍によって復旧された。



第18図 「旧熊本城間ガリ 第六師団本部石垣崩壊の景」(写真) 画像提供：国立科学博物館

第2表 熊本城年表

凡例：主な出典資料は次のように略記した。

〔新熊〕 = 『新熊本市史史料編近世Ⅰ』、『県史中』 = 『熊本県史料中世篇第五卷』、『県史近』 = 『熊本県史料近世篇』

年	西暦	藩主等	事 項	備 考
天正16年	1588		5月 畠山秀吉が佐々成政に切腹を命じる 6月 肥後を二分し、加藤清正（隈本城）と小西行長（宇土城）に分け与える 10月 肥前名護屋城、加藤清正・小西行長・黒田長政らの繩張により築造着手	
天正18年	1590		2月26日 石垣・堀の普請について家臣團に指示 4月24日 清正、聚楽より御歳米・材木の調達・城普請に付き家臣に指示	広島大学所蔵猪熊文書（〔新熊〕） 中沢広勝氏所蔵文書（〔新熊〕）
天正19年	1591		5月11日 織工町の町人の入れ替えを行う 8月6日 城内に米蔵設置を指示 8月13日 隈本城作事のこと、肥前名護屋城作事のための材木準備を指示	下川文書（〔県史中〕） 浜沢栄一氏蔵文書（〔新熊〕）
天正20年 (文禄元年)	1592		・文禄の役 9月21日 侍町の惣構の崩の建築について指示 11月12日 本丸の「おうへ」の作事について指示	西村清氏蔵文書（〔新熊〕）
文禄2年	1593		7月 西生浦城普請	
文禄3年	1594		3月12日 堀の建て方、櫓の建て直しなどについて指示	連見真曹氏所蔵文書（〔新熊〕）
文禄4年	1595	加 藤	11月28日 清正、惣構の堀の修復、年貢徵収、造船、鉄砲者・侍の徵集、瓦の発注などを留守家老に指示	高林兵衛氏蔵文書（〔新熊〕）
慶長元年	1596		5月 清正帰国。11月、朝鮮再征の先陣として隈本を発す ・この頃清正、古府中の商家・寺院を隈本城下に移すという	「加藤清正伝」 「肥後国誌」
慶長2年	1597	清	10月 岸山城普請	
慶長3年	1598	正	10月16日 高麗より帰国後は年貢のはか、人夫諸役も2・3年免除との制 札を出す 12月 朝鮮より帰国	下川文書（〔県史中〕）
慶長4年	1599		・城普請始まる ・慶長四年八月吉日銘の演瓦瓦製作（瓦師福田家の先祖附には初代福田五右衛門が慶長3年に瓦師棟梁を拜命とある）	出土瓦、『熊本市史』
慶長5年	1600		・関ヶ原の戦い。清正は黒田如水とともに九州で軍事行動を展開 10月26日黒田如水を「新城」で歎待するため、天守の作事を急がせる	中澤広勝氏所蔵文書（〔新熊〕）
慶長6年	1601		8月 徳川家康の許可を得て、隈本新城（茶臼山）造築の鍛はじめ（諸説あり）	続撰清正記
慶長7年	1602		・西出丸の大黒櫓（乾櫓）完成	肥後国年譜（〔肥後近世史年表〕）
慶長11年	1606		・江戸城普請	
慶長12年	1607		2月 脱府城普請 ・新城完成、隈本城を熊本城と改める、町の名も熊本と改称する	新撰事蹟通考（〔肥後文献叢書〕）
慶長15年	1610		4月 熊本城大広間及び花畠の作事、間もなく終了か 7月22日 本丸広間の縁、花畠作事について指示 ・名古屋城普請	「加藤清正伝」 下川文書（〔新熊〕）
慶長16年	1611		6月24日 清正没する 7月10日 萩藩の密使、肥後国を探索	
慶長17年	1612	加 藤	6月 忠広、造園相続を安堵される	肥後国熊本様子圖書
慶長19年	1614		10月 大坂冬の陣	下川文書（〔新熊〕）
(慶長20年) 元和元年	1615		一国一城令。支城の破却 4月 大坂夏の陣	
元和2年	1616		5月 中尾山に本妙寺が移される ・牛方・馬方騒動	
元和4年	1618	忠 広	6月 熊本地方に大地震、城内被害甚だしく煙硝蔵爆発。天守その他の石垣にも被害あり	「加藤清正伝」
寛永2年	1625		6月 忠広改易につき、幕府上使衆城の受け取りなど	『徳川実記』
寛永9年	1632		7月22日 上使衆、熊本・八代両城を受け取り	

		10月4日 熊川忠利、肥後拝領 12月9日 忠利、熊本城に入城	部分御旧記国都並人民部
寛永10年	1633	2月19日 熊本城本丸修理のため忠利は花畠屋敷に移る	總考類錄卷三十四
寛永11年	1634	3月17日 熊本城の石垣・堀・堀・門などの改修を幕府に願い出る 4月14日 幕府より熊本城の堀・櫓の修理、二の丸、三の丸の修理許可される 8月2日 熊本城の各所、絵図での申請通りに普請を行うことを許可される 8月15日 忠利、本丸作事成就につき花畠より移る ・岡藩密使、熊本城・城下の様子を探索	肥後國熊本城廻普請仕度所絵図 (県立図書館蔵) 御自分御普請 (永青文庫蔵) 御自分御普請
寛永12年	1635	・武家諸法度の改正 7月25日 九州地方大風、肥後も損害多く、城堀・櫓・民家破損多し 11月 本丸天守の修理、花畠屋敷の作事おおかた成就	總考類錄卷三十六 部分御旧記御書附并御書部廿三 (『縣史近』2-259)
寛永13年	1636	・江戸城普請 7月15日 本丸に落雷	『大日本近世史料細川家史料』
寛永14年	1637	閏3月 熊本城普請を中止する 7月 鮎田郡下立田村に泰勝寺建立 10月 天草・島原一揆起ころ ・平左衛門丸の屋敷、西竹之丸の台所など計7軒を解体	部分御旧記普請作事部 (『縣史近』3-776) 『肥後國誌』 平左衛門元屋敷材木覚帳 (永青文庫蔵) はか
寛永16年	1639	10月 花畠作事小屋番所より火事 12月 花畠屋敷の前の橋、百間馬屋の上角の櫓大方出来る。古城両所の橋の普請に取りかかる	部分御旧記災変部 部分御旧記御書附并御書部廿一 (『縣史近』2-181)
寛永17年	1640	6月1日 白川より川用までの井手の扯張と三の丸の内坪井川、町人その他用のため砂取の許可を幕府に申請し、14日、許可される ・熊本城本丸東方石垣孕みのため、築直を幕府に申請	御自分御普請 『大日本近世史料細川家史料』
寛永18年	1641	3月17日 忠利死去	
寛永20年	1643	5月5日 光尚、遺領相続する 2月 妙解寺建立	『肥後國誌』
寛永21年 (正保元年)	1644	6月25日 熊本町、農村とともに大雨洪水。熊本城石垣、土手、堀、櫓破損する 7月10日 熊本洪水のため、破損箇所の修復を幕府に申請 8月23日 幕府、熊本城石垣、土手、櫓、堀の破損修理、三の丸虎口櫓脇の川岸崩についての新規土塁、水抜き1箇所の修理を許可する ・幕府、国絵図と城絵図の作成を命じる	渡辺玄察日記 (『肥後文獻叢書』) 『冨庵和尚書簡集』 御自分御普請 神雜 (永青文庫蔵)
正保2年	1645	5月13日 太鼓櫓の門普請につき、門を開け普請者を通す 7月27日 九州・中国、大風で熊本城ほか各地の城郭が多く破損する	奉日 (『熊本藩年表稿』) 『徳川実紀』
慶安2年	1649	8月14日 本丸艮方石垣崩れにつき、修復が許可される 12月26日 光尚、死去	總考類錄卷六十四
慶安3年	1650	4月 納利、遺領相続	
承応2年	1653	8月 肥後大嵐にて大木倒れ、幅広き石を吹き割る、故に岩削風という	渡辺玄察日記
万治元年	1658	3月27日 熊本坪井町より失火にて400余軒焼失	渡辺玄察日記
寛文元年	1661	3月 坪井の火事 3月 熊本城本丸御殿の修繕につき、大工の食事を本丸内にて行いたいこと。それに応じ竹の丸の出入許可を願出 7月 肥後大地震、翌日まで中小地震3回	渡辺玄察日記 奉日 (『熊本藩年表稿』) 渡辺玄察日記
寛文2年	1662	9月 夜、大地震あり	渡辺玄察日記
寛文3年	1663	2月 熊本坪井町屋より失火あり、500余軒焼失す	渡辺玄察日記
寛文5年	1665	4月 熊本手取より出火、焼死40余人。熊本地方大地震	渡辺玄察日記
寛文7年	1667	3月14日 千葉城の塙硝蔵が焼失 ・火の用心のため花畠館長屋並びに塙を瓦葺に改める	本藩年表 (永青文庫蔵) 本藩年表
延宝4年	1676	・大雨洪水により城内石垣、堀、土居、水抜きなど破損のため修復願	御自分御普請、御家譜統編 (永青文庫蔵)

		12月11日 熊本城枕方石垣普請について幕府の許可	江戸幕府老中連署状写
元禄3年	1690	・本丸より申西（新一丁目御門付近）の堀の浚渫を申請	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）
元禄4年	1691	2月 坪井、大火事 8月 2月の大火灾の結果、道幅の拡張、町屋と侍屋敷を変更する事について、是月幕府の指令あり、着手し11月工事終る。＊坪井広町といふ	渡辺玄察日記 本藩年表、御家譜続編 肥後国熊本城下川岸崩傾候所之絵図（永青文庫蔵）
元禄8年	1695	・本丸より子の方角の川岸、大雨のため崩落につき、修復申請	
元禄10年	1697	4月 大地震あり	渡辺玄察日記
細川綱利	1702	・堀の浚渫と修築の申請	〔熊本城修築願絵図〕（永青文庫蔵）
	1703	8月9日 小天守下（石門附近）の石垣孕み、その他4箇所の修復申請	〔熊本城修築願絵図〕（永青文庫蔵）
	1704	8月 小天守下石垣孕み、石垣普請につき構2箇所取除	御奉行所覚帳（永青文庫蔵）
	宝永3年	3月 是頃、天守北側の石垣を大補修	石門内に「元禄十七年甲申三月日」と刻字あり
宝永4年	1706	4月 是月、大地震所々岩石抜け大地破裂、家屋倒れ圧死する者夥しい	『肥後近世史年表』
宝永6年	1707	10月 肥後大地震	南蘿蔓録「肥後近世史年表」
正徳2年	1712	10月7日 熊本城石垣破損のため、6箇所修補願い、坪井竹屋町より出火、1200余軒焼失 ・手取の水道できる	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵） 官職制度考 肥後国誌
正徳5年	1715	7月6日 細利隠居願い、11日許可・宣記、熊本藩主となる	
享保元年	1716	4月 熊本城石垣破損、5箇所修補を幕府に願い、許可あり	本藩年表
享保4年	1719	9月30日 千葉城長岡内膳家より出火し、竹の丸下の竹小屋焼失、下通から宝町筋、白川端まで焼失	〔熊本藩町政史料一〕、本藩年表、御家譜続編
享保7年	1722	9月 熊本城本丸、子の方石垣1箇所、丑寅の方石垣1箇所孕み、外曲輪未申の方外川岸土留・石垣1箇所崩壊につき修補を8月に申請、許可される	御家譜続編
享保13年	1728	5月 新町1丁目御門外堀2箇所、坪井方面3箇所浚渫を幕府に申請、許可される	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）、御家譜続編
享保14年	1729	9月 熊本城新堀御門の普請あり	本藩年表
享保17年	1732	4月28日 蔽の内より出火し、京町1丁目・2丁目・今京町まで類焼	〔熊本藩町政史料一〕
享保20年	1735	6月26日 宣記、江戸で没する	
元文3年	1738	8月25日 宗孝、遺領相続	
元文5年	1740	5月 熊城小天守に落雷	本藩年表
寛保3年	1743	5月 大風雨により埋門脇板檻倒壊、以後再建なし	公私便覧後編
延享元年	1744	8月 東竹の丸堀藏、大破につき壊す	本藩年表
延享4年	1747	閏7月9日 熊本城外曲輪高麗門脇左右の堀、木下伊織屋敷脇の堀の浚渫について、幕府より許可あり	本藩年表、御家譜続編
寛延2年	1749	5月 熊本城諸所修築について願出の通り完了	御家譜続編
宝曆4年	1754	6月2日 竹の丸松木に落雷	肥後国年歴（〔肥後近世史年表〕）
宝曆6年	1756	11月 熊本城石垣修築並びに堀の浚渫について、願の通り終了	御家譜続編
宝曆8年	1758	4月12日 熊本城石垣崩れ孕み箇所3箇所修復、堀浚渫について幕府より許可される	本藩年表、御家譜続編
（宝曆13年）明和元年	1764	8月15日 湯川宗孝江戸城内において切られ、翌日死去	御家譜続編
明和2年	1765	10月 重質跡を廻ぐ	
宝曆2年	1749	4月 城内外御門脇の明地に權方役所を建てる	旧章略記（『熊本法學』第21号）、本藩年表はか
宝曆4年	1754	5月 熊本御作事所雷火	
宝曆6年	1756	12月15日 城内二の丸に藩校「時習館」を開設する	御家譜続編
宝曆8年	1758	12月 医学校再春館創設、翌年開講	旧章略記
（宝曆13年）明和元年	1764	3月 西大手門修繕につき往来差し止め	〔藩法集7〕・〔藩法集7〕
明和2年	1765	4月 坪井立田口際番所修繕	
明和4年	1767	1月 作事所焼失	年々覚頭書、御城内御絵図
明和5年	1768	6月 熊本城大天守に落雷	本藩年表（永）
		9月 竹の丸入口の用事の櫓に地引合見図帳を格納	年々覚頭書
		4月 小天守下平黒御門解体	公私便覧後編

明和 6 年	1769	7月28日 未の刻、熊本大地震	郷党歴代拾徳記（男成神社）
明和 7 年	1770	閏 6月25日 珠井から出火、476軒焼失、内坪井、京町、新堀、岩立ほか・熊本城北西隅の森木櫻焼失	本藩年表（水）ほか
安永 6 年	1777	7月25日 肥後大風で南御門を櫓中程より吹き破られ、家屋倒壊29,000軒余	本藩年表（水）
安永 8 年	1779	5月 熊本城乾櫻修復、棟札発見 5月27日 熊本城外曲輪水堀3箇所の浚渫を申請し、6月に幕府より許可される ・花畠屋敷大書院・中柱・歌仙の間などの屋根が銅瓦となる	肥後国年歴（肥後近世史年表） 肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）、 御家譜続編 本藩年表
天明元年	1781	・本丸より壯寅、午、未申の方の石垣三箇所学みのため築直し申請	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）
天明 2 年	1782	・天明元年に申請したものを幕府に再提出 8月 熊本大風、倒家669軒、田畠損耗甚大	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵） 本藩年表
天明 4 年	1784	・水堀（一丁目御門付近）の浚渫を申請	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）
天明 5 年	1785	9月 御花畠広間銅瓦となる 10月 重質死去	『熊本藩町政史料一』
天明 5 年	1785	細川重質 12月12日 治年、遺領相続	
天明 6 年	1786	6月 城内竹の丸往来差紙付のほか禁止	『藩法集 7』
天明 7 年	1787	9月 治年死去 立札（宇土支藩藩主）、遺領相続し齊茲と改める	
寛政 2 年	1790	1月 熊本城本丸より卯之方及び未之方石垣孕みの修補について幕府に申請	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）
寛政 4 年	1792	細川齊茲 2月 熊本城元竹小屋跡に犬追物積古場出来る 4月1日 島原の眉山崩れ、大津波発生	学校方改帳
寛政 5 年	1793	2月 熊本城修理許可	本藩年表
寛政 8 年	1796	11月 権方裏御櫓石垣普請幕府に届け出 6月 熊本大洪水、古今未曾有の洪水、熊本府内京町山崎の外全域浸水、漁家2,927軒等 7月 立田口子飼方面に堤防築（一夜塘とも農年塘とも言う）	〔肥後国熊本城絵図〕（永青文庫蔵） 本藩年表 『肥後先哲録』
寛政10年	1798	12月 東竹之丸明地の犬追物積古場、元通りに戻すため稽古停止（稽古場は田迎町に移転）	学校方改帳
文化 7 年	1810	・熊本御藏、7間に21間建添あり 11月10日 齊茲隠居し、齐樹が家督相続	本藩年表
文政 3 年	1820	細川齊樹 12月 熊本城本丸より子の方（権方）櫓下の石垣孕に付、修補願を幕府に提出	肥後国熊本城絵図（永青文庫蔵）
文政 4 年	1821	1月 熊本城石垣手入願、許可される	本藩年表
文政 5 年	1822	・権方裏御櫓石垣普請完成 6月 作事所材木藏雷火にあう	内側石垣に「文政五年六月竣工」の刻字あり 本藩年表
文政 7 年	1824	6月 古京町長岡内膳屋敷に二の丸御形完成。本山旧屋形は解体し、内膳宅は牧崎に引越	本藩年表ほか
文政 9 年	1826	2月 齊樹死去。 齐謙（宇土支藩藩主）本家相続	
文政12年	1829	・御天守方椽板、雨戸板は杉材をやめ、楠とする	年々覚頭書（永青文庫蔵）
天保10年	1839	3月 御城西大手御門作事につき、往来通行止め	壁書扣（熊本藩年表稿）
天保11年	1840	10月23日 薬物所柄油方御蔵2戸焼失	〔肥後近世史年表〕
弘化元年	1844	・十四間櫓修理	棟札
弘化 3 年	1846	・靈台橋架構着工。二の丸屋敷落雷	〔肥後近世史年表〕
弘化 4 年	1847	12月 数十年来希な強震のため、熊本城の諸所の石垣も崩れ、または孕み会所の圍い垣なども破壊される	〔肥後近世史年表〕
嘉永元年	1848	2月 竹の丸作事所火事	本藩年表
安政 4 年	1857	・七間櫓修理	柱墨書
安政 5 年	1858	・安巳橋架設	〔肥後先哲録〕
安政 6 年	1859	6月 強風雨、熊本城一の天守の櫓吹き折られる	肥後国年歴（肥後近世史年表）
安政 7 年（万延元年）	1860	・源之進櫓修理 ・齊謙死去 詔邦遺領相続	棟札

文久元年	1861	・東十八間櫓、北十八間櫓、五間櫓修繕	棟札ほか
慶応元年	1865	・田子櫓修繕	懸魚
慶応2年	1866	・四間櫓、不開門修繕	棟札
明治2年	1869	6月17日 詔邦、版籍奉還により熊本県知事となる	『肥後藩国事史料卷十』
明治3年	1870	7月 時習館・郷学校・洋学校・再春館を廃止。藩庁を花畠郡に移す 9月 知事久が熊本城廢棄を申し出る 10月 古城医学校開校 ・熊本城内を一般に公開する	『肥後藩国事史料卷十』 『肥後藩国事史料卷十』
明治4年	1871	3月 時習館を解崩して兵式操練場とする 7月 城内に錦山神社創建 7月14日 魔羅置県 8月20日 鎮西鎮台の設置。本營を熊本に置く 9月 洋学校開校	『肥後藩国事史料卷十』 法令全書
明治5年	1872	4月3日 鎮西鎮台に花畠旧藩邸引渡し 6月 明治天皇肥後巡幸 6月 熊本県庁、二の丸から二木本に移転。白川県と改称 7月12日 新町3丁目に郵便役所開設（西南戦争で焼失） ・新宇（懲役場）を手取本町（現熊本市役所）に設置	『肥後藩国事史料卷十』
明治6年	1873	1月9日 鎮西鎮台から熊本鎮台に改称 6月 二の丸の操練場の兵営建設始まる 6月30日 鎮西兵团病院（鎮西鎮台病院）を熊本鎮台病院に改称 9月 月見櫓・取付櫓以下大城により撤去 12月 熊本鎮台暴動発生	法令全書 熊本県公文類纂12-2 公文別録 大日記
明治7年	1874	5月12日 熊本師範学校開校 6月 熊本城、陸軍用地に編入される。本丸に鎮台本營が移転 ・錦山神社を城内より京町に移転	
明治8年	1875	3月 古城医学校、魔校 4月15日 歩兵第十三連隊、二の丸に屯着 4月 駆兵第六大隊が発足。現在の熊本市民会館付近に仮営 4月 一新小学校開校 11月24日 県庁が二木本より古城病院跡に移転	
明治9年	1876	2月 白川県を熊本県に改称 4月17日 工兵第六小隊が発足、花畠郡内に兵舎が置かれていたが失火のため全焼し、精庵坂下兵舎へ移転 9月 熊本地方裁判所設置。洋学校を廃止し、洋学校跡に臨時裁判所、県警本部を設置 10月24日 神風連の変 ・砲兵第六大隊の新兵舎が備前屋敷跡（現在の合同庁舎付近）に落成し、移転。予備砲兵第三大隊も砲兵第六大隊の兵舎へ同居	
明治10年	1877	2月西南戦争 2月19日天守、本丸御殿その他の焼失、広く城下も焼失 ・下馬橋撤去、架替え	
明治11年	1878	・藤崎宮、井川淵町に移転 ・裁判所、京町に移転	
明治17年	1884	7月1日 歩兵第十三連隊の一一部を分離し、歩兵第二三連隊第一大隊を設置。山砲兵第六大隊を砲兵第六連隊と改称し、元備前屋敷に設置。 ・宇土櫓及び監物櫓改修（陸軍）	
明治20年	1887	1月1日 熊本県庁、古城より南千反畠町に移転	
明治21年	1888	5月14日 熊本鎮台、第六師団と改称	
明治22年	1889	6月1日 熊本市役所開庁 6月13日 工兵隊第六大隊が千葉城から大江村渡鹿の兵営に移転 7月28日 大地震あり、頼当御門より数寄屋丸の石垣、暗がり門通りを経て師団司令部まで左右の石垣、竹の丸の中程（飯田丸五階櫓台）、下馬橋の石垣、百間石垣の上部が崩れる（金峰山地震）	

明治23年	1890	4月1日 憲兵隊設置	
明治24年	1891	7月1日 城内梅屋敷に熊本電燈会社が開業	
明治27年	1894	4月20日 歩兵第二三連隊が花畠旧藩邸に兵営移転	
明治30年	1897	8月 野戰砲兵第六連第一大隊兵営が大江村に移転 9月 監物台に陸軍幼年学校設置（昭和2年廃止）	
明治32年	1899	・桜橋架橋、城外と古城の北側を結ぶ	
明治35年	1902	5月 熊本電灯会社解散 11月 陸軍特別大演習、本丸が大本營となる ・旧南坂下馬橋通りを改修して行幸坂を新設、城内通路改修 ・下馬橋は下流に架け替えられ行幸橋と改称	
明治42年	1909	・清正公三百年祭。錦山神社を加藤神社と改称	
大正6年	1917	・第六師団司令部、天守台前に落成	
大正14年	1925	5月24日 歩兵第十三連隊、渡鹿の新兵舎に移る	
大正15年	1926	1月12日 熊本城跡保存会結成 6月15日 新町清爽園開場式	
昭和2年	1927	3月31日 陸軍幼年学校廃校 7月30日 熊本陸軍教導学校が城内に開校 4月1日 熊本城のドン（牛砲）復活 ・宇土櫓解体修理、長嘶改築、谷村計介銅像建立（書物櫓跡）	
昭和3年	1928	・電車敷設（辛島町 - 段山線）のため段山の基部を掘り削る	
昭和4年	1929	6月29日 熊本銀行社、千葉城趾に新築落成式	
昭和8年	1933	1月23日 宇土櫓、国宝に指定される 2月4日 熊本城が史跡に指定される	
昭和11年	1936	3月28日 熊本貯金支局が花畠町に落成	
昭和14年	1939	4月1日 熊本陸軍幼年学校が熊本陸軍教導学校内に開校（15年清水町に移転）	
昭和18年	1943	8月1日 熊本陸軍教導学校が熊本予備士官学校となる	
昭和20年	1945	10月 米軍進駐。旧幼年学校や工兵・騎兵・砲兵各隊兵舎に入る 10月21日 宇土櫓一般公開 ・三の丸に化血研發室	
昭和24年	1949	・大蔵省が熊本城を熊本市に貸下げ	
昭和25年	1950	・新文化財保護法により熊本城跡を史跡に、国宝建造物が重要文化財に指定	
昭和26年	1951	9月17日 熊本城の管理者に熊本市を指定	
昭和27年	1952	6月5日 本丸師団司令部跡に市立熊本博物館開館 11月8日 陸軍幼年学校跡に監物台樹木園開園 ・熊本城保存修理を国の直轄事業として、27年度から5カ年継続で実施	
昭和28年	1953	5月10日 長嘶が110m (81.0m) にわたって倒壊 6月26日 熊本大水害・平櫓保存修理起工式	
昭和29年	1954	・權方門崩壊（現加藤神社） ・新櫛橋下樹木園東北隅崖崩れ ・長嘶解体修理、宇土櫓半解体修理工事着手 ・西出丸の石垣（軍の火薬庫跡）を取り除く	
昭和30年	1955	12月29日 史跡熊本城跡が特別史跡に指定される ・新櫛橋（監物櫓）解体修理 ・權方門を解体保存	
昭和31年	1956	・不閉門・源之進櫛解体修理工事着手 ・西櫓門を改修	
昭和32年	1957	・宇土櫓の解体修理工事完了 ・權方門を竹の丸入り口に移築 ・田子櫓、七間櫓、十四間櫓、四間櫓の解体修理に着手	
昭和33年	1957	12月 熊本県立図書館が千葉城町に完成（昭和60年、出水町に移転開館）	
		4月1日 天守閣再建起工式	

昭和34年	1958	<p>8月20日 熊本県営熊本城プール完工式</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重文建造物（宇土櫓・不間門・平櫓・監物櫓・長櫓）の管理団体に指定 ・竹の丸旧軍倉庫解体時に長櫓52mが倒壊 ・五間櫓下石垣補強工事の実施 	
昭和35年	1960	<p>5月14日 熊本県立第一高校（古城町）落成式</p> <p>9月22日 天守閣再建完成、本丸20ha有料化</p> <p>10月15日 蕨崎台県営野球場完工</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十四間櫓、四間櫓、解体修理完了 ・五間櫓・北十八間櫓解体修理着手（36年完了） 	
昭和36年	1961	<p>1月16日 二の丸に合同宿舎完成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平御櫓再建完成 ・東十八間櫓解体修理工事着手（37年完成） 	
昭和37年	1962	<p>4月11日 熊本県立大に高校が二の丸に開校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・源之進櫓、四間櫓、十四間櫓、七間櫓、田子櫓、東十八間櫓、北十八間櫓、五間櫓の管理団体に指定 ・加藤神社、現在の位置に移る 	
昭和38年	1963	3月1日 NHK熊本放送開館が千葉城町の旧偕行社跡に完成	
昭和40年	1965	<ul style="list-style-type: none"> ・特別史跡熊本城跡の管理団体に熊本市が指定される 	
昭和41年	1966	<ul style="list-style-type: none"> ・馬具櫓再建完成 ・月見櫓修石垣修理 ・午穂台の石垣一部崩壊を復旧 	
昭和42年	1967	<ul style="list-style-type: none"> ・石門の石垣修理工事に着手（昭和44年に完成） ・二の丸広場園路、駐車場造成工事に着手（都市公園整備） 	
昭和43年	1968	<ul style="list-style-type: none"> ・県立第二高校が健軍東町の新校舎に移転 	
昭和44年	1969	<ul style="list-style-type: none"> ・加藤神社遷、平御櫓崩、馬具櫓前石垣復旧工事完了 ・宇土櫓部分修理工事 	
昭和45年	1970	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸、亥亥櫓跡から西大手門跡間の石垣復元工事に着手 ・長櫓屋根保存修理工事完了 	
昭和50年	1975	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸亥亥櫓跡から西大手門跡間の石垣復元工事完成 ・集中豪雨により樹木園の崖、二の丸空堀の崖などが崩壊する 	
昭和51年	1976	<p>3月4日 二の丸に熊本県立美術館開館</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西竹の丸五階櫓（独立櫓）石垣修理完了 ・昭和50年の崖崩れ等の災害復旧工事完了 ・二の丸御門跡整備工事着手 ・平櫓部分修理工事着手 	
昭和52年	1977	<ul style="list-style-type: none"> ・西南の役百周年龍城記念祭が飯田丸で開催される ・二の丸御門跡整備工事完成 ・長櫓部分修理工事完了 	
昭和53年	1978	<p>4月1日 熊本城内古京町に熊本市立熊本博物館が完成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不開門板道整備工事着手 ・監物櫓部分修理工事完了 	
昭和54年	1979	<ul style="list-style-type: none"> ・源之進櫓部分修理工事完了 ・不開門板道整備工事完了 ・三の丸森本儀太夫預櫓跡周辺整備工事完成 	
昭和55年	1980	<ul style="list-style-type: none"> ・棒庵坂石垣修理第一期工事着手 ・数寄屋丸の地図石補修工事完了 ・西大手門復元整備工事着手 ・不開門部分修理工事完了 	
昭和56年	1981	<p>3月15日 花畠町の勧業館跡地に産業文化会館開館</p> <ul style="list-style-type: none"> ・田子櫓、七間櫓、十四間櫓、四間櫓保存修理工事 ・棒庵坂石垣修理第一期工事完了 	

		<ul style="list-style-type: none"> ・西大手門復元整備工事完成 ・宇土櫓、櫓台石垣好み状況調査の実施 	
昭和57年	1982	<ul style="list-style-type: none"> 8月10日 熊本県伝統工芸館開館 ・宇土櫓西側石垣修理工事完了 ・千葉城跡（国税局所管）石垣修理工事完了 	
昭和58年	1983	<ul style="list-style-type: none"> 3月 特別史跡熊本城跡保存管理計画策定 ・平御櫓下石垣保護のため坪井川に擁壁石垣築造（59年完成） ・棒庵坂石垣修理第二期工事着手 	
昭和59年	1984	<ul style="list-style-type: none"> ・棒庵坂石垣修理第二期工事完了 ・平御櫓屋根補修工事完了 	
昭和60年	1985	<ul style="list-style-type: none"> ・宇土櫓保存修理（半解体）工事着手 ・美術館西側石垣修理工事着手 	
昭和61年	1986	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館西側石垣修理工事完了 ・坪井川護岸及び護床工事完了 	
昭和63年	1988	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸（奉行所跡）東側石垣保存修理工事着手 ・備前堀整備工事着手、平成元年3月完成 ・数寄屋丸石垣復元整備工事完了 	
平成元年	1989	<ul style="list-style-type: none"> ・宇土櫓保存修理工事完了 ・平櫓保存修理（部分修理）工事完了 ・数寄屋丸二階御広間復元整備工事完成 ・埋門（冠木門形式にて）再建整備工事完成 ・三の丸地区に県指定重文「旧細川刑部邸」の移築復元工事着手 ・古城堀復元のため發掘調査の実施及び一部浚渫工事の実施 	
平成3年	1991	<p>9月27日 台風19号が日本列島を縦断し各地に甚大な被害をもたらす。熊本城においても重要文化財（長堀、十四間櫓、源之進櫓、田子櫓、東十八間櫓、宇土櫓）が被害を受け、特に長堀は最大瞬間風速56m/hの南風によって中央部が倒壊した。また、石垣も2箇所が崩壊し、城内全城にわたって樹木の倒木、枝折れ等の被害を受けた</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豪雨により城内数カ所で崖崩れ等の被害を受ける 	
平成4年	1992	<ul style="list-style-type: none"> ・台風19号による災害復旧（長堀・源之進櫓他・石垣等）工事完了 ・西出丸（奉行所跡東側）石垣保存修理工事完了 ・二の丸御門周辺整備（第二期）工事完成 ・天守閣災害復旧（台風19号）工事着手 	
平成5年	1993	<ul style="list-style-type: none"> ・県指定重要文化財「旧細川刑部邸」移築復元工事完成 ・西出丸（奉行所跡西側）石垣保存修理工事着手 ・宇土櫓ほか2棟修理工事完了 	
平成6年	1994	<ul style="list-style-type: none"> ・三の丸（古吉町）北側石垣修理工事完了 	
平成7年	1995	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸（奉行所跡西側）石垣保存修理工事完了 ・奉行所跡遺構調査の実施 	
平成8年	1996	<ul style="list-style-type: none"> ・二の丸御門跡石垣保存修理工事完成 ・西出丸（奉行所跡）南側石垣一部復元工事完了 	
平成9年	1997	<ul style="list-style-type: none"> ・南大手門跡石垣及び南坂一部復元整備工事着手（平成10年3月完成） ・熊本城復元整備計画策定 	
平成10年	1998	<ul style="list-style-type: none"> ・未申櫓台石垣保存修理工事 	
平成11年	1999	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸一部復元整備工事着手（平成16年3月完了） 	
平成12年	2000	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田丸五階櫓ほか石垣保存修理、復元工事着手 	
平成13年	2001	<ul style="list-style-type: none"> ・西大手門石垣保存修理工事 	
平成15年	2003	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田丸五階櫓ほか石垣保存修理、復元工事完了 	
平成23年	2011	<ul style="list-style-type: none"> 3月 桜の馬場城彩園オープン 	
平成25年	2013	<ul style="list-style-type: none"> 10月 熊本城調査研究センター開所 	

4 本丸の曲輪と石垣

(1) 曲輪

a 「本丸」の範囲

史跡熊本城跡の個々の曲輪名称については現在、第6図のように呼称されているが、その根拠となる史料は江戸時代の城絵図や古文書に見られる曲輪名が使われている。しかし、本丸・二の丸・三の丸といった数詞曲輪名は時代によって変遷している。

加藤時代の「熊本屋舗削下絵図」^[34]では現本丸部分を「御本丸」と呼んで、その外は「加藤平左衛門屋敷」「たけの丸」「古城」が判明する程度で、他の曲輪名称は不明である。細川氏の入国直後となる寛永11年（1634）の「肥後熊本城廻普請仕度所絵図」^[35]には、現本丸を「本丸」と、現在の数寄屋丸・飯田丸・東竹之丸を「二丸」と呼んだ時期もあったようだが、正保城絵図（1644年頃成立）と推定される「平山城肥後国熊本城廻絵図」^[36]や同時作成の「肥後熊本城廻之絵図」^[37]、「熊本城図」^[38]では、現本丸を「本丸」、現在の平左衛門丸・数寄屋丸・飯田丸・東竹ノ丸を「本丸内」と呼び、現在の竹之丸・西出丸（奉行丸・權方を含む）は「二ノ丸」ないしは「二ノ丸之内」と呼称し、現二の丸は「三之丸」と呼んでいる。また、正保城絵図と同時作成と見られる「熊本城廻目録」^[39]では、「本丸」は「東西百參拾間 南北百五拾參間」の規模で、そのうち「天守有之丸 同丸之内 東西四拾四間 南北八拾壹間」とあり、この数値は現本丸曲輪の規模とほぼ一致する。

降って、元暦頃（1650年前後）・元禄頃（1690～1700年前後）・宝暦後半頃（1700年代後半）・天明頃（1871年前後）の二の丸の侍屋敷配置を描いた一群の絵図「二ノ丸之絵図」^[40]では、現本丸を「御城内」と呼んで外郭のみを描いて空白とし、現在の三の丸・段山・古城・千葉城を含めて「二ノ丸」として描いている。これと同時代の「熊本之図」^[41]や「熊本惣絵図」^[42]、「熊本府の絵図」^[43]といった城絵図では、現本丸部分に曲輪名称を記載せず空白となっていて、その他の曲輪の呼称も不明である。ただ、宝永6年（1709）を嚆矢とする幕府への修理伺いの一連の絵図の中には、現本丸から現西出丸までの空間を一括して「本丸」と、現二の丸を「二ノ丸」、現三の丸を「三ノ丸」と呼称しているものがある^[44]。すなわち、この時代には「御本丸」と「御城内」は同義であったが、三の丸は「二ノ丸」に包含されることがあったことになる。

なお、現在のように各々の曲輪を平左衛門丸などのように固有名での呼称は、寛文6年（1666）の「御城分間」という史料が初見で、「御本丸」（現本丸）、「御天守西ノ御丸」（現平左衛門丸）、「御すきや丸」（現数寄屋丸）、「西竹之御丸」（現飯田丸）とあり、以後はこうした名称が継承されていくことになる。

以上のように、史料上の「本丸」の範囲は時代によって変遷しているが、天守と御殿、及び曲輪外縁の多聞櫓や隅櫓、櫓門で囲繞された現本丸の空間が別の呼称を持つことはなく、熊本城の中核郭として江戸時代を通して機能していた空間であった。以後、特に断わらない限りこの空間を本丸と呼んで記述を進める。

b 本丸の繩張りと建築

本丸は、阿蘇山起源の火碎流堆積物Aso-4を基盤とする茶臼山山頂部の上位にあるローム層を造成して普請されている。Aso-4は弱固結の凝灰岩で農具などの掘削が可能で、ローム層ともども掘削の大きな障害になることはなく、雨水の浸食にも一定程度の耐性があつて石垣を築かない掘削しただけの切岸や空堀には最適な地質であったと考えられる。

本丸の規模はおよそ南北180mで、東西に貫通する幅6.6mの間（くらがり）通路によって南北二つの曲輪に分断されている^[45]。北曲輪は南北が102m東西118m、南曲輪は南北46m東西110mである。

先ず、曲輪内にあった櫓建築の名称と規模について、享保以降の成立とされる「隈本御城之事」^[46]によって紹介する。

北曲輪西側には大天守があった。現在昭和35年に復興された模擬天守が建つ。「御天守七階 御殿守高十六間半、石垣高七間五尺 御上段五間四方、五重目五間四尺四方、四重目五間四尺、三重目八間ニ九間、

二重目八間ニ九間、下重十一間、石垣ノ内穴藏七間ニ九間」とある。「天守方御間内之図」によれば1階平面は12間×13間であった。

大天守の北側に接続して小天守が築かれていた。石垣は大天守のそれを覆って築かれていて後出の普請である。規模は、「小天守五階、高九間半、石垣高七間五尺 御上段四間六間、三重目三間五尺五寸、二重目三間五尺五寸、下重八間半十三間、石垣ノ内穴藏四間半二十間 石垣土台ノ上ニ唐破風ノ出シアリ」である。

小天守の北側の石垣上にあった「北堀門ノ上居櫓」は、「三間十二間」の規模で、「内ノ石門」の上にあった平櫓である。

その東には「御裏北ノ五階」（御裏五階櫓）があった。規模は「上段四方、三重目四間半、二重目四間四間半、下重八間八間半、四方ハフ出、石垣ノ内穴藏五間高五尺」である。

また、その東に接する「御本丸北輪居櫓」は「二間二十六間」で、これに接続した東辺に建っていた「同（御本丸）東輪居櫓」は「五間二十間」で、長局櫓に相当する。

「東ノ口三階門」は「二之間御門」とも呼ばれ、本丸東の出入口にあった三階門で、「四間七間」の規模であった。また、その直ぐ東脇石垣上にあって「東ノ口三階門」と接続していた「東ノ三階」櫓は、上段三間四方、二重目同（三間四方）、三方破風出シ有、下重五間六間二尺」とある。一方、「熊本城図」⁶⁷⁾では「五階御櫓」と記されている。

本丸の巽（南東）にあった「月見櫓」は「上重三間四方、下重六間十三間」の規模で、二層目が櫓で、一部部分は「イロリ」を備えた「月見御台所」であったが、「御城内御絵図」では南東隅に石落しが附いている。

本丸南の突き出した石垣上には「御本丸南小広間櫓」があった。「六間半十五間」規模で、西端に「（上段）三間四方、二（重）目三間四方、下重五間四方」の「小広間西ノ三階」櫓を付属していた。小広間櫓とあるように「御城内御絵図」では南東隅に石落しが附いていた。

小広間の北側の高石垣上には、「西廊下」「御本丸西輪居櫓」「四間十間」があり、その北の大広間との間には「二間半四間」の「北ノ取付」の間があった。「御城内御絵図」ではこれらの西面は廊下で、武者走りの空間とされている。

本丸への西側出入口となっていた「耕作之間三階御門」は「四間十二間」であった。

「限本御城之事」には、「御城内御絵図」で小天守東にあった「トキ御櫓」が見えない。トキ御櫓は元禄16年に櫓台修築にあたって解体されており⁶⁸⁾、狭間や石落しといった櫓の要素が取り除かれて、櫓扱いされないようにになったのかもしれない。

城郭の御殿は、通常、表と奥という二つの空間があり、表の殿舎は一般に玄関（造侍・小広間）、広間（大広間）、書院の三棟で構成されたとい⁶⁹⁾。熊本城の場合、前節でふれたように、明治10年まで存続していた御殿は慶長15年（1610）に加藤清正の指示によって建造され、その殿舎群は寛永9年（1632）に転封してきた細川忠利によって一部修築が加えられたもので、その平面は「御城内御絵図」によって知ることができる。

御成などの応接・接待での武家儀礼の場となる表では、「昭君之間」を主室として三列型で11の部屋が並んだ大広間棟が中心にあり、これと接して小姓部屋を併設した大台所棟が東にあった。また、大広間と露地を挟んで対面する南側には小広間棟があり、その東には月見御台所棟があり、さらに大広間の西側には茶室をもつ数寄屋棟があった。これらは互いに接続し、また、「麒麟之間」や「西廊下」で結ばれていたほか、本丸の外方を臨む曲輪隅の月見台所や小広間では石落としや狭間を設けて櫓機能を具備していたように非常時を想定したものだった。

大広間北側には「吉野之間」を介して藩主が日常的に政務にあたる場となる「中」があった。上段をもち藩主の常御座所となる「松之間」や「波之間」「九曜之間」「造炉裏之間」（中の台所）、「御祈祷所」といった部屋が連続していた。加藤氏時代には「げんじノマ」（源氏之間）や「御座りノマ」（御座之間）が

あった場所だが、細川忠利が入部に伴い改築している。

この中の向の建物と中庭を挟んだ北側が藩主の私的生活の空間となる「奥」部分で、「御居間」を主室に井戸を併設した「御風呂屋」や「御裏御台所」があり、少し離れた石垣上に女房衆が住まう「長局御櫓」が位置した。「御居間」は細川忠利の入国直後に地震対策のため改築されており、「御地震間」や「櫻ノ間」とも呼ばれていた。

次に作事に先立ち普請されている石垣について特徴を解説する。

(2) 石垣

a 石垣観察上の用語の説明

◆立面図が作成してある石垣は、立面図を使用し、あるいは参考とした。

◆立面図がない石垣は、写真ないしは写真から起こした略図を作成した。

◆本章の文や表で使用した特殊用語の定義は以下のとおりである。

反り：石垣根元と石垣上端の間にある曲線勾配

角石の稜：稜線を鋭くするものと丸く加工した丸面取りに分類

痩せ：隅角の角石尻部分が築石面よりも内部側にある状態

進入角：隅角稜線と水平地表面がつくる角度

勾配：築石面がつくる垂直方向の傾斜角で、今回は石垣根元周辺で計測

素割石：転石を1・2回で割っただけで、成形が不完全な石材

側面や裏面に自然面が残る場合が多い。

粗割石：転石を数回に分けて割るが、成形はまだ不完全で主に多角形等を呈する石材

自然面を残す場合がある

割石：複数回にわたる石割りによって直方体や長方体に近く成形した石材

直方体：外側が四角形に近い6面体の石材

長方体：縦横の寸法のうち一方が長い形状の6面体石材

大面・小面：長方体石材の広い側の面と狭い面

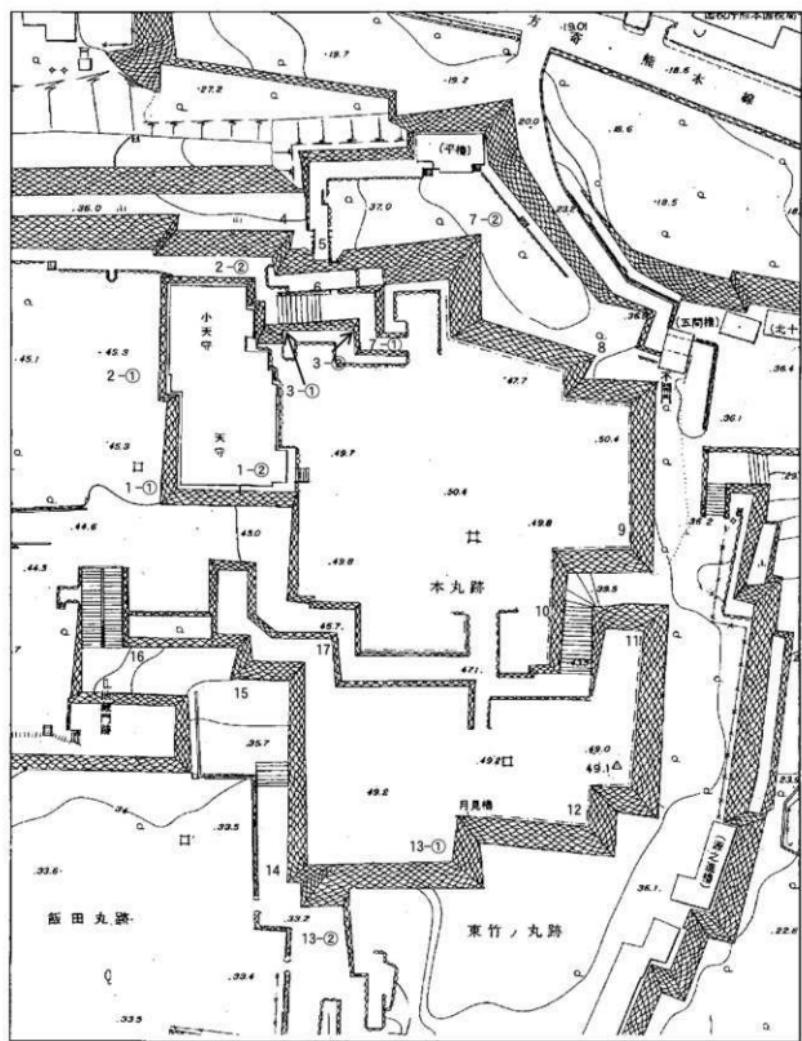
b 石垣各説

①大天守台〔第20図1〕

南西隅角で、高さ11.7m進入角38度を測る。石垣根元が大きく外方に張出し、極めて緩やかに立ち上がり、上部3分の1付近から大きくなりながら天端に至る。隅角の角石は直方体が主だが長方体の角石も点々と混在する。しかし角脇石は使用せず、下部では角石の尻部が築石内部に入り込む「痩せ」が見られる。角石の稜線は丸く仕上げた丸面取りで、左右の控えは小さいながらも交互に長短の差があり算木積みを意識した積み方が多く見られる。北西隅角は遅れて普請された小天守台石垣によって覆われていて確認できないが、北東隅角も類似した算木積みを混在した状況が確認できる。ただし、南東隅角の場合は、整った重箱積みで算木積みは見られない。南東隅角の場合、侵入角が42度とやや急角度となり、その東側は高さ5mの本丸上段曲輪によって埋設されている。片側を土圧で補強することが前提にあり算木積みを使用しなかった可能性が高く、石垣の普請箇所の状況によって算木積みの採否が決定されたと推定される。築石は勾配48度で、転石を素割りしない場合は粗割りして剖面を外側に使った石材が下部に多く用いられ、大小の割塊石を多く使用した間詰石を用いて布崩し積みとしている。

②小天守台〔第20図2〕

南西隅角で、高さ11.0m進入角46度を測る。大天守台の北西角を覆って建造されており、大天守台よりも遅れて建造された石垣である。



第19図 本丸主要石垣の位置図

*石垣番号は第3表と対応

角石は縦横が $60\text{cm} \times 120\text{cm} \sim 150\text{cm}$ 、高さが 60cm 程度の長方体（小面と大面の比が略1対2）に整えられた石材を用いている本格的な算木積みで、稜線は丸面取りとなっている。角脇石は役石として独立しているものではなく、複数の割石を充填しているものが多く、築石を兼ねているものもある。

築石は勾配56度で半ばまでは直線的勾配だが、次第に反りを増し、上部3分の1付近で垂直に近い急勾配となる。築石の高さは $45\text{cm} \times 60\text{cm}$ 程度を基調とする長方体石材が多く、高さを揃える傾向にある。特に上部では角石の高さを意識して揃えてあり、築石面の目地は緩やかに波打つ程度の布積みとなっている。したがって、間詰石は上下ではほとんど使用されず、四つ目積み対策に左右に縦石を入れた箇所が多い。

③トキ御櫓台〔第20図3〕

トキ御櫓は小天守の東正面にあったコ字形石垣を基壇とする平櫓である。北東隅角で、高さ11.6m進入角58度を測る。長方体石材を使用した算木積みだが、控えの長さはまちまちで整った算木積みとなっていない。稜線は丸面取りされずに角が立つ。角脇石も築石を兼ねるものが多く、独立した角脇石を意識していない。

築石は高さを角石に合わせた長方体基調の割石が使用され、布積みとなっている。勾配は66度で上端近くに弱い反りがあるが、ほぼ直線的な勾配となっている。間詰石は多くは使用せず築石左右に置く四つ目積み対策の調整石材が主体となる。北西隅角についても高さ5.7m侵入角62度で同様の特徴をもつ。

史料によれば、この櫓台は埋門（石門）上部の櫓台とともに細川時代の元禄17年に積み直しがおこなわれている³⁰⁾。トキ御櫓の東通路躰り場に面した東面石垣入隅部分には、粗割石と間詰石を多く使った布崩し積みの石垣が残っており、修理前の旧石垣の一部とみられる。

④小天守北帶曲輪石垣〔第21図4〕

北東隅角で、高さ11.3m進入角48度を測る。御着櫓台や北埋門（石門）上平櫓台に連れて普請された石垣である。角石は縦横 $60\text{cm} \times 120\text{cm} \sim 140\text{cm}$ 、高さ50cm程度の長方体基調の石材を主体とするが、角石尻がすぼまる事例や小面と大面が交互とならない重箱積み的な箇所があるなど、整った算木積みとはなっていない。角石稜線は丸面取りとなっている。明瞭な角脇石はなく、ほとんどが築石を兼ねていて、下部では瘦せ積みが見られる。

築石は勾配57度で、下部3分2は直線的に立ち上がり、残りの上端までが緩やかに反って上端に至る。不整形の粗割り石を用いた布崩し積みとなっていて、間詰石には多くの大小塊石を使う。

⑤北埋門（石門）上平櫓台〔第21図5〕

「北埋門上居櫓」の西半部の土台となる石垣である。北東隅角で高さ6.5m（東側平地から10.5m）、進入角は中段で42度を測る。小天守北廊下塀下石垣よりも先に普請されている石垣で、下部4mほどは北側に接続する外石門のある石垣に覆われており、本来の侵入角はさらに緩やかな角度になると推定され、上部で大きく反り上って天端となる。

角石は粗割りの塊石や扁平な長方体石材を用い、左右に控えを出す算木積み部分と重箱積み部分が混在する。角石の稜線は丸面取りされていて、角脇石は築石を兼ねる。

築石は勾配46度と緩く、横長の粗削石を顕著に使用し、間詰石を多く入れた布崩し積みとなっている。

⑥北埋門（石門）直上石垣〔第21図6〕

小天守前階段と御裏五階櫓脇の門からの階段を下り、底部の隧道を通って北側の東竹ノ丸北端に至る特異な施設がある。隧道は、史料では「北埋門」「石門」と呼ばれ、石垣上には、「北埋門上居櫓」（平櫓）の東半土台となっていた。元禄17年に積み直しされ³¹⁾、昭和42年～44年にも解体修理され慶長時代のオリジナルの石垣の多くの部分は失われている。しかし、石門の櫛石を支える支柱から左右の階段に近い石垣部分は、粗削り石を布崩し積みした古い石垣が観察できる。この古い築石は粗削石からなり、その勾配は74度で間詰石を多く使用する。石門近くの石材は被熱による劣化が顕著で、西南戦争直前での本丸炎上の際に上部櫓が焼却したことが推定できる。

隧道石材の毀損によって実施された昭和時代の修理は、基本的に元禄修理後の原形に復旧されているので、ここでは元禄期修理後の石垣の特徴を述べる。石垣南面の御裏五階櫓側には元禄度修理の時に新たに造られ埋め戻された隅角がある。長方体に加工された石材を用いた算木積みで、稜線には緩やかな反りがある。算木積みは明瞭な角脇石を入れた箇所とそうでない箇所が混在する。石垣に埋め込まれた隅角の稜は丸く加工せずに角が立つ。築石は角石と同じ高さで直方体ないしは長方体に加工されているため布積みとなっていて、間詰石の使用が少ない。こうした特徴は元禄17年に同時に積み直しされた南側のトキ御櫓台と共通している。

⑦御裏五階櫓台〔第21図7〕

北東隅角で、高さ14.3mを測る。同箇所では進入角が34度とかなりの裾広がりで、緩やかに立ち上る特徴的な石垣である。角石は直方体を基調とする重箱積みだが、下半部では長方体状の石材を縦位に重ねる縱積みが4石見られる。上半部では石材が小型となり左右に短く控えを伸ばす算木積みの要素が見られる。稜線は丸面取りされている。

築石は勾配45度で全体的に緩やかに反り上がり、そのまま上端に至るのは他の石垣と異なる特徴である。下半部の石材は大小の素割石で横長のものを多く混在する。築石の形態が多様であるため間詰石の使用量も多く、乱積みに近い布崩し積みとなっている。

一方、同櫓台の天守側の南西隅角は、高さ6.1m進入角66度の重箱積みで、築石は勾配71度の粗削り石による布崩し積みとなっていて、大きな相違が認められるが、双方の石垣には連続性があり、修理の証左はみられない。曲輪の内側は石門付近と同様に急勾配とすることを優先した結果と推定され、大天守同様に石垣の曲輪内での位置や地形、高さなどの要件によって採用される技術が選択されている可能性を指摘できる。

⑧本丸北輪平櫓台〔第21図8〕

石垣中央にある出隅の部分で、高さ14.3m進入角47度を測る。角石は縦横60cm～80cm×120cm、高さ6cm前後の長方体に整形した石材を使用する明瞭な算木積みとなっている。角石の稜線は丸面取りされる。角脇石は築石を兼ねるものと独立してその役を果たすものとが混在する。

築石の勾配は48度で、中位から上端にかけて強く反り上る。下部では粗削り石を多く使用し、上部では小型の長方体削石が顕著である。角石の高さと築石の同調はなく、下部では間詰石を多めに使用するが、上部については石材も揃い横目地が通る部分が多く布積みとなる。

⑨長局御櫓台〔第22図9〕

南東隅角の部分で、高さ13.0m進入角47度を測る。角石は前述⑧の本丸北輪平櫓と類似した規模形状での長方体に整形した石材を使用した明瞭な算木積みとなっていて、角石の稜線も丸面取りされる。角脇石に複数の石材を使用した例が多く、また築石を兼ねるものが多い。

築石の勾配は54度で、中位から上端にかけて強く反り上る。下部に粗削石を多く使用するが、長方体削石が比較的顕著で、目地はやや波打つ布崩し積みとなっている。

⑩御小姓部屋下石垣〔第22図10〕

「一之開御門」を出て北に曲がって階段となる通路に面した石垣で、高さが5.5m～9.7m、進入角が南東隅角で64度である。角石はよく整形した長方体石材が用いられていて算木積みとなっている。しかし、大面の長さは小面のそれの二倍以下で、角脇石は角石の高さに近いものを選択しているが築石を兼ねている。角石稜線は丸面取りされている。

築石は勾配65度で、全体的に緩やかな曲線となる反りをとる。直方体削石と長方体削石が混在するが高さが略同一であるため横目地が比較的明瞭な布積みとなっている。築石の左右には縦石の間詰石を入れて目地調整をしている。

この石垣は長局櫓台の石垣に遡れて築造されたことが北側の入隅の観察から判明しているが、旧石垣の南端隅角は「一之開御門」から6m内側に後退した箇所にある。本丸御殿復元工事に伴う石垣解体修理で

は、石垣内部から先行する旧石垣の築石が確認され、その地上面では「此處地内つき石有」という銘文をもつ碑が検出されている。内部で確認された石垣は部分的なため、粗削石による布崩し積みと推定されるものの、そのほかの細かい特徴は不明である。

なお、「一之開御門」周辺と二ノ櫓御門下に該当する石垣部分は被熱による劣化が著しく、西南戦争直前での同門の炎上が推定できる。「一之開御門」周辺の石垣解体修理では、一部石材は新材に入れ替えられている。

⑪東三階御櫓台〔第22図11〕

本丸上段への東の虎口となる鉤型通路に面した三階櫓台となる石垣で、高さ12mで進入角44度を測る。北東の隅角の角石は、直方体と長方体の石材を用いた重箱積みと算木積みが混在し、縦積みの角石も2石見られる。角石の棱線は丸面取りされる。角脇石は算木積みの部分では築石を兼ねる。隅角の下位では痩せが見られる。

築石は勾配56度で、下位から緩やかに反り上り、上端近くに反りの最大値がある。粗削石による布崩し積みだが、長方体に成形された割石も比較的多い。石材形状と大きさには統一感が弱く、隙間には割塊石の間詰石を多く用いる。

⑫月見御台所下石垣〔第22図12〕

台所の南東隅角で、高さ12.1m、進入角40度を測る。角石は60cm角大の直方体石材を用いた重箱積みとなっている。多少の出入りはあるが、算木積みの要素は看取されず、したがって角脇石はない。

築石は勾配48度で、下位から緩やかに反り上り、上端近くに反りの最大値がある。粗削石による布崩し積みで、側面や背面に自然面を残す石材が多い。石材の大きさに突出した規模のものではなく、割塊石による間詰石で隙間をしっかりと詰める。

⑬小広間櫓台南東隅角〔第23図13〕

小広間の南東隅角で、高さ13.3m、進入角50度を測る。角石は60cm角大の直方体石材を主体とした重箱積みだが、長方体状の石材を交互に入れていて算木積みの意識が看取される。角石棱線は丸面取りされ、角脇石として抽出できる石材はない。

築石は勾配52度で、下位から緩やかに反り上り、上端近くに反りの最大値がある。粗削石による布崩し積みで、側面や背面に自然面を残す石材のほか、横長の割石が多い。石材の大きさに突出した規模のものはほとんどなく、割塊石による間詰石で隙間をしっかりと詰める。

⑭小広間櫓台南西隅角〔第23図13-②〕

小広間櫓の南西隅角で、俗称「二様の石垣」の古期石垣である。前述の南東隅角の石垣と一連の石垣であるが、東竹ノ丸よりも3mほど低い通路に面していて、高さが16.1m、進入角は36度を測る。角石は縱横が60~80cmで高さが40~50cm大の略直方体石材を主体とした重箱積みだが、長方体状の割石を点々と入れており算木積みの意識が看取される。角石の棱線は丸面取りされ、隅角下位では痩せが見られる。角脇石として抽出できる石材はない。

築石は勾配46度前後で、下端から緩やかに反り上り、上端から4m下付近に反りの最大値をもち上端に至る。粗削石による布崩し積みで、側面や背面に自然面を残す石材が下位に多く、全体的に横長の割石が目立つが、石材の大きさに突出した規模のものはほとんどなく、割塊石による間詰石で隙間をしっかりと詰める。

⑮小広間櫓脇三階櫓台〔第23図13-③〕

前述の古期石垣の西側に増設された高石垣で、俗称「二様の石垣」の新規石垣である。高さが16.1m、進入角は58度を測る。角石は縱横60~70cm×120~140cmで、高さ50~60cmの比較的整えられた長方体石材を使用した算木積みである。角石棱線は丸面取りされ、痩せは見られない。定型化した役石としての角脇石はなく、角石の小面よりも小型の割石を用いるため複数の石材で上位角石を支える事例が多く、そのた

め築石を兼ねる場合が大半である。

築石は勾配60度で、下端から直線的に伸び上り中位から反り上りながら、上端から7m下付近に反りの最大値をもち上端に至る。角石と同等の高さの長方体割石を用意していく布積みとなるため、目地は略水平に通る。石材の高さが均一なため上下に間詰石を用いることはなく、四つ目積み対策に左右に縦石の間詰めを入れて築石の間隔を調整している。

⑯御殿数寄屋下石垣〔第23図15〕

御殿の西側に付属した数寄屋の南西隅角で、高さ15.1m、進入角52度を測る。角石はほとんどが直方体で重箱積みだが、下位の一部では大型の長方体石材を使用し算木積みの箇所があり、縦積みに見える部分がある。痩せは見られない。また、角石は丸面取りされている。

築石は勾配が56度で、緩く反り上がりながら上端から3.5m付近に反りの最大値をもち上端に至る。粗削石による布崩し積みで、側面や背面に自然面を残す石材が下位に多く、全体的に横長の割石が目立つが、石材の大きさに突出したもののはほとんどなく、割塊石による間詰石で隙間をしっかりと詰める。入隅の重ねから後述の御天守方多聞櫓下石垣と同時に普請されていることが判る。

⑯御天守方多聞櫓下石垣〔地蔵門北側石垣〕〔第23図16〕

南西の隅角で、高さ9.31m、進入角46度を測る。角石は直方体のほか長方体石材を縦位に積んだ縦積みを混在した重箱積みである。しかし、左右の控えに長短が見られ算木積みの要素も併せ持ち、痩せもある。角石の稜は丸面取りされている。

築石は勾配が52度で、緩く反り上がりながら中位付近に反りの最大値があり上端に至る。粗削石による布崩し積みで、側面や背面に自然面を残すや大型の石材が下位に多く、横長の石材も混在する。割塊石による間詰石で隙間をきっちり詰める。

⑰闇櫓御門東面石垣〔第23図17〕

闇櫓御門に向って右側内部の石垣で、蘇鉄之間の床下の石垣となる。北東隅角で、高さ4.3m、進入角56度を測る。角石は直方体石材を用いた重箱積みである。角石は丸面取りされている。

築石は勾配が74度、下位から緩く反り上がる。大小の粗削石による布崩し積みで、築石の左右に多くの割塊石を使用する。大小の石材を上下の部位に関係なく用いている。西南戦争時の御殿火災によって、ほとんどの石材が被熱し剥離破損している。

(3) 本丸の石垣普請

御殿の普請・作事については慶長15年の作事着手や細川氏の入国後の「中家」作事に関する若干の史料があるものの、普請の着手時期や順序、慶長15年以前の作事の様子などの内容を具体的に知ることのできる史料はない。ここでは石垣の普請着手と完了、特徴をまとめておきたい。

a 本丸石垣の普請着手

清正發給文書から慶長5年10月頃には新城での接待が可能なところまで天守建築が進んでいたことが知られる。一方、本丸とその周辺からは李朝系軒瓦（蓮華紋軒丸瓦と滴水軒平瓦）が出土することはよく知られている³⁰。この内、滴水瓦には「慶長四年八月吉日」の銘があり、他の事例からも天守用所の瓦であった可能性は大きい。瓦は棟上げ時に葺かれるのが一般的であり、祝事である棟上げゆえに「吉日」という銘文が選ばれたもので、その時期が大きく齟齬することは考えにくい。とすれば、慶長四年八月には天守作事は棟上げまで進捗していたと想定するのは妥当であろう。残る問題は、この李朝系瓦を使用した天守はどの櫓であるのかということになる。

周知のように、熊本城には天守相当の三層五階以上の櫓が7棟存在する。本丸に「大御天守」「小御天守」「御裏五階御櫓」の3棟、平左衛門丸の「五階土御櫓」、数寄屋丸の「五階御櫓」、飯田丸南西隅の「五階

御櫓」と同丸南東通路にある「五階御櫓」である⁷³⁾。天守は本丸に建造されることが一般的であるが、天守の候補となるのは本丸にあった大天守と小天守、御裏五階櫓の3棟となる。このうち、小天守は慶長16年の清正の逝去直後に萩藩密にによって描かれた鳥瞰スケッチに見えないので天守候補からは除外される⁷⁴⁾。

残る二つの櫓の土台となる石垣の観察では、双方の櫓ともに勾配は緩く裾広がりの石垣であることが共通するが、御裏五階櫓台は外面において石材に横長の素割石や粗割石を多用し、隅角には算木積みの要素がなく角石に立石積みを混在しているなど、大天守に比較して古い要素を持っている。このことを重視すれば、具体的な時期差は不明だが、大天守に先立ち御裏五階櫓が建造されていた可能性は大きい⁷⁵⁾。その所用瓦については、二つの櫓ともに本格的な発掘調査が行なわれていない現在、所用瓦の特定は出来ない。今はいずれかが、あるいは双方が李朝系軒瓦を所用瓦としていた可能性を想定しておき、本丸の石垣普請の着手が慶長4年8月よりもさかのばることを確認しておきたい。

b 本丸石垣の普請完了

熊本城には比較的多くの城絵図や史料が残されている。最も古い絵図は寛永6~8年とされる「熊本屋敷割下絵図」⁷⁶⁾だが、正確さに欠けるところはあるものの、本丸の縄張り自体はその後の絵図も大同小異で、本丸南西部の「二様の石垣」の拡張石垣が細川氏代の所産とされていることはあるが、基本的に細川氏入国以降も曲輪や縄張りが大きく変更されることはない。つまり、慶長19年の「一国一城」によって普請・作事は凍結され、修理をされることはあるが、それでも加藤時代の縄張りのまま幕末を迎えたと考えられる。

c 本丸石垣の特徴

間り通路で二分されている本丸のうち、北曲輪の石垣については、大天守台・小天守台・御裏五階櫓台・長局御櫓台など、各櫓台によって石垣の特徴に多少の違いがあることが指摘されている⁷⁷⁾。入隅の接合状況によって普請の新旧がはっきりと確認できているのは、北曲輪の東北部分で、御裏五階櫓台に連れて長局御櫓がある曲輪が拡張されている。また、小姓部屋の下の石垣も長局御櫓のある曲輪普請に統いて東側に6mほど拡張したものであることが解体修理時に確認されている⁷⁸⁾。

一方、本丸南曲輪は東三階御櫓から月見御台所、小広間、小広間三階御櫓までの連続する石垣の入隅は交互に組み合っている。本丸数寄屋、御天守方多聞櫓の石垣の特徴もこれと同一であることを考えると、後年に拡張した「二様の石垣」部分を除いて、本丸南側の曲輪では同時に普請が進められて、同時期に完成していたことが指摘できる。

(4) 小天守北空堀東部石垣（参考）

寛永9年の加藤家改易に伴い熊本藩主となった細川忠利は、寛永11年に熊本城の修築を幕府に申請する。本丸と北側櫓方丸との間にある空堀の東端は、加藤時代には石垣がなく地山の非溶結凝灰岩の露頭を利用した切岸となっており、入国早々の忠利は切岸を長さ70mの石垣に改造している。細川氏が施行した石垣普請は、江戸中期以降の史料によって複数の修理が確認できるが、石垣の修築が補強に限られている。本石垣の場合は史料によって寛永期にさかのばる石垣普請で、細川氏オリジナルの石垣普請として明確に確認できる事例であり貴重である。

本石垣は、北東隅角で高さ7.0m進入角66度を測る。角石は、縱横が40~60cm×80~100cmで高さ40~50cmの長方体に成形された石材を使用した算木積みである。角石には面取りがなく稜が立つ。角脇石となっている石材が3個ほどあるが、築石を兼ねたものも4個ほどある。

築石は勾配が68度、根元から直線的に立ち上がり天端下1.5m付近で緩く反り上る。上部の1.5mまでの石材は極端に小型で異質であり修築されている可能性があるが、その他の石材は直方体や長方体に加工した割石で、角石の高さと同等の高さの石材を用意しており布積みとなっている。間詰石は築石上下にはほとんど使用せず、左右に縦石を入れて調整を図っている。

第3表 本丸主要石垣觀察表

桂 番	石垣の場所	高さm	[m]	隅 角			積み方	石神加工	石神加工	勾配	備 考
				積み方	角石加工	角石の後					
1	① 天守台南西隅角	11.7	下手側に倒く 上手側に倒く	直方体 上部は重積 下部は算木状	直方体 直方体	無し	丸面取り	有り	38度 42度	角石多 粗削り	直方石 48度 直面は上段造立上段 直角石上位4石は互以降
2	② 天守台南西隅角	11.5	直角	直方体	直方体	無し	丸面取り	無し	45度 50度	直方石 左右幅6多 上下少	直角石 56度 55度 明治期写真有り
2	① 小天守南西隅角	11.0	上半部は反る	算木積み	小面・長方体 1:1.2	二段積み など複数	丸面取り	無し	45度 50度	直方体基調	直方石 48度 直面は上段造立上段 直角石上位4石は互以降
2	② 小天守北東隅角	11.0	上半部は反る	算木積み	長方体	無し	巻石巻用	内有り	62度 58度	直方体基調	直方石 74度 元禄17年修明、西面被熱
3	トキ御櫓北東隅角	5.7	上端倒く反る	算木積み	長方体	無し	巻石巻用	内有り	62度 58度	直方体基調	直方石 66度 直面は上段造立上段 直角石上位4石は互以降
3	② トキ御櫓北東隅角	11.6	上端倒く反る	算木積み	長方体	無し	巻石巻用	内有り	62度 58度	直方体基調	直方石 66度 直面は上段造立上段 直角石上位4石は互以降
4	小天守北帝廟東北隅角	11.3	上半部	大面・小面 不偏い	直方体	無し	巻石巻用	丸面取り	無し	直方石 上位に長方体主	直方石 57度 直面下位は北側6面に覆設 上部は14塊長手平の直角
5	北廻門上半部北出隅	6.5 (1.5)	上半部倒く反る	算木積み	長方体 直方体	無し	巻石巻用	丸面取り	無し	直方石 大小混在	直方石 46度 直面下位は北側6面に覆設 上部は14塊長手平の直角
6	北廻門上半部竹面	—	上端倒く反る	算木積み	長方体 直方体	無し	巻石巻用	丸面取り	無し	直方石 上位に長方体主	直方石 74度 直面は上段造立上段 直角石上位4石は互以降
7	① 銅製五輪橋南西隅角	6.1	鷲原宿	直方体	直方体	無し	丸面取り	有り	60度 64度	直方石 粗削り	直方石 71度 直面は北側6面に覆設異なる
7	② 銅製五輪橋北北隅角	14.3	下位から倒く 反る	直前横積み 直前横積み有り	直方体・長方体	無し	丸面取り	有り	34度	直方石 直面多い	直方石 45度 直面は北側6面に覆設異なる
8	本丸北輪半船突出出隅	14.3	上手から倒く 反る	算木積み	長方体整形	有り	巻石巻用	丸面取り	無し	直方石 下部は粗削石上	直方石 48度 直面は北側6面に覆設異なる
9	長尾御櫓南東隅角	13.0	上手から倒く 反る	算木積み	長方体整形	有り	巻石巻用	丸面取り	47度	直方石 粗削り	直方石 71度 直面は北側6面に覆設異なる
10	小姓宿屋下東石垣	-5.5 -9.7	中位から倒く 反る	算木積み	長方体 直方体	無し	巻石巻用	丸面取り	64度	直方石 直方石・長方体 石詰在	直方石 65度 直面は北側6面に覆設異なる
11	東三階御櫓北隅角	12.0	下位から倒く 反る	直前横積み 直前横積み有り	直方体・長方体	無し	巻石巻用	丸面取り	44度	直方石 粗削石・長方体	直方石 56度 直面は北側6面に覆設異なる
12	月見御櫓南東隅角	12.1	上部	直前横積み	直方体・直方体	無し	丸面取り	有り	40度	直方石 粗削石・長方体 直方石	直方石 48度 直面は北側6面に覆設異なる
13	① 小庁・圓櫓南東隅角 (古削の石垣)	13.3	上部で反る	直前横積み 一部算木状	直方体・長方体 直方体	無し	巻石巻用	丸面取り	50度	直方石 粗削石・焼長の 直方体削り退在	直方石 52度 直面は北側6面に覆設異なる
14	小庁間櫓南東隅角	16.1	上部倒く 反る	算木積み	直方体・直方体	無し	巻石巻用	丸面取り	58度	直方石 粗削石・焼長の 直方体削り退在	直方石 46度 直面は北側6面に覆設異なる
15	銅鍛數器南東隅角	15.1	上部	直前横積み 下部算木状	直方体・長方体	無し	丸面取り	無し	52度	直方石 粗削石上	直方石 56度 直面は北側6面に覆設異なる
16	天守方多門南東隅角	9.3	上部	直前横積み 直前横積み	直方体・長方体	無し	丸面取り	有り	46度	直方石 直方体削り退在	直方石 52度 直面は北側6面に覆設異なる
17	圓櫓東南隅石垣	4.3	下位から倒く 反る	直前横積み	直方体	無し	巻石巻用	丸面取り	56度	直方石 粗削石	直方石 74度 直面は北側6面に覆設異なる
参考	小天守台空壁直端石垣	7.0	上端倒く反る	算木積み	長方体	無し	巻石巻用	内有り	66度	直方体基調	直方石 68度 直面は北側6面に覆設異なる



1-① 大天守南西隅角南面



1-② 大天守南東隅角南面



2-① 小天守南西隅角南面



2-② 小天守北東隅角東面



3-① トキ御櫓北東隅角北面



3-② トキ御櫓北西隅角北面

第20図 本丸主要石垣写真(1)



4 小天守北帶曲輪石垣北面



5 北埋門上平櫓台北面



6 小天守北東平櫓台南面



7-① 御裏五階櫓西面



7-② 御裏五階櫓北東隅東面



8 本丸北輪平櫓台中央出隅東面

第21図 本丸主要石垣写真(2)



9 長局橹台南西隅角東面



10 御小姓部屋下石垣北端東面



10 御小姓部屋下石垣南東隅角東面



11 東三階御櫓北東隅角北面



12 月見御台所南東隅角東面



13-① 小広間南東隅角東面

第22図 本丸主要石垣写真(3)



13-② 小広間櫓台・三階御櫓台南西隅角南面



13-② 小広間櫓台南西隅角



14 小広間三階御櫓南西隅角西面



15 御殿付属数寄屋下石垣南西隅角南面

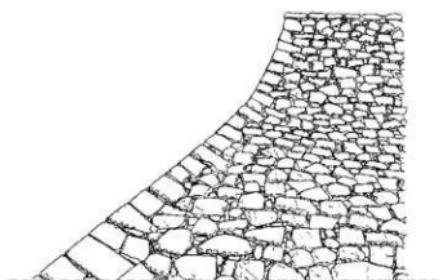


16 御天守方多聞櫓南東隅角南面

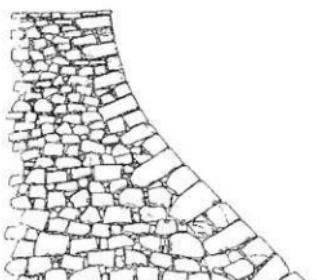


17 多聞櫓御門脇石垣北面

第23図 本丸主要石垣写真(4)



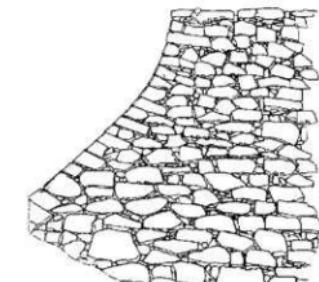
1-① 大天守台南西隅角南面



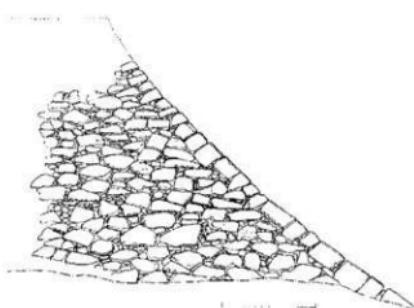
2-① 小天守台西南隅角西面



4 小天守北蒂曲輪北東隅角北面



5 北埋御門（石門）上平櫓台北面

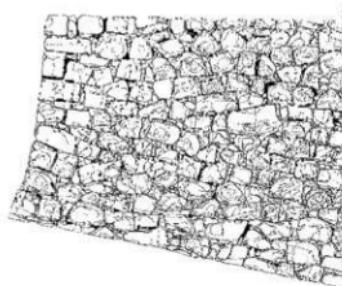


7 御裏五階櫓北東隅角東面略図

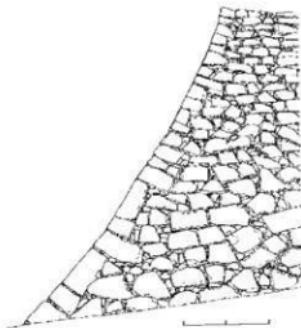


8 本丸北輪平櫓隅角東面略図

第24図 本丸主要石垣略図(1) *縮尺任意、番号は第19図・第3表に対応



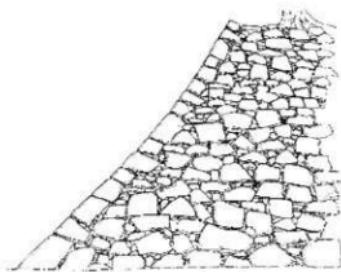
10 御小姓部屋石垣東面の立面実測図



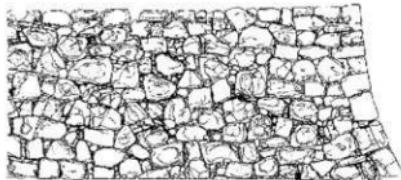
11 東三階御櫓東北隅角北面



13-② 小広間南東隅角及び14三階櫓隅角南面



16 御天守方多聞櫓台南西隅角南面



17 閣櫓御門脇石垣東面



〔参考〕小天守北側空堀東部石垣

〔註〕

- 1) 「来島文書」「新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世」熊本市 1993 269頁
- 2) 「築山トキ氏旧蔵文書」「新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世」555頁
- 3) 「新熊本市史 通史編 第二卷 中世」熊本市 1998
- 4) 「吉川家文書」「新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世」254頁
- 5) 近年では、上記の2説に加え、花岡山（紙團山）を隈本城とする説も提起されている。村上豊喜「隈本城のはじまり（一）～（五）」「熊本城」第80～84号 2010～2011
- 6) 「肥後国誌」青潮社 1971
- 7) 出田氏は「新撰事蹟通考」（武藤巖男・宇野東風・古城貞吉「肥後文献叢書（三）」株式会社歴史図書、1971）の系図によれば菊池氏三代経頼を祖とし、のちに菊池郡出田を領したことから出田姓を名乗るようになったとされる。
- 8) 「藤崎八幡宮文書」「新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世」667頁
- 9) 同上666～667頁
- 10) 「相良家文書」「新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世」316～317頁
- 11) 「藤崎八幡宮文書」「新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世」667～668頁
- 12) 「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」熊本市 1994 3頁
- 13) 「広島大学所蔵猪熊文書」「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」22頁
- 14) 「中沢広勝氏蔵文書」「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」22～23頁、「西村清氏蔵文書」同32～36頁
- 15) 森山恒雄「加藤清正伝記『統撰清正記』の成立とその追加集の紹介（一）」（『熊本大学教育学部紀要』42号 1993）によれば、「統撰清正記」の著者は、牛方・馬方騒動で美濃国岩村松平家乗に預け身となった和田備中一政の息子の和田利重である。本書は父の話と書き残された文書を元にし、さらに不分明な点を信州高島藩源訪頼水に預け身となった中川周防に尋ね、寛文4年（1664）に著述されたとされる。このことからも比較的の信憑性の高い記事が多いが、熊本城築城については「予若干年の時、肥後國退出いたし、其後見ざるにより、失念いたしたる所あまた有故、委不記候」と述べており、「統撰清正記」の記述を熊本城完成の根拠とするにはいま少し慎重さが求められる。
- 16) 「中澤広勝氏所蔵文書」「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」73～74頁
- 17) 平野流香「熊本市史」熊本市 1932
- 18) 「新撰事蹟通考」「肥後文献叢書（三）」所収
- 19) 「大阪城天守閣藏吉村文書」「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」80～81頁
- 20) 中野嘉太郎「加藤清正伝」青潮社 1979 620～621頁
- 21) 「下川文書」「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」84頁
- 22) 「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」81～82頁 99号文書
- 23) 「肥後國熊本様子聞書」山口県立文書館蔵毛利家文庫*他家3号文書（「新熊本市史 史料編 第三卷近世I」86頁 109号文書）
- 24) 小野将史・北野隆「毛利家文庫の絵図『(肥後熊本城略図)』について－加藤氏時代の熊本城に関する研究（その1）」「日本建築学会計画系論文集」第561号 2002、「加藤清正代末期の熊本城について－加藤氏時代の熊本城に関する研究（その2）」「日本建築学会計画系論文集」第566号 2003、「加藤忠広による熊本城改修と熊本城小天守について－加藤氏時代の熊本城に関する研究（その3）」「日本建築学会計画系論文集」第576号 2004
- 25) 「大日本近世史料 細川家史料 十三」74頁 1085号文書
- 26) 「総考輯録」三十五

- 27) 「部分御旧記 公用部」『熊本縣史料 近世篇第一』熊本県 1965
- 28) 神戸大学文学部『中川家文書』臨川書店 1987
- 29) 「御城内御絵図」の性格については、「熊本城調査研究センター報告書第1集 熊本城跡発掘調査報告書1—飯田丸の調査—」及び、「熊本城調査研究センター年報1 平成25・26年度」に詳述している。
- 30) 北野隆「城郭・侍屋敷古地図集成 熊本城」至文堂 1993
- 31) 本絵図は、城郭研究者高田徹氏から熊本城調査研究センター職員へもたらされた情報により、新たに存在を確認した絵図である。所蔵者富原道晴氏のご厚意により、平成27年9月に現物調査を実施した。氏によれば、昭和36年に文化財関係者の手によって、原本を透写する形で製作された。原本とほぼ同じ寸法で、絵図の端裏には「昭和三十六年三月複製」の貼紙がある。原本で失われている御殿部分の貼付けを確認することができる。
- 32) 下記報告書によれば奈良文化財研究所所蔵のガラス乾板に映った絵図は現在、所在が不明である。
熊本市熊本城総合事務所『特別史跡熊本城跡木丸御殿復元整備事業報告書—大広間・大台所・数寄屋—』2009
- 33) 本報告書では、原本で失われている御殿部分の貼付けについては、昭和36年時点の原本の写として正確性が高く、現在实物を確認することができるものとして、しきるく古地図と城の博物館富原文庫所蔵の絵図を使用した。
- 34) 『新熊本市史 史料編 第三卷 近世I』213~220頁 183号文書
- 35) 第14図「御城内御絵図」原本では破損のため文字が見えないが、奈良文化財研究所所蔵のガラス乾板に映った写で、「長局御櫓」の名称が確認できる。
- 36) 作事方の「壁書き」(熊本大学附属図書館寄託永青文庫細川家文書 10. 6. 18) には、慶応3年12月9日のものとして、「政府御本丸引移後長ノ御間ニ而如此」と題された略図が写されている。この略図での縁側、引き戸、柱の位置など、「御城内御絵図」と一致する。長之間は「長御間」や「長ノ御間」の名称が史料中に確認できるが、本報告書では「御城内御絵図」での他の部屋の名称の記載方法に準じて、長之間と表現する。
- 37) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』207~213頁 182号文書
- 38) 『大日本近世史料 細川家史料十二』67~68頁 835号文書
- 39) 註34に同じ (藻塩草)
- 40) 熊本大学附属図書館寄託永青文庫細川家文書「慶応三年 機密間日記」(12.2.17)
- 41) 熊本大学附属図書館寄託永青文庫細川家文書「慶応三年卯正月 覚帳 小物成方」(文7.3.5)
- 42) 『改訂 肥後藩国事史料卷十』侯爵細川家編纂所 1932 576頁
- 43) Ref.A03023207100、公文別録・陸軍省衆規潤鑑抜粹・第十三卷・明治四年～明治八年(国立公文書館)
- 44) 富田紘一「古写真に探る 熊本城と城下町」肥後上代文化研究会 1993
- 45) 日本史籍協会『熊本鎮台戦闘日記』東京大学出版会 1977
- 46) 原口長之・永田日出男・中村哲也校訂『西南戦争隈岡大尉陣中日誌』熊本史談会 1980
- 47) 炎上については、富田紘一「熊本城炎上の謎を考える」「熊本博物館報」11号 1999、猪飼隆明「西南戦争の大義と動員される民衆」歴史文化ライブラリー253 吉川弘文館 2008、富田紘一「熊本城炎上の謎を探る」「熊本城」復刊百号記念号 熊本城顕彰会 2015
- 48) 児玉源太郎口述「熊本籠城談」三光社 1900、出石歎彦述「熊本籠城の実況」「講演速記録第拾參輯」維新史料編纂会 1918、杉原歩兵大尉口述「熊本籠城戦況」(熊本博物館蔵)
- 49) 註47の富田 (2015)
- 50) 「起誌簿」(熊本博物館蔵)
- 51) 註47の猪飼 (2008)
- 52) 陸上自衛隊北熊本修身会「新編西南戦史」原書房 1977

- 53) 龍崎俊彦「新史料『熊本城郭及市街之圖』」「熊本城調査研究センター年報1 平成25・26年度」熊本城調査研究センター2015
- 54) 熊本県立図書館所蔵。『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』(新熊本市史編纂委員会編 熊本市 1993) では寛永6~8年ころとする。
- 55) 熊本県立図書館所蔵。平井聖監修・北野隆編著『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』至文堂 1993
- 56) 熊本県立図書館所蔵。『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』(新熊本市史編纂委員会編 熊本市 1993) では寛文12年とする。描写や記載内容から正保城絵図の可能性が高い。
- 57) 熊本県立図書館所蔵。『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』(新熊本市史編纂委員会編 熊本市 1993) では製作年代を延宝2年以前とする。描写法や記載内容が註56の絵図と同一で同時期に作成された絵図の可能性が高い。
- 58) 永青文庫所蔵。『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編I』(熊本大学附属永青文庫研究センター編 吉川弘文館 2011) では江戸時代後期とするが、絵図の描写や記載内容から正保城絵図と同時期の可能性が指摘できる。
- 59) 永青文庫所蔵。『新熊本市史 史料編第三巻 近世I』(新熊本市史編纂委員会編 熊本市 1994) 年月日欠だが、記載される曲輪の名称や規模が註3~5の絵図と一致することから正保城絵図に添付された目録と推定される。
- 60) 熊本県立図書館所蔵で年代比定は『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』による。
- 61) 個人蔵(熊本博物館寄託)『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』の12番絵図。
- 62) 熊本県立図書館蔵。『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』の14番絵図。
- 63) 熊本県立図書館蔵。『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』の15番絵図。
- 64) 永青文庫蔵。『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』の8番~16番の絵図。
- 65) このように主郭を通路によって二分するという特異な曲輪構成は、加藤氏の支城である佐敷城跡本丸にも存在する。佐敷城では同時代の詳細な絵図や史料がなく、慶長19年の廢城令や寛永14年のキリシタン一揆後の破城によって石垣上部が大きく破城されているため建築物の実態が不明だが、大手口から遠い本丸北端石垣上には天守相当櫓か重層の多間櫓などがあった可能性がある。
- 66) 「熊城秘録」(享保年間以降 堀平太左衛門編著『御手鑑学稿』所収)
- 67) 永青文庫蔵には『熊本城図』と外題を附した数葉があるが、いずれも同じ内容となっていて「東ノ三階」櫓を「五階御櫓」と記す。『新熊本市史 別編第1巻 絵図・地図 上 中世近世』では同図を文政11年・12年と推定している。一方、平面規模を記した『隈本御城之事』は具体的な成立年は不明だが享保年間以降の成立とされている。「東ノ三階」櫓台の石垣は築城当初の特徴を有し改修の痕跡は無く、史料によってその一階梁間と推定される五間は櫓台となる石塁の東西幅10mに一致している。すなわち、当初から五間×六間二尺の規模の櫓であったと考えるのが順当であろう。
- 68) 「御奉行所日記」の元禄16年8月の記事に「小天守下孕石垣御普請ニ付、御櫓ニヶ所取除之筈ニ付、(以下略)」とある。このニヶ所の櫓は元禄相当の石垣が確認できるトキ御櫓とその北側にあった「北埋門ノ上居櫓」と推定できる。
- 69) 三浦正幸『城の鑑賞基礎知識』至文堂 1999 33頁。
- 70) 永青文庫所蔵元禄15年8月9日付けの普請窓絵図「肥後國熊本城絵図」の書き込みに「二之所 本丸ヨリ子丑之方、石垣高サ五間半、幅九間孕申候」「一、二之所矢蔵を除ケ置孕候所築直、矢蔵前々之通取立」とあり、永青文庫所蔵『御奉行所覚帳并同日記頭書草稿』に「元禄十六年八月 一、小天守下孕石垣御普請ニ付、御櫓ニヶ所取除之筈ニ付、(以下略)」とあり、「北埋門」(石門)と同時にトキ御櫓が修理されたと推定できる。なお、「北埋門」内部には「元禄十七年甲申三月日」と修理銘があり、竣工年月が判明する。

- 71) 註70に同じ
- 72) 美濃口紀子「熊本城跡出土の李朝系軒丸瓦—いわゆる「日足紋瓦」をめぐる問題—」『織豊城郭』第5号
織豊城郭研究会 1998
美濃口紀子「織豊城郭における李朝瓦の移入と展開」『佐敷城跡』芦北町教育委員会 2004
- 73) 明和年間の製作とされる「御城内御絵図」による
- 74) 山口県文書館所蔵「肥後筑後両城図」による。スケッチ的描写だが天守脇に小天守が存在しないのは明瞭である。同図は富田紘一編著『定本 熊本城』(郷土出版社 2008) 71頁に掲載されている。
- 75) 矢野和之氏は、御裏五階櫓を石垣の特徴や一間が六尺であることから、慶長3年から5年の間に移築された可能性を考え、第一次天守として古城の櫓を移転した可能性を提唱する(『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市 1990 33頁)。
- 76) 註54に同じ
- 77) 矢野和之氏(『重要文化財 熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市 1990) や富田紘一氏(『熊本城の築城と構造』『定本 熊本城』郷土出版社 2008)、市川浩文氏(『九州における近世城郭石垣の変遷について(2)』『7加藤家(肥後)』『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所 2012)
- 78) 熊本市経済振興局熊本城総合事務所編『特別史跡 熊本城跡 本丸御殿復元整備事業報告書』熊本市 2009

〔主要参考文献・史料出典〕

- 熊本市『熊本市史』1932
 讃善之助編著『沢庵和尚書簡集』株式会社岩波書店 1942
 生田宏『肥後近世史年表』日本談義社 1958
 熊本県『熊本県史料 近世篇第一』～『熊本県史料 近世篇第二』1965
 熊本県『熊本県史料 中世篇第五』1966
 藩法研究会『藩法集7 熊本藩』創文社 1966
 武藤嚴男・宇野東風・古城貞吉編『肥後文献叢書(三)』株式会社歴史図書社 1971
 同『肥後文献叢書別巻(一) 肥後先哲仰蹟』株式会社歴史図書 1971
 熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告書』1971
 錬田浩『旧章略記—熊本藩法制資料(五)—』『熊本法学』第21号 熊本大学法学会 1973
 細川藩政史研究会『熊本藩年表稿』1974
 細川家編纂所『改訂肥後藩国史資料 復刻版』國書刊行会 1974
 熊本市教育委員会『熊本市中央南地区文化財調査報告書』1978
 熊本市教育委員会『熊本城三の丸森本櫓跡漆畠遺跡調査報告書』1979
 中野嘉太郎1979『加藤清正傳』青潮社
 熊本市教育委員会『熊本市中央北地区文化財調査報告書』1980
 熊本市教育委員会『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』1982
 荒木栄司『肥後古城物語』熊本日日新聞社 1982
 田村実『熊本の土地の生い立ち』熊本地学会 1985
 細川藩政史研究会『熊本藩町政史料一』1985
 土田将雄編『出水叢書4 綿考輯録 第四卷 忠利(上)』汲古書院 1989
 靖国神社社務所『靖国神社忠魂史 西南の役』青潮社 1990
 横山勝三ほか「熊本および周辺地域の地形・地質の概要と研究課題」『市史研究くまもと』第2号 1991
 大塚虎之助『唯今戦争始メ候 電報にみる西南役』熊本日日新聞情報文化センター 1991

- 熊本大学「熊本大学放送公開講座 熊本城を科学する」 熊本大学学生部 1992
- 乙益重隆「壺に埋収した玉」「弥生農業と埋納習俗」六興出版 1992
- 東京大学史料編纂所『大日本近世史料 細川家史料十三』東京大学出版会 1992
- 北野隆『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』至文堂 1993
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』熊本市 1993
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 別編第一巻 絵図・地図上 中世・近世』熊本市 1993
- 富田紘一『古写真に探る 熊本城と城下町』肥後上代文化研究会 1993
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第三巻近世Ⅰ』熊本市 1994
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第四巻近世Ⅱ』熊本市 1996
- 富田紘一『白川・坪井川流路と城下町の形成』『市史研究くまもと 第7号』熊本市 1996
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第一巻考古資料』熊本市 1996
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第八巻現代Ⅰ』熊本市 1997
- 平野敏也・工藤敬一『図説 熊本県の歴史』河出書房新社 1997
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第一巻 自然 原始・古代』熊本市 1998
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』熊本市 1998
- 富田紘一『熊本三河川と城下町の形成』『市史研究くまもと 第11号』熊本市 2000
- 柳田快明『南北朝期から戦国期の『隈本城』を考える』『市史研究くまもと 第11号』熊本市 2000
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第九巻現代Ⅰ』熊本市 2000
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第三巻近世Ⅰ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第五巻近代Ⅰ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第六巻近代Ⅱ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第七巻近代Ⅲ』熊本市 2003
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 別編 第三巻年表』熊本市 2003
- 熊本県立美術館編『熊本城築城400年記念 激動の三代展』熊本城築城400年記念展実行委員会 2007
- 小川原正道『西南戦争 西郷隆盛と日本最後の内戦』中公新書 2007
- 富田紘一『『熊本城の歴史と探訪』第6回 加藤清正の熊本城築城』『熊本城 復刊68号』2007
- 富田紘一『熊本城 歴史と魅力』熊本城顕彰会 2008
- 富田紘一『定本熊本城』株式会社郷土出版会 2008
- 熊本市教育委員会『智照院細川家墓所』2008
- 熊本市教育委員会『熊本城跡 桜馬場地区－熊本城遺跡群桜馬場地区埋蔵文化財確認調査報告書－』2011
- 熊本県立美術館『生誕450年記念展 加藤清正』生誕450年加藤清正展実行委員会 2012
- 熊本日日新聞社編『加藤清正の生涯 古文書が語る実像』熊本日日新聞社 2013

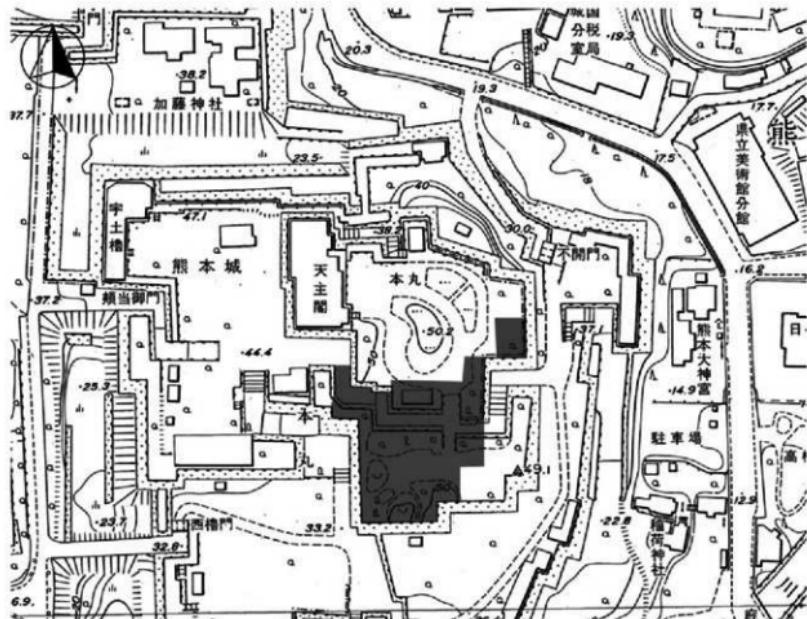
第3章 調査の方法

1. 調査の方法

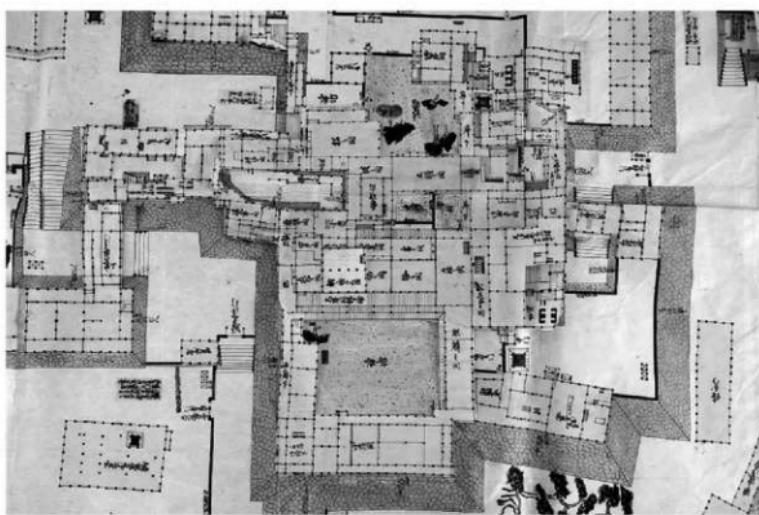
発掘調査は平成11年度の大広間から着手し、大御台所・小広間・御小姓部屋・小広間三階御櫓・長之間・間り通路・露地・長局御櫓の順で行い、平成18年3月に終了した。表土層は重機で除去し、以下は人力で掘り下げた。掘削後に測量機械を用いてグリッドを設定した。なお、数奇屋・西廊下・小広間などの櫓台上は、表土層から人力で掘り下げている。調査は、I・II層を除去し、III層上面の観察をした上で焼土を除去した。調査による発生土は、遺物を採集後コンテナに仮置きし、城外へ搬出・廃棄した。大量に出土した瓦は、現地にて選別を行い、奉行丸に運搬して仮置きした。現在は三の丸に運搬している。遺構・遺物の出土状況等の実測は、測量機械を併用しながら手作業で行い、主に縮尺20分の1と10分の1の図面を作成した。工事立会は隨時行い、必要に応じて図面を作成した。

2. グリッドの設定（第30図）

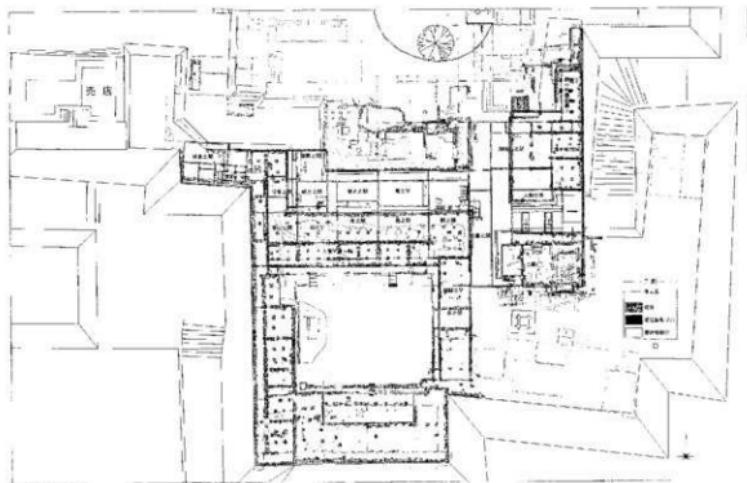
調査グリッドは、縮尺2,500分の1の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城城全体を覆うように500m×500mの大グリッドを設けてA～Mのアルファベットを冠し、それぞれのグリッド中に5m×5mの小グリッドを設定して北から南、東から西へ1～100の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字2つを組み合わせてグリッド名とした（例：A100-100グリッド）。今回の調査は、Fグリッドに収まる。



第26図 調査区（主要部）位置図（1/2500）

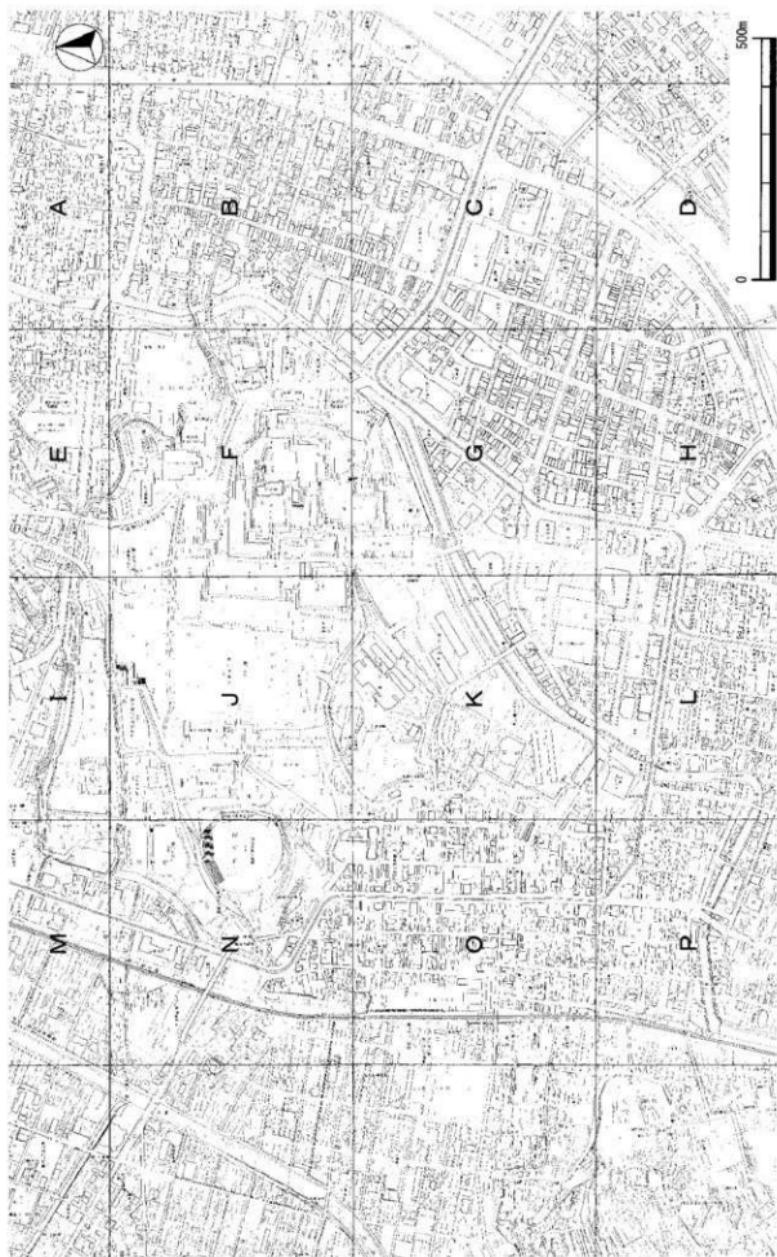


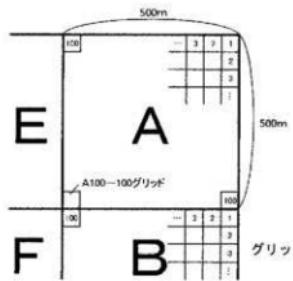
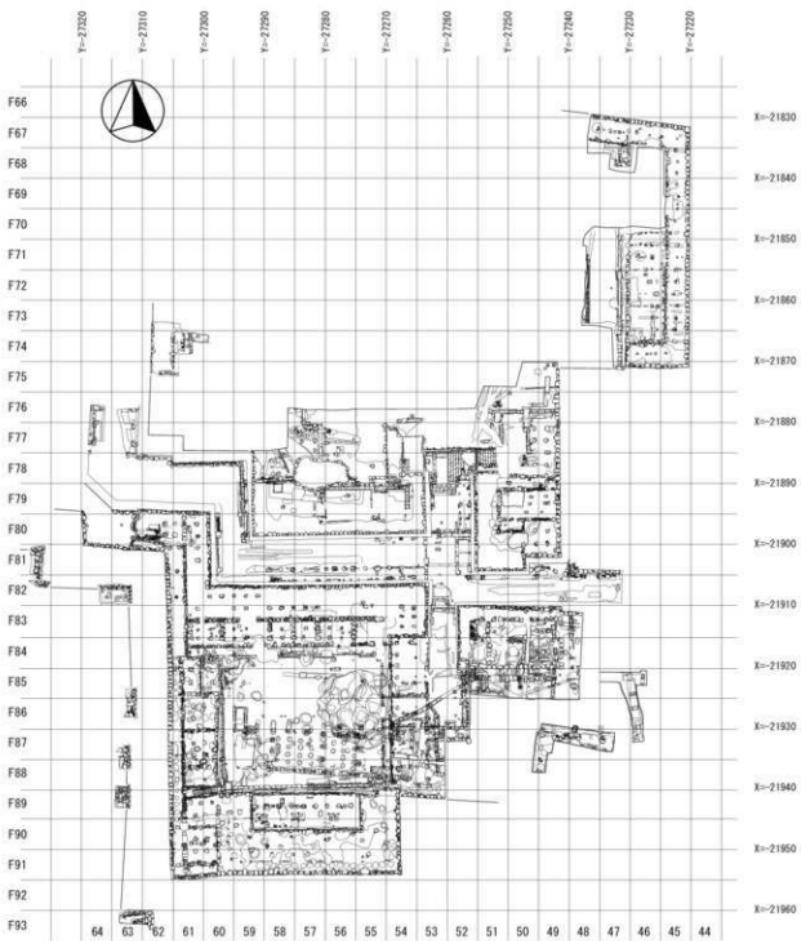
第27図 「御城内御絵図」(しろはく古地図と城の博物館富原文庫蔵) 本丸御殿部分



第28図 遺構復元図

第29図 広域グリッド配置図

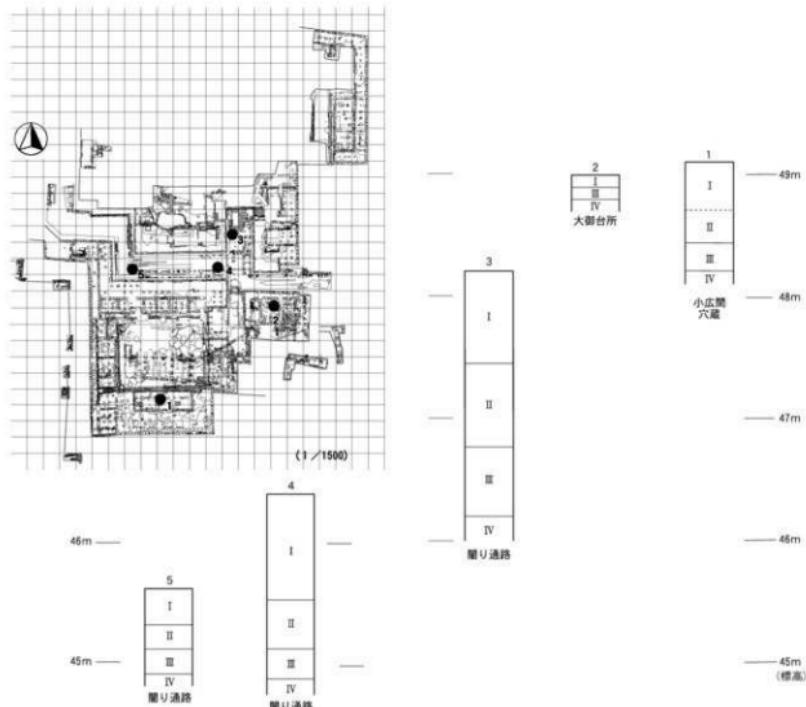




第30図 調査区・グリッド配置図（縮尺任意）

3. 基本層序

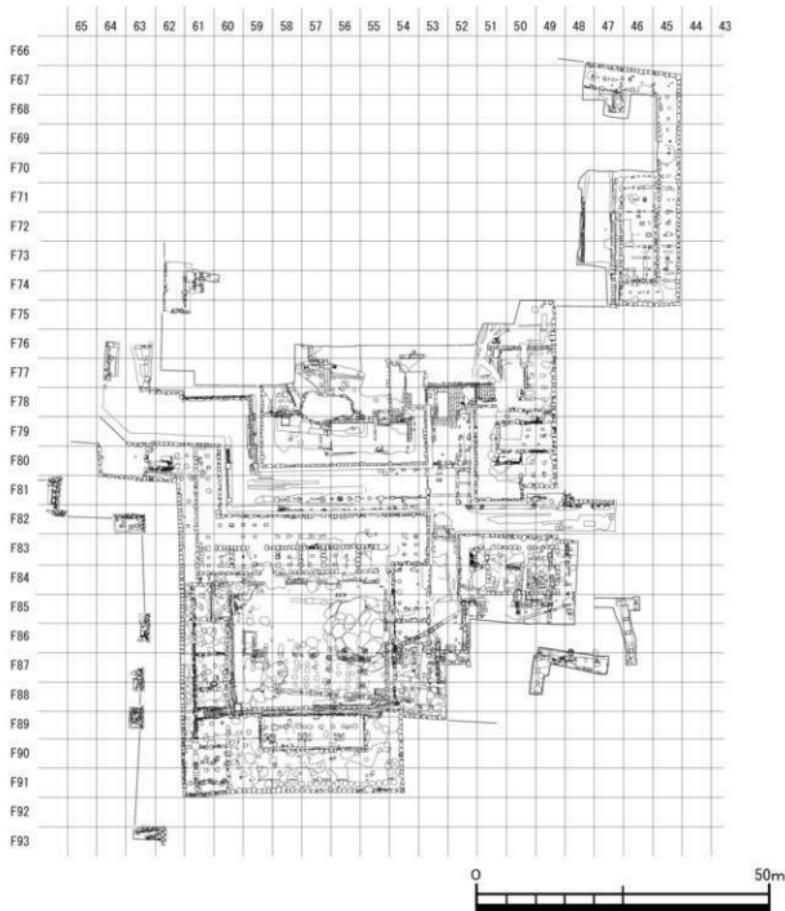
- 基本土層は I ~ IV 層に大別する。調査区・トレンチごとの土層内容は、実測断面図を基に報告する。
- I 層：現代の表土・擾乱層。砂礫・瓦片等を含む黒褐色～暗褐色土。檜台の上面や植栽の周辺以外は非常に固くしまる。
- II 層：近代～現代の堆積土。主として明治初期（明治10年）以降の堆積土。熊本鎮台および第六師団による整地や、城内の整備に伴う客土が主と思われる。砂礫・瓦片等を大量に含む黒褐色～暗褐色土で、部分的には礫を多く含む。また、下位は III 層と混在した部分もみられた。一部は、非常に固くしまる。
- III 層：明治10年2月19日の焼土。漆喰・壁土・屋根土に起因する土が主で、砂も目立つ。II 層が堆積する際に混在した部分もあるが、それは II 層と扱っている。炭化材・瓦・金属製品を多量に含む。建物のない露地ではほとんどみられない。
- IV 層：焼失以前の土を一括している。トレンチ調査など、調査した部分はごく限られている。近世から明治初頭の堆積土。主に灰白色・明黄褐色・暗褐色・黒褐色等の色調を呈する粘質土または砂質土・凝灰岩質の二次堆積土等からなる。
- 今回の調査では、明瞭な自然堆積層を確認できなかった。



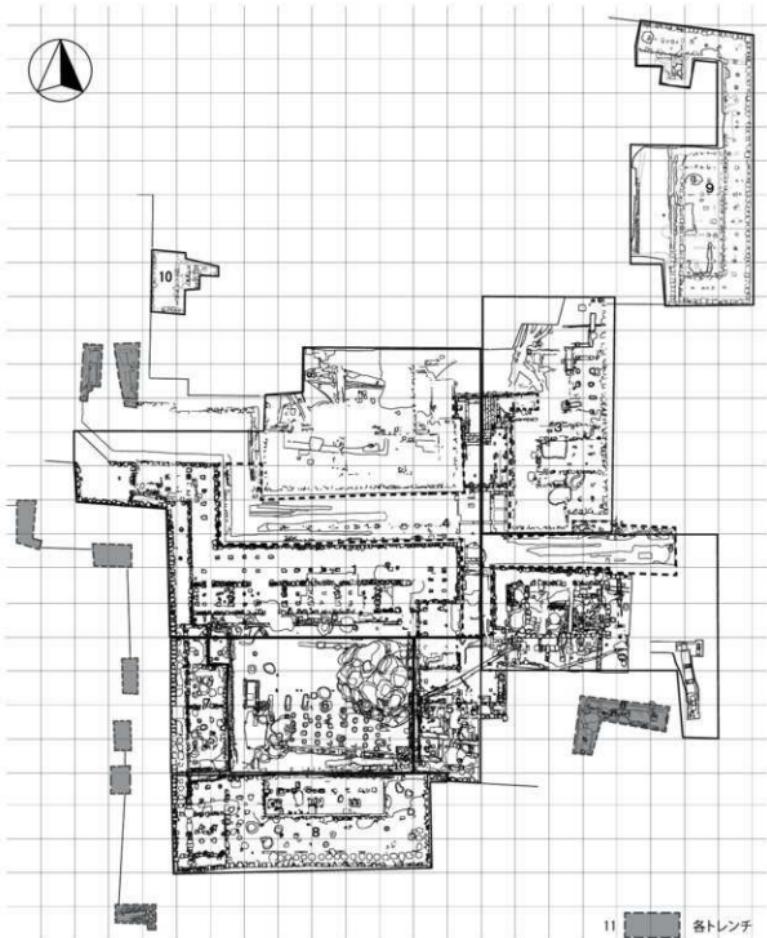
第31図 土層模式図 (1/40)

第4章 調査の成果1 遺構

以下に、建物の名称を基に調査区を分け、検出した遺構についての記述を行う。調査区は、主要建物である大広間棟・大御台所棟と、それから派生する建物で分けている。大広間棟には、大広間に統いて大広間北側に展開する本丸御殿建物群を入れ、大御台所棟は北側の御小姓部屋を分離した。記述は、大広間・大御台所・御小姓部屋・闇り通路・長之間・露地・西廊下・小広間（三階御櫓含む）・長局御櫓・御天守廊下・各トレンチの順で行う。なお、闇り通路は、通路としての機能を含んだ現代の名称である。史料中には、その入り口である門が「闇門」「クラガリ御門」「闇り櫓御門」と記されているが、通路本体部分の名称はまだ見出せない。本報告書では、便宜上「闇り通路」と記述している。



第32図 調査区全体図



- | | | | | | |
|--------|---------------|---------|----------|-------------|------|
| 1 大広間 | 2 大御台所 | 3 御小姓部屋 | 4 間り通路 | 5 長之間 | 6 露地 |
| 7 西廊下 | 8 小広間（三階御櫓含む） | 9 長局御櫓 | 10 御天守廊下 | 11 その他・トレンチ | |
| SD溝状造構 | SK土坑 | ST堀 | SB建物 | SLカマド | SP小穴 |
| SX不明造構 | | | | | |

第33図 調査区名と掲載順序及び造構名

(1) 大広間（第34図～第63図）

大広間（第34図～第48図）

「御城内御絵図」に示された平面によれば、本丸御殿の主要建物である大広間・大御台所棟は間り通路上に位置する。大広間棟の式台之間・雪之間・御家老間・帳台之御間・团扇間は通路上に、齋之間・梅之間・桜之間・桐之間・若松之間・猿幸之間・数寄屋・蘇鉄之間・昭君之間は通路より南側の石垣上に乗る。広間の南側には露地に面した縁側、西側には拭板があり、蘇鉄之間の西隣に数寄屋棟が付属する。通路上に位置する部屋には間り通路へ下る階段があり、齋之間の下には中地階構造の玄関が設けられていた。

間り通路に面した石垣は、明治22年7月28日深夜の熊本地震（金峰山地震）によって崩落しており、大部分は天端からの幅約2m、高さ2～3m分が地震後の積み直しである。調査区内では、主に明治10（1877）年2月19日の火災の後から昭和50年代にかけて、焼失した御殿廃材の片付けや新たな建物の基礎掘り、配管等の作業で掘削が繰り返されており、礎石や溝の石材の抜き取りや転用も行われていた。これらの搅乱を受けていない部分にはⅢ層とした焼失時の焼土層が残存し、建物遺構と共に大量の瓦片や建築金物等の金属製品、炭化した部材片等の御殿建物に伴う遺物のほか、熊本鎮台に関する軍用品等がまとまって出土している。火災の影響で遺物は変色・変形したものが多く、礎石や石垣にも表面の剥離や割れ、欠損が目立った。

この項では、間り通路より南側の石垣上で検出された遺構について記述する。南側石垣上では、御殿の基礎として、単独で存在する礎石と東西・南北方向に並ぶ礎石列が残存していた。東西方向の礎石列は全長約30mで、間り通路に面した北側石垣天端から南へ約6mの位置で検出されている。「御城内御絵図」との対照から、礎石列は広間と縁側の間仕切りに相当するものであり、広間部分の基準柱間寸法は6尺5寸（約2m）と推測した。石列東端の一際大きな礎石は、上面に東西幅53cmの浅い溝が刻まれており、齋之間の西側間仕切りの土台当たりに相当する。他の間仕切り位置では独立礎石が検出されたが、齋之間が南北に長いためか、土台当たりのある礎石の北側には隣接して礎石が2石並んでいた。南側はS X I 006によって破壊されていたため、礎石の有無は不明である。若松之間南側の礎石列上面には、本土台と思われる厚さ9cm、幅36cmの炭化材が残存しており、独立礎石には焼失によって生じた柱材の痕跡が認められたものもある。礎石列の南側は、広間の間仕切りの延長上に南北方向の礎石列が延びており、南端には落縁先の土台として高さ40cmの石垣が積まれていた。石垣の裾から南へ下がった部分には、濡れ縁の先端を支える安山岩製の縁東石と凝灰岩製の雨落ち溝S D I 001が検出されている。縁東石は一辺が46cmの方形を呈し、上面には丁寧な面取りが施されて、中央に一辺が6cm、深さ3～6cmの方形のほぞ穴が穿たれていた。S D I 001の側面の間に約4mの間隔で据えられており、南側面は溝の側壁を兼ねている。S D I 001は、内法・深さとも約30cmで底石を伴わず、長之間側へ折れる部分でマス状に広くなっていた。S D I 001はマスより南へ続かず、西廊下の石垣裾を走るS D II 001に合流していたと推測されるが、後世の搅乱が激しく、2条の溝の接続部分は検出されていない。S D I 001は濡れ縁の端まで延びていたが、西端では南側石が撤去されて埋め戻されており、その上でS X III 077が検出された。S X III 077は、厚さ10cmの板状に加工した凝灰岩を立て、L字形に組み合わせたもので、一方の側面にもう一方の小口を突き合わせた形で角を合わせている。漆喰などで接着した痕跡は認められず、内側は深さ30cmの部分がややしまっていたが、底石は伴っていないかった。「御城内御絵図」では、露地の北西部に大小2つの水槽様の表現がみられ、後述するS X II 002は南側の大水槽に相当すると考えている。このS X II 002に比べるとS X III 077の造りは粗く、別の排水施設と推測している。S D I 001の南側では、縁側から下る階段の桁を受ける土台石が検出された。桁受けは幅6cmの浅い溝状を呈し、その間隔から階段の踏面は1.3m程度と推測される。

拭板に相当する部分では高さ約1m、幅約3mの腰石垣が検出され、上面に東石様の安山岩が2石みら

れた。腰石垣は西面の高石垣の入隅部分まで続き、入隅から西へ折れた高石垣沿いと猿率之間に当たる一画の石垣は、拭板の腰石垣より30cmほど高く構築されていた。拭板東面石垣の延長線上には礎石列が検出され、周辺の独立礎石も残存していたが、猿率之間の遺構は高圧線埋設等による攪乱を受けており、残っていなかった。

拭板腰石垣の東側では、小広間三階御櫓の、いわゆる「二様の石垣」（以下「二様」）の旧石垣の検出を試み、F80～82-61グリッドにトレーナーを設定した（第47・48図）。北側2か所のトレーナーで、本丸御殿の礎石に伴う遺構面より約60cm下の部分に西向きの石積みを2段検出し、「二様」の旧石垣が昭君之間下まで続く可能性を確認した。拭板北端の石垣解体修理工事の際には、数寄屋棟南面の高石垣が先述のトレーナーで検出した石積みに載ることも確認している。ただ、櫓御門北側の通路上で行われた配管設備工事の際には石垣は検出されておらず、トレーナーの石積みより北側の状況は不明である。

南側石垣の東側、齋之間・梅之間・桜之間に相当する一帯では、礎石に伴う遺構面を5～20cm掘り下げた部分で柱穴を検出した（S P I 023・025～038、第46図）。柱穴の直径は40～100cmで、遺構の性格を確認するために一部を掘り下げたところ、直径30～40cmの抜き取り痕跡や基底面に25cm角の柱痕跡が確認されたものもあった。深さは、東側の10基（S P I 023・025～033）で80～110cm、西側の5基（S P I 034～038）では50～60cmであった。15基の柱穴の間隔は6尺5寸（約2m）で、東側の10基については東西・南北両方向への展開がみられ、柱痕跡等も認められたことから、少なくとも南北2間、東西3間以上の掘立柱建物が存在したものと推測している。埋土中の出土遺物がほとんどなく、明確な時期は不明であるが、柱穴の配置が石垣の軸に平行し、石垣天端との間隔が北・東面で同じことなどから、石垣の構築後に建てられたものと考えている。

東西方向の礎石列の東端では、穴蔵状遺構S X I 006を検出した（第45図）。S X I 006の主体部は、上端部の南北長が約3m、東西長が2.6mで、深さは1.6m、基底面の面積は約6m²である。南北両側に幅が約1mの階段を有し、階段下には縦横60cmの方形の土坑（S K I 009）が検出された。階段には主に安山岩が使用されており、石材の形状や矢痕等からみて石垣や礎石からの転用石と思われる。基底面は硬化しており、東西方向に走る幅・深さ約20cmの溝が等間隔で並んでいた。溝の断面は方形で、内側に木質片が残っており、木材を敷いて基底面の補強を行ったものと考えている。主体部の壁面にも壁材を立てたと思われる痕跡が認められた。S K I 009は、上位にS X I 006のものと類似する埋土が入り、下位には自然礫が集中していた。中位にはややしまる平坦面があり、その周囲には幅1～2cmの隙間が検出された。S X I 006は、少なくとも3層上面から掘り込まれており、第二次大戦中の防空壕として構築・使用されたものと考えている。

大広間北側建物群（第49図～第63図）

遺構表示のために、天守前広場の大銀杏付近を北限として大広間北側の本丸御殿建物群の調査を行った。大広間北側は熊本地震の際に東西南三方の石垣が崩れた上、中央にS X III 054が設けられ、さらに発掘調査前まで売店が設けられており、遺構の残存状況は悪い。

間り通路北側の南面石垣は大広間棟の1階梁が乗る部分だが、熊本地震で崩れてしまったため、天端石の本来の状況は不明である。石垣は、現況の東・西・南の天端からそれぞれ約2m内側まで積み直しており、積み直しの際に充填された栗石が旧地表面上に露出していた。南面石垣の観察では、間り通路面の1～2段を残して積み直しがみられ、高低差約4mにわたって崩壊した可能性がある。遺構がみられるのは、F80-56・57グリッドの中ほどから北である。調査区を東・西・北に分け、検出した遺構を解説する。

東側（第50図）は、大広間棟・九曜之間・吉野之間に囲まれた露地を中心とした部分で、間り通路側から北へ向かって遺構を解説する。F80-56グリッドで東西に連なる凝灰岩製の板石を確認した。積み直し

の栗石に埋もれるような状態で、残存長は約4mである。確認できたのは北側のみで、底や南側が確認できなかったため、溝であるかは不明。溝であれば大広間北側の雨落ちか。「御城内御絵図」では壁状の表現がみられるが、絵図から想定される壁の位置よりも本造構はさらに北側に位置する。

露地は表土が浅く、売店をはじめとした近現代の搅乱、さらには木の根によって土層が乱れており、焼失時の表土も明瞭ではない。搅乱を受けていないⅢ層は部分的に残存する程度であった。絵図では、露地の北側に位置する九曜之間や西側に位置する吉野之間は、瓦葺ではなく有機質素材で葺かれていたとされているが、露地からは相当量の瓦が出土している。「御城内御絵図」では、露地の中央に出入り口のある南北方向の壁の表現があり、遺構としては凝灰岩製の延石を確認した。炭化材等は残存しておらず、壁の構造は不明。延石は、幅25cm前後で、長さ約165cmのものと約125cmの平面長方形の2石が、長さ20cmの方形の石を挟んで南北に並べられていた。SDⅢ031から南へ全長約3.1mが残存していたが、そこから南側は残存していない。北端はSDⅢ031の側石に乗る。延石の延長とSJⅢ020の西側が合っており、SJⅢ020が機能していた段階では延石があった可能性がある。SJⅢ020は、甕の周りに遮蔽物の基礎と思われる凝灰岩の板石などを並べ、漆喰タキを施す。甕の縁等の焼損が不明瞭で構築時期は不明だが、遮蔽物として壁を利用していたものであれば、焼失前に存在していた可能性もある。また、露地では比較的大型の甕SJⅢ019も確認している。SKⅢ162に破壊されている。SJⅢ019・020ともに便所と考えている。

露地の北側では雨落ち溝とみられるSDⅢ031、東側ではSDⅢ032を確認した。両遺構ともに凝灰岩の板石を組み合わせた溝である。底石と側石は別造りで組合させており、底面の幅が40~45cm、側石の外側幅が60cm前後である。SDⅢ031は、SDⅢ032の交点から西へ下がる。SDⅢ031は九曜之間の雨落ちと判断している。西端は板石列に突当るが、交点がSXⅢ054で破壊されており、さらに北側へ曲がるかは不明。F79-55グリッドでは、SDⅢ031を破壊してSJⅢ014・015が設けられている。SJⅢ014・015に使用された甕の口縁が焼けしており、SDⅢ031は焼失前に改変され機能を失っていたと判断している。九曜之間の礎石については、SDⅢ031の北側に並行した安山岩石列を検出しており、これが建物南端の礎石と判断している。SDⅢ031と礎石列の芯心距離は約160cmである。この石列とSDⅢ031の間からもSJⅢ016~018を検出した。いずれもSDⅢ031を改変しているが、周辺の焼土の残存が不良な点と、各SJは上面確認のみで内部が未調査なことから、設置時期は不明。ただ、SJは建物内部では見つからなかったため、九曜之間軒下を便所として利用したもので、焼失前に設置されたものと考えている。

SDⅢ032は南側へ下がるが、南の延長が一部の側石以外残存していない。露地に落ちる雨水の行方は不明瞭である。F80-54グリッドで、東西方向の凝灰岩板石を検出しており、SDⅢ032の延長の可能性がある。SDⅢ031とSDⅢ032の交点で安山岩切石にはぞ穴を掘り込んだ礎石を検出した。この礎石は、軒の先端を支えた礎石か。SDⅢ032は南北の雨落ち溝で、御膳立之間の西側にあたる。遺構としてはSDⅢ032の東側に間隔のまばらな東石が数石みられるが、これらは御膳立之間西側の廊下の礎石と想定している。それ以東は熊本地震で崩れた部分となり、礎石等の状況は不明である。

九曜之間の東側半分ほどの床下は、闇り通路から続く地下構造があった。F79-54グリッドには、地下から階段で上がり露地の北へ出入りする多門があった。出入り口部分のSDⅢ031には、溝に堆積した焼土上に凝灰岩の板石が置かれている。焼失後の地下部分への出入りの便宜を図って改変されたものであろう。

露地の西側は吉野之間である(第55図)。構造物SXⅢ054により大きく破壊されている。SXⅢ054は東西に長い楕円形を呈したモルタル造りの構造物で、化粧のように安山岩築石が配されている。長軸約10m、短軸約5mで、北西側にモルタル造りの突出部がある。設置時期や設置理由は不明で、昭和30年代までは存在し、水が入っていたとの証言があった。SXⅢ054の西端にSDⅢ034とした土管を連ねた導水施設がある。SXⅢ054への給水施設であろう。吉野之間と露地の間で、SDⅢ031に直交する南北方向の凝

灰岩板石列を確認した。大広間側で確認した東西方向のものと近似しており、吉野之間の雨落ち溝として適切な位置であるが、側石とすれば一方のみで底石も無く溝にはならない。SD III 031を止めた格好であり、雨落ち溝よりも露地からの雨水の浸入を阻止するための構造物か。この石列の西側には南北方向の礎石列が2列確認されている。東側のものは、全長3m程度の石列で、安山岩板石を使用している。絵図の吉野之間東側にみられた廊下状の表現の基礎になるものか。板石の南側延長のF 80-57グリッドで内側を削りこんだ方形の凝灰岩を確認した。大広間棟と吉野之間が合わさる部分であり、屋根の基礎の可能性がある。西側の石列は8m程続き、北側はSX III 054に破壊されている。南側も樹木による搅乱で破壊され、延長は不明瞭。

吉野之間は、間仕切りにより仕切られて南北に長い部屋が東西方向に並ぶ構造である。熊本地震での崩落、さらにSX III 054などの近現代の搅乱が激しく、焼失時の地表面はほぼ残存していない。吉野之間南側は礎石もほとんど残存せず、抜き痕も不明瞭である。SX III 051は方形の構造物だが、性格は不明。SK III 101は少なくとも焼失後の搅乱で、瓦が充填されていた。

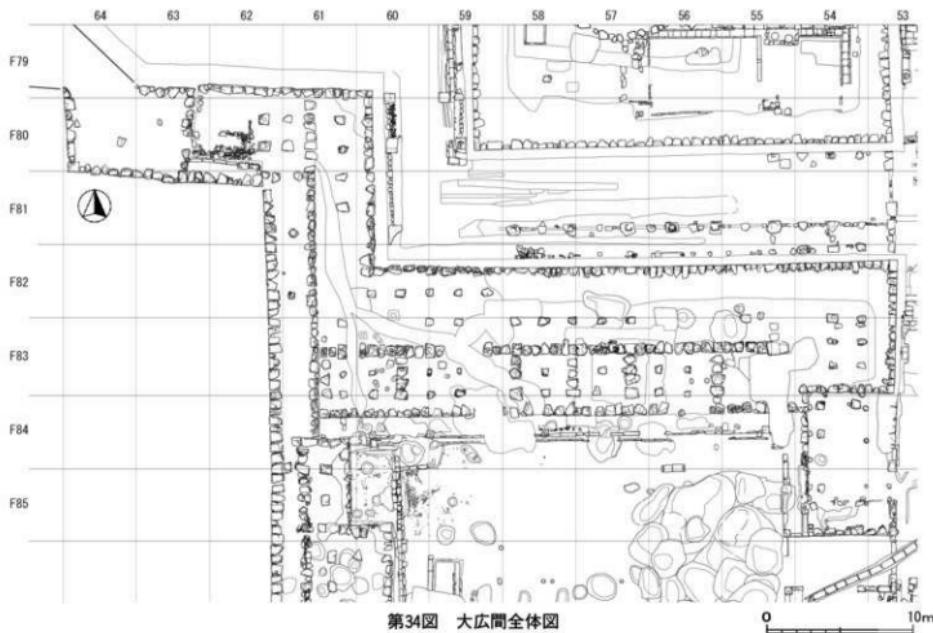
吉野之間北寄りに、東西方向の石組み溝であるSD III 030があり、間櫛御門北側石垣に排水口が開口している。SD III 030は、凝灰岩板石を組合せた溝を底とし、側石の縁に沿って角礫などを積んで側壁とした溝である。側壁の角礫の一部が焼けていることから、焼失時は開渠であったようだが、本構造内東側の土層の堆積状況からは、焼失段階で埋没も進んでおり、本来の機能は失われていた可能性が高い。焼失後、SD III 030は、一部改変して利用されている。取水口と思われるマス状の組石(SX III 052)を設け、SX III 052から西側の凝灰岩石組溝に蓋をして暗渠化している。蓋には凝灰岩板石が使用されているが、西側の石垣端部分には全長130cm以上のまほこ型の凝灰岩を使用している。改変の時期は、排水口付近まで石垣の積み直しが行われていることから、熊本地震の後の可能性が高いのではないか。SX III 052以東は、焼失後に埋没したままである。SD III 030の東側延長はSX III 054によって破壊されており、SD III 029・31との関連は不明である。吉野之間北側は、搅乱が激しいもの一部礎石が残存している。間仕切りに当たる部分の礎石はやや大きく、東柱と思われる礎石は小さめである。大きな礎石は南北の芯心距離が約2mで、6尺五寸に近い。小さめの礎石は、東西の芯心距離約170cm、南北の芯心距離が約100cmである。

波之間は、吉野之間北側の部屋で吉野之間とは同じ棟である。調査対象はこの部屋の南側と東側で、北西側は面的な発掘調査を行っていない。波之間南側は吉野之間と鍵型に接しているが、礎石等が残存していないため、部屋境の基礎構造は不明。南東側はSX III 054により破壊されている。北東側は九曜之間と接するが、棟は別になる。波之間北東には、独立した礎石3石がL字形に残存しており、うち東側の2石が九曜之間との部屋境の礎石である。波之間の北東端には九曜之間へと連続する安山岩の切石を並べた石列がある。部屋境の礎石2石と石列との南北間の芯心距離は約150cm-約170cmである。

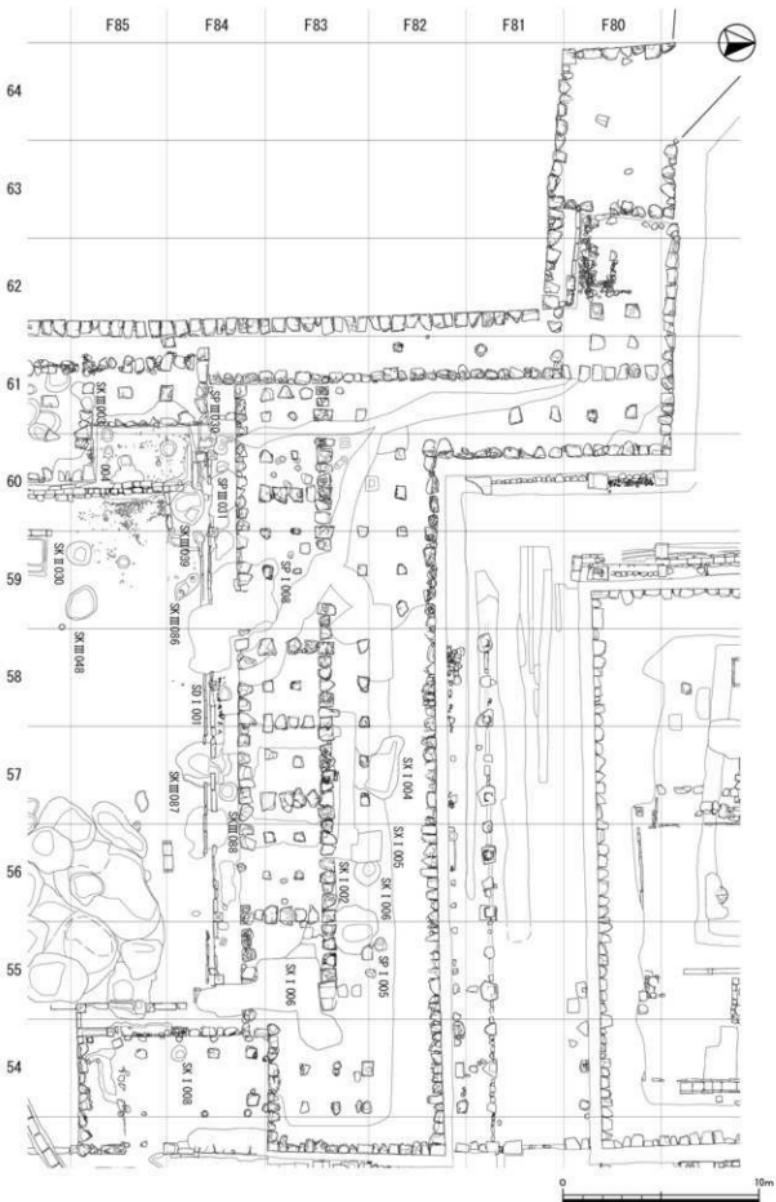
なお、吉野之間・波之間は南北棟であり、建物としては南北方向が桁行きとなる。しかし、波之間北東の礎石間は、東西方向が長く約2m、南北方向で1.6mである。吉野之間に残存する礎石とは柱間が一致しない。波之間北東端の東西石列は、波之間北壁の土台となる。安山岩の切石が使用されている。切石は九曜之間へ連続することから、波之間の北壁と九曜之間北壁は連続していた可能性が高い。九曜之間側の大半は搅乱されて礎石等は残存していない。波之間北側に接する松之間東端には、波之間北壁の切石は連続しない。波之間と九曜之間の部屋境から東へ約1mにSD III 029とした南北方向の溝がみられる。SD III 029は、素掘りの溝底に凝灰岩板石を組合せたもので、検出面での幅110~120cm、底幅は45~50cm、深さは検出面から45cm前後である。焼土が堆積していることから、溝自体は焼失時開渠であったようである。底面の勾配から、九曜之間の床下を通って南側へ水を誘導したと判断している。SX III 054によって破壊されており、排水先は不明である。SD III 029の東側には九曜之間の安山岩製の礎石がみられる。波

之間とは柱間が異なり、軸もずれている。九曜之間の礎石間は、梁間方向（南北）で約2m。桁行き（東西）は不明瞭だが約2mの可能性がある。SDⅢ029は、先述した波之間北東端の石列下を通るが、SDⅢ029をまたぐ部分は凝灰岩製である。南北方向のSDⅢ029は、九曜之間の北で西へ曲がり、さらに松之間東側で北へ曲がる。九曜之間床下以外は雨落溝として機能していた可能性が高い。この部分をSDⅢ028とする。SDⅢ028は、側石が抜かれるなど擾乱が激しい。波之間・九曜之間境の延長とSDⅢ028が交わる部分には、安山岩切石がSDⅢ028の側石を兼ねるように据えられている。九曜之間北側で「トコ」とされた突出部の礎石と思われる。

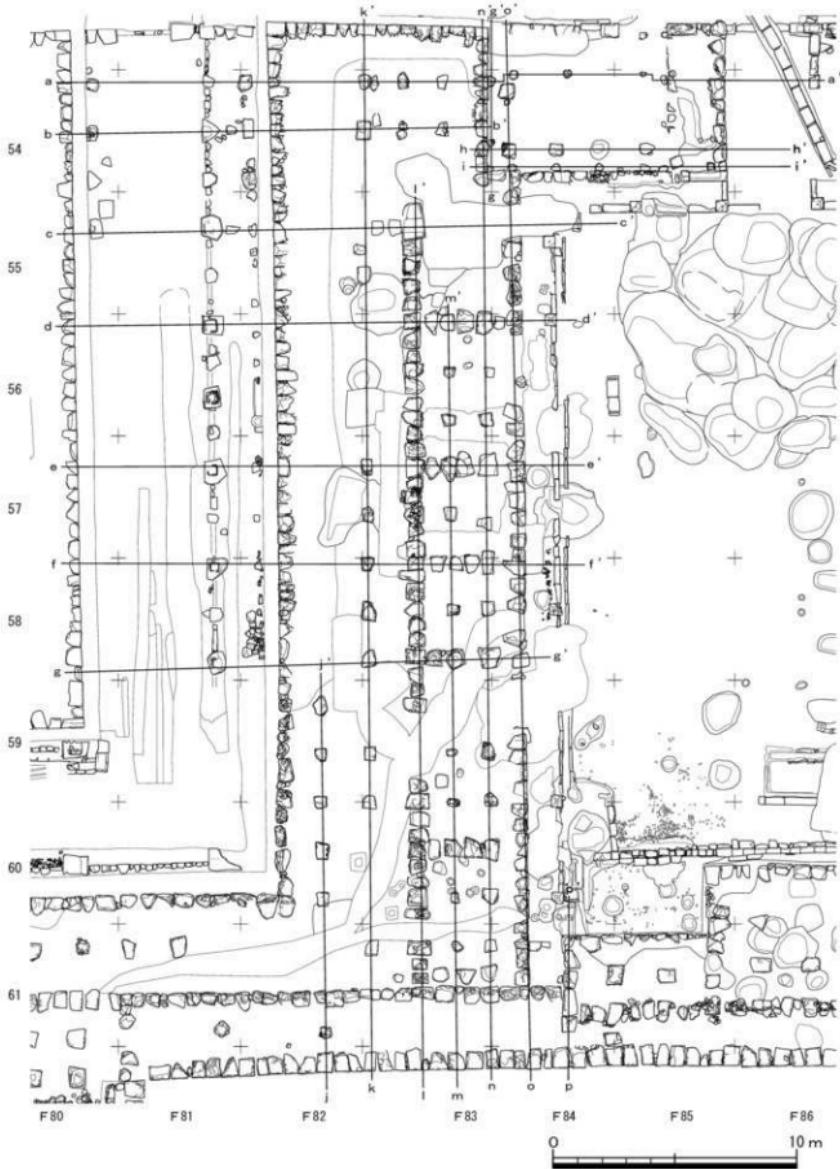
九曜之間に当たる部分は、露地に面した南側と、波之間と接する西側以外は造構面と現地表面がほぼ同じであり、擾乱が激しく礎石や礎石抜き痕も確認できていない。九曜之間と遣炉裏之間部屋境の北側で凝灰岩板石を組合せたSDⅢ033を検出した。東西の延長は破壊されており不明だが、西側はSDⅢ028につながっていた可能性もある。九曜之間東側には、闇り通路から続く地下部分がある。九曜之間下門から西に続く地下構造で、5.6m四方の土間と北西端と南西端に地上へ上がる石製の階段が付く。地下は東西2段に分かれ、南北方向の石垣（第60図E面）が設けられている。この石垣の高低差は約130cm。石垣の南端に安山岩切石による階段が付く。上がった部分は南北へ向かう通路状で、北端には幅165cmの安山岩切石を用いた階段が設けられ、多門を介して九曜之間北側地上へ通じている。階段ならびに周囲の石垣の残存状況は不良である。南側は幅165cmの階段が設けられ、多門を介して九曜之間南側の露地へ通じている。こちらの階段は比較的良好に残存しており、高低差は155cm前後である。北側の階段も本来は同規模であった可能性が高く、北側周辺は30~80cmほど削平されているようである。九曜之間地下は、安山岩切石を用いた階段で、石垣も方形に近い石を横目地が通るように積むなど、作りが丁寧である。闇り通路東側の御小姓部屋側への階段は凝灰岩製であり、用途の差が想定される。



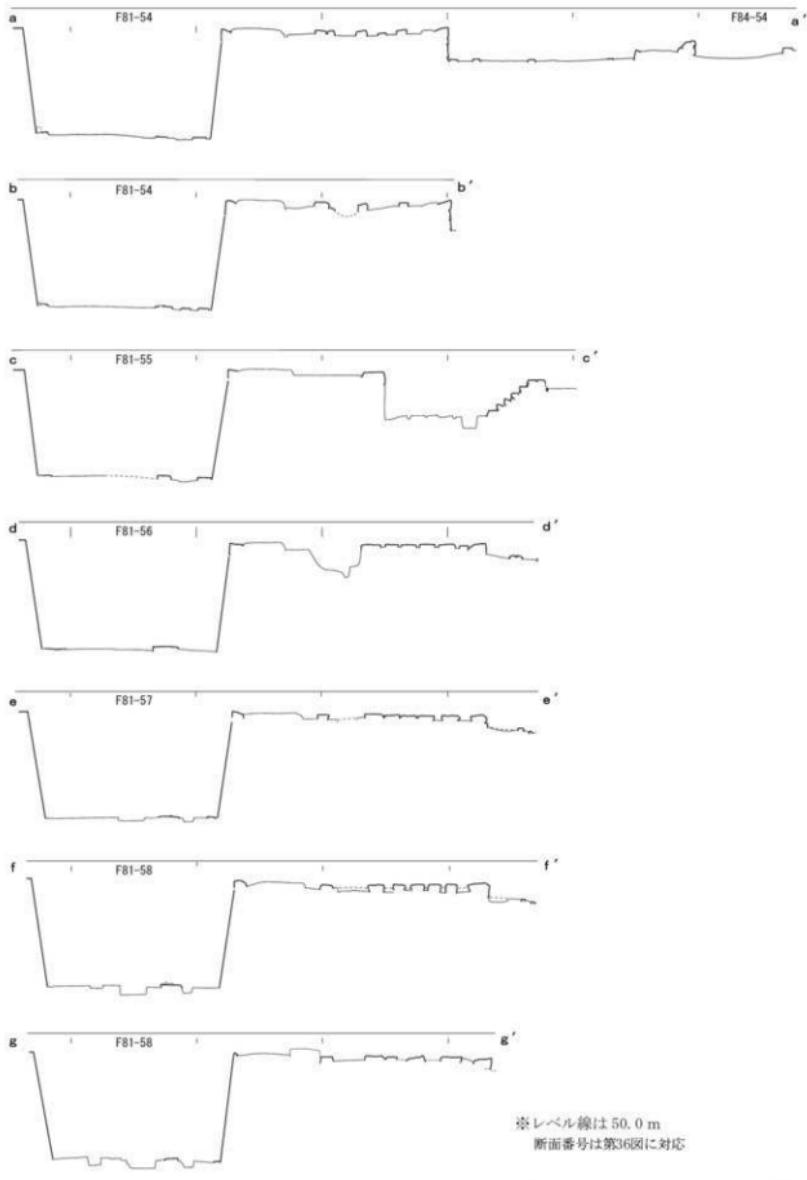
第34図 大広間全体図



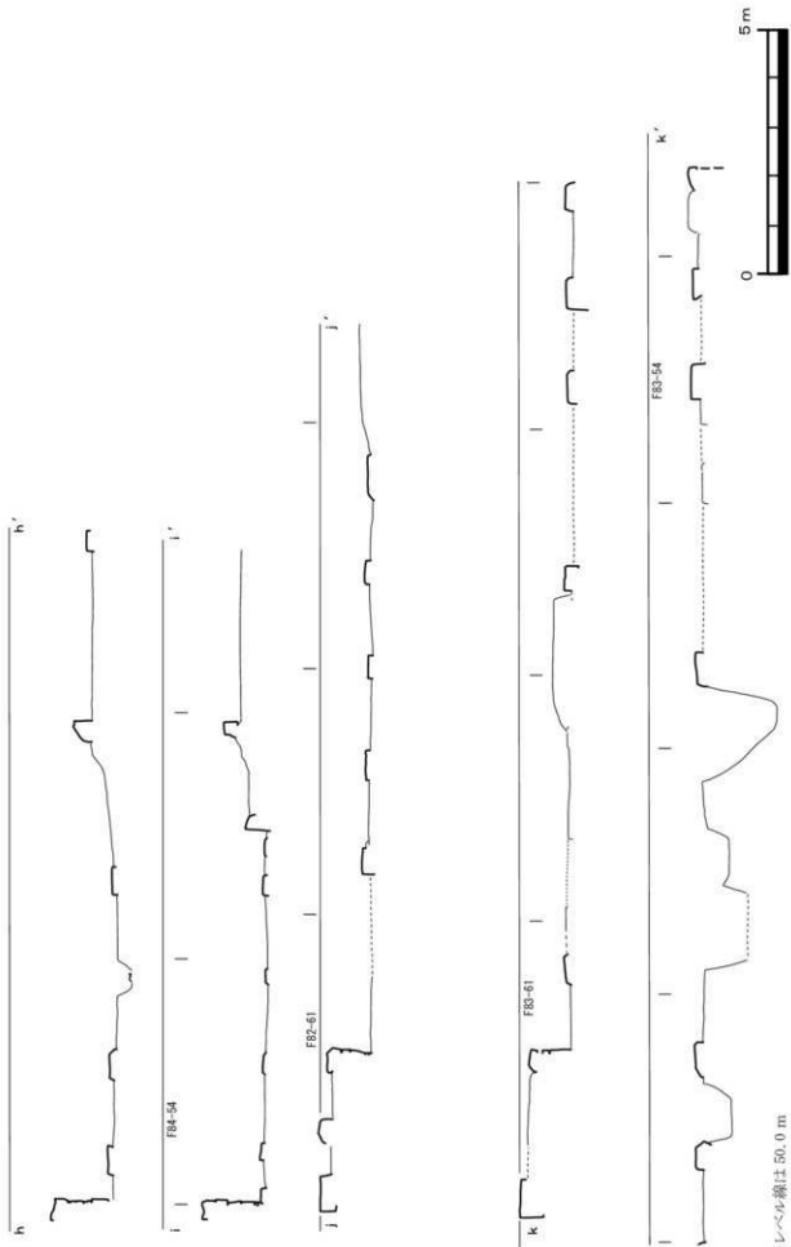
第35図 遺構実測図1 大広間平面図1



第36図 遺構実測図2 大広間平面図2

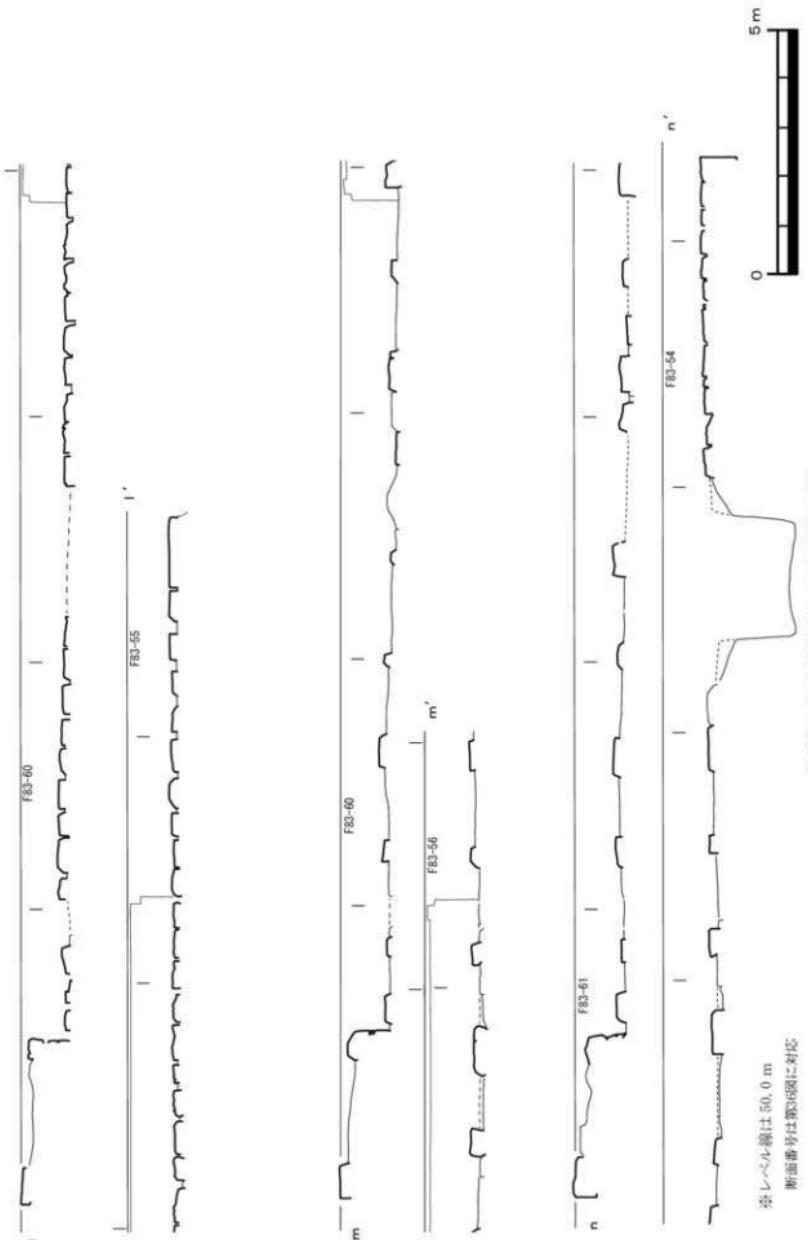


第37図 遺構実測図 3 大広間断面図 1

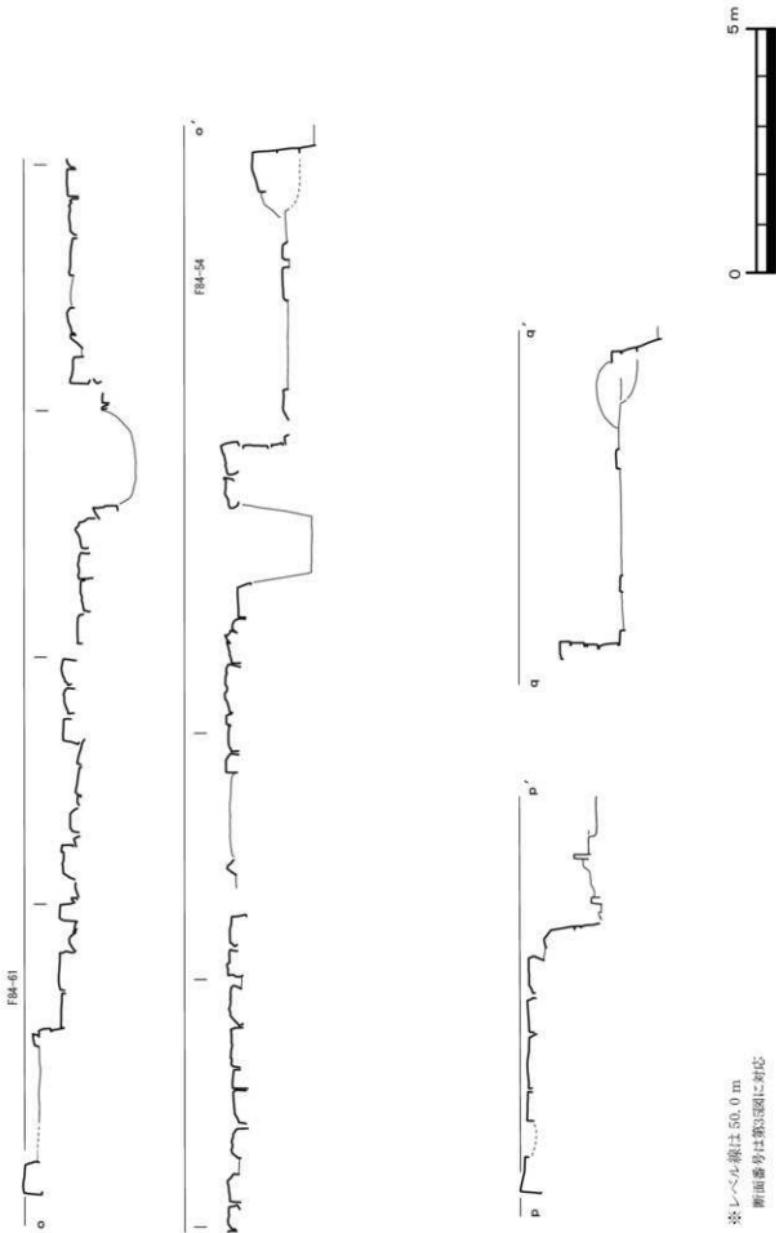


第38回測溝実測図 4 大広間断面図 2

※ レベル線は第38回に対応
 断面番号は第38回に対応

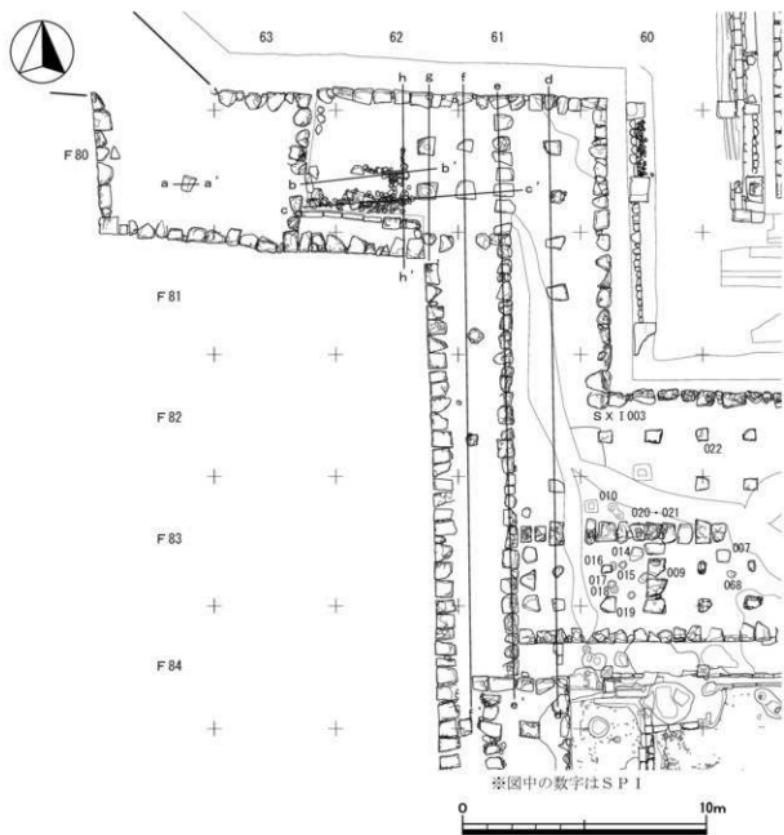


第39図 造構築測図5 大広間断面図3

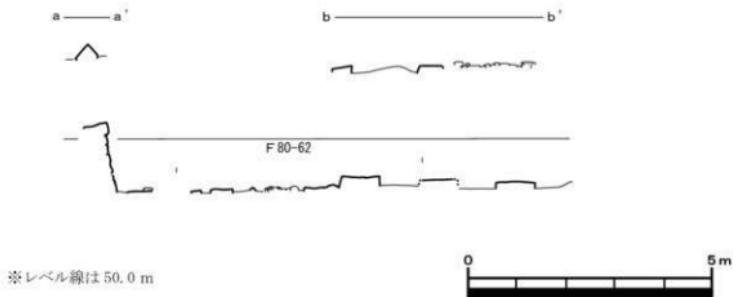


※レベル線は50.0m
断面番号は第33図に対応

第40図 遺構実測図 6 大広間断面図4



第41図 遺構実測図7 大広間平面図3

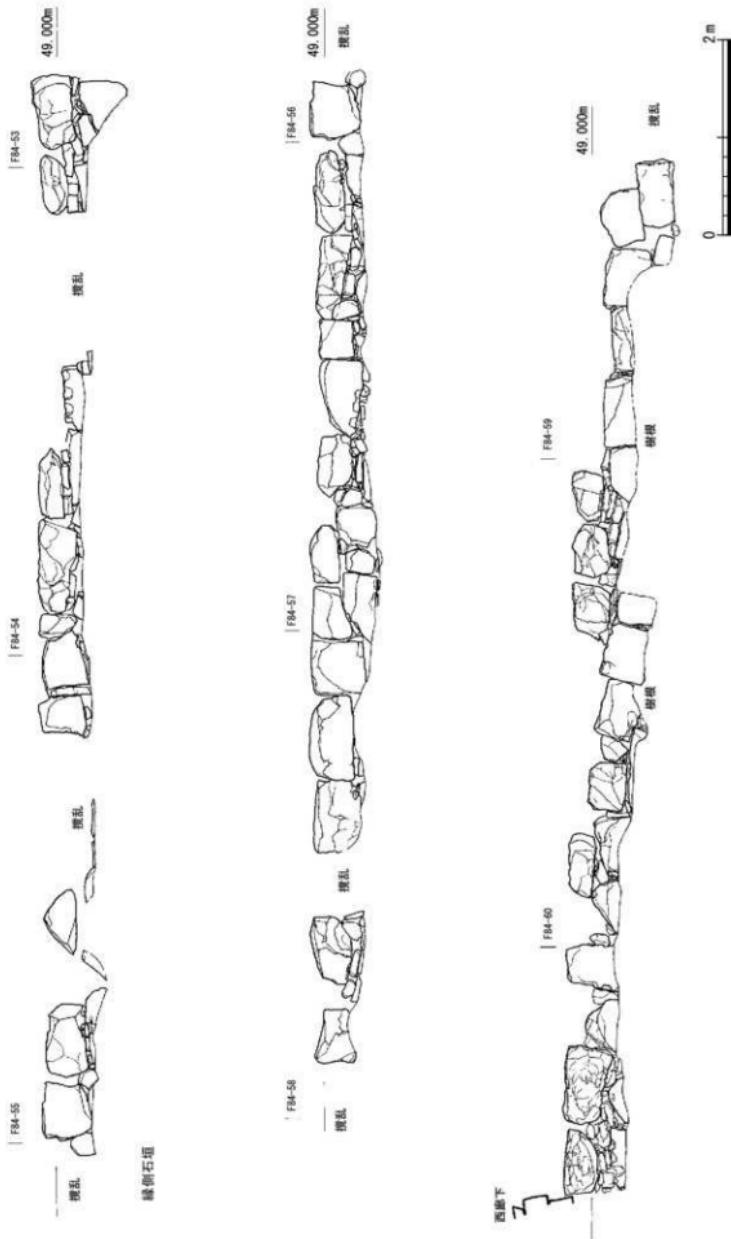


第42図 遺構実測図8 大広間断面図5

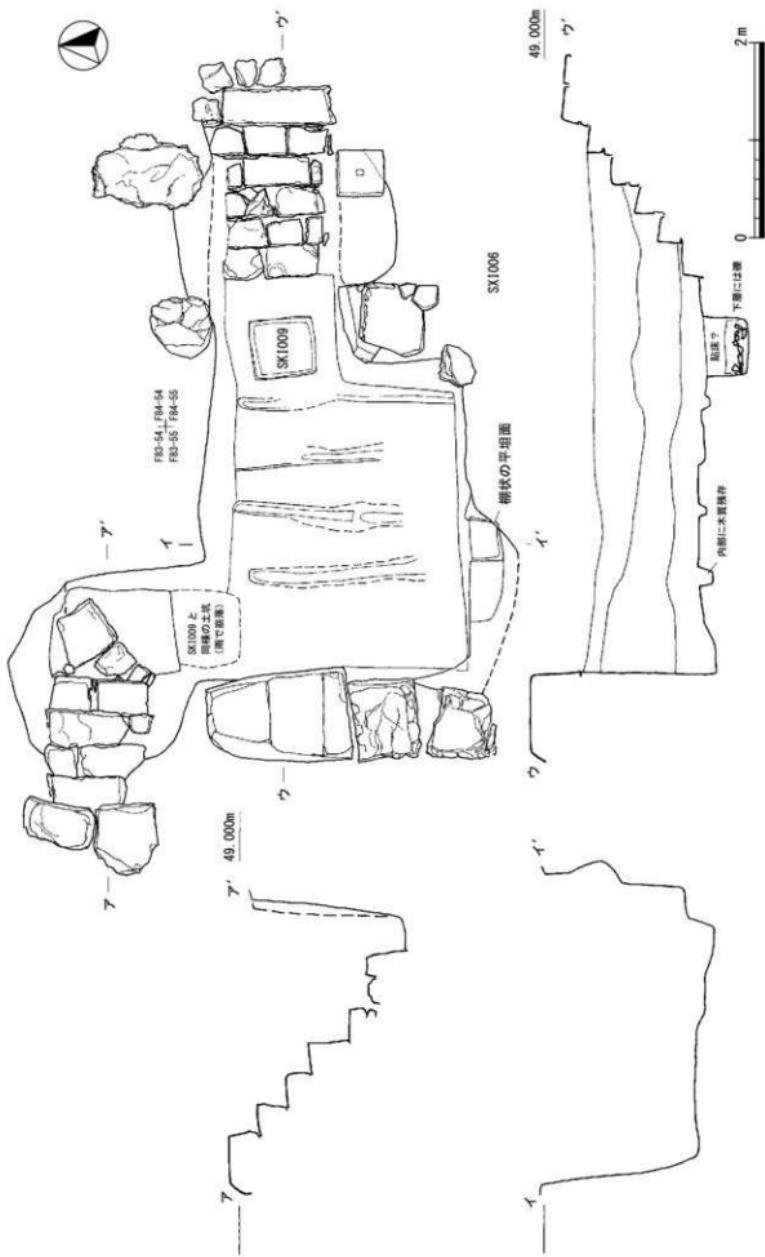
第43図 遠横実測図9 大広間断面図6



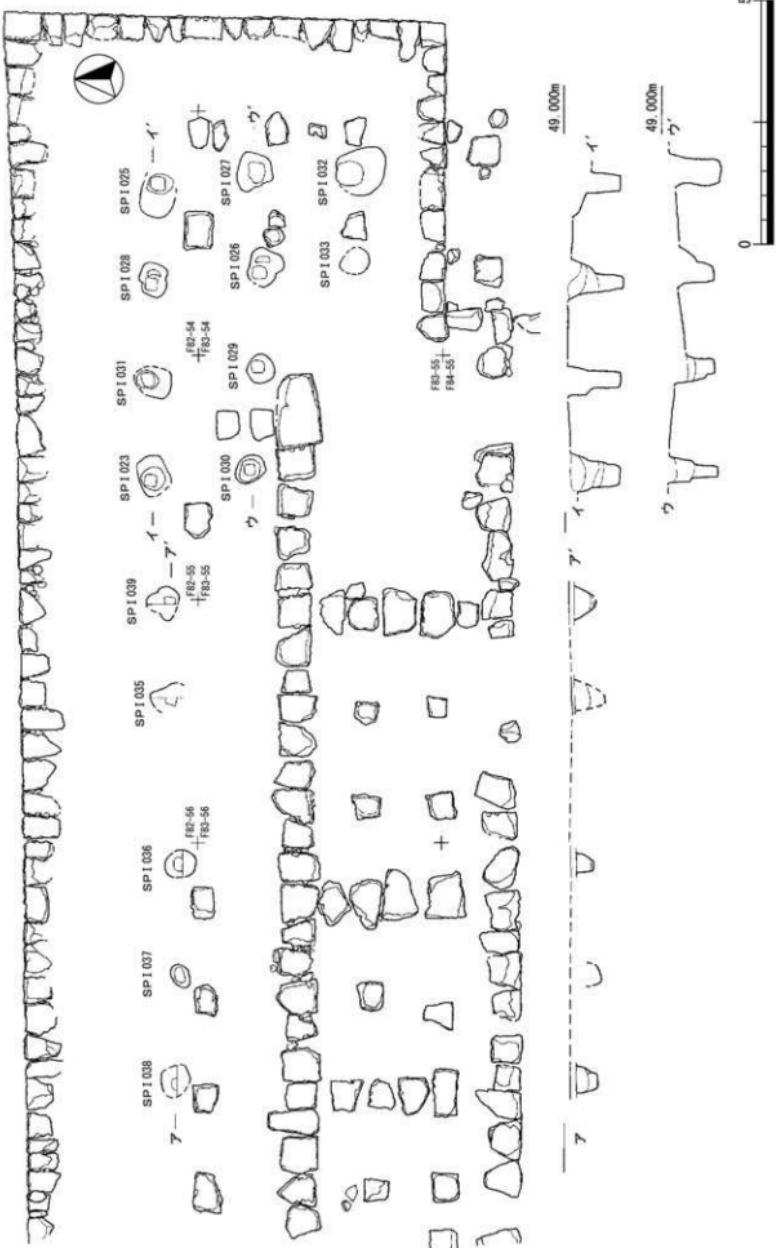
第44図 遺構実測図10 大広間立面図1

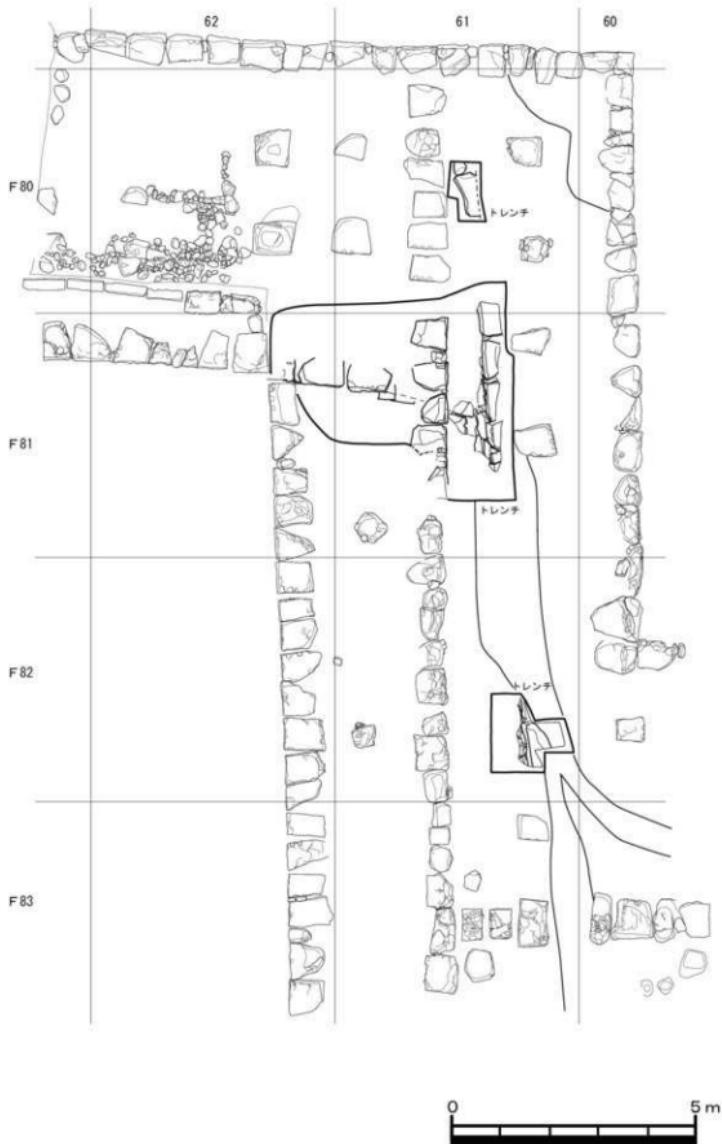


第45図 通構実測図11 大広間平・断面図1

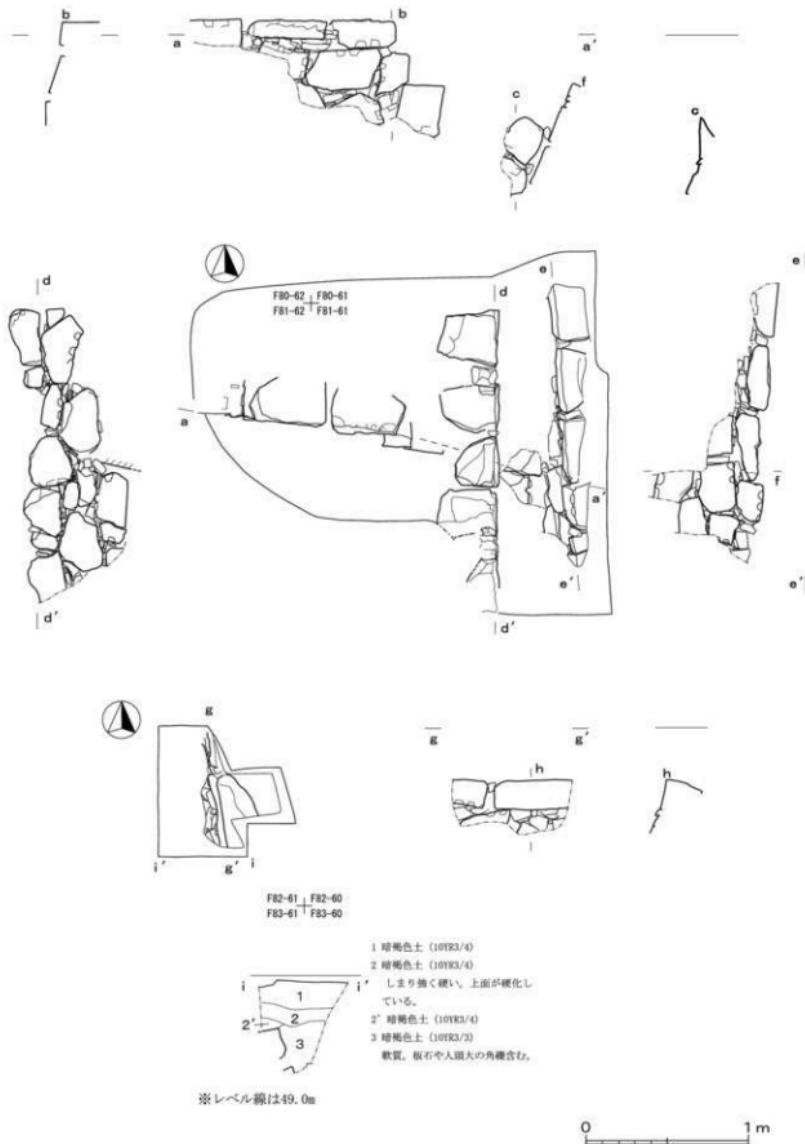


第46図 邊構築測図12 大広間平・断面図2

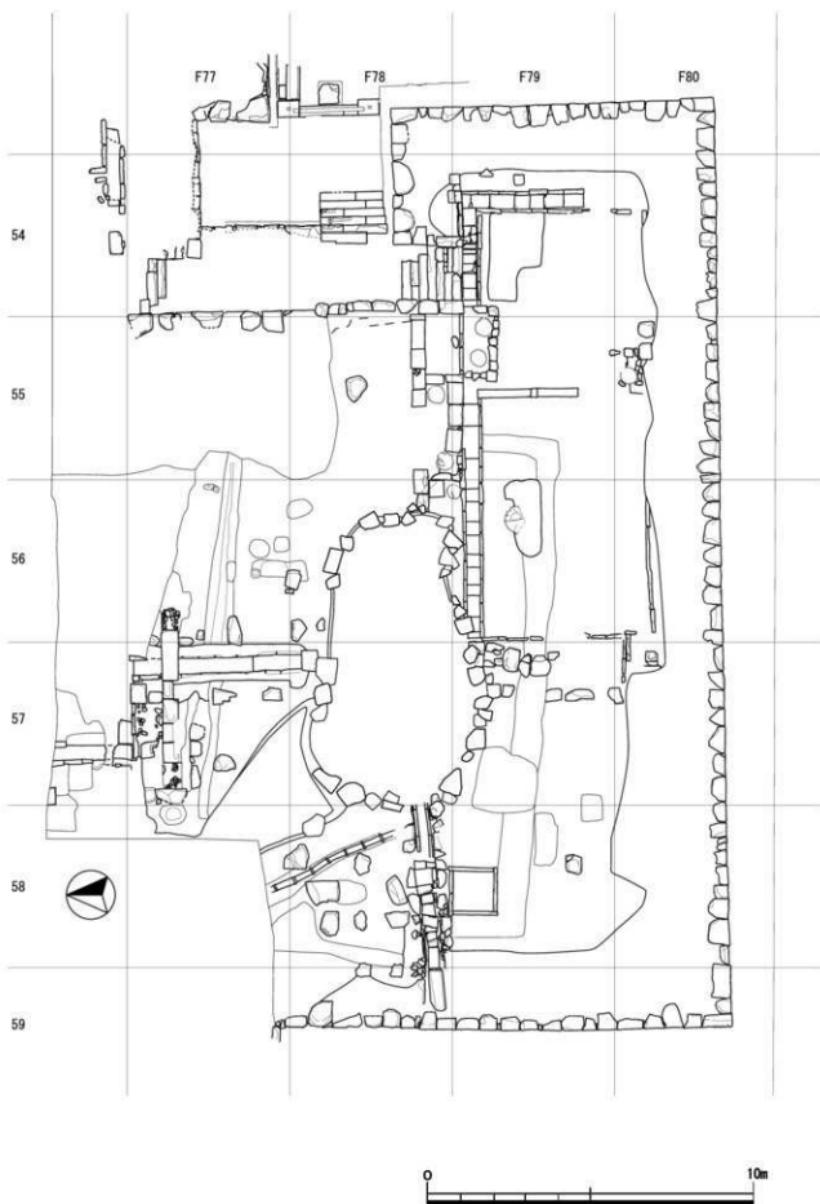




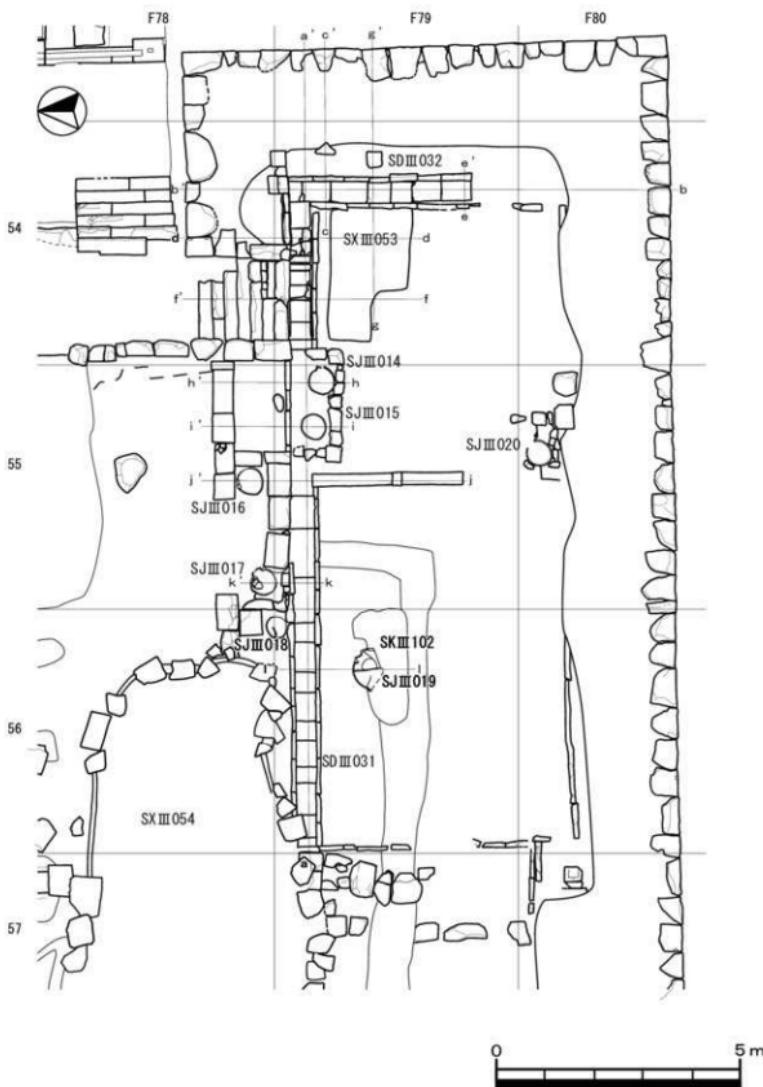
第47図 遺構実測図13 二様石垣トレンチ位置図



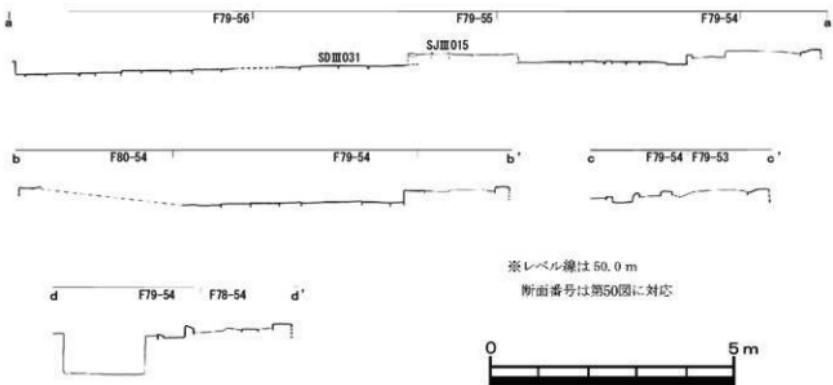
第48図 遺構実測図14 二様石垣トレンチ



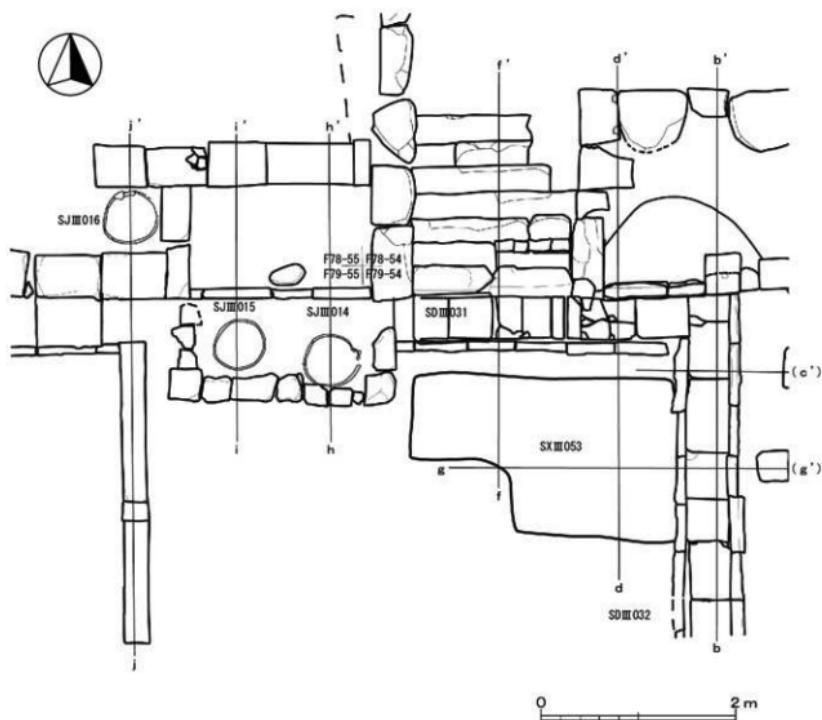
第49図 大広間北側全体図



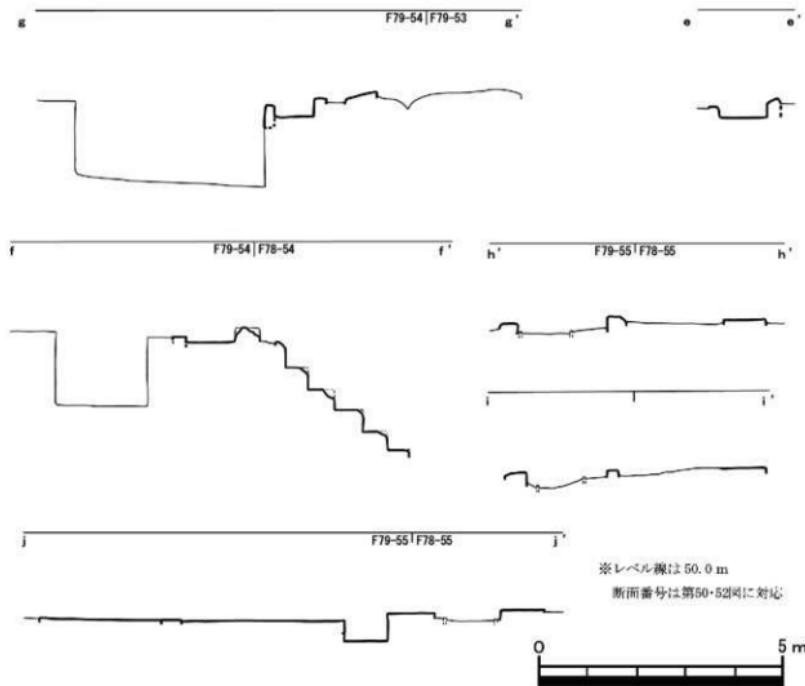
第50図 遺構実測図15 大広間北側平面図1



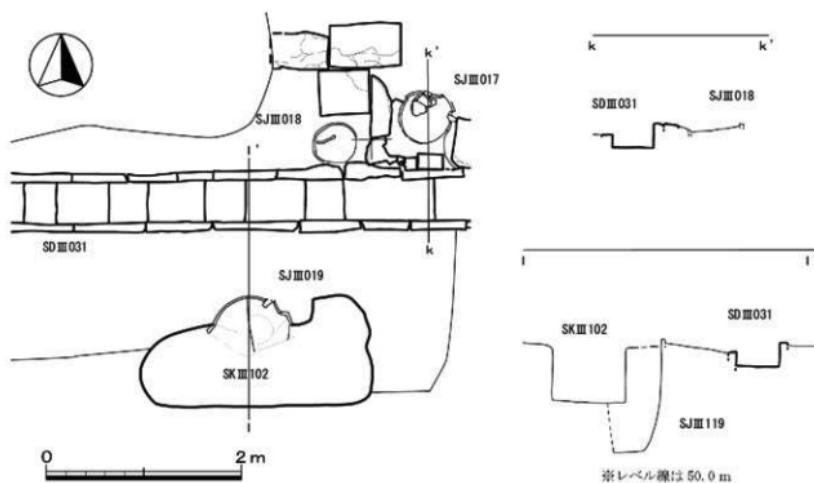
第51図 造構実測図16 大広間北側断面図1



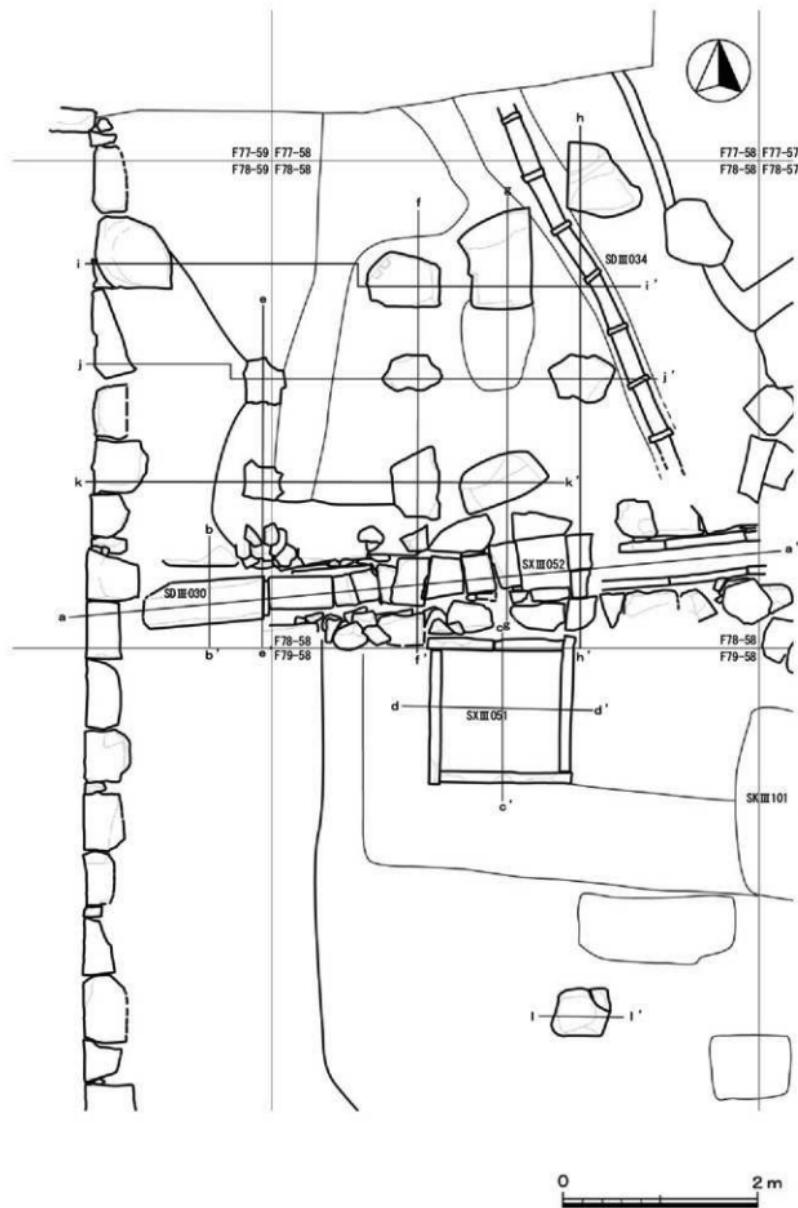
第52図 造構実測図17 大広間北側平面図2



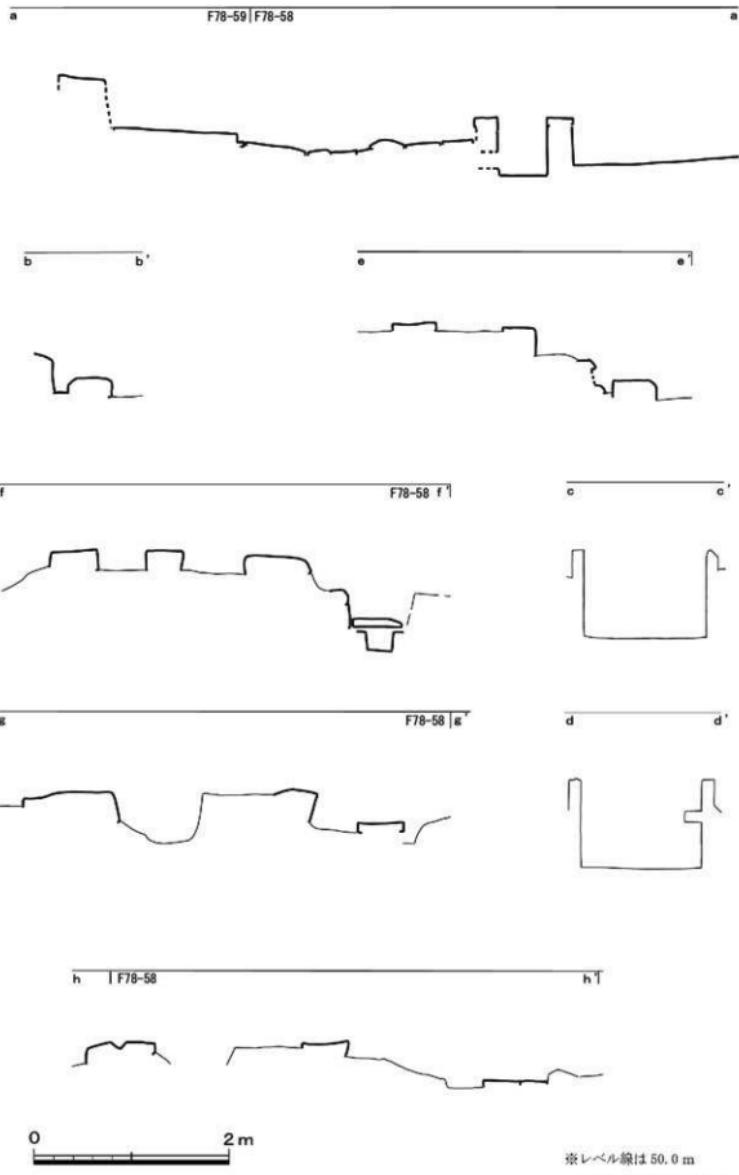
第53図 遺構実測図18 大広間北側断面図2



第54図 遺構実測図19 大広間北側平・断面図1

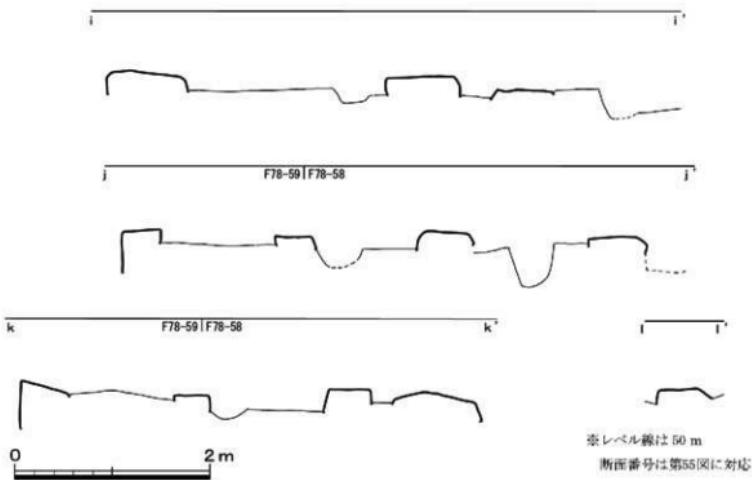


第55図 造構実測図20 大広間北側平面図 3

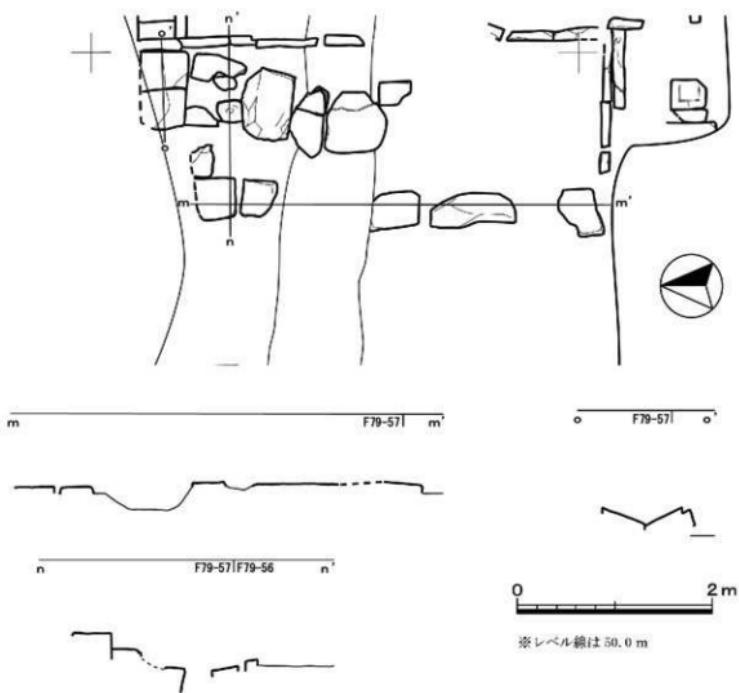


※レベル線は 50.0 m
断面番号は第55図に対応

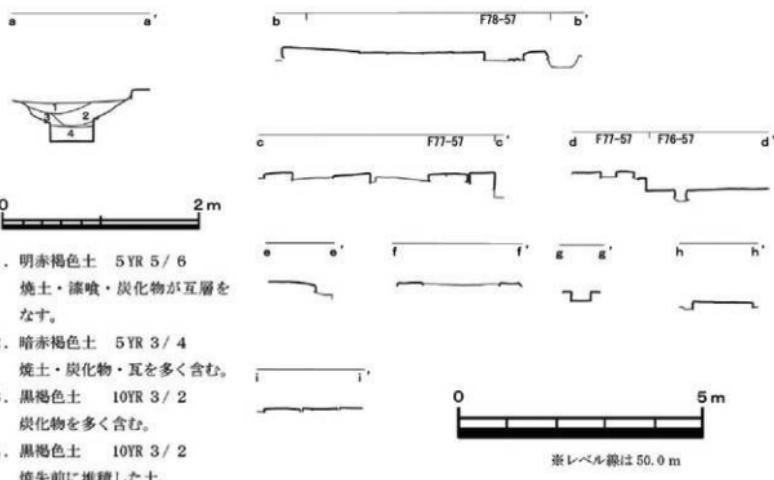
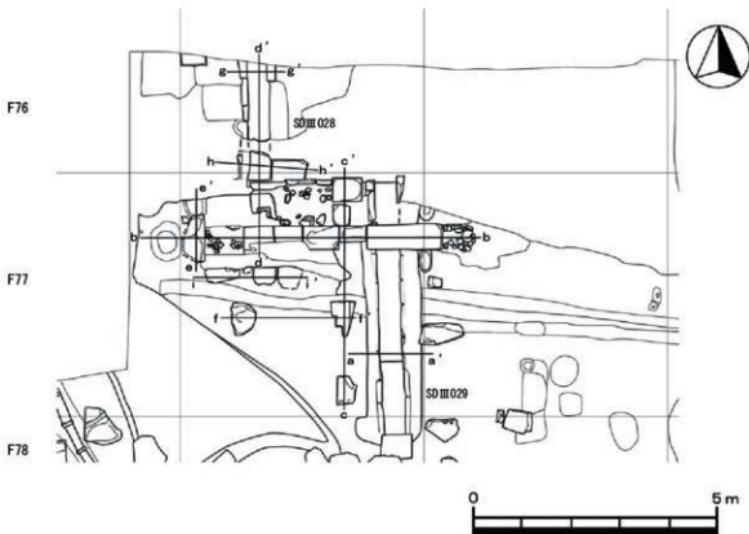
第56図 遺構実測図21 大広間北側断面図 3



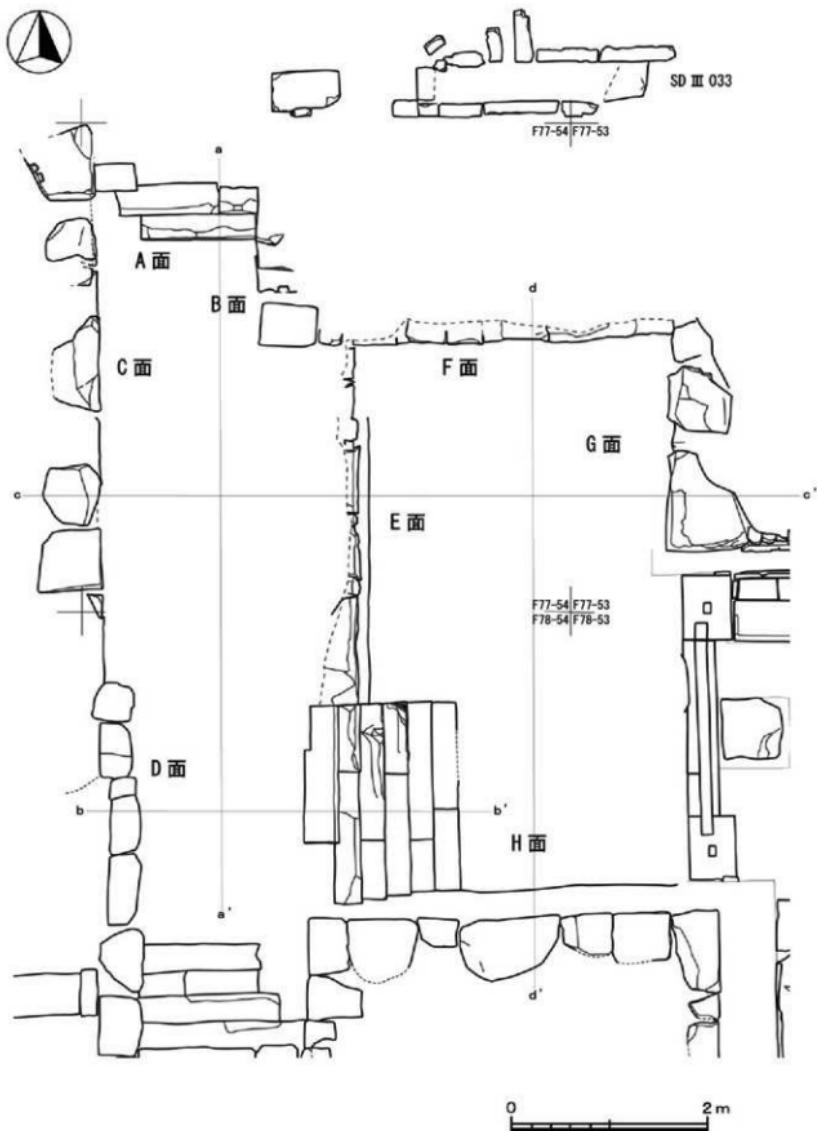
第57図 遺構実測図22 大広間北側断面図4



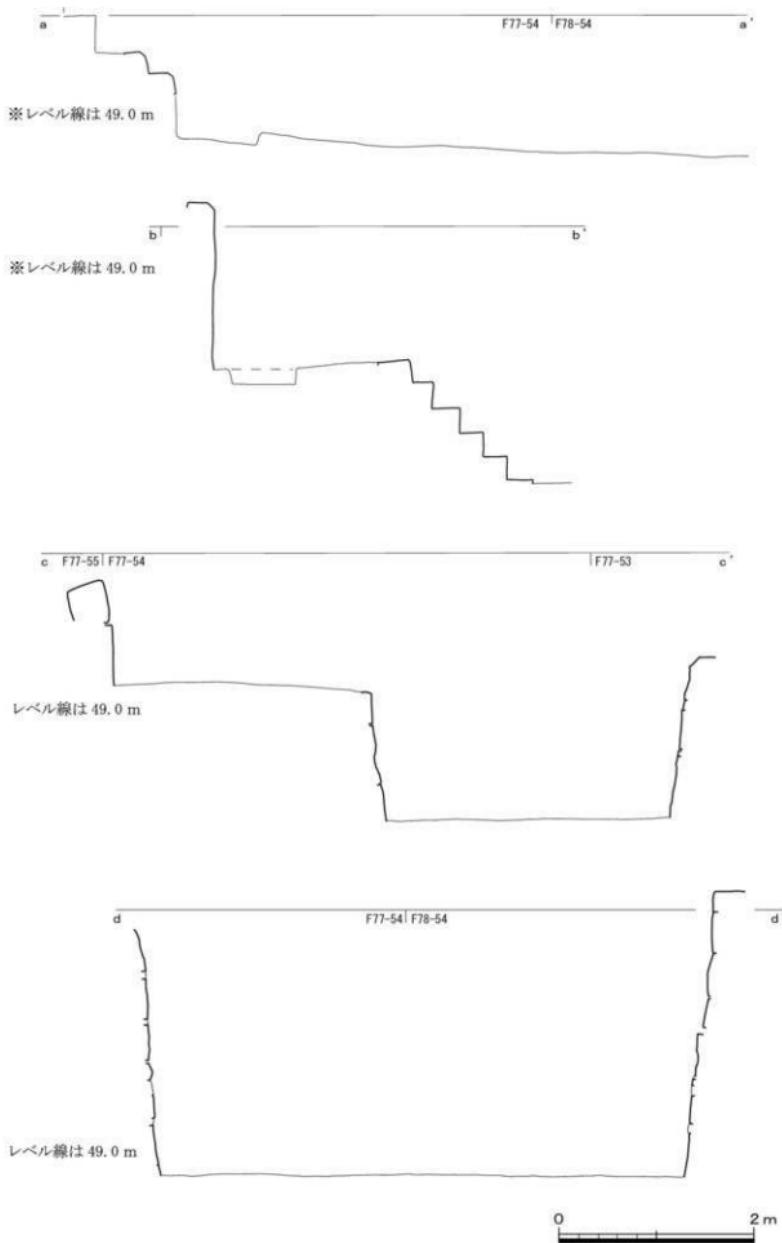
第58図 遺構実測図23 大広間北側平・断面図2



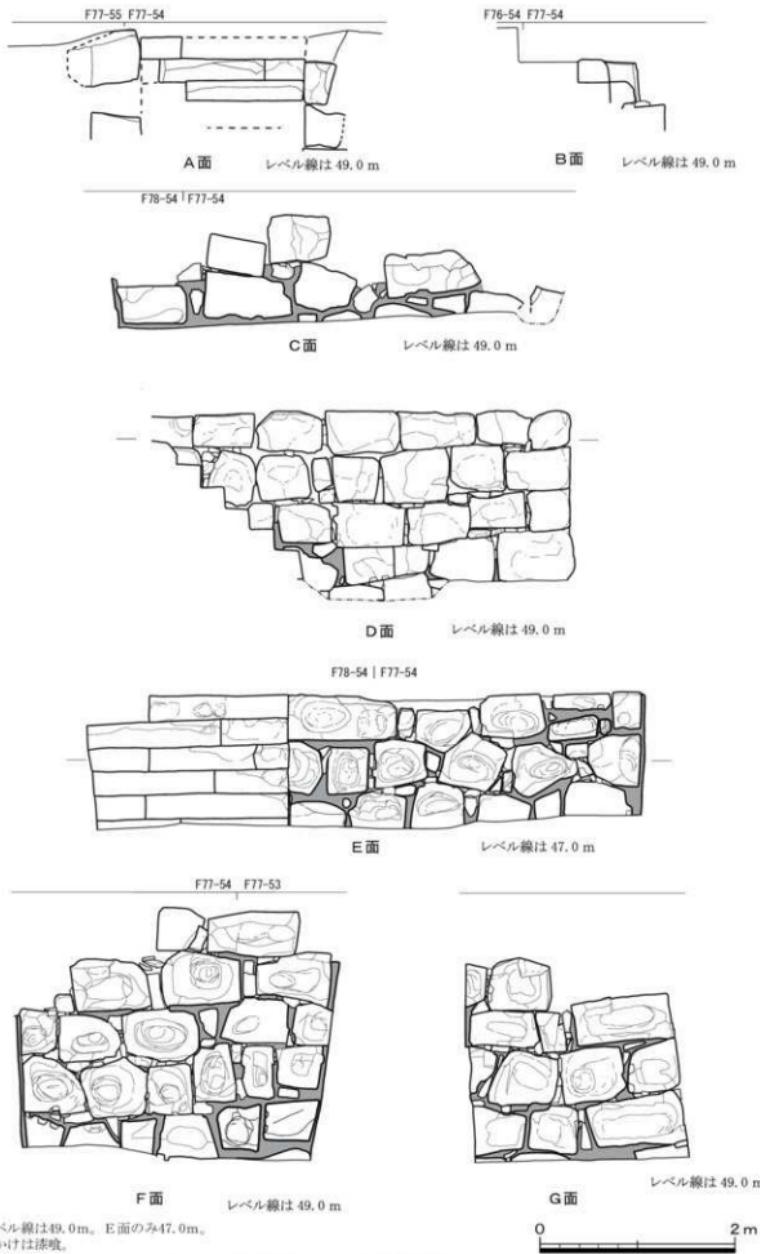
第59図 遺構実測図24 大広間北側平・断面図3



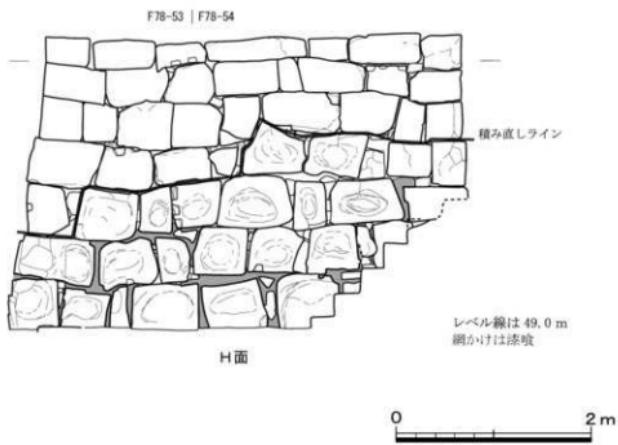
第60図 造構実測図25 九曜之間地下平面図



第61図 遺構実測図26 九曜之間地下断面図



第62図 遺構実測図27 九曜之間地下石垣立面図1



第63図 遺構実測図28 九曜之間地下石垣立面図 2

(2) 大御台所（第64図～第73図）

大御台所棟は、大広間棟と同じく間り通路上をまたいでおり、内部は、南端に土間、間り通路上に「イロリ」、その北側に大御台所・御膳立乃間・御小姓部屋と続く。ここでは、間り通路南側の土間を中心とした一帯（F 83～85-48～52グリッド）について記述する。

大御台所調査区の北西の出隅から西面にかけての石垣は、明治22年の金峰山地震によって崩落しており、後世に積み直されている。近代以降の掘削で焼失時の地表面まで搅乱された部分が多く、礎石の抜き取りもみられたが、調査区内を口の字形に区画するような安山岩の礎石列が残存していた。遺構と「御城内御絵図」との比較から、東・南側の礎石列が大御台所の壁の土台、北・西側が土間の間に仕切りに相当すると推測している。南面礎石列の東端では、礎石の表面に堆積した土に木土台のものと思われる幅34cmの圧痕が認められた。

土間には硬化面が広がり、南東部でカマドの痕跡と思われる灰溜が4か所検出された（S L III 001～004）。灰溜周辺の粘土や被熱の痕跡から、焚口を南に向けたカマドが存在したと考えているが、「御城内御絵図」では南北に並ぶ二口のカマドが2基、焚口を向かい合わせにして描かれている。灰溜の北側では周囲に浅い立ちあがりを伴う東西1.8m、南北1m規模の硬化面が検出され、下層にも別の灰層や硬化面の広がりが認められたため、カマドの作り替えが行われたようである。

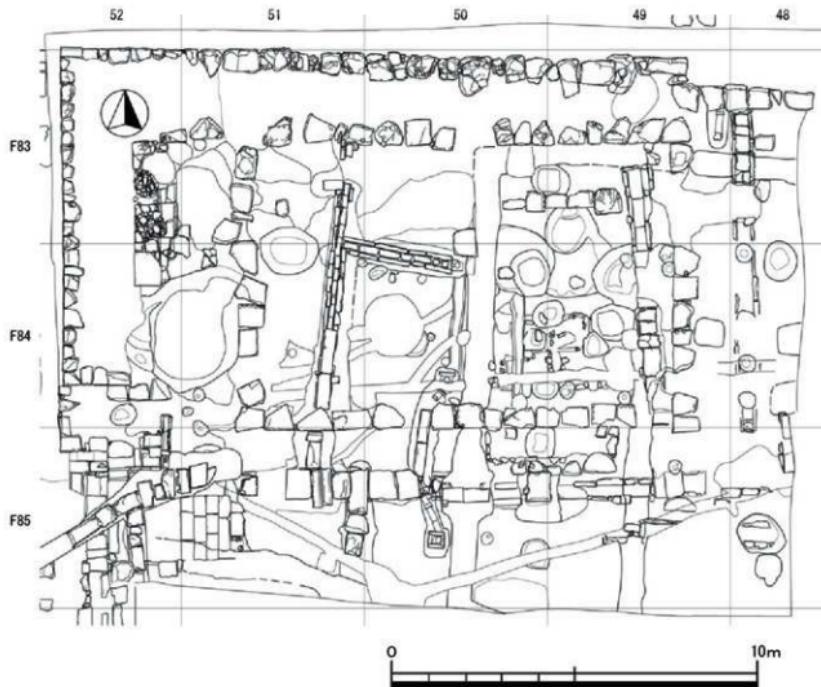
カマドの南側では、大御台所の礎石列に取り付くコの字形の石列が検出されており、「御城内御絵図」にみられる幅2間×奥行1間の庇の土台と思われる。石列の規模は東西幅が3.6m、奥行は西面で1m、東面で1.2mである。奥行の異なる部分では石材の形状が異なり、本来の遺構面と土質の異なる土で固定された西面側の石列は、後世に追加された可能性がある。庇の南面には全長6mの雨落ち溝S D III 013が検出されたが、御殿の焼失時には埋没しており、直上で炭化材と共に九曜紋の軒目板瓦が出土している。直下を暗渠S D III 016が並走しており、雨水はS D III 013の両端から下のS D III 016へ落ちる構造になっていた。

大御台所では、この他にカマド東側の屋内に暗渠S D III 011、屋外に雨落ち溝S D III 018、西側の積み直された石垣の手前にS D III 055があり、いずれも南側でS D III 016に接続している。S D III 011は北端が塞がっており、屋内の排水を処理していたものと思われる。S D III 018は御殿の焼失前に埋没しており、側石の内側に約2m間隔で5基の埋甕（S J III 009～013）が埋設されていた。S D III 055の主体部は板状の凝灰岩の表面にある幅40cm、深さ4cmの皿状の落ち込みで、東西両端に幅5cmの平坦面を有する。この平坦面に、両側から厚さ10cm、幅40～70cmの凝灰岩が内傾しつつ重なっており、側石の役目を果たしたものと思われる。この溝の延長線上にあるS K III 010を挟んで南側には、内法15cm、深さ5～10cmの断面コの字形に加工された凝灰岩があり、石階段に沿ってS D III 016側へ下っていた。間の石垣が積み直されていたため両者の接続部分は確認されなかったが、主軸が一致しており、一連の溝と考えている。石材はすべて被熱していたため、焼失前の御殿の床下に存在した施設で、屋内の排水を処理していたものと考えている。S D III 016は、F 85-51グリッドでは検出面から基底面までの深さが1.5mで、側面は凝灰岩の切石を積上げた石積みである。基底面は、幅が40～50cmで、東に向かって傾斜しており、月見御台所東側石垣の排水口に通じていた。西側は、大御台所と井戸の間にある中門の石階段脇を通り、四ツ辻へ下る通路の手前でS D III 022と接続する。石階段の横では蓋石の高さが約1.2m下がり、S D III 055の受け口となる10cm四方の方形の孔も認められた。ただ、孔の位置は石材の端に寄っており、他の蓋石の形状や石材も不揃いであったことから、低い蓋石は後世に架け替えられたものと考えている。蓋石の下がる部分には近代以降の溝S D III 008が入っていたため、中門上の建物の土台等は残存していなかった。

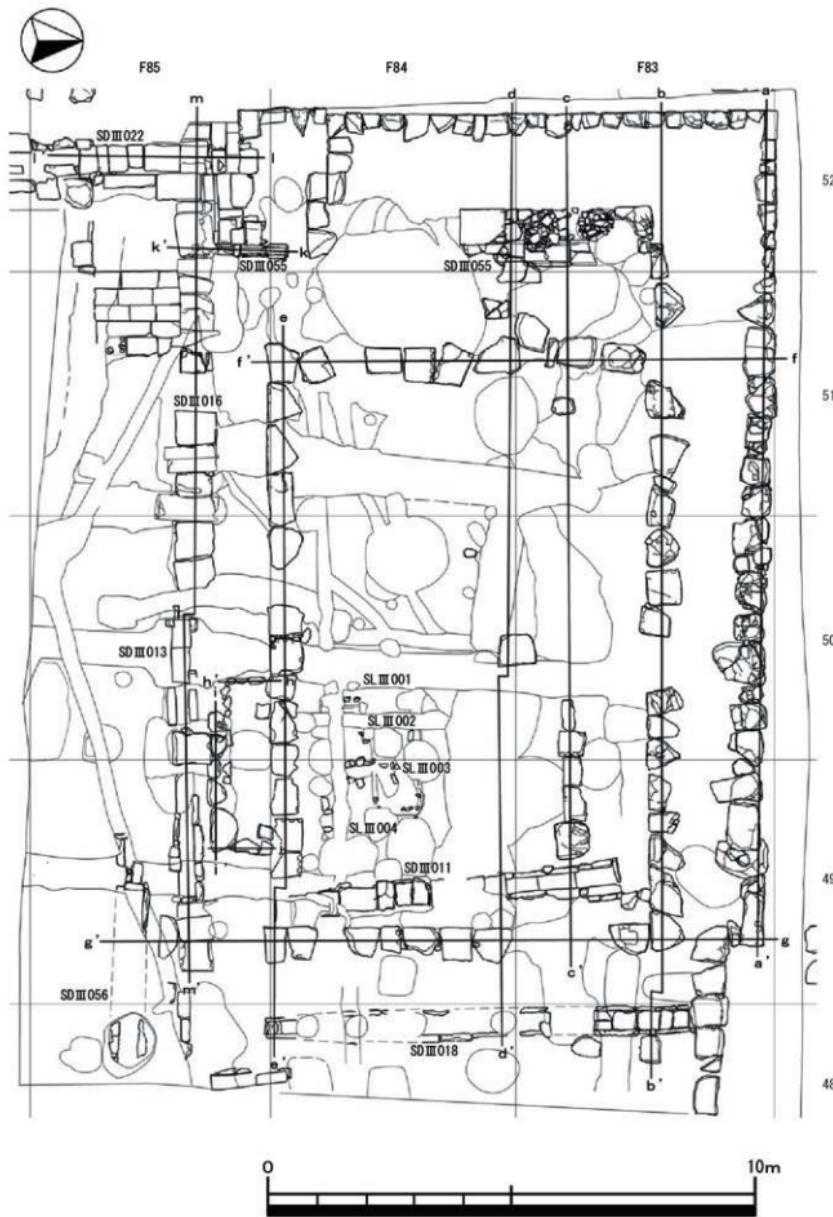
中門の石階段は、焼失前に少なくとも2度客土されており、焼土（Ⅲ層）の直下には硬化した斜面が検出された（第71図）。この硬化面が形成された客土の下には転用石材を用いた段階があり（第72図）、その

下の客土を除去した部分で近世の石階段を検出した（第73図）。近世の石階段裏には奥行1.5mの平場があり、比高約30cmの凝灰岩を上って四ツ辻へ続く通路に至ったようである。平場の北側には、大御台所へ出入りするための凝灰岩製の階段が残存していたが、階段北側の石垣改変やS D III 008等の掘り込みにより、階段が大御台所棟へ取り付く部分や、階段と平場のつなぎ部分の詳細は不明である。石階段の西側では、四ツ辻へ向かう通路に沿った石垣の本来の出隅が検出された。

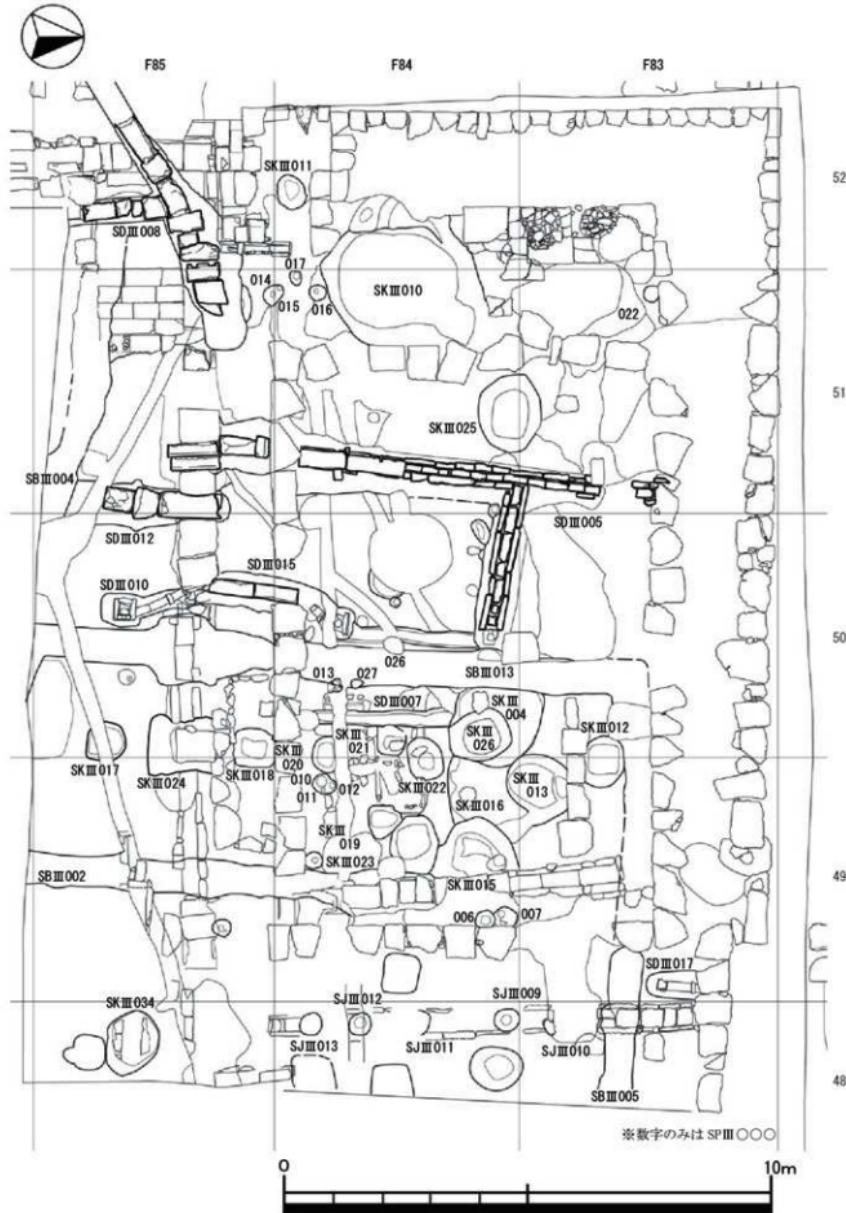
統いて御殿焼失後の遺構について述べる。S B III 013は、調査区のはば中央を南北方向に走る溝状の遺構である。幅70~80cmの溝状の掘り込みの中に、石垣や礎石から転用した安山岩や凝灰岩、ぐり石等を敷き詰めたもので、東西礎石列に沿うS B III 005とは一連の遺構と考えている。掘り込み内の石材の種類や量の違いはあるが、S B III 002・004・005も同様の遺構である。露地では、同様の溝状遺構が一周して長方形を呈し（第142図、S B II 001・002）、樋受けを有する瓦質管（同、S D II 002）等の排水施設が併存することから、建物の基礎状遺構と推測している。この調査区では、S D III 005・010・015がS B III 013沿いに樋受けを有しており、蓋石を架け替えるなどして、S D III 016に接続されていた。S K III 018・023等は内部がぐり石で埋まり、その上位から中位に礎石様の石材が検出された。一定の間隔で並ぶものがあり、独立基礎に相当するものか。S K III 024・029は、S D III 016の蓋石を架け替えるための掘り込みで、溜まった土砂などを取り除くために掘削したものと考えている。



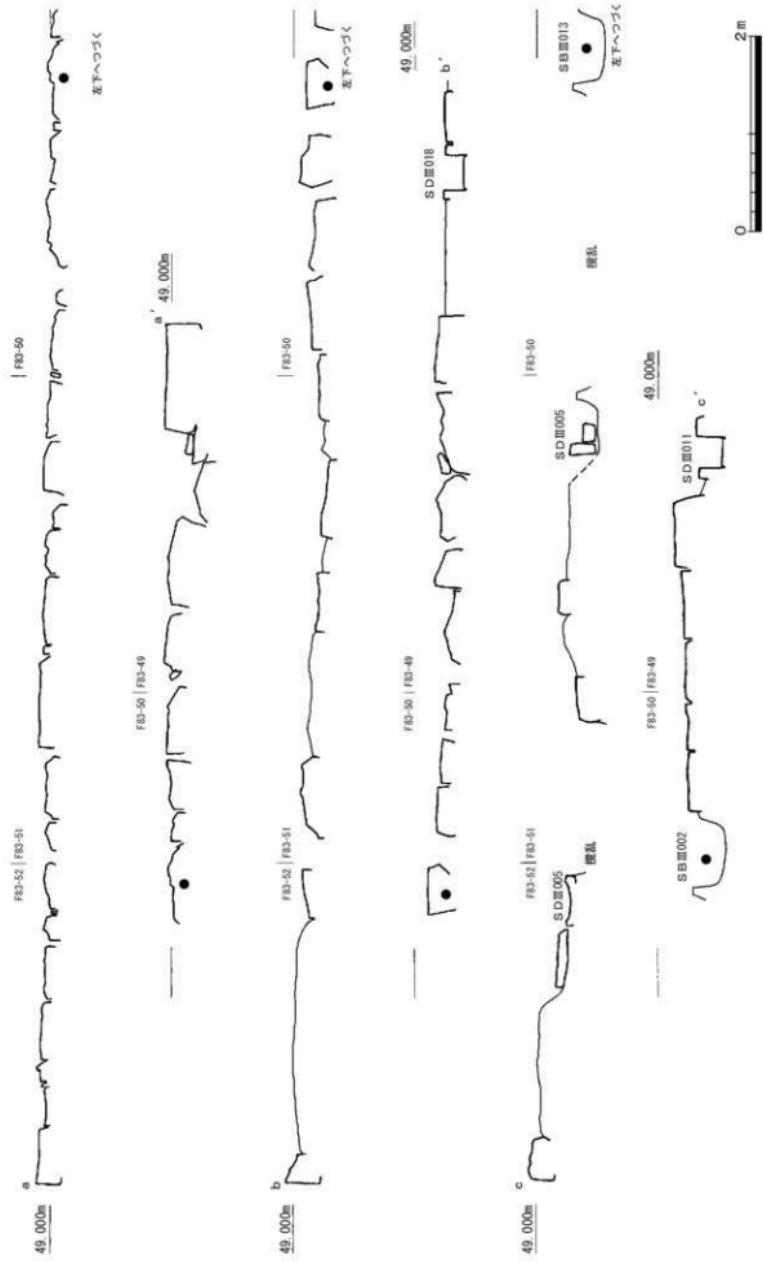
第64図 大御台所全体図



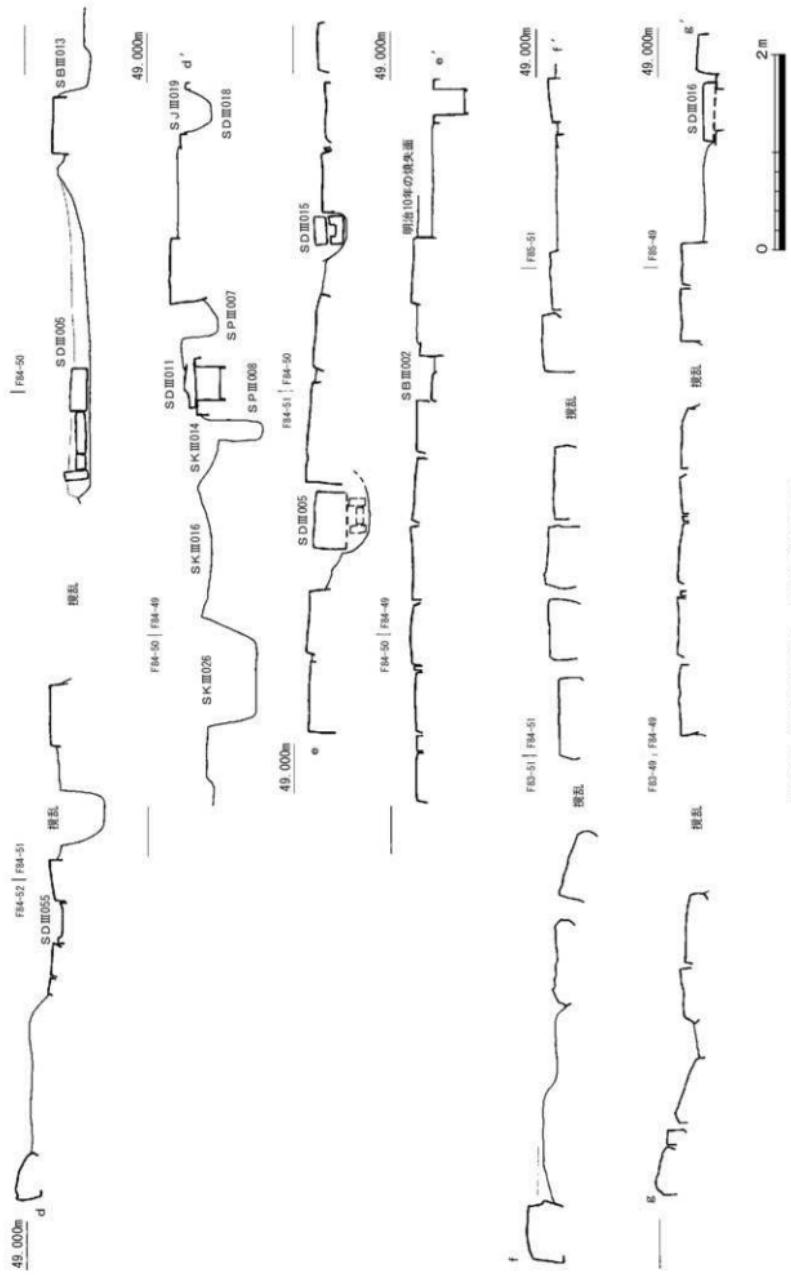
第65図 造構実測図29 大御台所平面図（近世）



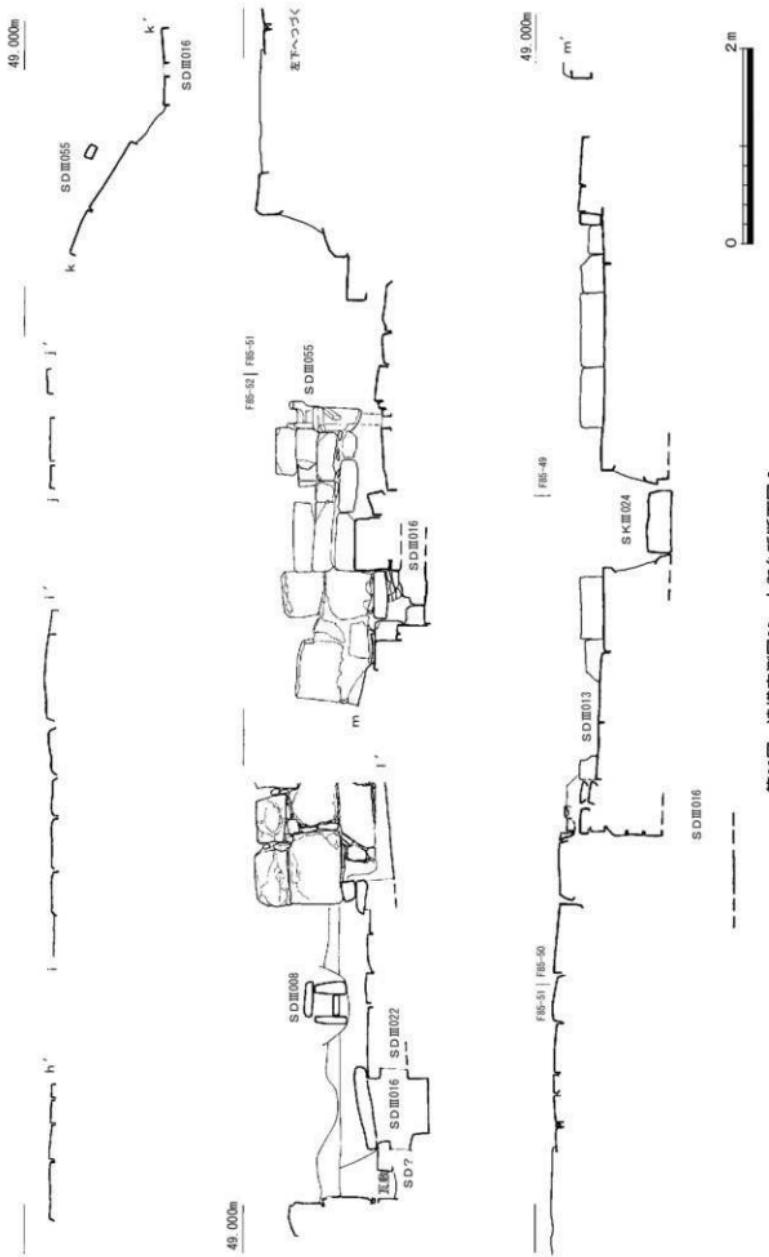
第66図 遺構実測図30 大御台所平面図（近代以降）



第67図 連構実測図31 大御台所断面図 1

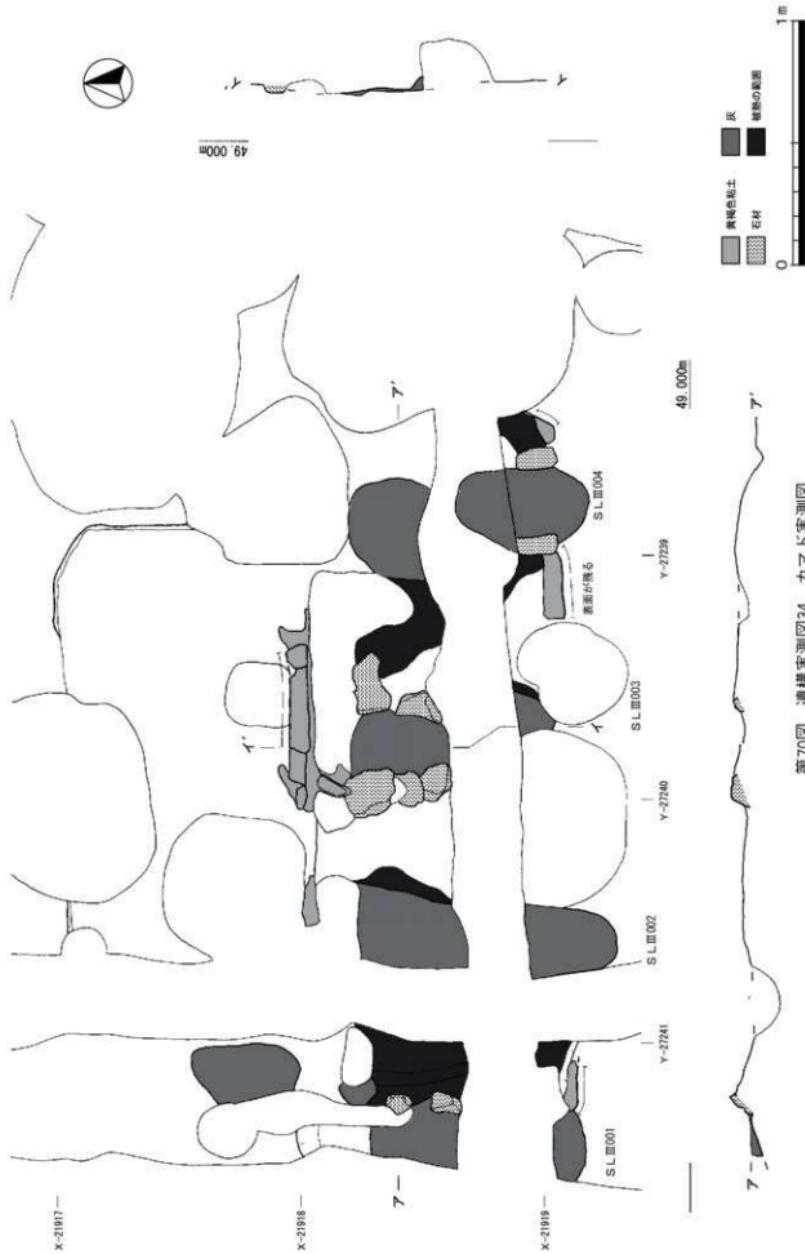


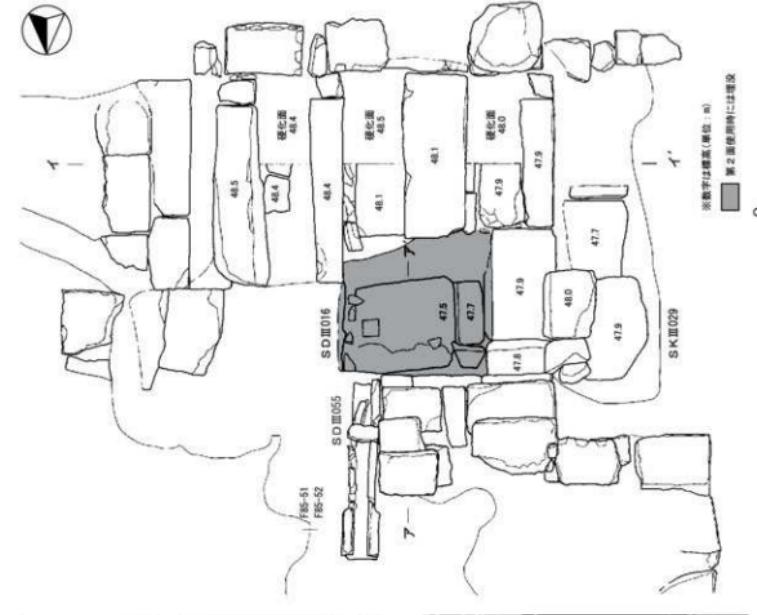
第68図 通構実測図32 大御台所断面図2



第69図 通構実測図33 大舞台所断面図 3

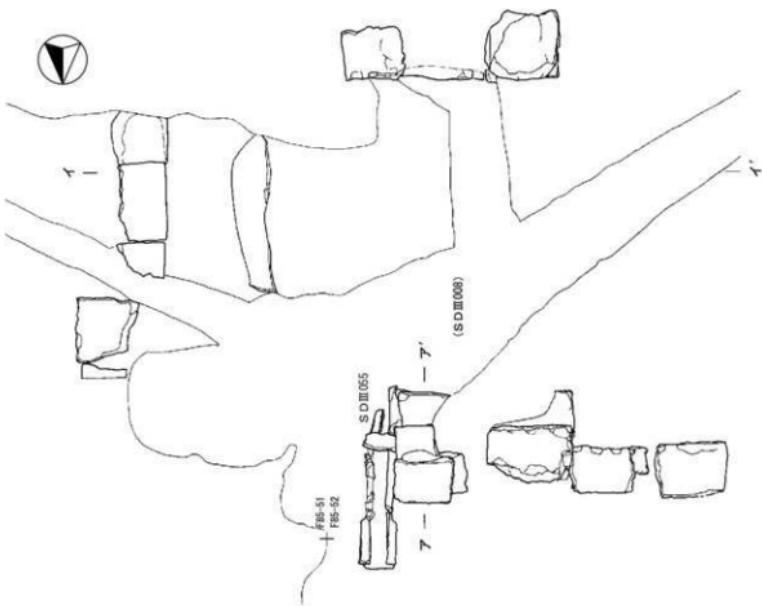
第70図 通構実測図34 カマド実測図





第71図 遺構実測図35 南西石階段第1面

第72図 遺構実測図36 南西石階段第2面



2m

49.000m

※数字は標高(海抜: m)
■ 破壊

49.000m

石垣段第1面 (明治10年の焼失面)
同第2面 (硬化面)

SK III 029

SD III 022

イ

イ'

工-工' 石垣立面図



49.000m

第73図 通構実測図37 南西石階段第3面

図面草 4-4

第1面の断面図

49.000m

(3) 御小姓部屋（第74図～第83図）

御小姓部屋とした調査区は、大御台所棟の北側に当たり、間り通路の四ツ辻北東の石垣上の部分を指す。グリッドはF74～81・49～52の範囲。「御城内御絵図」には、北から御小姓部屋廊下・小姓部屋・御小姓部屋・膳立乃間の表記がある。また、間り通路を跨ぐ大御台所の一部もこの調査区に入る。棟続きの建物は小姓部屋・御小姓部屋までで、御小姓部屋廊下は大御台所棟から北へ派生した建物であり、さらに北側の入隅までを塞ぐように細長い建物が建てられている。

遺構を北側から解説する。御小姓部屋廊下北側の建物は、桁行4間、梁間1間の南北に細長い建物である。御小姓部屋廊下と接している。東側は石垣を壁土台とし、西側は礎石が置かれていたと思われる。礎石は、北端の1石以外はS X III 056により搅乱されており、残存していない。残存礎石は、東西約40cm、南北約38cmの安山岩製の切石で、上面中央に約8cm角の方形のほぞ穴があり、わずかに焼損している。S X III 056は完掘していないが、規模や平面形態からは第二次世界大戦時の防空壕の可能性が高い。S X III 056の南には不定形の落ち込みがS K III 111あたりまで広がっている。

この建物の北から3間目には、御祈祷所に向かって西へ伸びる廊下が接続していた。S D III 038と、その両端に位置する礎石抜き痕のS K III 106とS K III 111は、この廊下に関連する遺構である。S D III 038は、砂利が混入した軟質の土が堆積しており、S K III 106とS K III 111の礎石間に埋める間石を抜いた痕跡の可能性がある。絵図では、御小姓部屋廊下との接続部に階段がみられる。御小姓部屋廊下側に下がるもので、御小姓部屋廊下より床が高かったと想定される。床の高さや廊下の高さは不明瞭だが、御祈祷所への廊下下に多門が設けられており、相当の高さがあったようである。

建物の北側外でS J III 025・026を検出した。便所と判断している。東側のS J III 025は焼土・炭化物を多量に含む土と瓦片で埋まっており、最下位に砂が堆積していた。砂の中からは多量の銭やキセルが出土している。西側のS J III 026は、瓦片や炭化物で埋まっていたが、最上層にのみ焼土が堆積していた。この状況から、S J III 026は焼失前に機能を失っていた可能性が高いと想定している。この建物の西外側からS K III 104を検出した。平面形は歪な隅丸長方形で、2段の構造である。検出面での長軸110cm、短軸95cmで、東面と南面に段を持ち、下段に東西約90cm×南北50～65cmのやや歪な長方形の板窓いの構造物を設けている。板で囲んでいるが、底面に木質などは認められず、素掘りである。板は炭化して一部崩落しており、板で囲まれた部分の本来の深さは不明瞭。蓋があったかも不明瞭で、内部からは炭化材と建物の壁を構成していたと思われる粘土・繩・漆喰等が出土した。これらは東側に集中しており、東側の建物が焼け落ちて本遺構に混入したと想定した。この粘土・繩・漆喰の下から、急須や魚骨・二枚貝が出土した。検出面からの深さは50～60cmである。

御小姓部屋廊下は、桁行5間×梁間2間の南北に長い建物で、西側に4間×半間の庇が付く。御小姓部屋廊下南側1間分は大御台所棟北端の廊下と直行し、大御台所棟に食い込む格好になっている。この建物の焼失時の地表面は削られ、Ⅲ層も残存していない。礎石の大半は抜き取られているが、抜き取り痕は窪みとして残存しており礎石の位置を復元できる。北端はS K III 107・112であり、東端は石垣を壁土台としている。南端の礎石とS K III 107の芯心距離は約9.8mで、1間は196cmである。北から5間目の地表面は礎石上面とほぼ同じ高さだが、前述したように1間目から4間目までは焼失時の地表面が礎石とともに削平されている。削平は焼失後の近現代に行われたようである。御小姓部屋廊下の北端には東西方向のS D III 036がある。凝灰岩切石で組まれたもので、東面石垣上端に排水口を持つ。底面幅は35～40cm、側石外側の幅は60cm前後である。御小姓部屋廊下建物の床下を通って東側へ排水していた。検出時、S D III 036の排水口から約150cmまでは、凝灰岩板石で蓋をしていた。これは周辺を削平した後で整地する際に設置したもので、本来のものではない。S D III 036が焼失前に開渠であったか暗渠であったかは不明。S D III 036は、S X III 058で一部破壊されているが、西へ延びて御祈祷所の手前で北へ短く折れている。御小姓部

屋廊下の西側には南北方向の S D III 037がある。S D III 036と同様の凝灰岩切石で組まれたもので、S X III 058で破壊されているが、本来は S D III 036とT字状に合流していたものと考えられる。南側は建物の3間目まで伸び、東へ短く折れている。S K III 110とした礎石抜き痕と重複するが、S D III 037の東端が崩れており前後関係は不明瞭。S D III 037の側石上端には切込みがあり、礎石を開渠上に載せる構造であったことが伺える。「御城内御絵図」では、庇部分は板張り状に描かれており、S D III 037上に建物が被っていたようである。S D III 037の中心から東面石垣の端部までは約5.1mである。庇部分の北端に「御城内御絵図」では便所の表現がある。S K III 108の北西からS J III 021を検出しており、「御城内御絵図」との位置が一致することから便所の下部構造と想定している。S J III 021は、壇の底部であり、体部は破壊されている。S K III 109の南西でもS J III 022を検出しており、庇部分に絵図にはない便所が存在したようである。底部のみの残存だが、水平ではなく西側へやや傾いた状態で出土した。底から魚の鱗と思われる有機物がわずかに出土している。北から4間目の礎石の西には東西方向の延石が2石残存しており、さらに西側に抜き取ったと思われる痕跡も認められる。この部分は大御台所棟の北端に当たり、紙絵図では下見板張りの壁である。延石上面は北側が段を持ってわずかに下がっており、壁の土台あたりと思われる。残存礎石とその東側の礎石抜き取り痕であるS K III 117の間は、土間タキがみられ、間石や延石等は無く、御小姓部屋廊下建物内は独立した礎石が配置されていた可能性が高い。御小姓部屋廊下南端は礎石が残存し、礎石と礎石の間を安山岩や凝灰岩で埋めており、礎石列となっている。南端中央の礎石上面では東西方向に伸びる炭化材を検出した。のことから、礎石列上に本土台を置き、礎石に当たる部分には本土台上に床束の柱を組み合わせていたことが想定できる。御小姓部屋廊下までは、礎石上面と地表面の高さがほぼ同じで土間状だが、これ以南は礎石上面と地表面に高低差がみられる。大御台所棟の北壁には、開御門の表現がある。この開御門から床下に出入りし、床下の土間空間を利用していたようである。なお、御小姓部屋廊下5間目の地表面からは金属製の水筒がまとまって出土している。焼土と混在しており、焼失時に地表面から離れていたものが落下した可能性が高い。また、南端の礎石列に「此所地内つき石有」と陰刻した凝灰岩を確認した。御小姓部屋廊下や大御台所棟が乗る石垣は、石垣の重複関係から東側に拡張されたことが明らかである。重複がみられる南側の入隅の延長が陰刻した石の方向であり、この石の下に旧石垣があることを示したものである可能性が高い。御小姓部屋廊下の北西隅のS X III 058は、防空壕である。基底面に横木を渡した痕跡が三筋みられる。南側にステップがあり、こちら側から出入りしていたのであろう。S X III 058の東側壁には版塗がみられた。石垣拡張時の整地層か。北から4間目の西側でS X III 059を検出した。S X III 059は不定形で、遺構の上端と下位でS J III 023・024を検出した。下位から出土したS J III 024とした壇は、据えた状態で残欠が出土したことから、S X III 058は、S J III 024を除去する際の掘り込みの可能性がある。

御小姓部屋廊下の南側は、「御城内御絵図」では東西方に連続する名称の無い小部屋をはさみ、小姓部屋・御小姓部屋と御膳立之間が東西に並ぶ。先述のように御小姓部屋廊下から南側は、土間はなく礎石上面と地表面に高低差がある。部屋境部分の礎石は礎石列となっており、東柱ではなく本土台をまわした上で床束を設けていたようである。F79・80-50・51グリッドを中心に礎石列上に削石を並べたものがみられた。地盤沈下または土台の腐食を補強したものが。小姓部屋では独立した礎石が6基みられた。いずれも小ぶりの礎石で、部屋境に合わない。また、配置も南北の正位に乗らず、並びの軸は東へ約20度傾いている。小姓部屋は、焼失時の焼土が良好に残存していた。遺物出土状況の特殊なものとして、徽章・ボタン・ホックがそれぞれ固まって出土した。焼土と混在しており、地表面にあったものではなく、地表面から離れていたものが焼失時に落下したものと判断できる。

御小姓部屋は、中央にS X III 060があり、地表面が大きく搅乱されている。このため部屋の内側の礎石の有無は不明瞭である。S X III 060は、東西約3.6m、南北約2.6m、深さ0.7mの隅丸長方形を呈する。北

西隣に階段状のステップがあり、人が出入りした遺構である。調査前の写真にはこの位置に樹木が生えており、伐採・抜根時の掘形の可能性がある。北・西・南側の部屋は礎石列となっている。西側の膳立之間との境の南北礎石列は、石がいくつか抜かれて一見独立した礎石になっている。

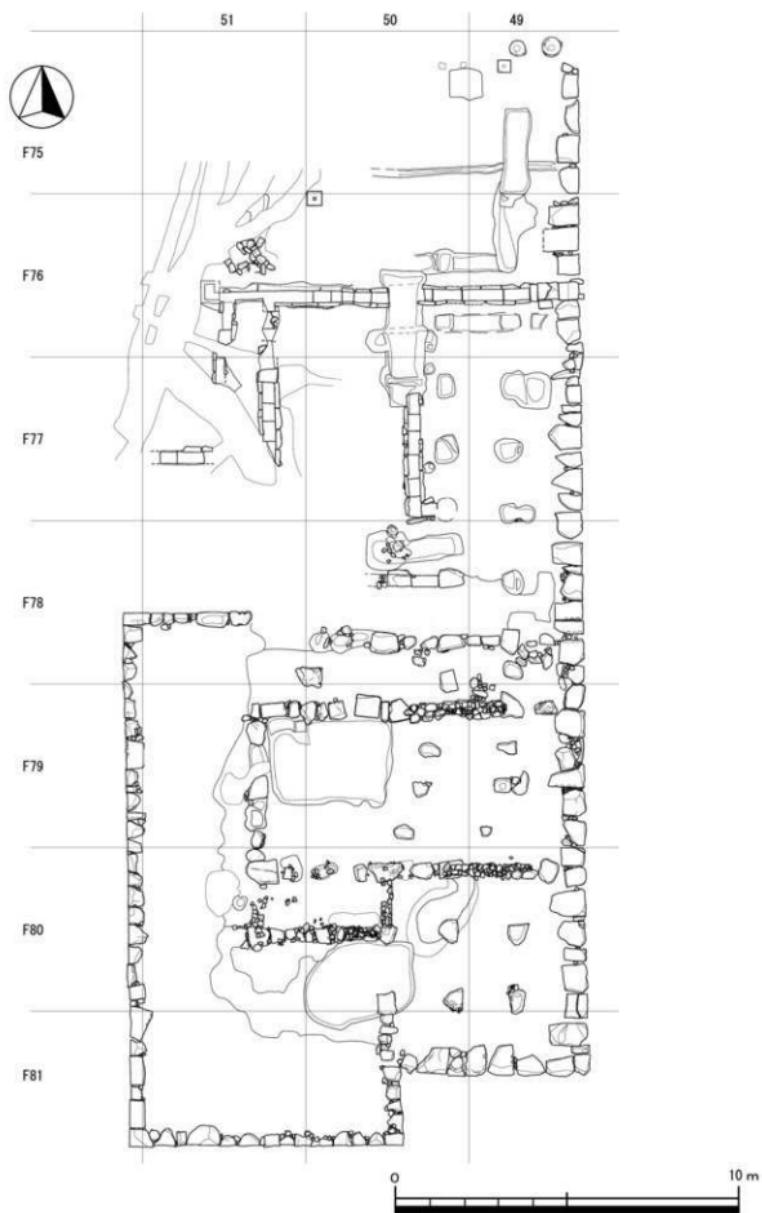
膳立之間は、大半が熊本地震で崩落した部分に当たる。御小姓部屋との境の礎石列以西は崩れて積み直されたようで、焼土や焼失時の地表面も残存していない。

小姓部屋・御小姓部屋・膳立之間の南側は名称の無いL字状の部屋である。御城内御絵図上に間仕切りの表現はないが、遺構としては、F81-50グリッドに南北の礎石列があり、東西に分かれる。東側は3間×3間の方形状である。東・南側は石垣、北・西側は礎石列で、その内側に4基の礎石が配されている。東西・南北の正位にはほぼ乗っているが、礎石間の距離はややばらつきがあり、芯心間で195~210cmである。この部屋の床下は起伏があり、F80-50付近を最高所として周囲に15~20cm程度下がる。

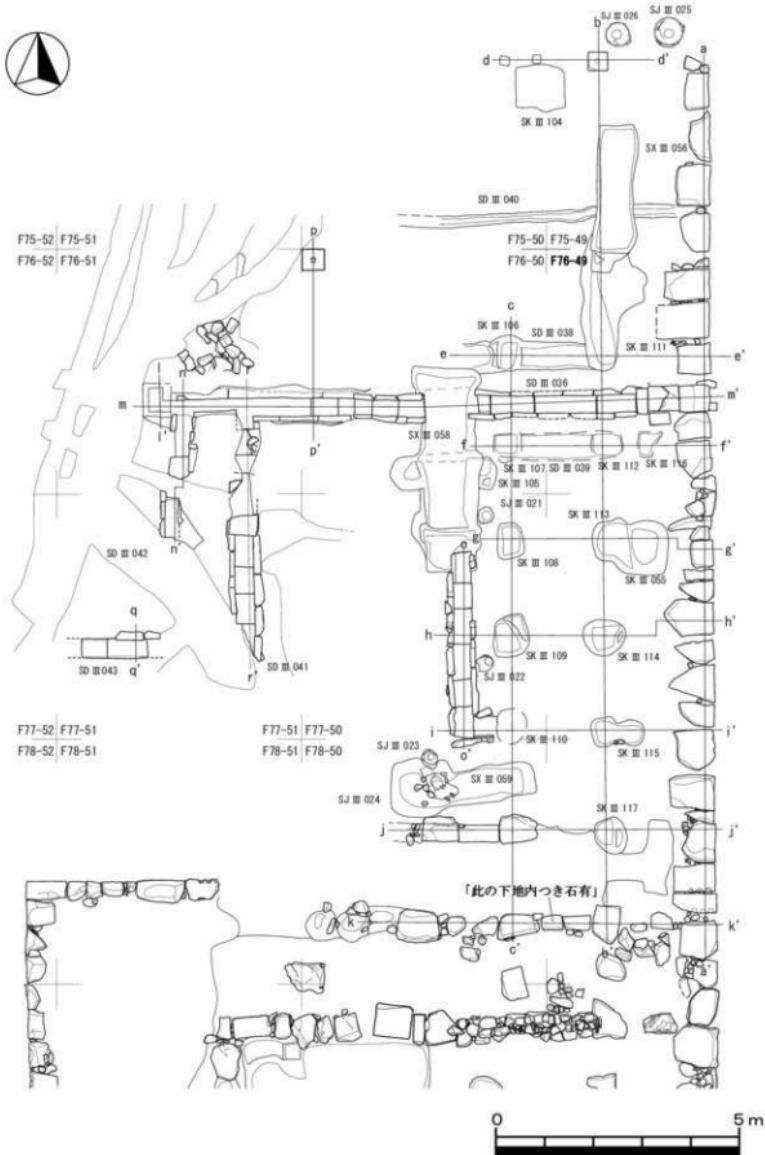
西側はS X III 057により大きく搅乱されている。また、熊本地震で崩落した部分でもあり、礎石の有無は不明瞭である。S X III 057は、調査前に「熱河・河北聖戰記念碑」と樹木があった場所で、記念碑の設置及び撤去と樹木の抜根の際に形成されたものと思われる。S X III 057南東底に安山岩築石を1石確認した。西側には焼土が充填した落込みが礎石列に沿ってみられた。礎石列上の挿石も多い。

南端石垣は鍵状に折れるが、南に突出した部分が古く、入隅から東側が拡張部分である。熊本地震では旧石垣部分が崩落したようで、拡張部分は焼失後から現在に至るまで大きな改変は無いようである。ただし拡張部分の石垣は焼損が激しく、上面の発掘調査終了後に解体修理が行われている。その際に拡張部分で埋没していた旧石垣を検出した（第83図）。検出した範囲は、高さ・幅ともに2.5m程である。使用された石は、長辺が1m近い大きなもので、割石だが自然面が残るものも存在する。形状は不安定なものが多い。検出した範囲が狭いため、横目地の通りは不明瞭だが、間詰石は大きさがまちまちで隙間も大きい。拡張の際に、旧石垣の天端石を意図的に外しており、拡張した入隅から北側の旧石垣の天端石は地表面には現れない。S X III 057底面で確認した安山岩築石は旧石垣の一部である可能性が高い。想定される旧石垣天端石の延長と、「此下地内つき石有」と陰刻した凝灰岩は2~3mほどずれている。

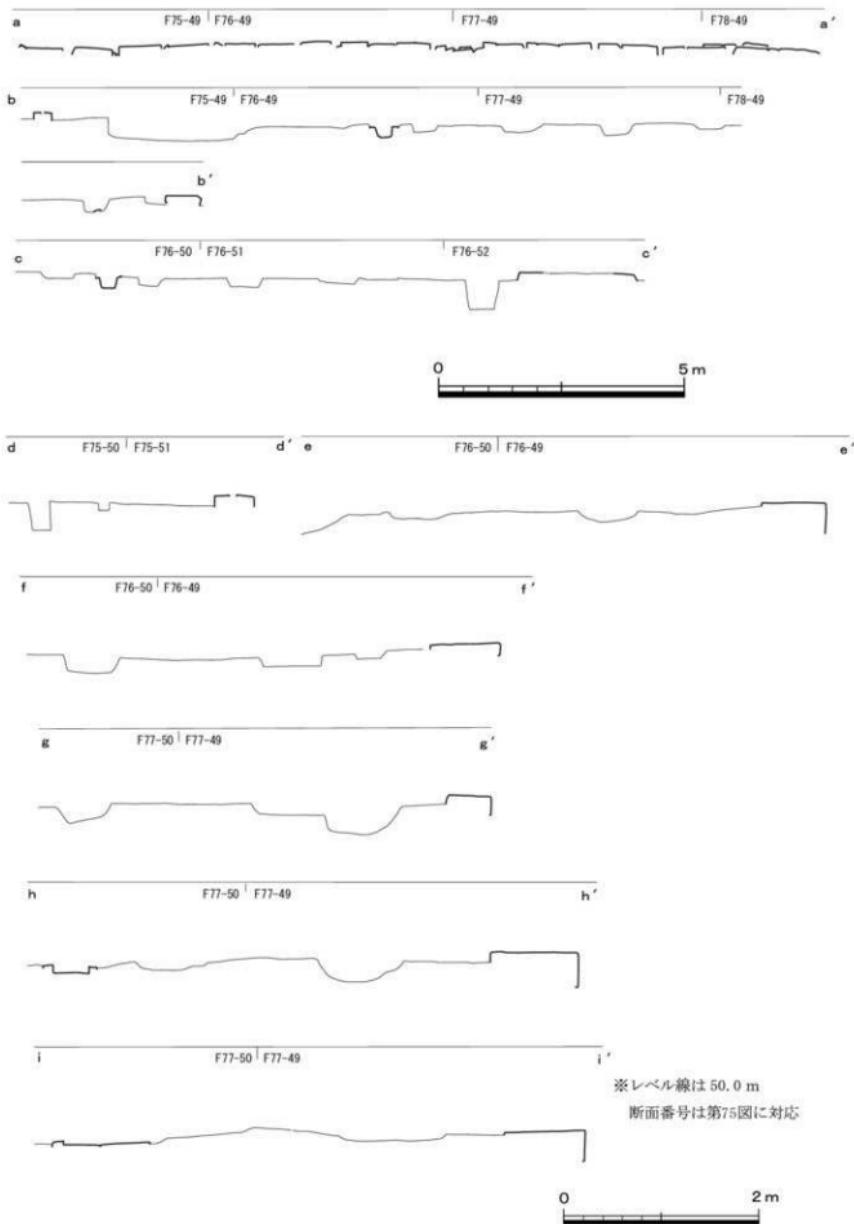
熊本地震で崩落した石垣は、小姓部屋の西側一帯で、西面と南面については間り通路面の1~3石を残して完全に崩れたようである。西面では、積み直した際に残存部と積み直し部分にずれが生じている。積み直しの石は、小ぶりで方形なものに替えられている。また、積み直しの際にグリ石を石垣上面まで充填し、土を貼り直していないため、石垣上面の観察では崩落部分がグリ石の露出部分として観察できる。その範囲は、最大で石垣から4mの部分にまで達している。



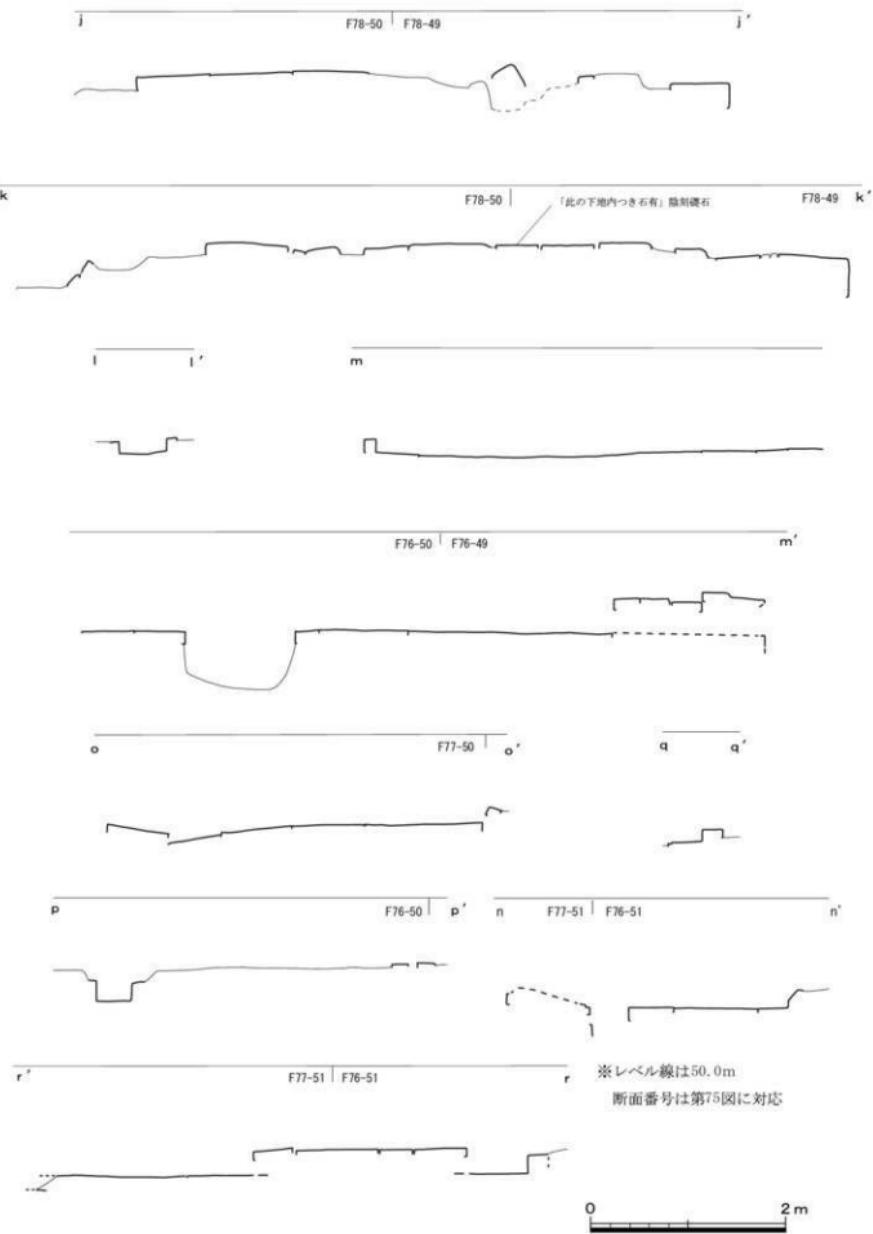
第74図 御小姓部屋全体図



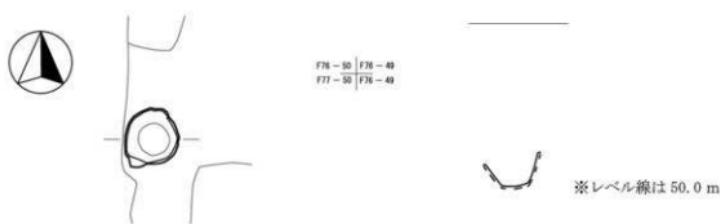
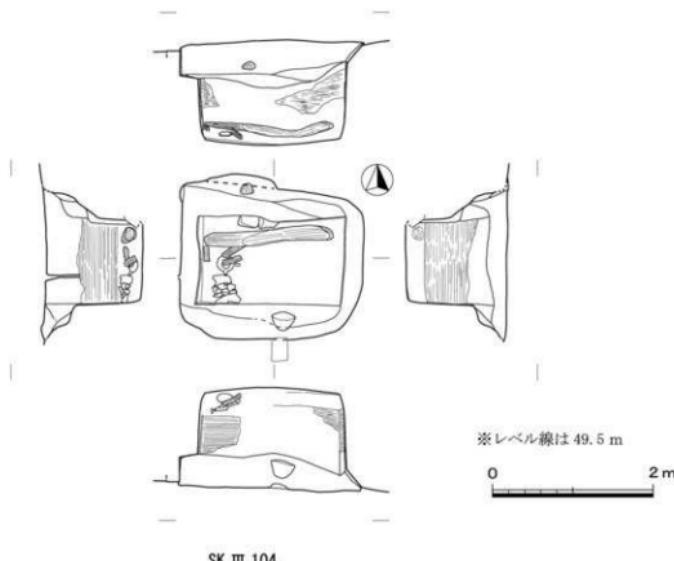
第75図 遺構実測図38 御小姓部屋平面図 1



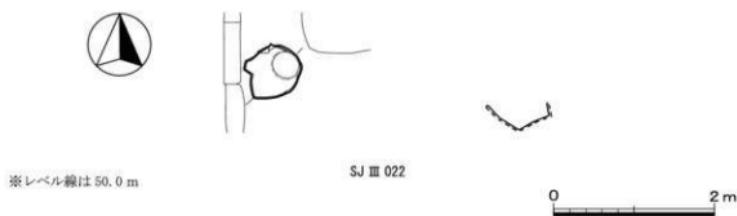
第76図 遺構実測図39 御小姓部屋断面図1



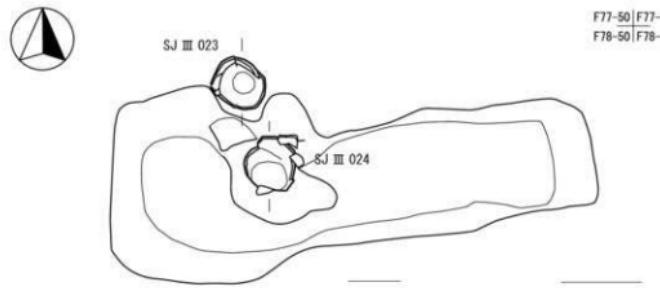
第77図 遺構実測図40 御小姓部屋断面図2



SJ III 021



第78図 遺構実測図41 SK III 104 SJ III 021・022



* レベル線は 50.0 m



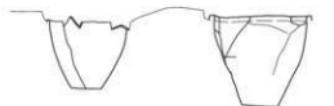
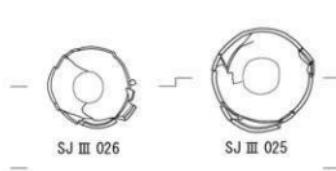
SJ III 023 断面図



SJ III 024 断面図



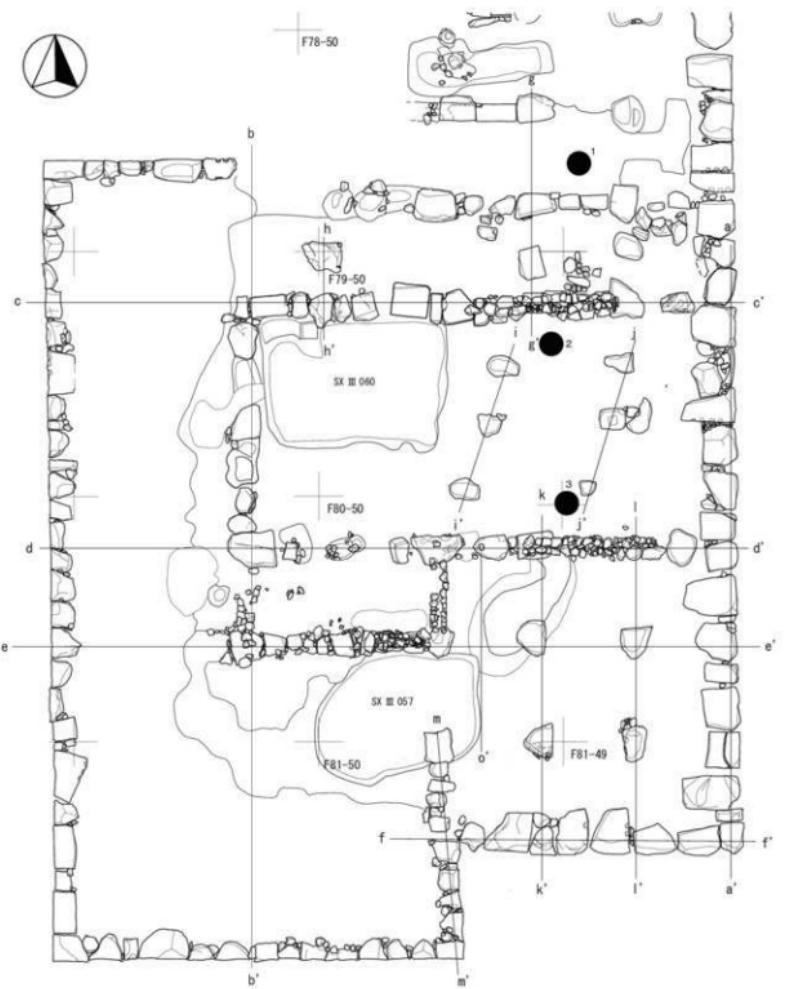
F75-50/F74-49
F75-50/F75-49



* レベル線は 49.5 m



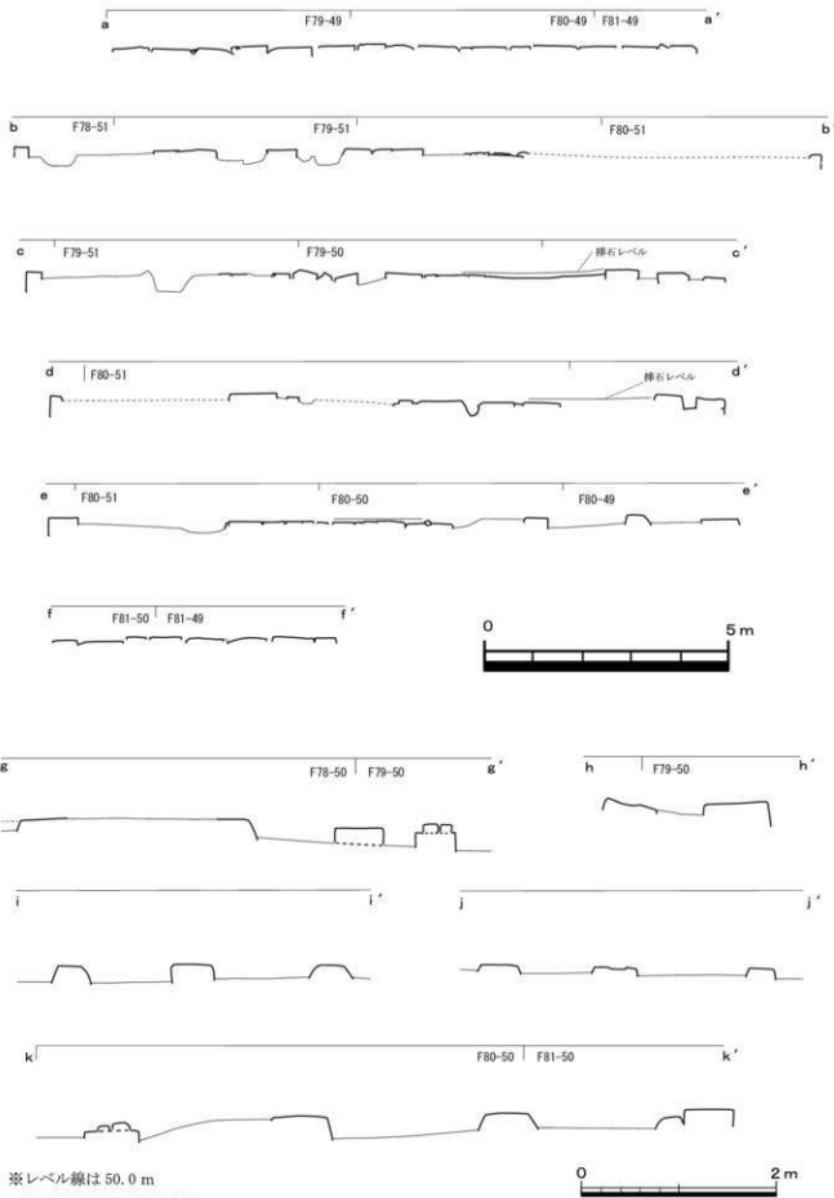
第79図 造構実測図42 SJ III 023~026



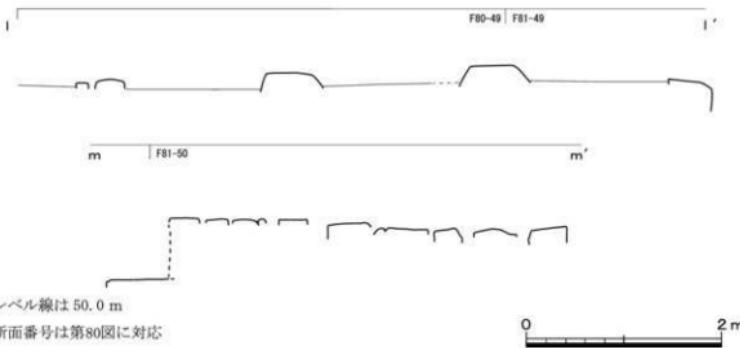
- 1 水筒
2 銃剣
3 徽章・ボタン・フック



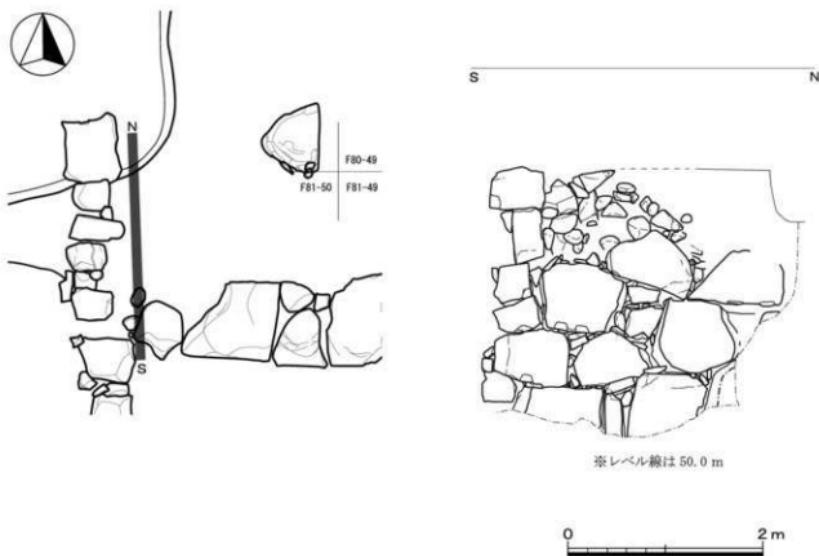
第80図 造構実測図43 御小姓部屋平面図2



第81図 遺構実測図44 御小姓部屋断面図 3



第82図 遺構実測図45 御小姓部屋断面図 4



第83図 遺構実測図46 旧石垣立面図

(4) 間り通路（第84図～133図）

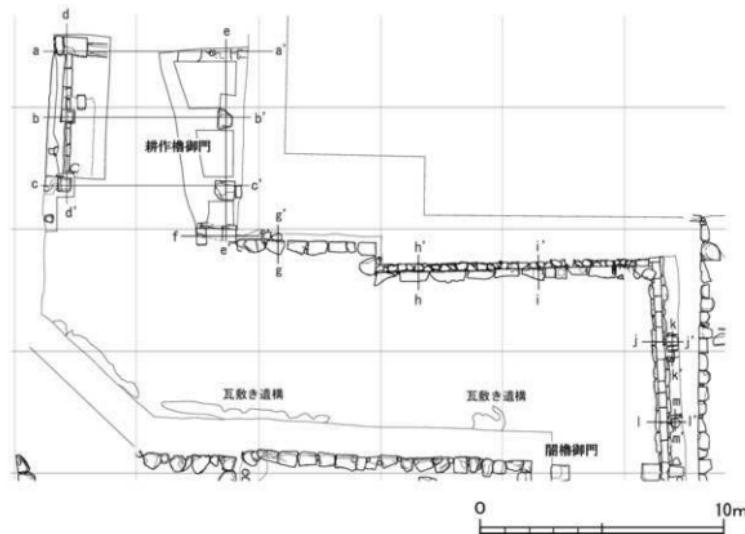
耕作櫓御門・間櫓御門間

平成11年度のトレンチ調査で耕作櫓御門の西側礎石を検出していたが、本丸御殿周辺の外構工事に伴い、再度、周辺造構の残存状況を確認した。

間櫓御門の北側では、吉野之間西面の石垣に沿って幅30cm、深さ20cmの溝が検出された。溝は、間櫓御門北側対面の石垣に沿って続いているが、耕作櫓御門下の出隅では北へ折れず、直進して暗渠となっていた。開渠部分の石材は、大広間跡西面では凝灰岩、入隅から西では安山岩、暗渠の入口では凝灰岩が使用されていた。「御城内御絵図」では、耕作櫓御門と間櫓御門の間に警固所があり、入隅から西で溝の側石となっている安山岩は、警固所の礎石も兼ねていたと推測される。暗渠の石組みには板状に加工した凝灰岩が使用されており、寸法は蓋石の幅が80cm、厚さが10cm、側石の幅が20cm、内法の幅・高さは60cmであった。耕作櫓御門下では通路の中央やや西寄りを通り、門北西の石垣出隅の位置で通路を東西に横断する暗渠に合流していた。

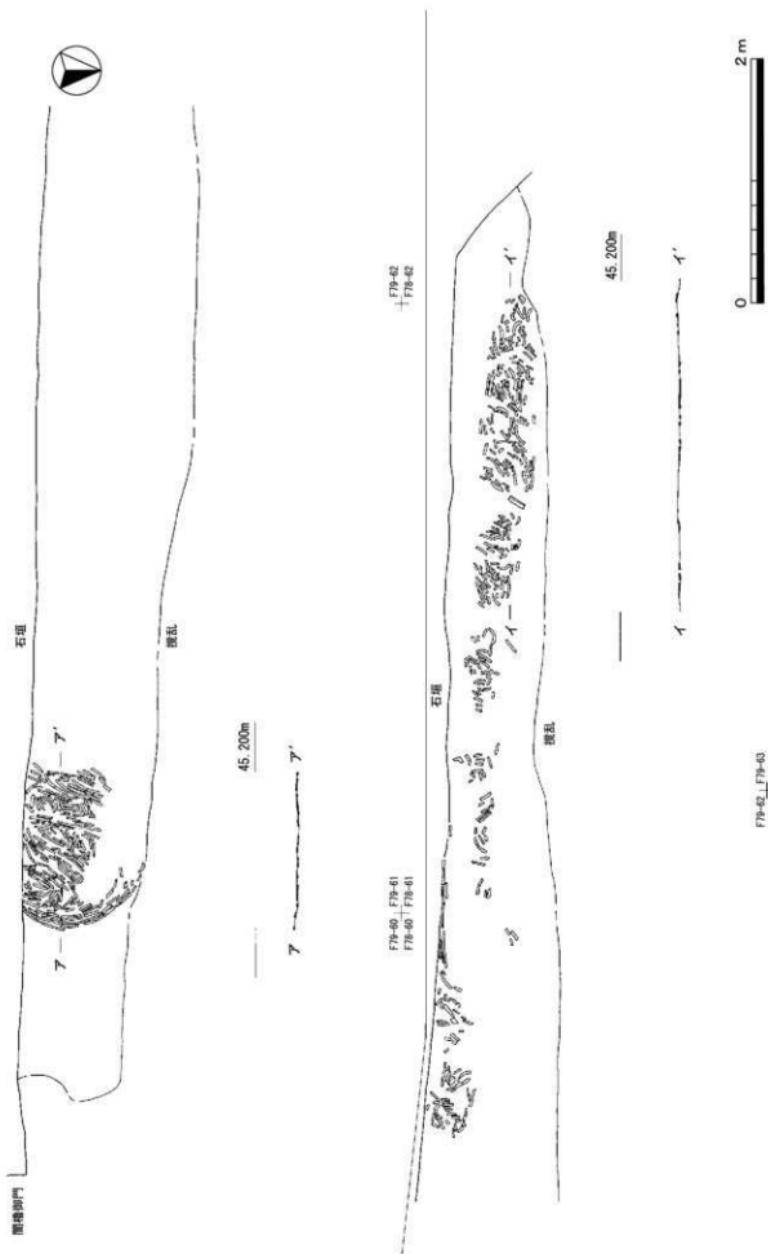
耕作櫓御門下の通路面に開渠はみられなかったが、蘇鉄之間から猿楽之間、火打之間下では、御殿の雨落ちを受けるための瓦敷き造構が検出されている。瓦を、小口を上にして立てて埋め込んだもので、蘇鉄之間下では幅広く、東西長1.2m、奥行1mの範囲に平瓦が敷かれていた。間櫓御門の唐破風や屋根からの雨水が集中する部分で、本来は石垣の裾から半円形に広がっていたものと思われる。

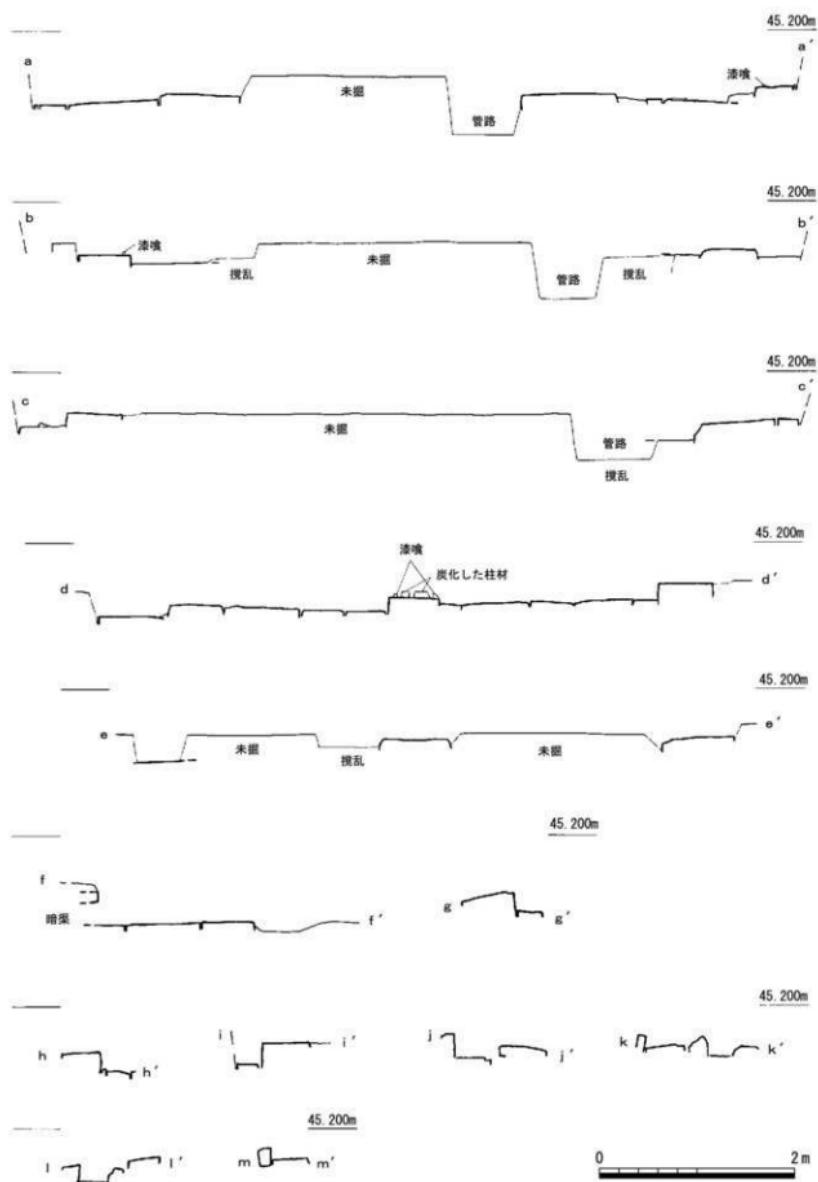
耕作櫓御門跡では、新たに東側の石垣裾の礎石を確認した。「御城内御絵図」と比較して、調査区北端で検出された礎石の内、東から3石目は鏡柱の礎石に相当すると思われるが、別の工事の際に据え直され、一旦原位置を離れた可能性がある。礎石上には炭化材や根巻の漆喰等が残っており、鏡石列の西端で70×50cm、控柱列で40cm角の柱痕跡が認められた。出土した炭化材の分析により、柱の一部にスギ、貫にアカガシが使用されていた事がわかっている。



第84図 耕作櫓御門・間櫓御門間平面図

第85図 通構実測図47 瓦敷き通構





第86図 遺構実測図48 耕作樋御門・間樋御門間断面図

闇り通路

大広間棟と大御台所棟の地下にある平面十字型の地下通路である。大広間棟北西側に北へ開口する闇檜御門から入り、御玄関や四ツ辻と呼ばれる十字路から本丸御殿各所に向かう連絡路である。全面に渡って大量の瓦・焼土・炭化材が出土した。いずれも上部構造である大広間・大御台所等を構成した材と、通路の構造材である。1階床梁や地階柱などの大型の部材はみられない。多量の炭化材が残存していることから大型の部材が完全燃焼したとは考えにくい。また、生焼けの部材が相当数みられたことから、大型の部材が腐敗したとも考えにくいため、焼失後に燃え残った大型の部材は片付けられたのであろう。

闇檜御門から入る経路で解説する。闇檜御門は東西方向の門で、北側に開口する。幅は約5.5m。「御城内御絵図」や「紙絵図」では東側に脇戸が設けられている。近・現代の配管や配線が通路中央を通っており、旧地表面が大きくえぐられていたが、門櫛は残存していた。東側の鏡柱礎石は、地表に露出した部分が東西・南北ともに約70cmで、方形に近い平面形である。西側の鏡柱礎石は、東西75cm、南北75cmの台形の平面形で、西によった部分に約40cm四方の隅丸方形の例り込みがみられる。東壁沿いには脇柱礎石がある。東西約55cm、南北約40cmのやや重な長方形の平面形である。鏡柱礎石と脇柱礎石の芯心間は1m。両者の間には、凝灰岩製の溝が設けられている。控柱礎石は、東西いずれも壁沿いに置かれている。東側の控柱礎石は、東西70cm、南北110cmの台形の平面形である。南北長40cmの面取りをした方形の炭化材が残存しており、通路に面下部分に漆喰による根巻きが施されている。西側の控柱礎石は、東西約80cm、南北約100cmの長方形の平面形を呈する。上面には約50cm四方の例り込みがみられる。炭化材は残存していない。鏡柱と控柱との距離は、礎石の芯心で約300cmであり、礎石の間は、川原石を1列に並べている。「御城内御絵図」では西壁沿いに床構造があるように表現されている。圓扇乃間から闇檜御門西側に降りる階段が存在していたが、階段を受けるような構造の遺構は地表面では明確ではなく、焼失した木構造であったと考えられる。

闇檜御門を入り、南に約4.2mで通路は直角に東へ曲がる。西端から四ツ辻開御門まで約35m、幅約7mの東西通路で、北面石垣裾から北へ1間の部分に大広間の1階床梁を支える地階柱が並んでいた。調査結果と「御城内御絵図」から、柱は四ツ辻手前の玄関まで9本存在したと想定される。報告の便宜上、西から數えて報告する。闇り通路のコーナー部分は、配管・配線の掘削等で大きく搅乱され、西端の地階柱礎石は残存しているが、西から2番目の礎石は搅乱されて失われていた。西端の地階柱礎石と闇檜御門西の控柱礎石の間も川原石が並べられている。先述の西壁に沿った床構造の土台か。地階柱の並びには、1間毎に大き目の地階柱礎石と、小ぶりの安山岩礎石が交互に置かれ、さらにその間に川原石を並べている。地階柱礎石上には炭化材、漆喰根巻きがみられる。根巻きの通路側には、小石をちりばめた漆喰化粧が施されている。出土した地階柱礎石上の炭化した柱材だが、いずれも平面形は四隅を面取りした方形で、1辺が35~50cmほどである。地階柱本体の根腐れに補充された材と想定しているが、地階柱本体の規模も同程度であろう。地階柱と南壁の間は、上框状の構造であったようで、炭化した框材が柱と柱をつなぐように出土し、部分的に框の下の蹴込み板や地覆状の材がみられた。小ぶりの安山岩礎石上には東柱が残存するものがあり、框を支え、蹴込み板をつないでいたものと想定している。框材には、根太と思われる直交して南北方向に向く材が付属するものもある。

「御城内御絵図」では西から4石目付近まで警固所となっている。5石目から8石目までは、御玄間に上がるための式台で、上框からさらに北側に突出した框が設けられていた。炭化材の出土状況としては、5石目から8石目手前まで、上がり框から30cm北に厚さ3~5cmほどの板材が東西方向に連なり、この板材に根太と思われる細長い板材が釘で固定され、上がり框とをつないでいた。この上に張っていたと思われる板は、わずかに残存している程度であったが、「御城内御絵図」に表現された式台の構造が良好に残存していた。

8石目から四ツ辻開御門までは御玄闇という中地階の構造物が設けられていた。藩主が大広間に入る際には、式台から階段で中地階の御玄闇に上がり、さらに階段で鶴乃間と式台之間に入っていた。この中地階の構造物を支えるために、8石目から東は、南北面石垣沿いにも礎石が置かれ、柱が建てられていた。地階柱の並びは、西と同様に大ぶりの礎石と小ぶりな礎石が交互に配置されている。小ぶりの礎石上にも約30cm角の柱痕跡が認められるものがあった。南面石垣沿いには1間毎に礎石が置かれ、約20cm角の柱が建てられている。直径35cmほどの丸い柱も使用されている。北面石垣沿いの礎石は比較的大ぶりだが、柱痕跡は認められなかった。なお、南面石垣沿いに景色石が置かれていたとされる「肥藩図巻」がある。南面石垣西端の礎石付近には多量の礎が集中した部分がみられた。これはⅢ層の上面から確認できたもので、焼失後に除去した景色石の窪みを礎で埋めた可能性がある。礎の直下には、通路面とほぼ同じ高さの安山岩が据えられており、これが景色石の土台石であった可能性もある。

この間櫓御門から四ツ辻開御門までの通路からは大量の瓦や炭化材が出土している。地階柱の礎石や周囲の石垣も焼損が激しい。多層構造物の大広間部材が、穴藏状の地下通路に落下し火力が激しかったためであろう。石垣沿いには安山岩が細かく割れた片石が多量に堆積していた。大広間から落下した構造材は、炭化材・瓦・金具であり、さらに大広間に置かれていたものも混在していた。炭化材の中には、踏み台と思われるものや建具の一部と思われるものを確認している。四ツ辻開御門西側で出土した大量のボタンやフックは、轄之間・式台之間・御玄闇付近に置かれていたものが落下したのであろう。臺印（第365図81）はF81-58グリッドから出土した。裁縫セット（第370図）はF81-56グリッドから出土した。

落下したものではなく、通路に置かれていたと判断できるものもある。北側石垣裾に整然と並べられていた炭化材である。地表面に接しており、落下した焼土・炭化材などに覆わされていた。40~50cm程度の長さである。雨水を避けて通路内に置かれていたものと思われ、燃料用の薪の可能性がある。

御玄闇の東は十字状の交差点であり、四ツ辻と呼ばれている。「御城内御絵図」によれば、間り通路から四ツ辻への入口には四ツ辻開御門があり、門に入った正面には南北2間、東西1間の番所が置かれていた。四ツ辻の北側には四ツ辻脇北開御門、南側へ上の石階段の途中に四ツ辻脇南開御門があり、東側は番所を避けて開かれた通路の先に一ノ開御門が設けられていた。

四ツ辻開御門は、南北の門で、絵図では西に開く。鏡柱の芯心間が約4mで、2間の門であったと想定できる。土台の木材が炭化して一部残存し、本体と思われる格子状に組んだ炭化材が門の南西側から出土して入る。南側には西に開く脇門がみられた。脇門本体の炭化材が残存しており、鏡柱に挿した財金物と、それと組合されたが財金物が格子状の炭化材に挿さっていた。四ツ辻のほぼ全面が焼失前に客土で覆われていたため、門の礎石も埋没していた。

四ツ辻から南に折れると大御台所・長之間・月見御台所へ向かうが、その手前に四ツ辻脇南開御門がある。「御城内御絵図」によると、四ツ辻脇南開御門は西寄りに門がつき、門の北側と南側に階段を伴う。土層の状況からみて、門の周辺から南側の堀重門前の露地にかけての一帯は、焼失前に客土されて焼失時に階段は埋没していたようである。検出した礎石は鏡柱の列の3石と控柱の列の2石で、門の西側では鏡石の表面に30cm×35cmの柱当たり、鏡石の間には土台のものと思われる幅20cmの圧痕が認められた。客土に埋没した状態で焼失した控柱・門扉の炭化材や圧痕も残存しており、控柱は30cm角、扉の幅は1.2mと推測している。「御城内御絵図」では門の北側に短い階段が描かれていたが、実際には6段の石階段が検出されている。石材は、最上段では礎石の北側に凝灰岩、踏面に当たる部分には安山岩が使用され、2段目から下はすべて凝灰岩であった。最下段から約10cm下で近世の地表面を確認している。門の南側では被熱の痕跡のある斜面が検出された。門跡に設定したトレーンチでは礎石の周囲に平坦面が検出されたが、斜面の下方は焼失前に削平されており、階段の痕跡は確認出来なかった。

四ツ辻から北に折れると、四ツ辻脇北開御門がある。四ツ辻脇北開御門の南側には2段の石階段が確認

されたが、下段は埋没していた。埋没以前の状態を確認するため、四ツ辻の焼失面にトレントを設定したところ、10~15cm掘り下げた部分で幕末の地表面が確認され、四ツ辻の北東隅には番所跡と思われる南北2間、東西1間分の礎石が検出された。礎石には平坦面を有する安山岩の割石等が使用されており、柱間間隔は6尺5寸(約2m)であった。

「御城内御絵図」によると、四ツ辻脇北開御門は中央東寄りに大扉があり、西側に1間の脇戸がつく。大扉の東側には通路と仕切られた空間があり、室内の表現がなされている。門の礎石はすべて残っており、鏡柱の柱間間隔が芯心で約3mである。大扉西側の礎石上に残存していた鏡柱の炭化材は正面幅が30cmで、四ツ辻側に厚さ3cmの板材が添っていた。西端の礎石上では、四ツ辻側の根元を漆喰で固定された状態で16cm角の敷居状の炭化材が出土し、東端の礎石上には柱材の一部が残存していた。大扉の西側扉の下棧が戸当りの石に当たった状態で残っており、焼失時には扉が開かれた状態であったことがわかる。扉の炭化材は全長125cmで、12cm角の縦枠の間に幅10cm、厚さ3cmの横棧と縱棧が12cmの間隔で並んでおり、四ツ辻側のみ横板が貼られていた。戸当りは、門の西側では鏡柱の礎石のほぼ真北に位置していたが、東側は門の鏡柱に付く間仕切りを避けて通路寄りに据えられていた。大扉東側の間仕切りの通りと東側の石垣裾では、約1mおきに礎石と柱の炭化材が検出され、礎石の周囲には土壁の痕跡が認められた。門から約4m北側で検出された礎石は特に大きく、直径約40cmの柱の炭化材が残存していた。御殿床下の1階床梁を支えたものと思われる。

四ツ辻の通路面は北開御門から北へ約6mの部分まではほぼ平坦で、そこから天守台前の平場と同じ高さに上るまでに3か所の階段が検出されている。最初の石階段は凝灰岩製で、四ツ辻の通路から6段(高低差約1.2m)上った場所に奥行き約5.5mの平場がある。正面に石垣があり、通路はここで左右に分かれてT字路となる。平場から東側は、同じく凝灰岩製の石階段を6段(高低差約1.2m)上り再び平場となる。この平場の奥行きは約2.9mで、平場の西寄りに安山岩の石列が検出された。石列は幅が23cmで、上面に戸当り様の段差がみられ、敷居に相当すると思われる。「御城内御絵図」では一番目多門が描かれていたが、礎石はみられず、後世に据え替えられた可能性がある。この平場から凝灰岩製の石階段を6段上ると、御小姓部屋廊下の西へ出る。

T字路の西端には九曜之間下門の礎石、その奥に南側の中露地、北側の天守側の露地へ上の石階段が検出された。門の礎石には正面幅10cm、奥行6cm、深さ4cmセンチの長方形のはぞ穴があり、その間隔は約2.5mである。炭化した部材が残っており、柱材は正面幅が42cmで、奥行33cm、敷居材の幅は12cmであった。両端に八双金物が装着された材は幅110cm、厚さ10cmで、門扉の一部と思われる。門の留め栓金物も出土した。西側の階段はいずれも安山岩製で、仕上げも丁寧である。この門から西側は、九曜之間の地下構造として、大広間の項で解説している。

四ツ辻より北側の排水は、一番目多門側から北側の石垣裾を通り、間り通路の西側石垣に沿って四ツ辻脇北開御門の脇戸下を潜って走る溝によって処理されていた。溝の大部分は板状に加工した凝灰岩を組み合わせたものだが、石階段では路面の端がU字形に削り抜かれていた。北開御門の南側では地表面下に埋設された暗渠になっており、四ツ辻を斜めに横断して一ノ開御門へ向かい、一ノ開御門から外は開渠になっていた。北開御門では、大扉の東側でも同様に暗渠が検出された。

四ツ辻から東側の一ノ開御門に向かって間り通路は続く。大御台所の地下部分である。四ツ辻から一ノ開御門まで約16mで、幅は4.5~6m前後である。焼失後、盛土をして整地を行い、四ツ辻から一ノ開御門に向かって下がる勾配が付けられていた。盛土内に配管や配線を入れるために、盛土の薄い東側では配管・配線の掘形が焼失面を大きくえぐっている。「御城内御絵図」にも地階柱の表現は無く、南北の石垣沿いに礎石が数石みられる程度である。

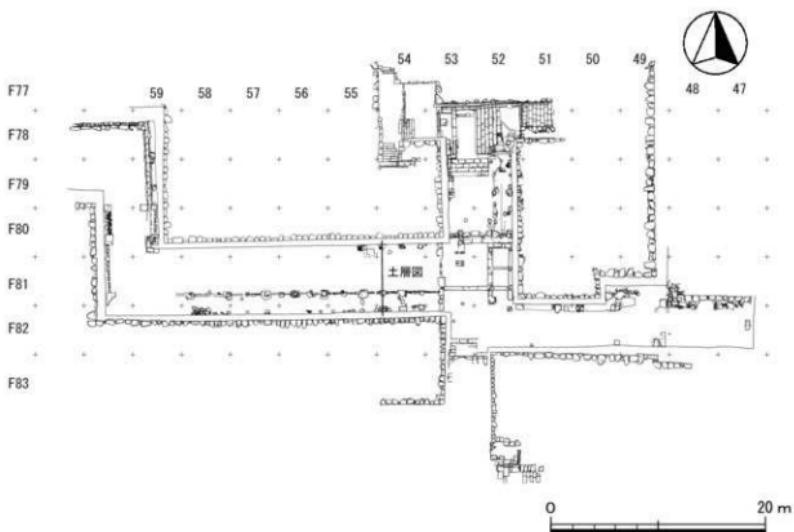
一ノ開御門の礎石は、南側の脇柱礎石以外は全て抜かれていた。控柱礎石は北側の鏡柱に対応するもの

と、南側脇柱に対応するものを確認した。一ノ開御門の外は、階段と思われる石列が一部残存していた。門の外に段差があったようである。焼失前に、この階段をなくすような土盛が行われている。

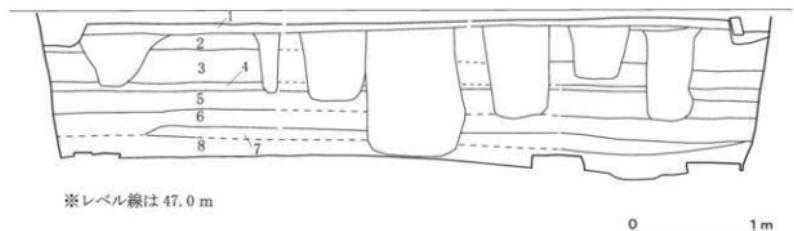
一ノ開御門の外は、北へ折れて二ノ櫓御門へ向かう。二ノ櫓御門へは階段で降りるが、現在の階段は過去の整備で通過の便をよくするために設けられたものである。勾配も緩く蹴上げ高も低い。上2段は江戸期のものが露出しているが、それ以下の江戸期の階段は埋没している。闇り通路北側から誘導されてきた雨水は、東側へ向かって北側の石垣沿いを暗渠で通され、一ノ開御門外へ排出される。現在、階段西脇に凝灰岩板石製の側溝があるが、これは現代の整備によるものである。本来の側溝は安山岩と凝灰岩を組んだもので、現代の溝の下に埋没している。一ノ開御門の北脇から排出された闇り通路からの雨水は、この排水路を通って下の郭へ誘導されている。

闇り通路東側からも炭化材が多く出土した。特筆すべきは、大御台所から落下したイロリを構成していると想定される凝灰岩製の板石である。組合わせることでイロリを構成していたと思われ、長辺の側石とみられる割り込みのある板石や、底石とみられる板石が出土した。これらの石材の一部は、復元整備の際に再現されたイロリに使用されている。炭化材と混在する形で出土し、周辺に大量の砂がみられた。灰も含むが、目立つ程の量ではない。また、イロリ石材が集中した付近に安山岩がみられた。石垣の築石と思われ、建物の焼失崩落時に石垣の一部が落下した可能性を想定している。また、通路上の南北の壁際で円形の炭化材が並べられた状態で出土した。蓋と簾状のものは確認できたが、全体像は不明瞭。本来は円筒型で樽状のものであったと想定している。直径は35~40cm程度である。

四ツ辻付近の土層の観察から、焼失後は焼土層(Ⅲ層)の上に客土し、階段などの段差をなくしてスロープ化したことがわかる。スロープ化は大きく3時期に分かれる。最初は、Ⅲ層の上の大量の瓦や安山岩・凝灰岩の礫を入れ、階段の段差をなくしている。特にF79・80-52付近が顕著であった。ここで一旦硬化面が形成されている。続いてこの硬化面を埋めてスロープのかさ上げが行われ、四ツ辻から大銀杏前に直進できるようにしている。このかさ上げ時には、F78・79-52・53グリッドを中心で大量の焼土が持ち込まれている。このスロープの上に碎石を主体とした土砂を入れ、表面にアスファルトを張ったものが発掘調査前の状況である。各スロープの構築時期は判然としないが、最初のスロープは焼失後間もない時期、次のスロープは、搬入できるほどに城内に焼土が露出していた頃であろう。SDⅢ047・048は、2段階目のスロープ層を切り込んで設けられており、2段階目の排水施設と想定している。SDⅢ047は、安山岩と凝灰岩の板石を組合せて暗渠としたもので、四ツ辻を北西から南東に横切っている。天守前広場側の雨水を誘導したものか。SDⅢ048はSDⅢ047と同様の構造で、四ツ辻を南から北へ横切ってSDⅢ047と合流している。SDⅢ047はさらに分岐している。大御台所・長之間・月見御台所側の雨水を誘導したものであろう。合流部にはマス状の構造もみられ、地上に露出していた可能性もある。図化はしていないが最初のスロープ化時にもSDⅢ044・045が設けられていた。



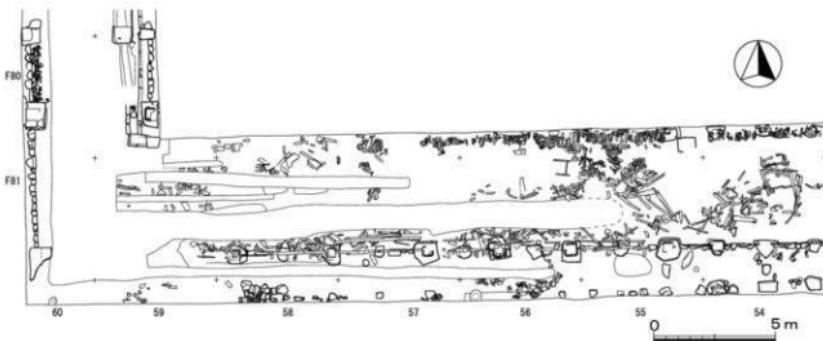
第87図 間り通路全体図



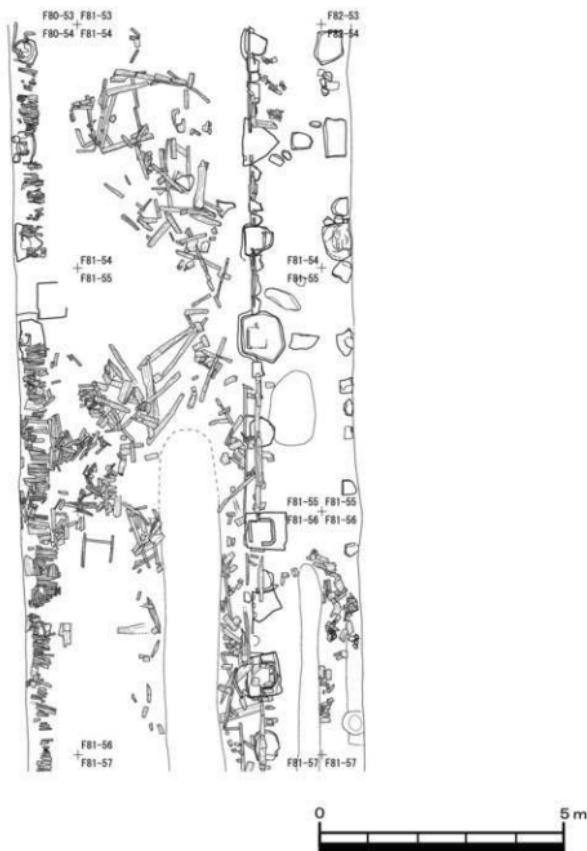
※レベル線は 47.0 m

- | | |
|---|--|
| 1 ~ 4 は I 層。 | 6. 暗褐色土 10YR4/2
整地層。砂質土。分層可。 |
| 1. 現代の表土 | 7. 暗褐色土 10YR3/2
整地層。瓦を多く含む。焼土を含むが 8 ほど多くはない。 |
| 山砂整地層 | 8. 焼土層 7.5YR3/4
III層。明治 10 年の焼土層。瓦や金具などの遺物・炭化材・漆喰を多く含む。 |
| 2. 暗褐色土 10YR3/2
整地層。数層に分層可。瓦を多く含む。混入物多い。 | |
| 3. 暗灰色土 N3/0
整地層。粉碎された凝灰岩を主体とする。 | |
| 4. 灰オリーブ色土 2.5GY3/1
砂利層。旧表土か。 | |
| 5. 暗褐色土 10YR3/2
整地層。粘質土。瓦を多く含む。 | |

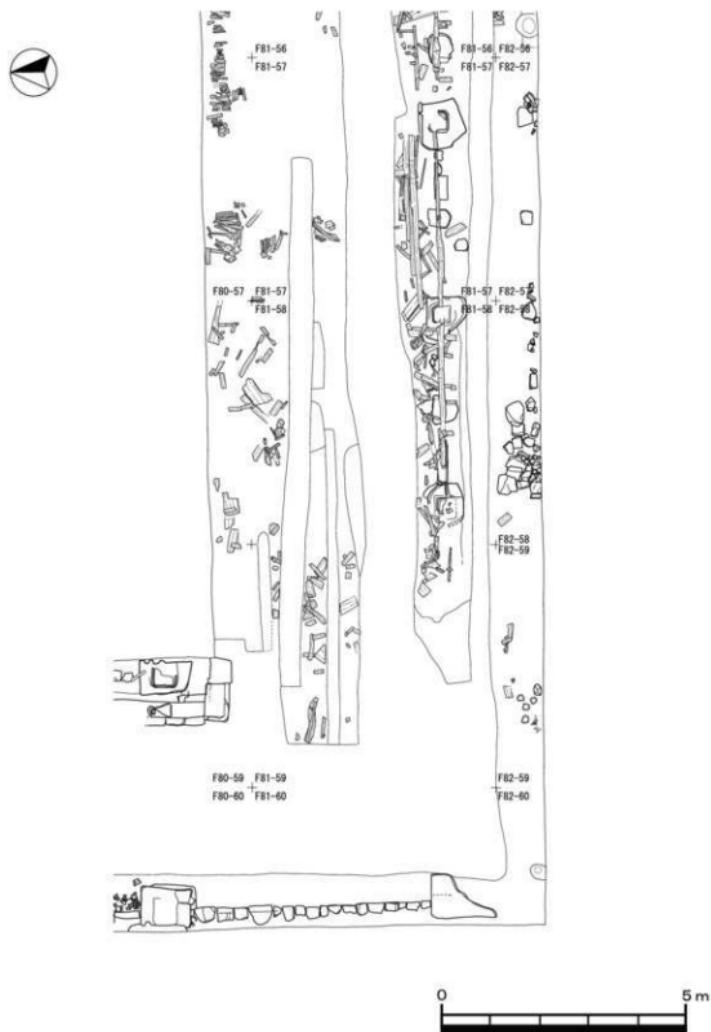
第88図 遺構実測図49 間り通路土層図



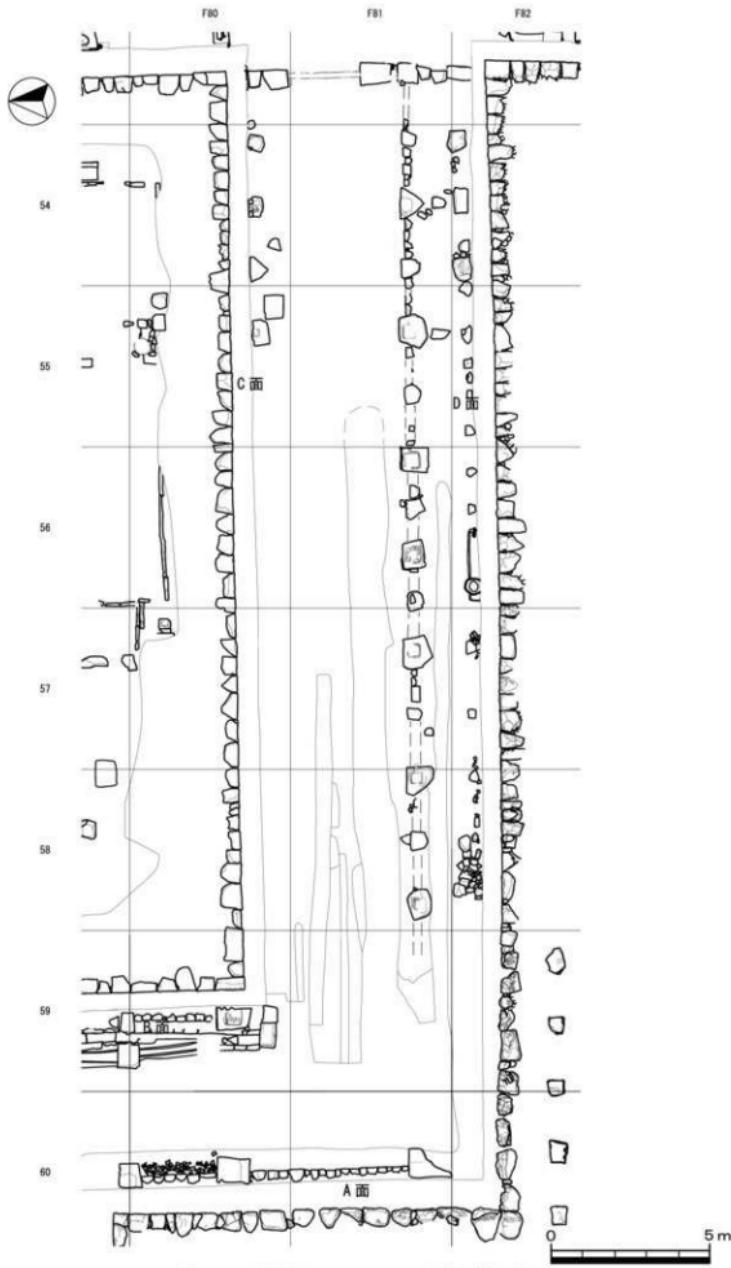
第89図 遺構実測図50 間り通路（西側）平面図



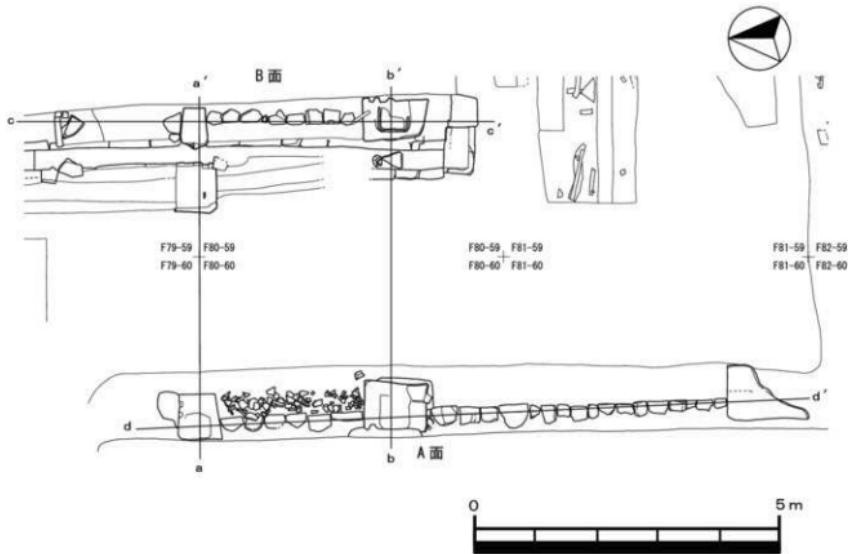
第90図 遺構実測図51 炭化材出土状況 1



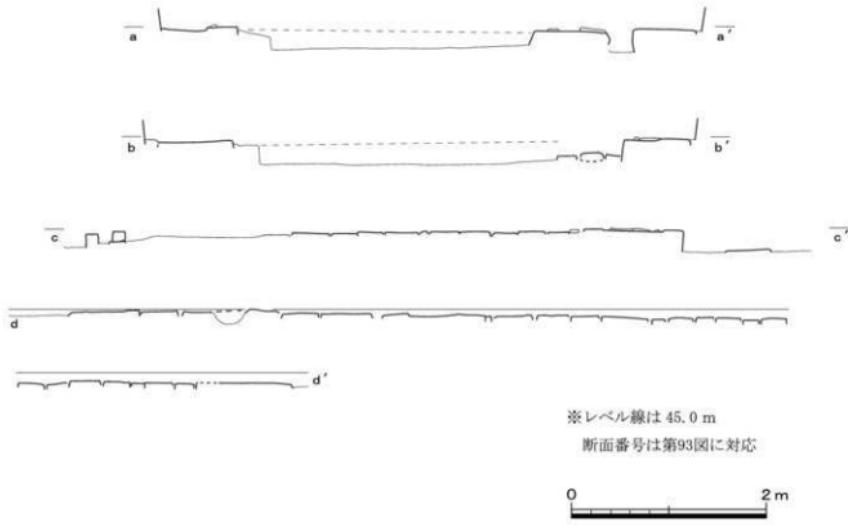
第91図 遺構実測図52 炭化材出土状況 2



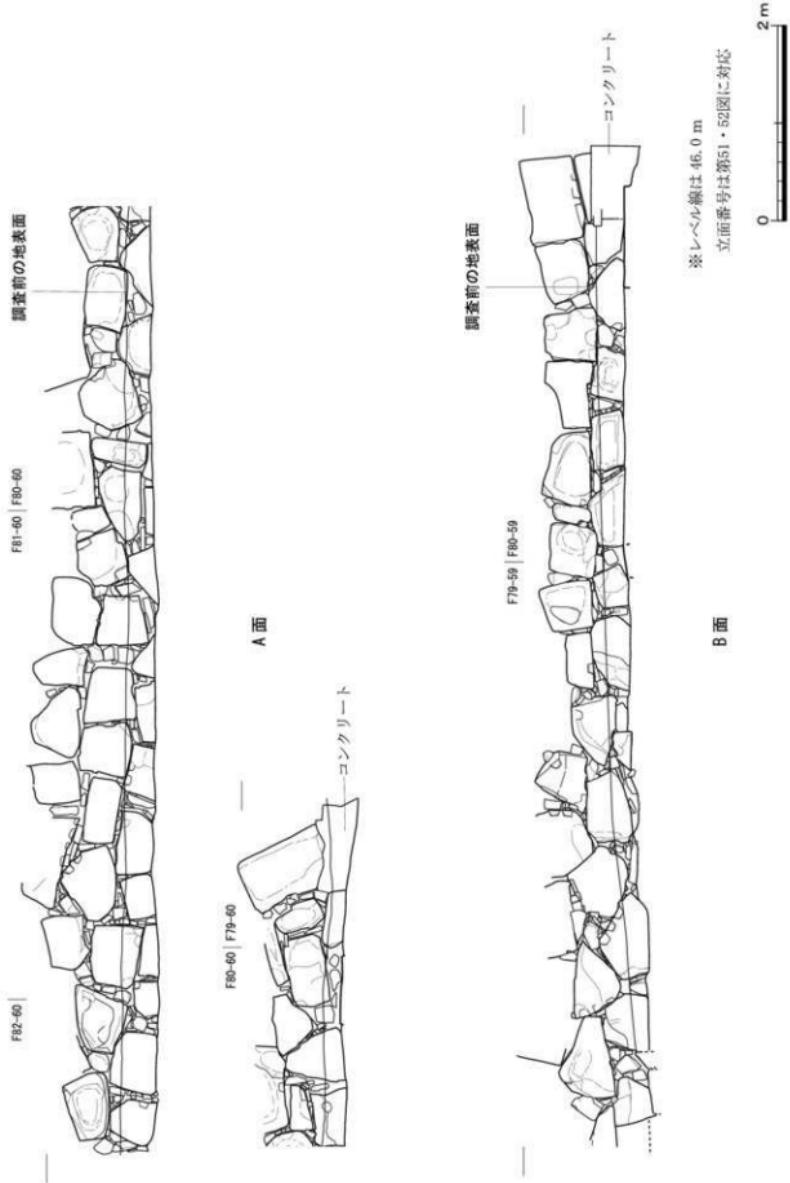
第92図 遺構実測図53 間り通路礎石検出状況1



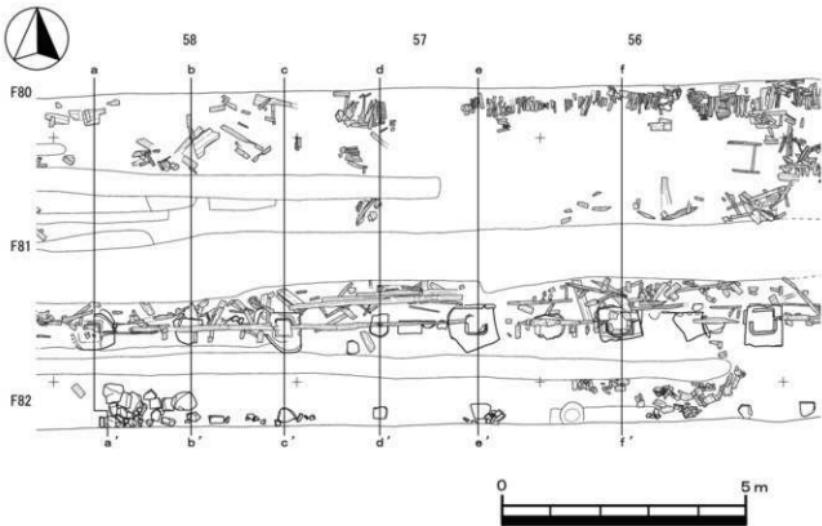
第93図 遺構実測図54 間櫓御門周辺



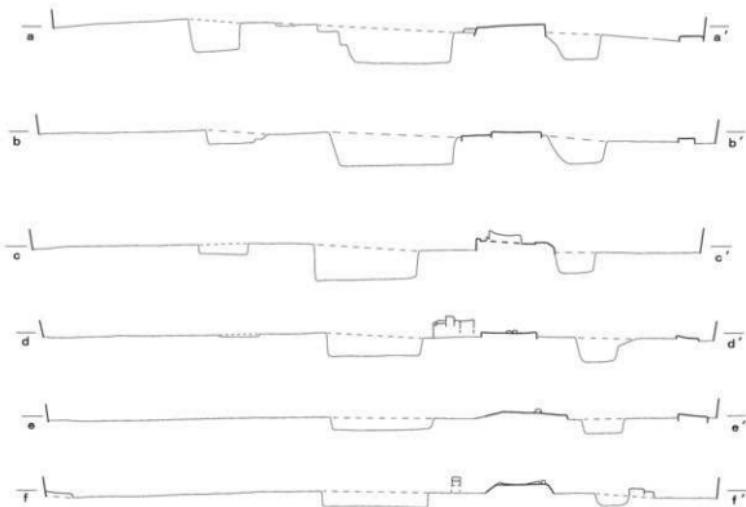
第94図 遺構実測図55 間櫓御門断面図 1



第95図 遺構実測図56 間り通路立面図1



第96図 遺構実測図57 間り通路平面図1

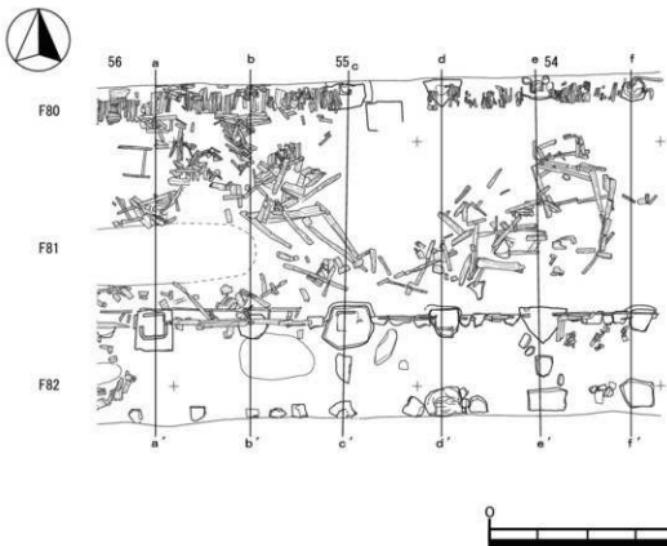


※レベル線は 45.0 m

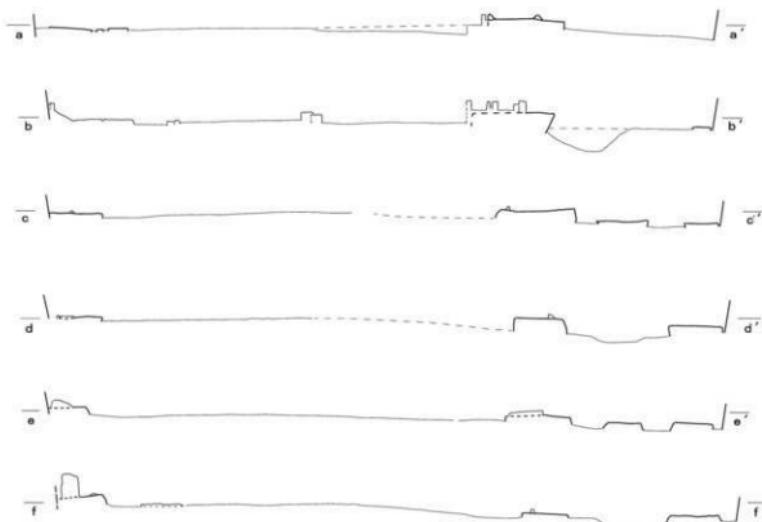
断面番号は第96図に対応



第97図 遺構実測図58 間り通路断面図2



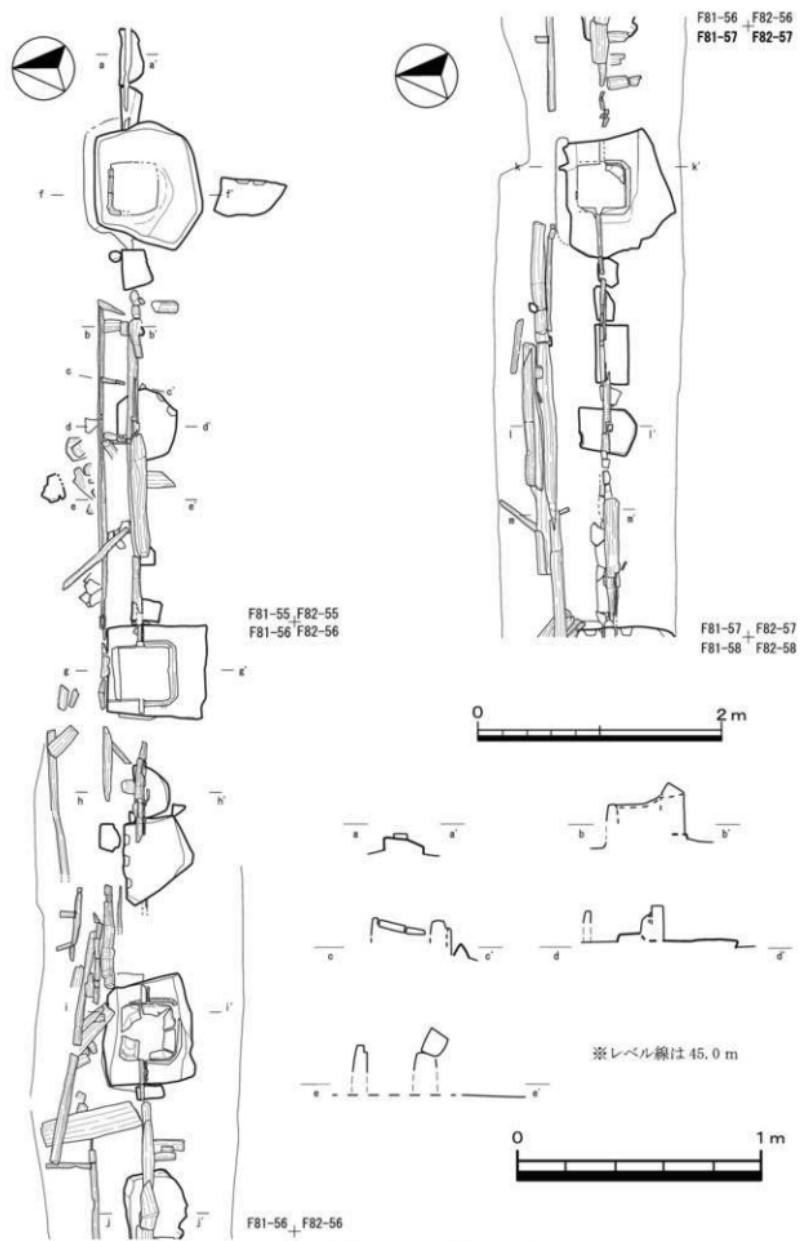
第98図 遺構実測図59 間り通路平面図2



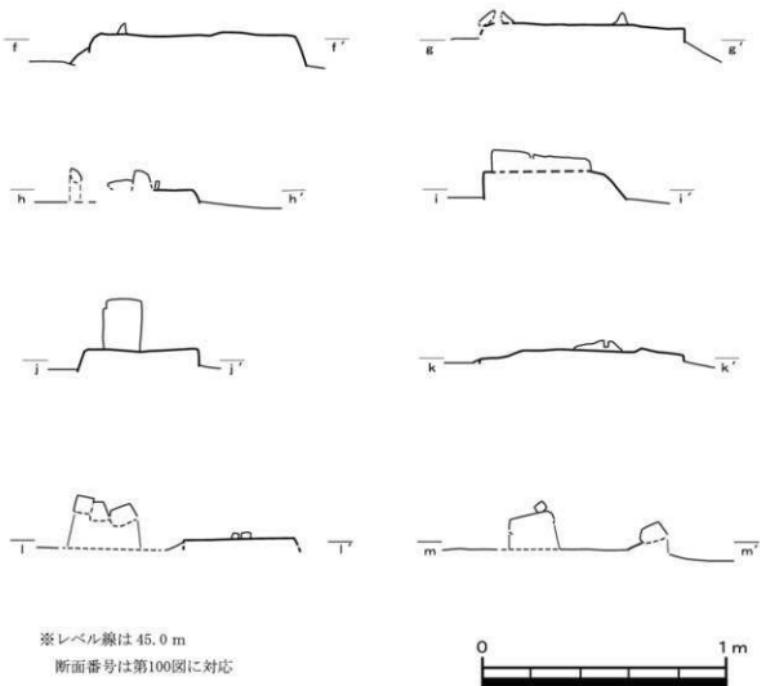
※レベル線は45.0 m
断面番号は第98図に対応



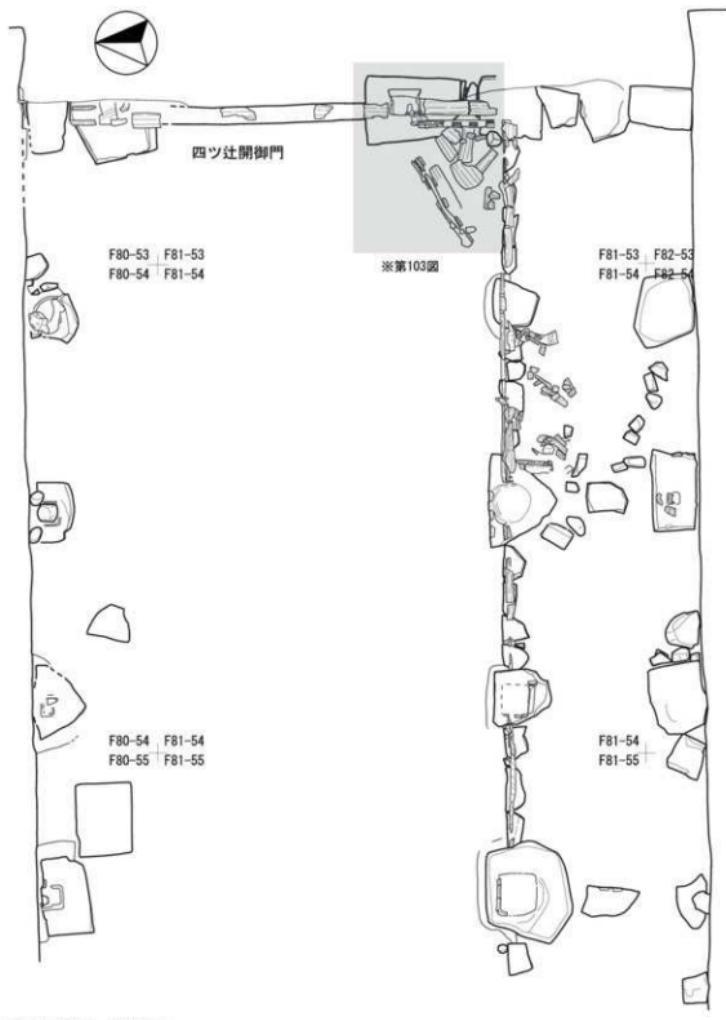
第99図 遺構実測図60 間り通路断面図3



第100図 遺構実測図61 式台平面・断面図

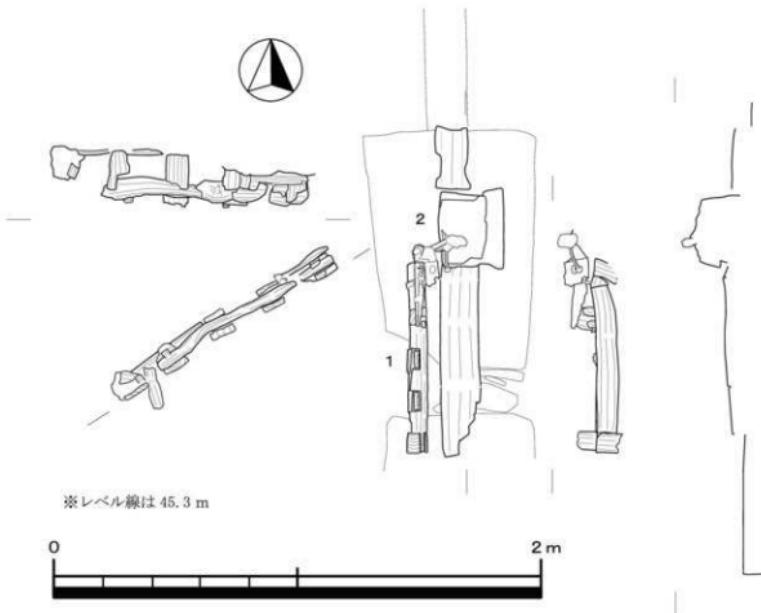


第101図 遺構実測図62 式台断面図

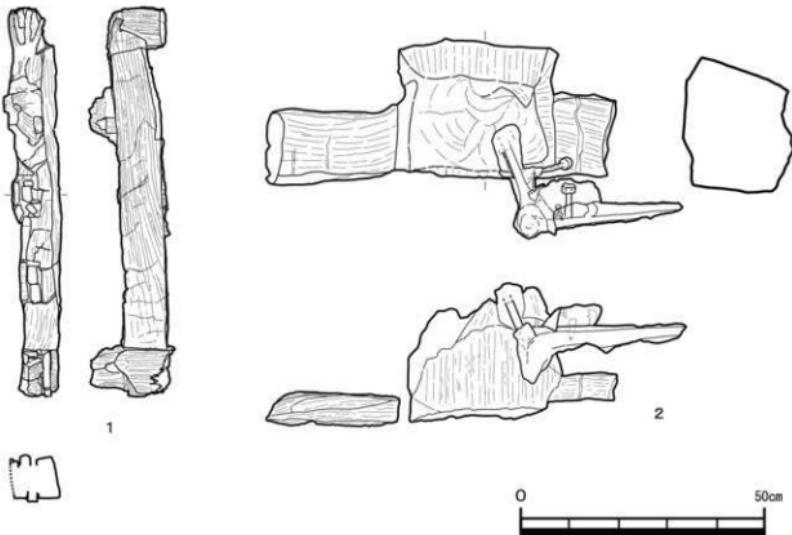


※断面図は第98・99図参照

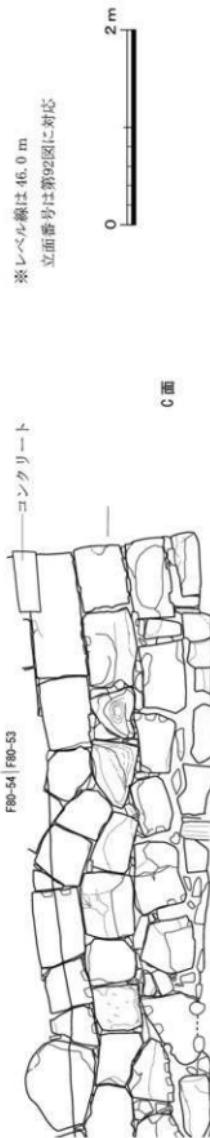
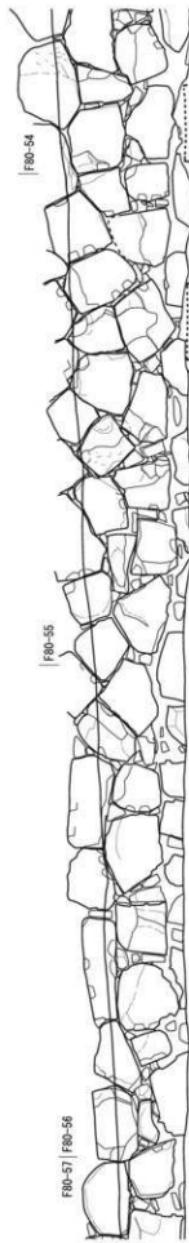
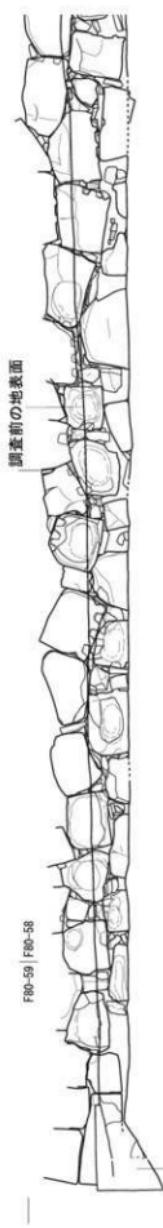
第102図 造構実測図63 御玄関平面図



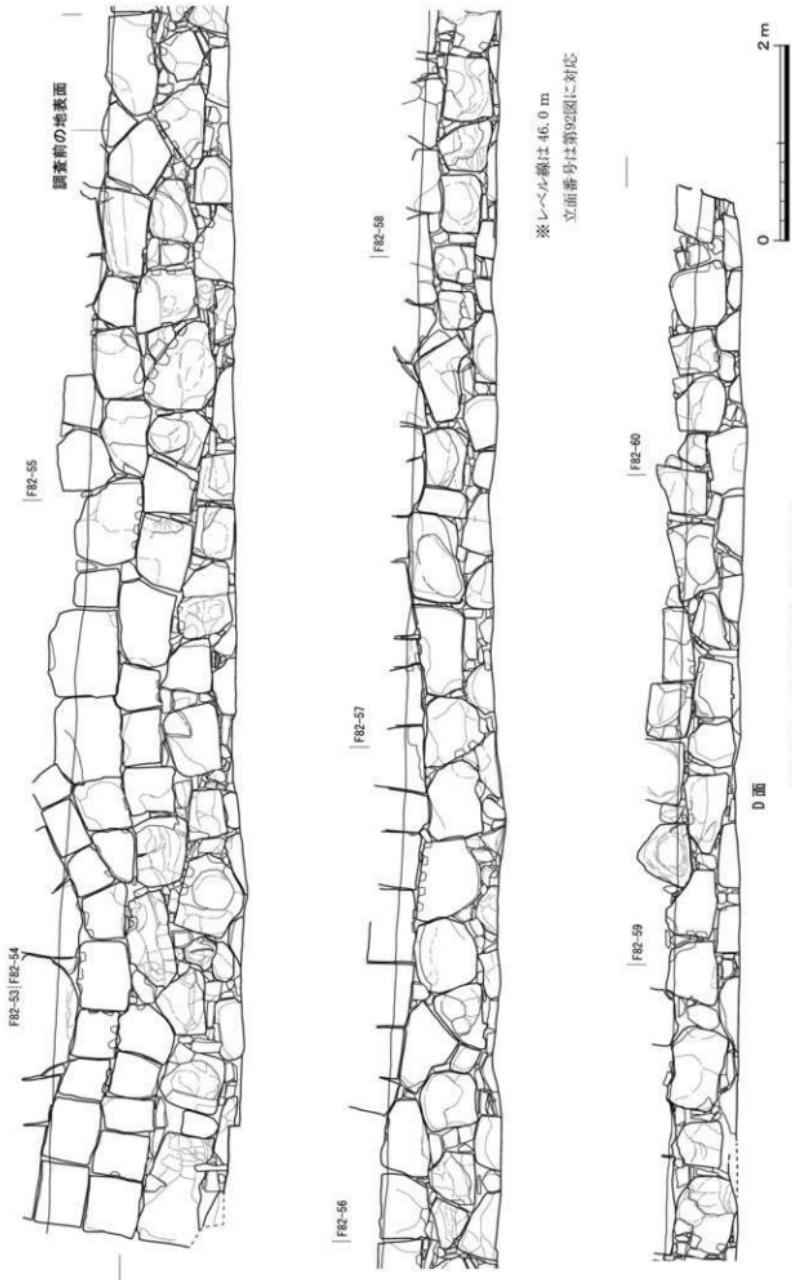
第103図 遺構実測図64 四辻開御門炭化材出土状況



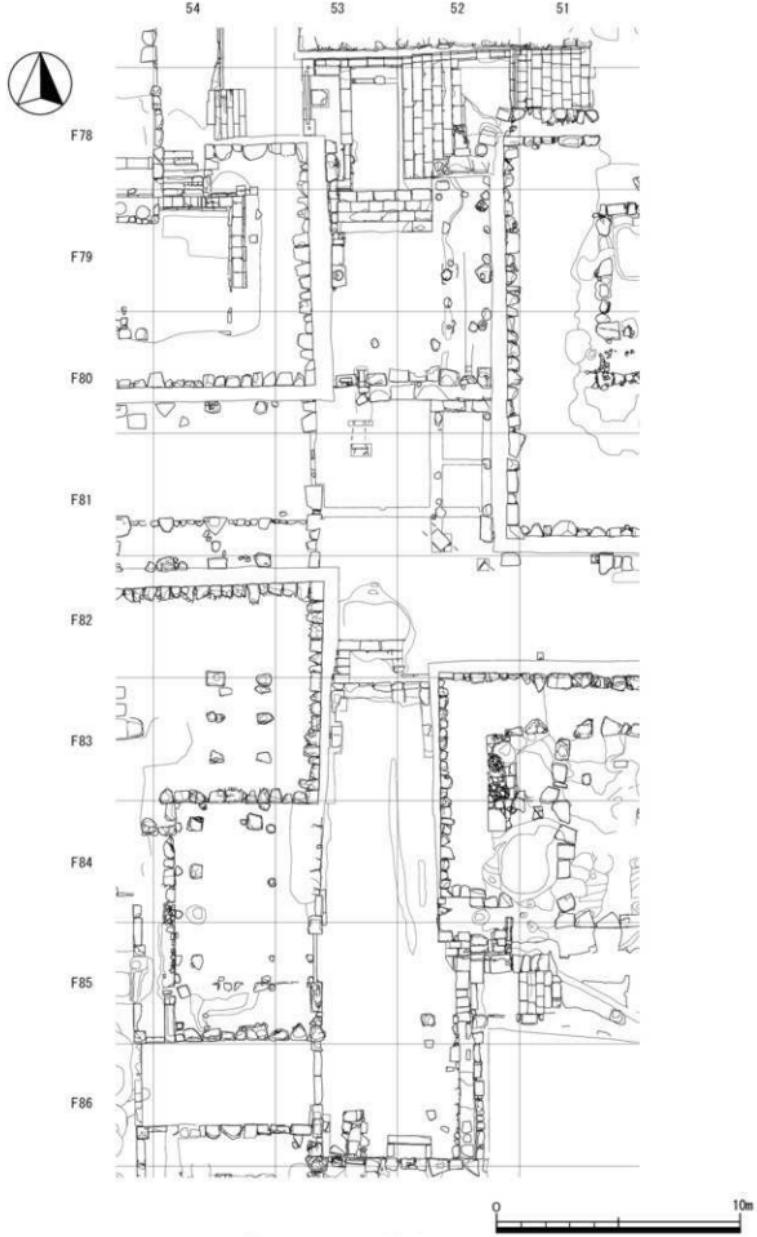
第104図 炭化材実測図



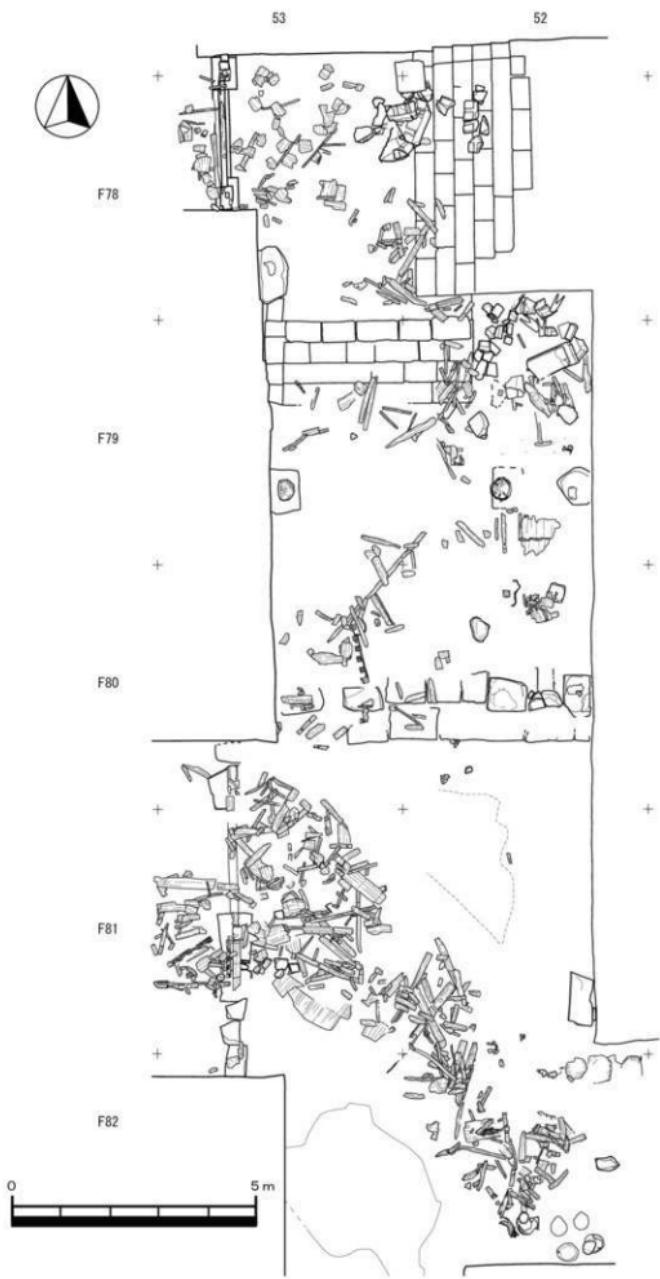
第105図 運搬実測図65 C面立面図



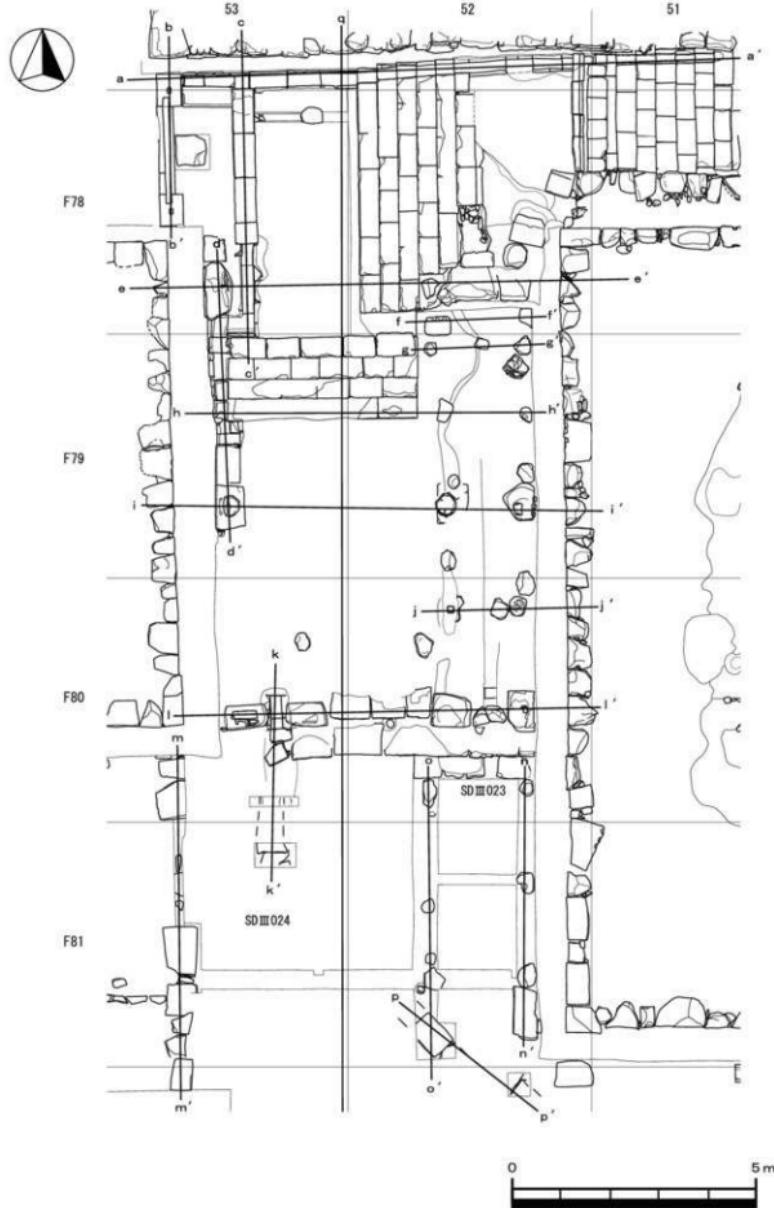
第106図 造構実測図66 D面立面図



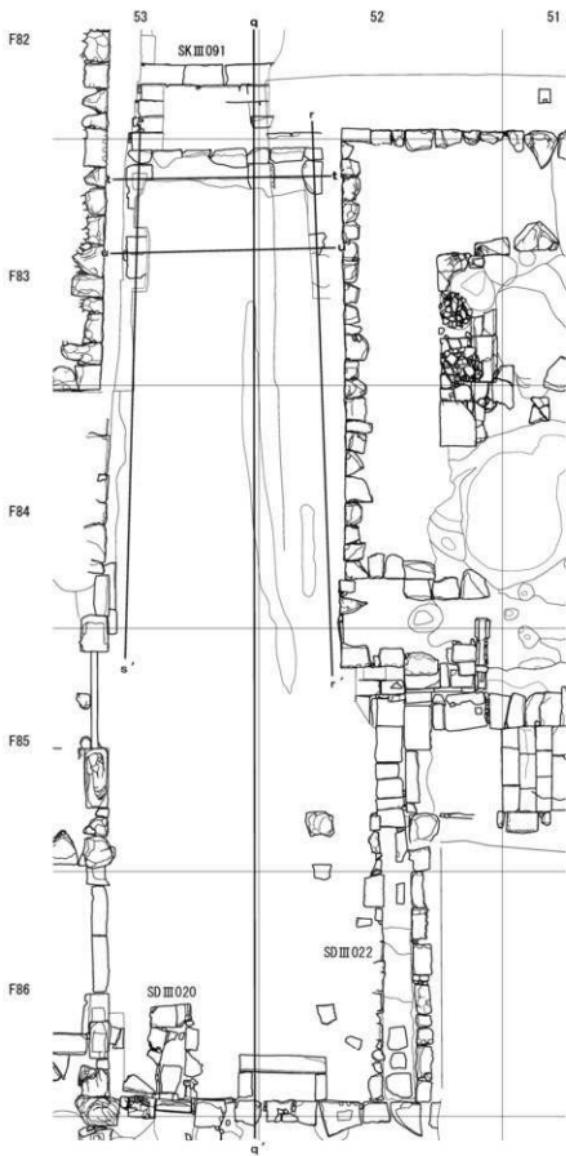
第107図 間り通路南北平面図1



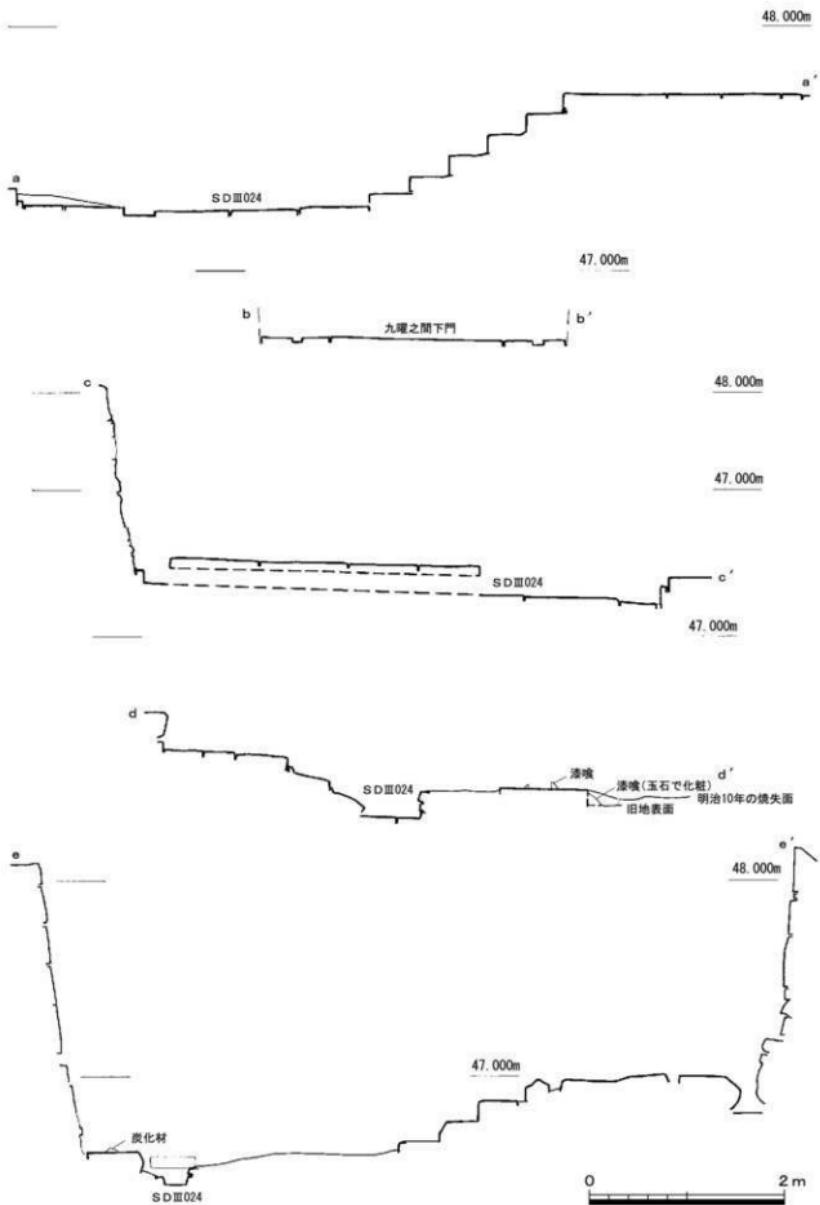
第108図 遺構実測図67 間り通路南北炭化材出土状況



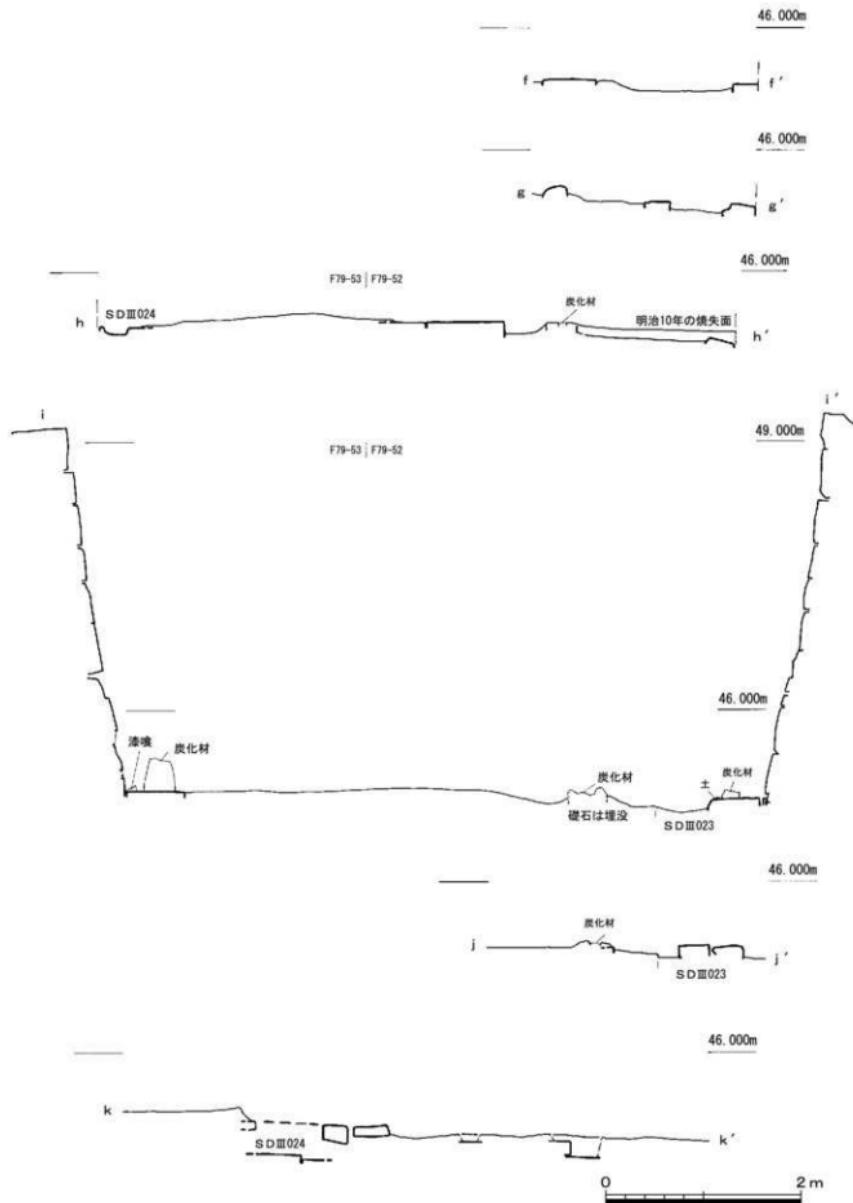
第109図 造構実測図68 間口通路南北平面図2



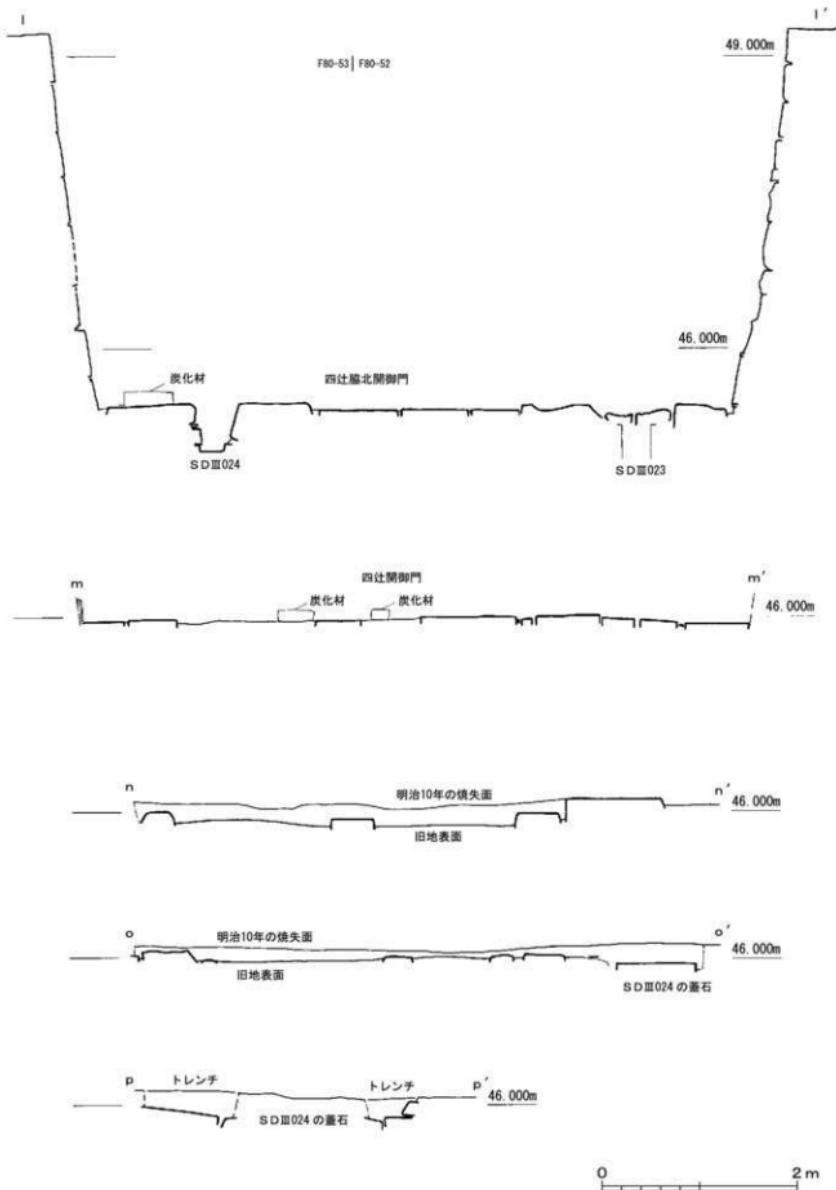
第110図 造構実測図69 間の通路南北平面図 3



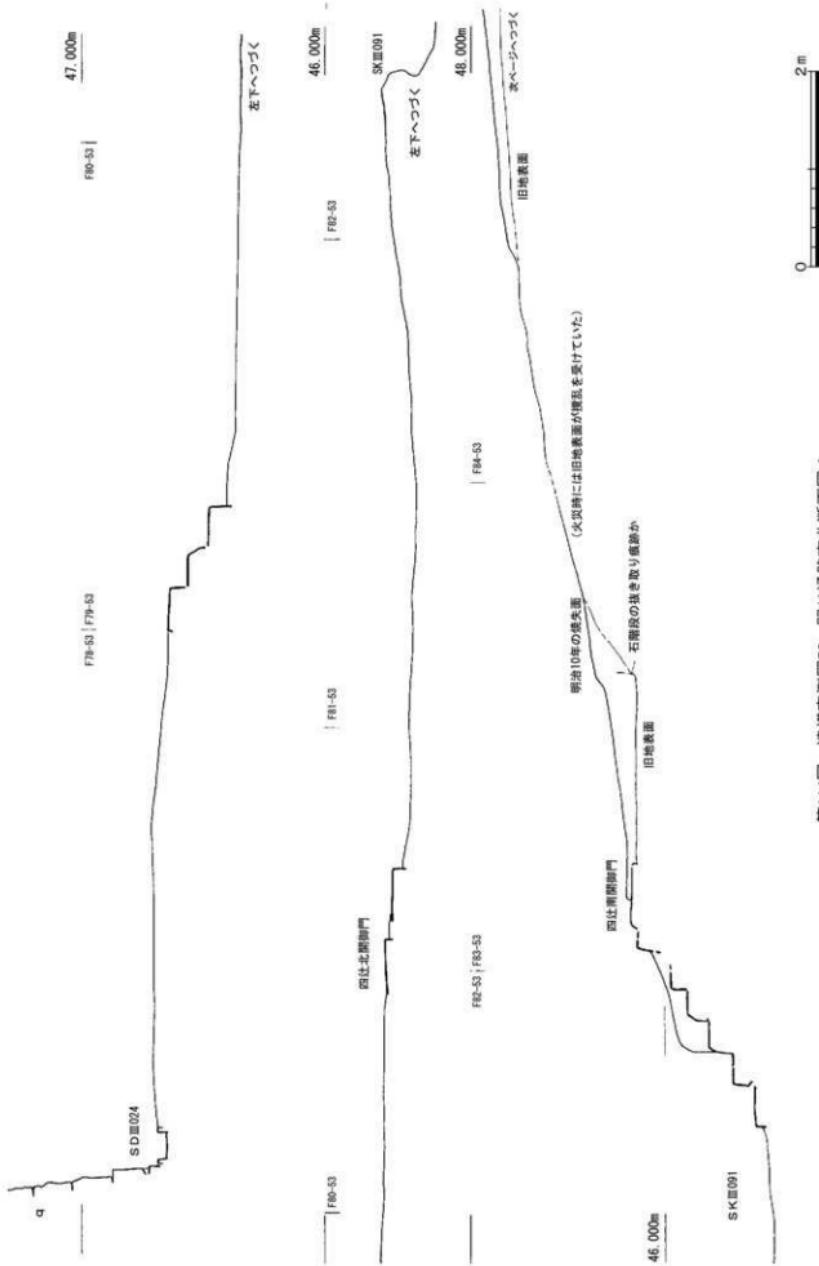
第111図 造構実測図70 間り通路南北断面図 1



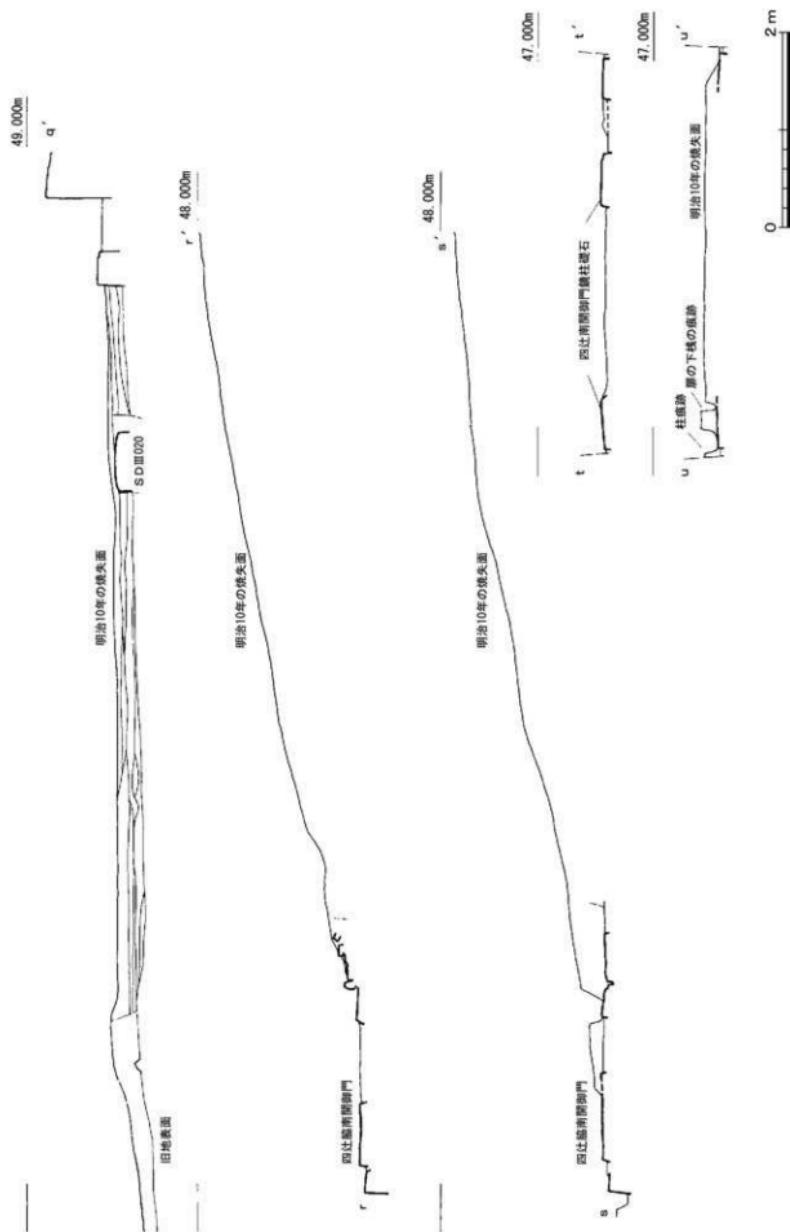
第112図 造構実測図71 間り通路南北断面図2



第113図 造構実測図72 間り通路南北断面図3

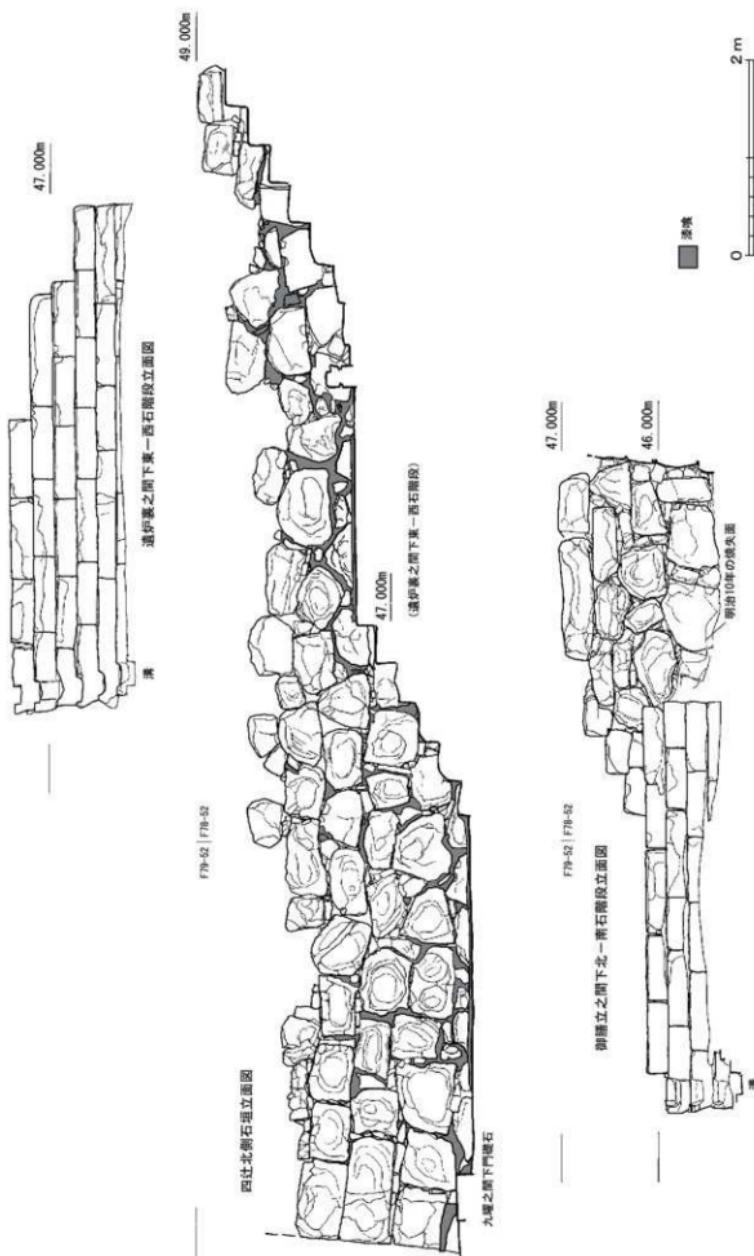


第114図 道構実測図73 闇り通り南北断面図4

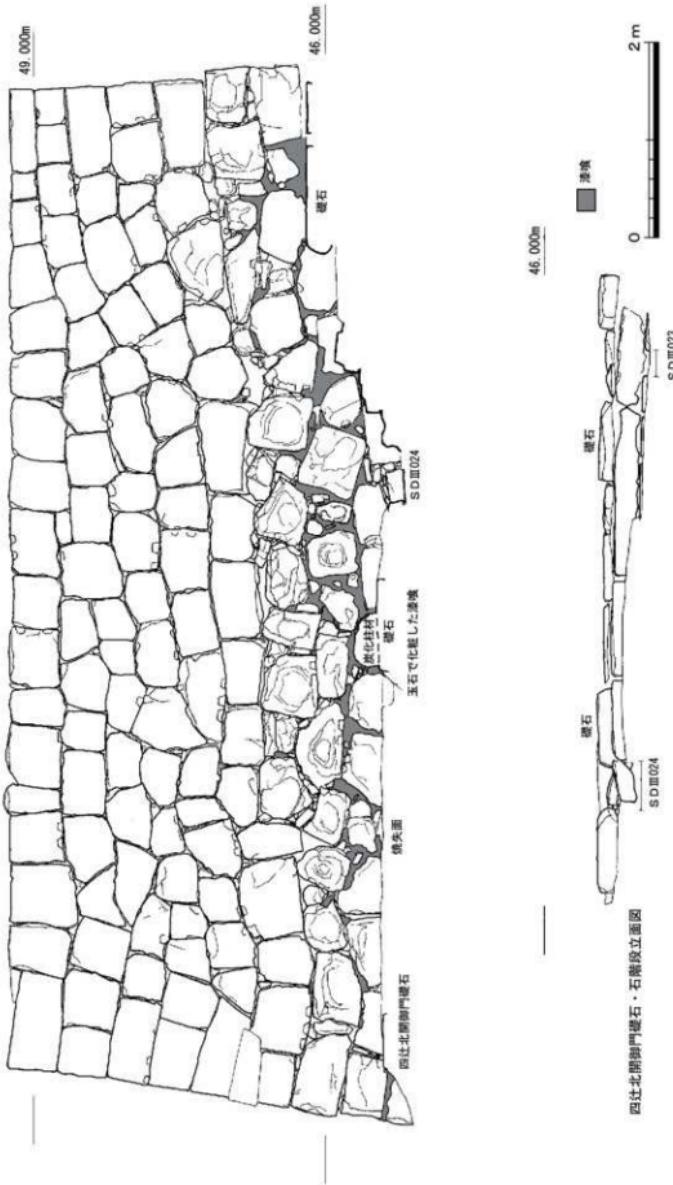


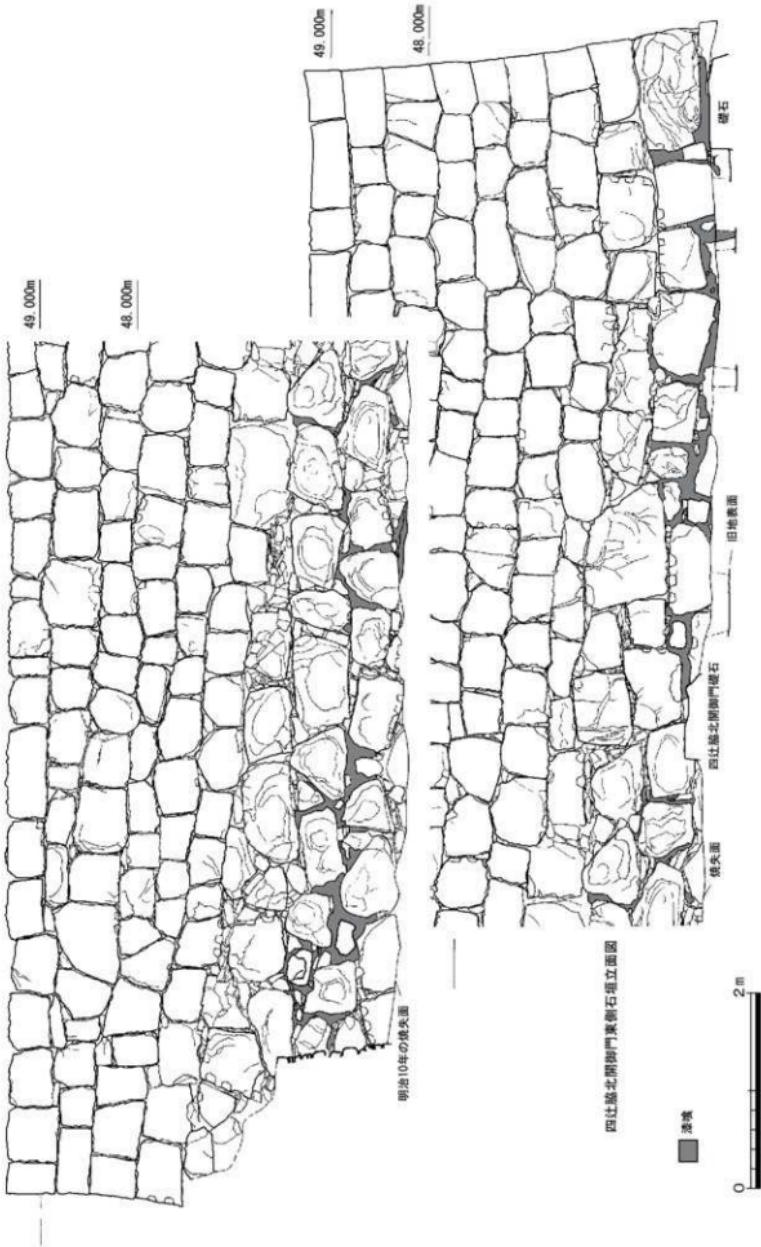
第115図 通構実測図74 闊り通り南北断面図5

第116図 通構実測図75 闊り通り南北立面図1

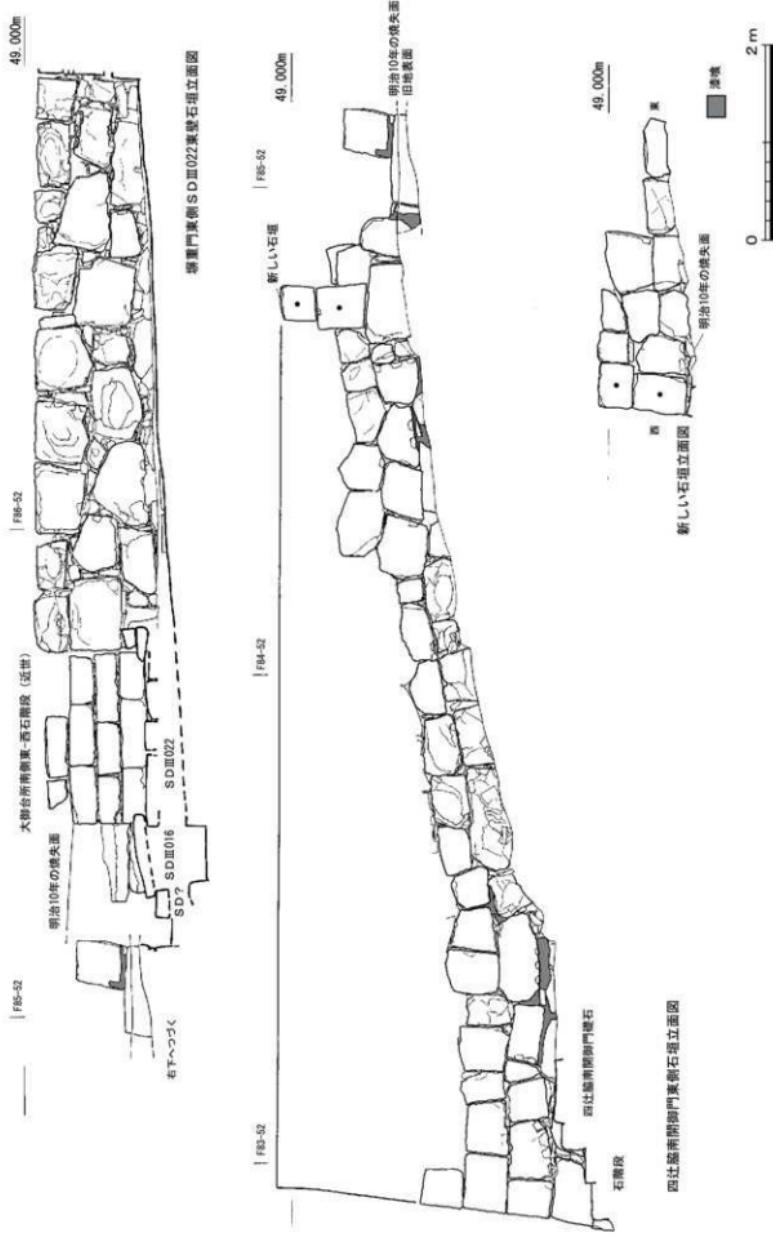


第117図 通構実測図76 開り通路南北立面図2



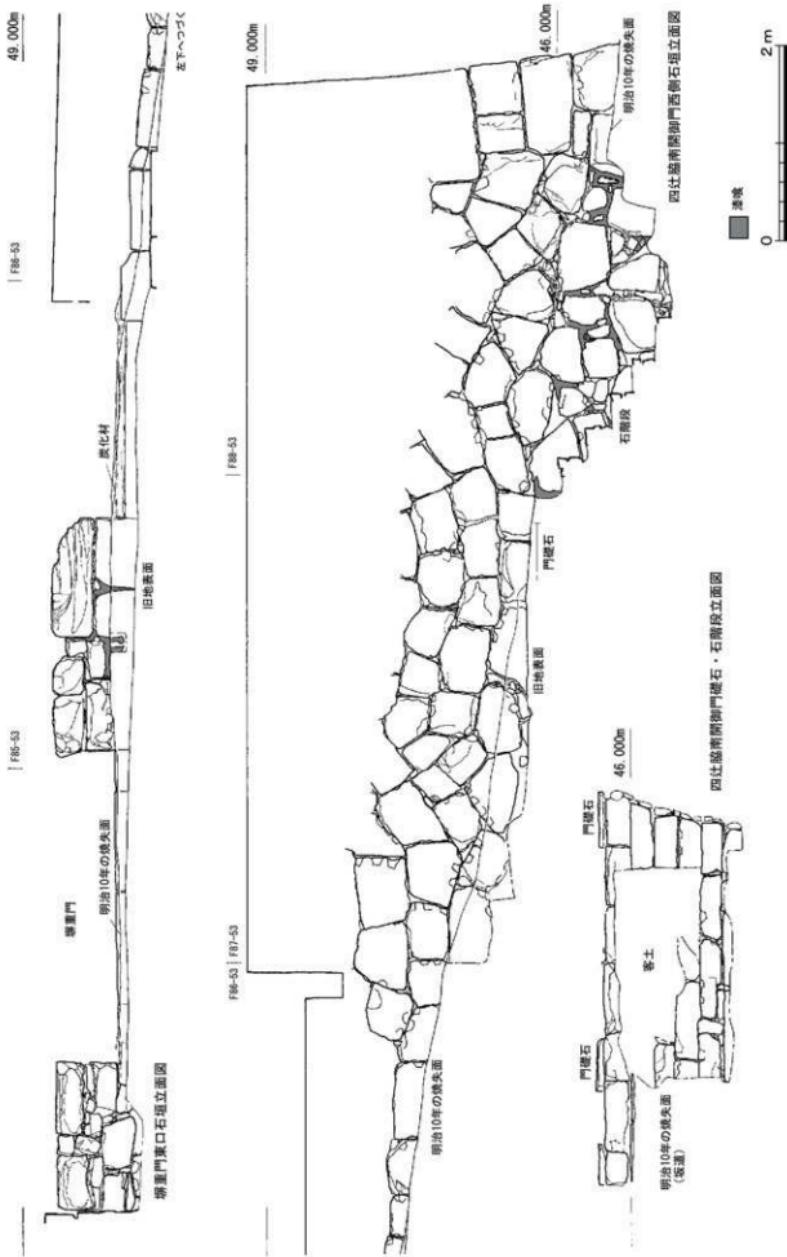


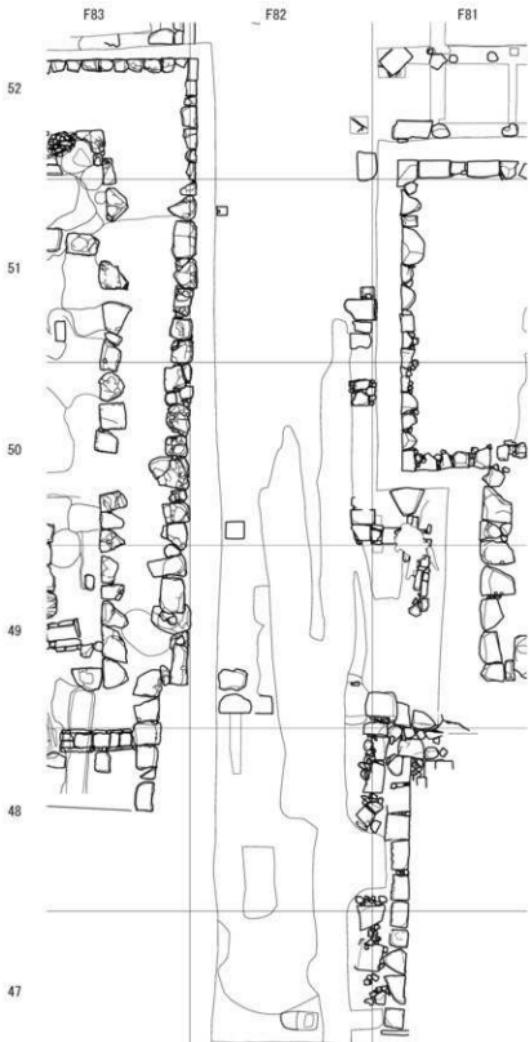
第118図 通構実測図77 間り通り南北立面図3



第119図 通構実測図78 間り通り南北立面図4

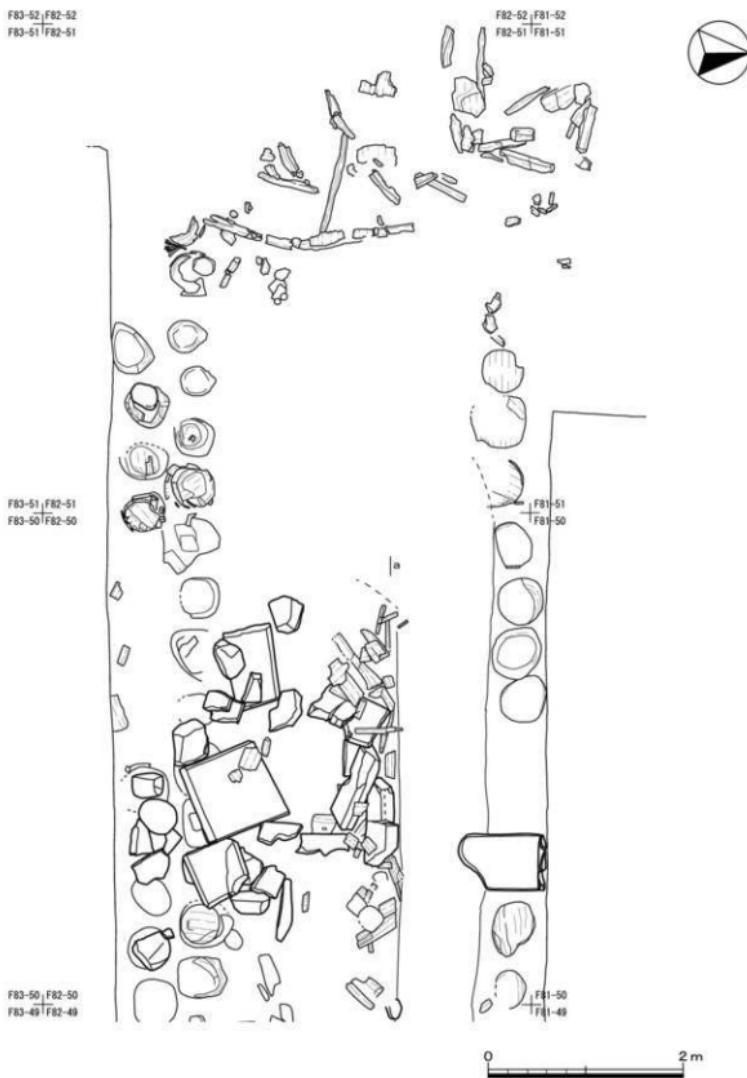
第120図 通構実測図79 簡り通路南北立面図5



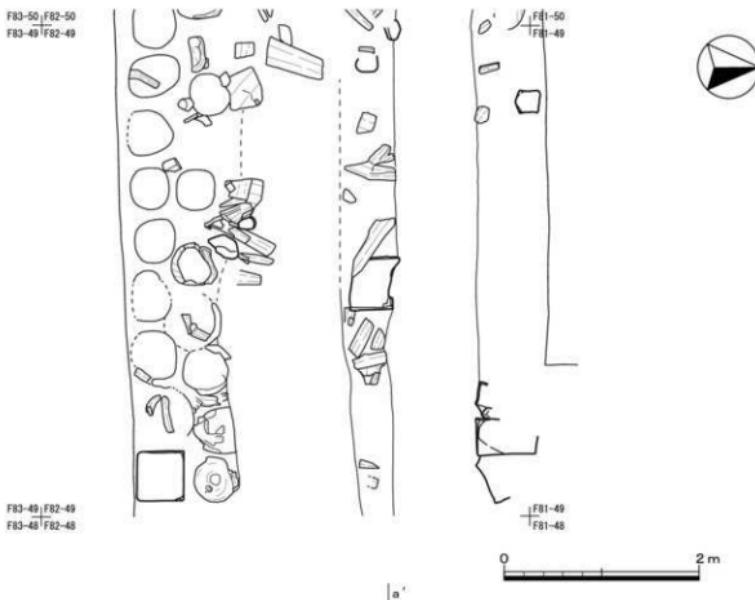


0 10 m

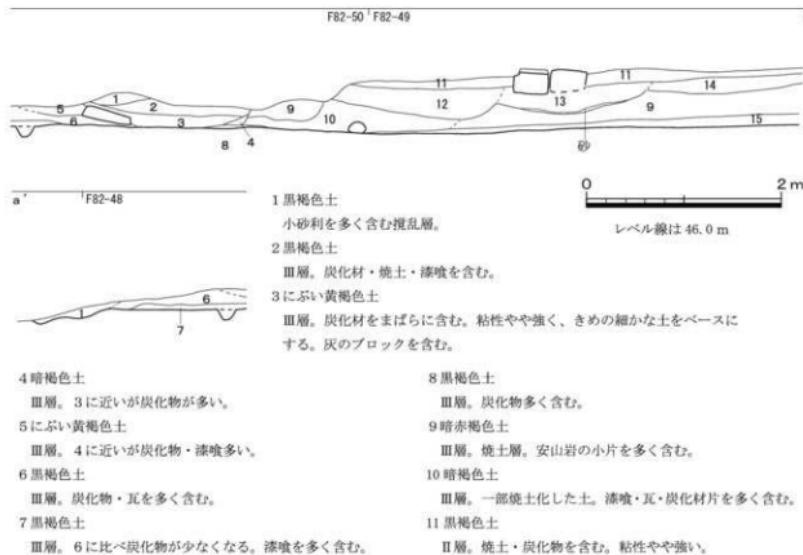
第121図 間り通路東全体図



第122図 遺構実測図80 聞り通路東炭化材等出土状況1

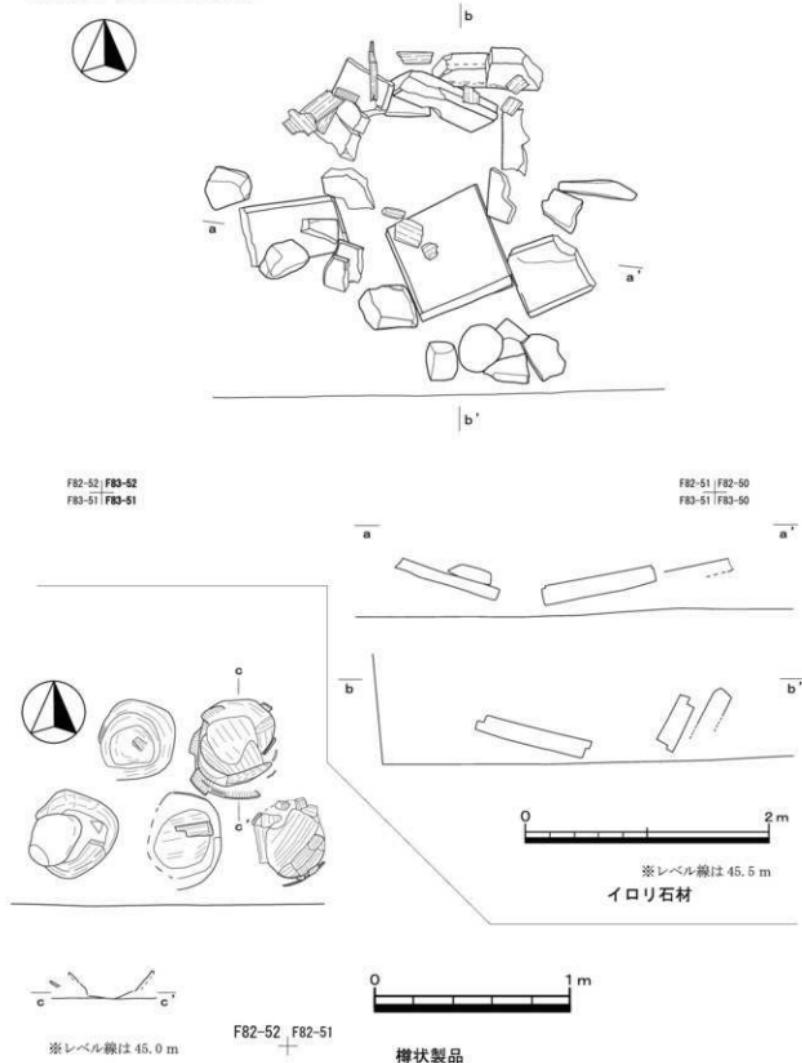


第123図 遺構実測図81 間り通路東炭化材等出土状況2

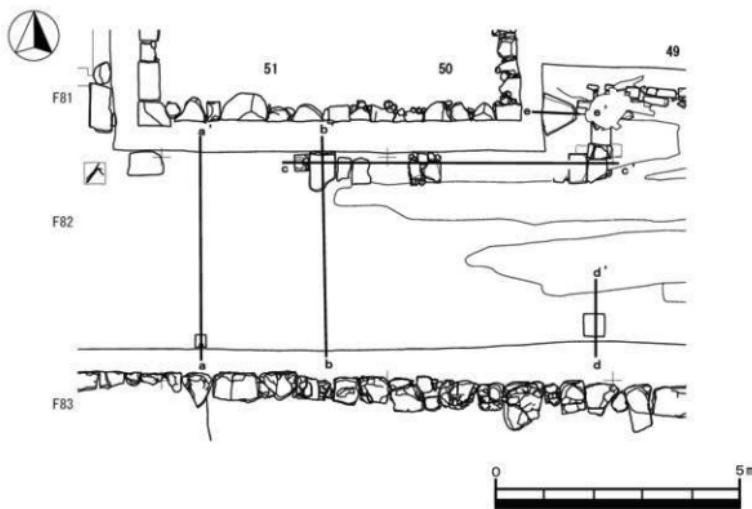


第124図 間り通路東土層断面図

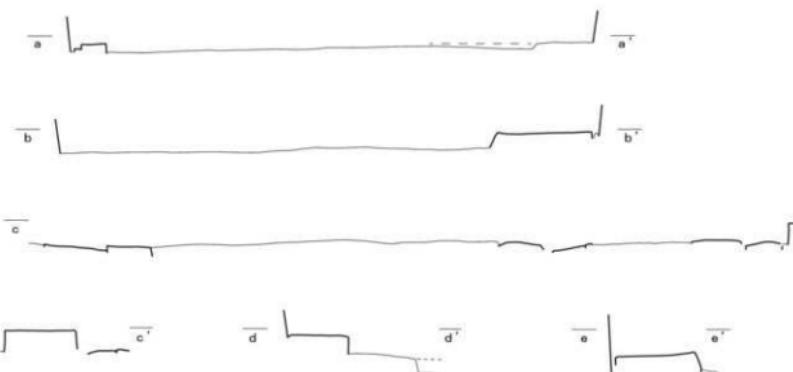
- 12 黒褐色土
II層堆積時に擾乱を受けた土か。粘性やや強い。焼土・炭化物
・瓦を多く含む。
- 13 にぶい黄褐色土
III層。イロリとともに崩落した土か。完全に焼土化している。
砂質感強い。底に薄い砂の層がある。
- 14 暗褐色土
III層。10に近い。一部焼土化した土。安山岩の小片多い。
- 15 黒褐色土
III層。7・8に近い。炭化材の堆積に濃淡がある。



第125図 遺構実測図82 遺物出土状況



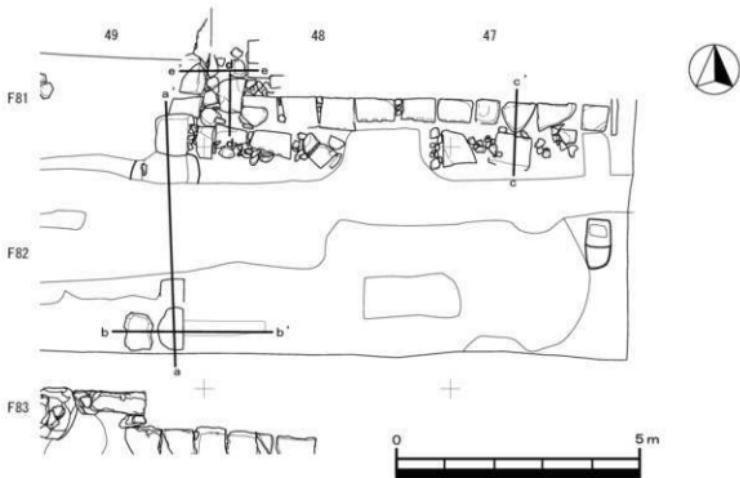
第126図 遺構実測図83 間り通路東平面図 1



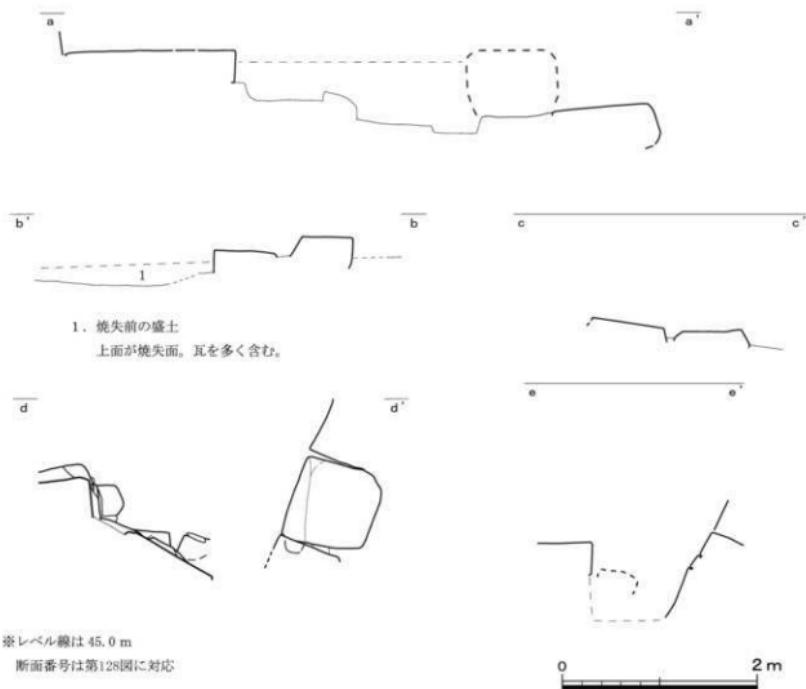
※レベル線は45.0 m
断面番号は第126図に対応



第127図 遺構実測図84 間り通路東断面図 1



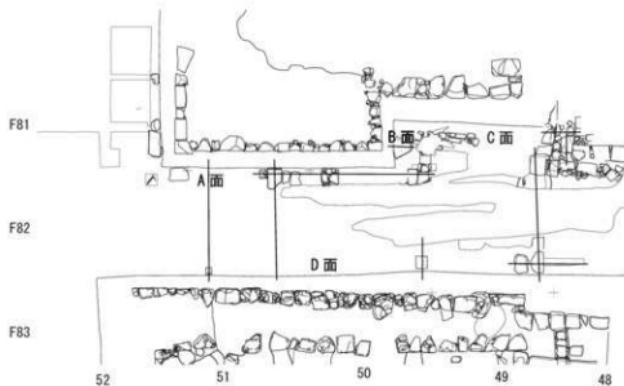
第128図 遺構実測図85 間り通路東平面図2



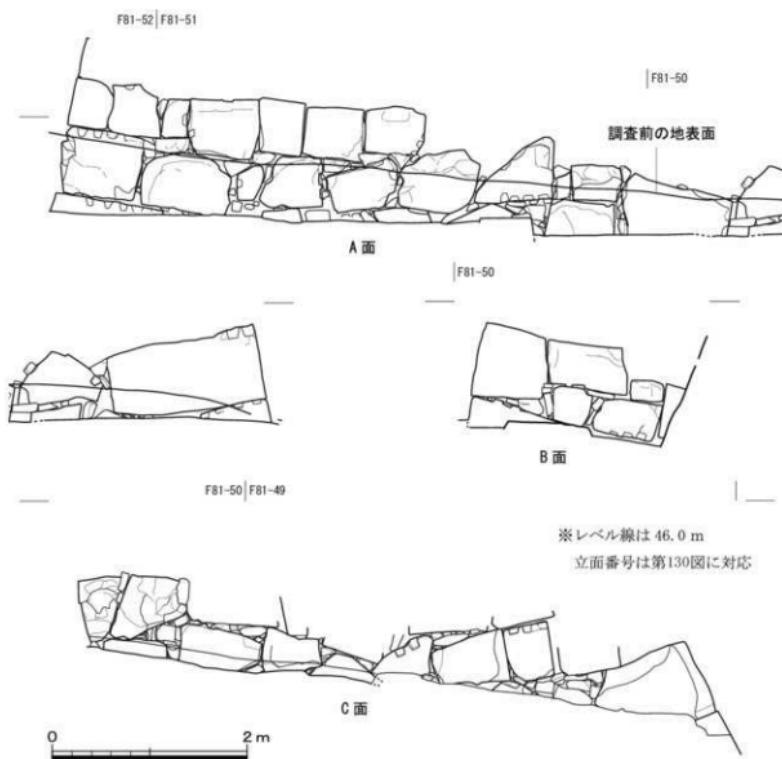
※レベル線は45.0 m

断面番号は第128図に対応

第129図 遺構実測図86 間り通路東断面図2



第130図 間り通路東立面図位置図



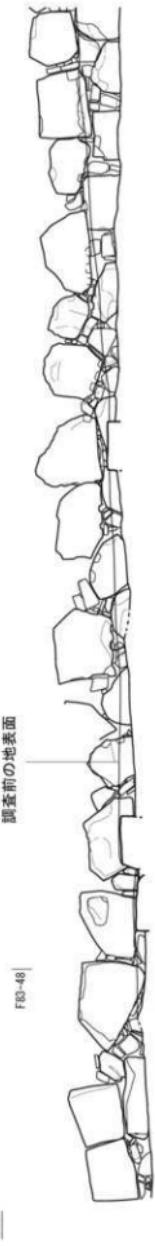
第131図 間り通路東立面図 1

第132図 遺構実測図87 闊り通路東立面図2

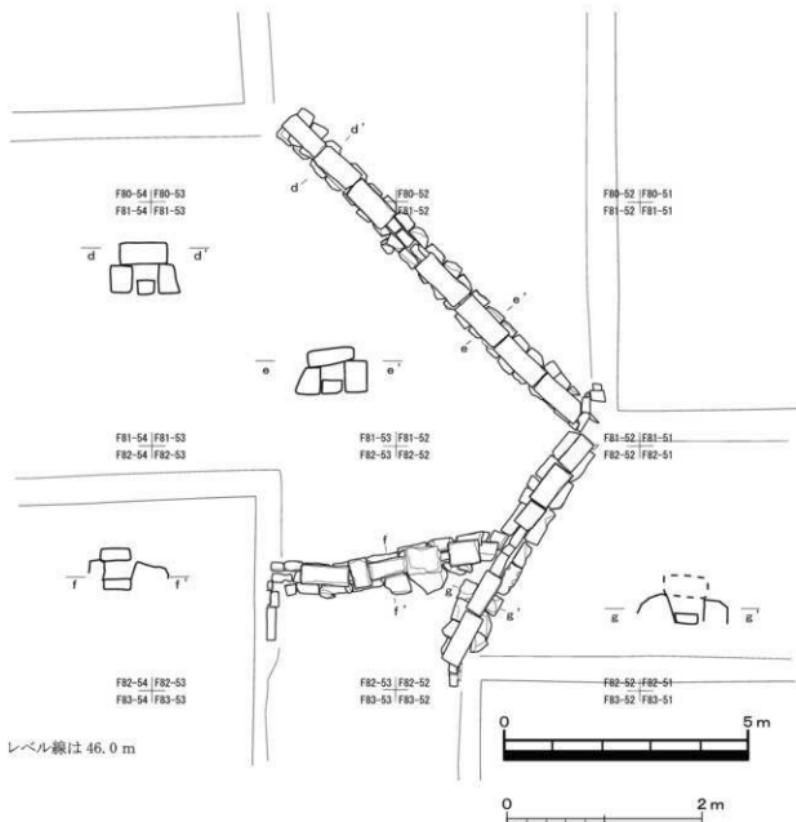
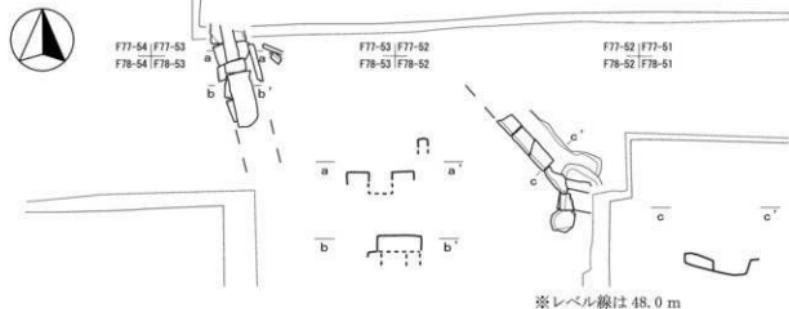


D面

※ レベルノ線は第130図に対応
立面番号は第130図に対応



調査前地表面



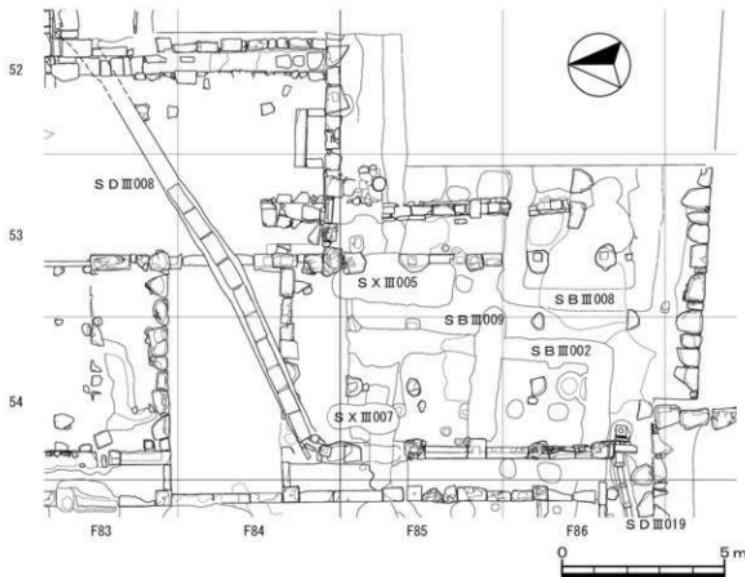
第133図 造構実測図88 間り通路近現代排水溝

(5) 長之間（第134図～第139図）

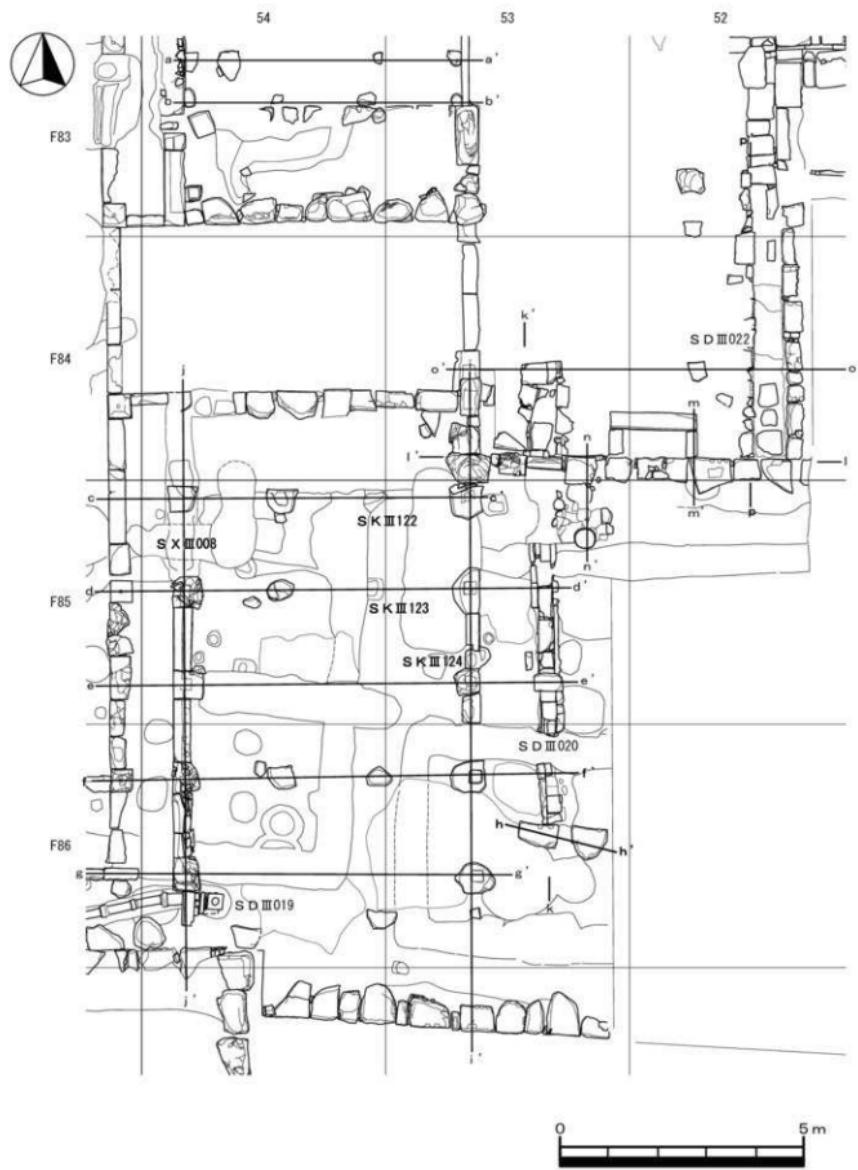
「御城内御絵図」で「麒麟之間」と記された、梁間3間の南北に細長い建物である。1階部分の絵図には建物の北側と南側に「麒麟之間下土間」の記載があり、その間に堀重門が通っている。

長之間北端の麒麟之間下土間に当たる部分では、遺構面が大広間の土台となる石垣の天端から1.3m下がっており、単独の礎石と土間の硬化面が検出された。土間と東側の通路の境は、北半分が熊本地震後の石垣積み直しの際に削られていたが、南側は土間への入口の礎石や土台が残存していた。土間の南端には石垣の痕跡があり、堀重門との間に石垣で区画した幅2.4mの高まりがあったようである。堀重門では、東西の敷居石の高低差が40cmあり、硬化した路面が西から東へ下る斜面となっていた。西側の敷居石の延長から露地に面して安山岩の延石が続いており、間に縁先を支える束石が4m間隔で置かれていた。堀重門の南側には、路面沿いの石垣とほぼ高さで幅2mの平坦面があり、この平坦面より約30cm高い部分で長之間の礎石が検出されている。堀重門より南側の長之間では、東西両側面の礎石の間に幅30～40cmの地覆石が並んでおり、礎石には22～23cm角の柱当たり、西側の地覆石には幅20cmの段差が認められた。建物の内側には単独の礎石も残存しており、柱間隔は6尺5寸（約2m）と判明した。

長之間の東側には、月見御台所との間に露地があり、長之間側の雨落ち溝SD III 020が検出された。SD III 020は建物と堀重門東側の地下を通ってSD III 022に合流し、SD III 022は大御台所南側の暗渠SD III 016に合流する。闇り通路への下り口には幅10cm、高さ5cmの水切り石があり、通路に下る排水施設は存在しない。堀重門の東側露地では銅製の樋（第326図216）も出土しており、周辺の雨水はすべてSD III 016に導水していたと考えている。

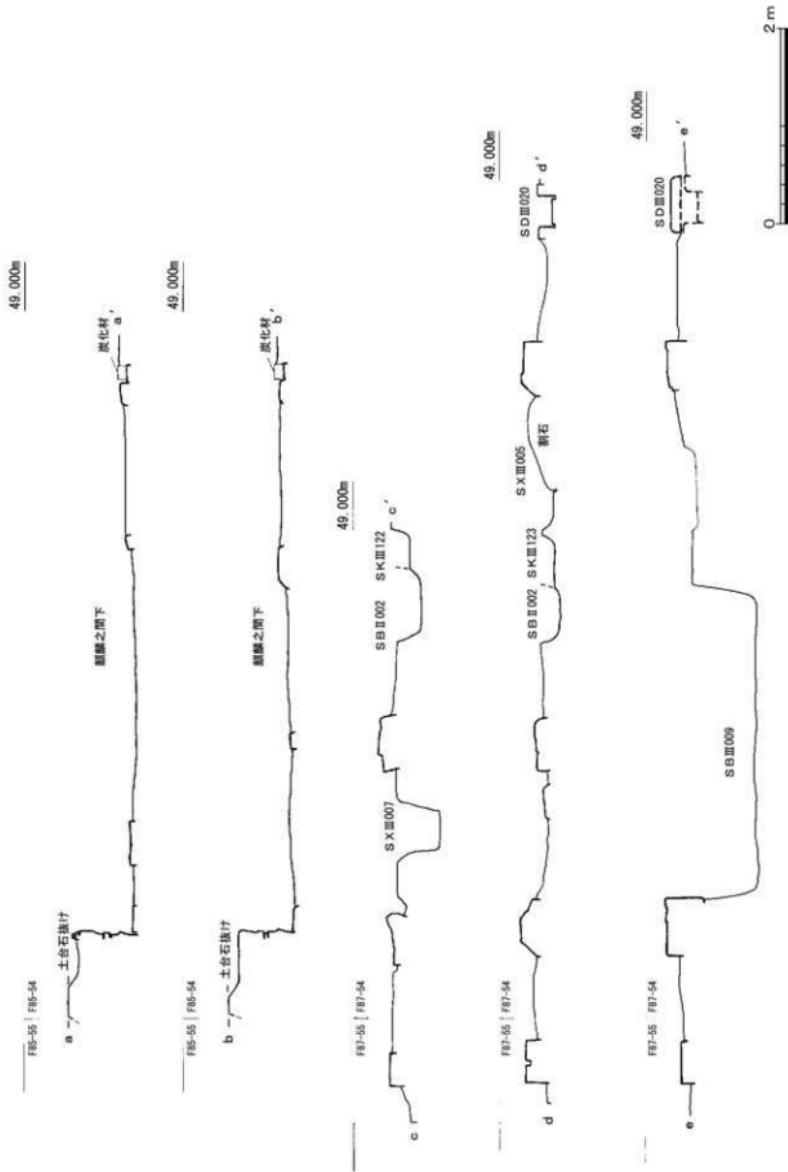


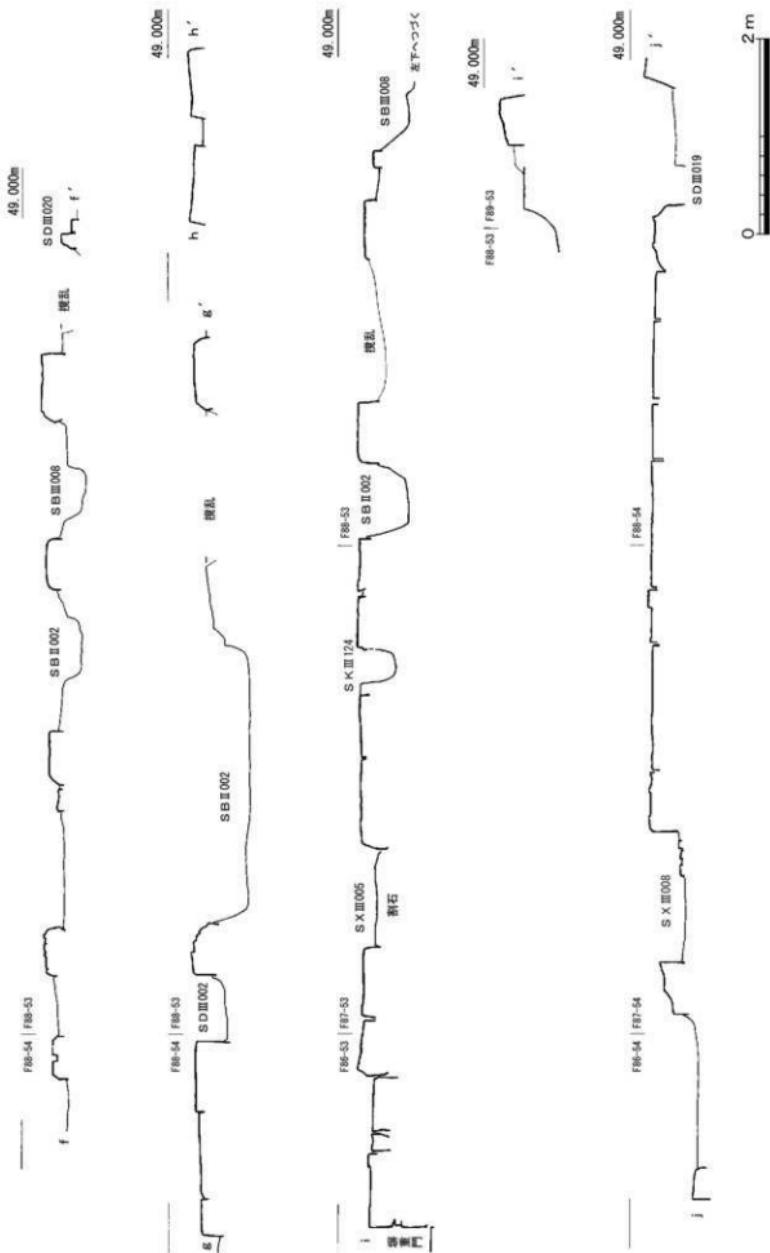
第134図 遺構実測図 長之間全体図



第135図 遺構実測図89 長之間平面図

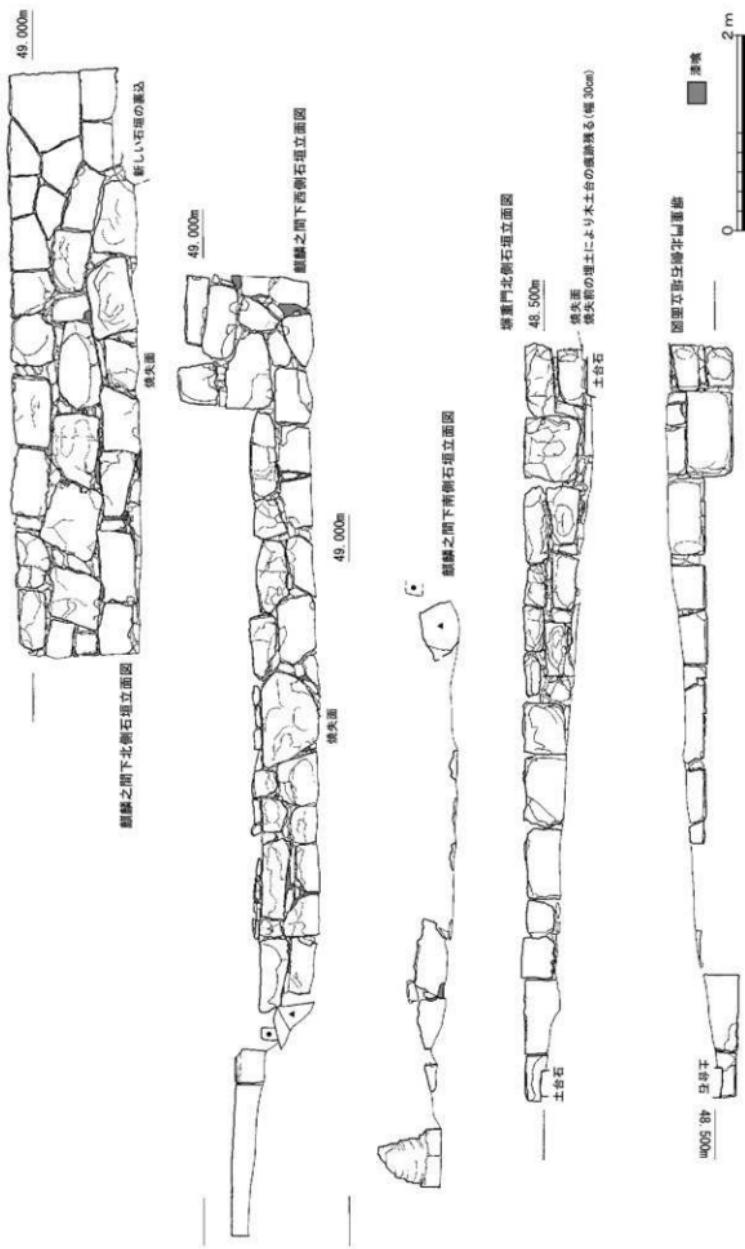
第136図 連構実測図90 長之間断面図1



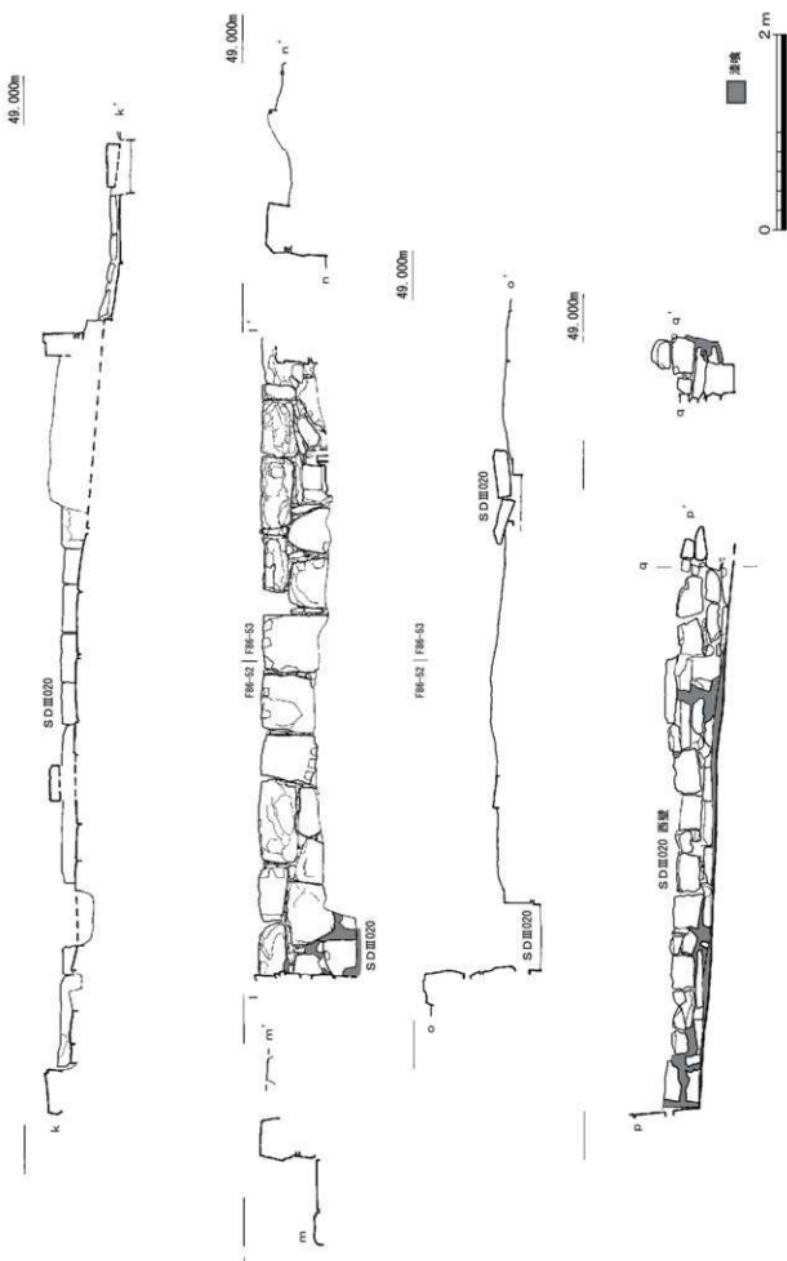


第137図 連続実測図91 長之間断面図2

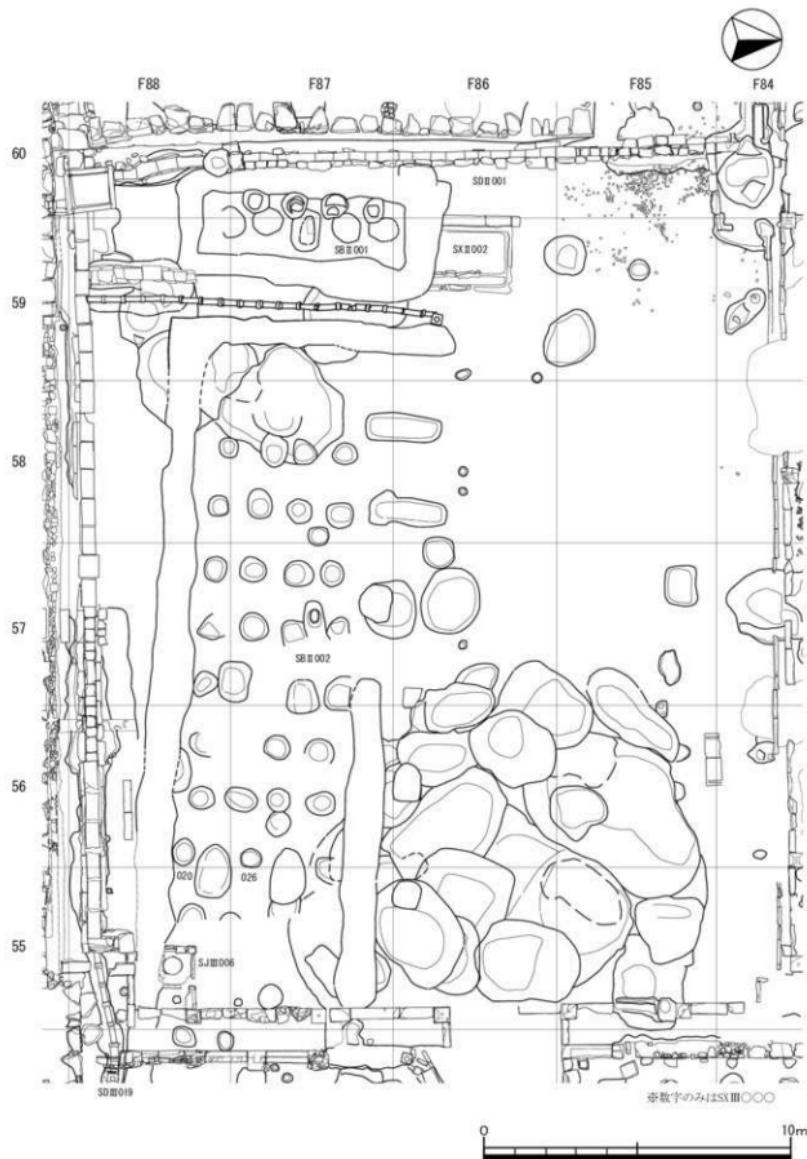
第138図 道構実測図92 長之間立面図1



第139図 通構実測図93 長之間立面図2



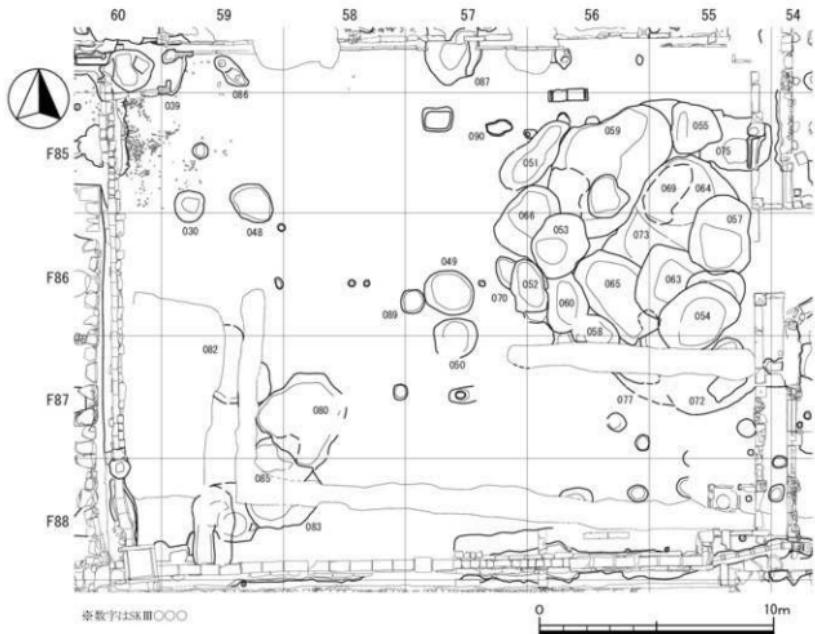
(6) 露地 (第140図～143図)



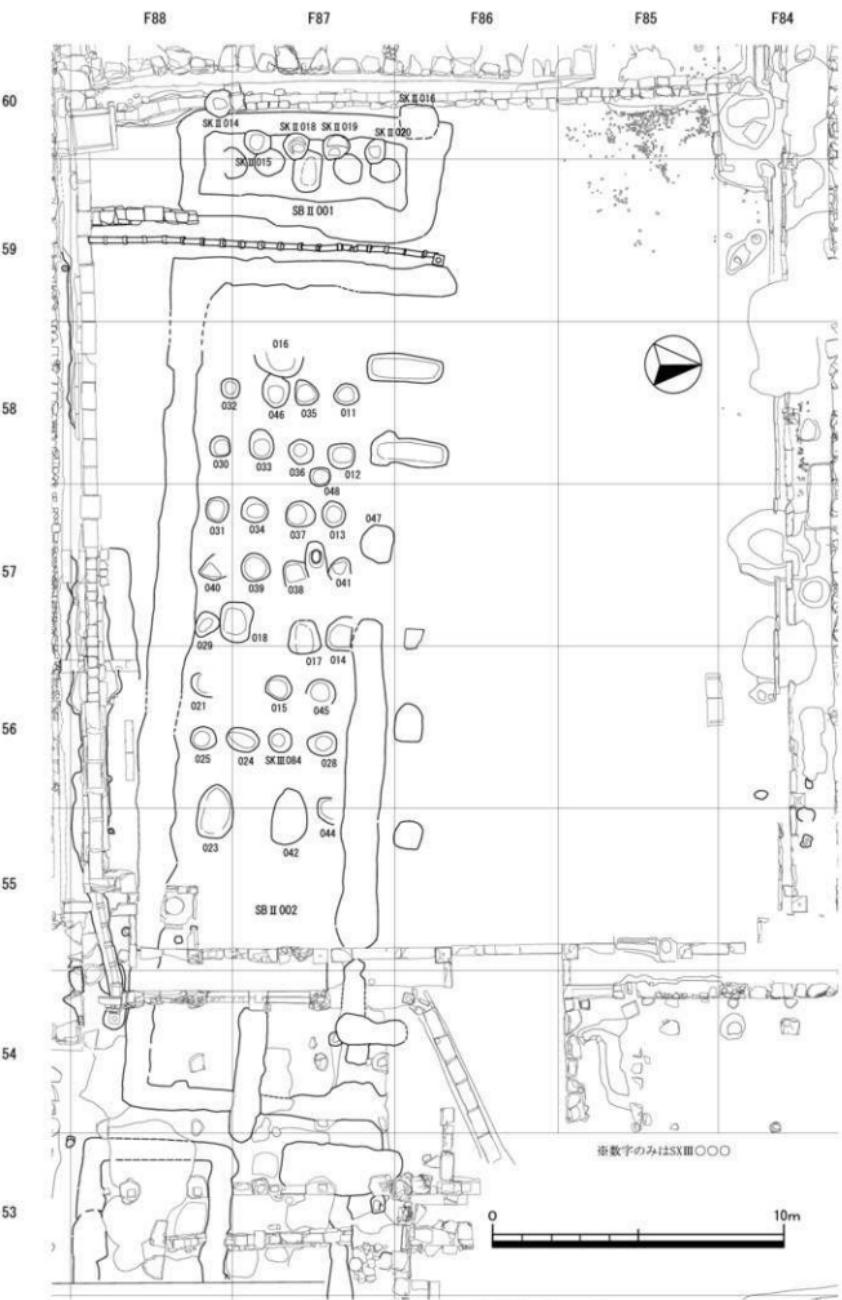
第140図 露地全体図

検出された露地面は、大広間・西廊下・小広間の土台となった石垣や礎石の天端よりも1~1.5m低く、表面には径2~5cmの化粧玉石がみられた。建物の近くでは、焼け落ちた部材の影響で地表面が赤色あるいは黒色に変化している部分が認められた。「御城図」では大広間縁先の2か所に木製の階段が描かれており、梅之間の南側で階段の桁受けの土台石が検出された。西廊下前の露地では南北4m、東西2mの長方形の漆喰槽S X II 002が検出されている。漆喰槽は全面に漆喰が塗られており、東西両側縁に沿って幅30cmの凝灰岩が敷かれていた。トレーナーを設定して埋土の一部を掘り下げたところ、深さは1.5mで、東側に幅30cmの段を有する。基底面から順に裏込めのぐり石、褐色粘質土、近世瓦片によって埋められている。埋土の上面には被熱の痕跡が認められ、焼失前に埋められたようである。「御城内御絵図」の露地の西側と北西隅の部分に池あるいは水槽様の表現がみられ、これに相当する遺構と考えている。漆喰槽の南側では、幅20cmの漆喰による区画が南北5m、東西3.4mの規模で検出される部分があり、より古い漆喰槽が埋没しているものと推測している。

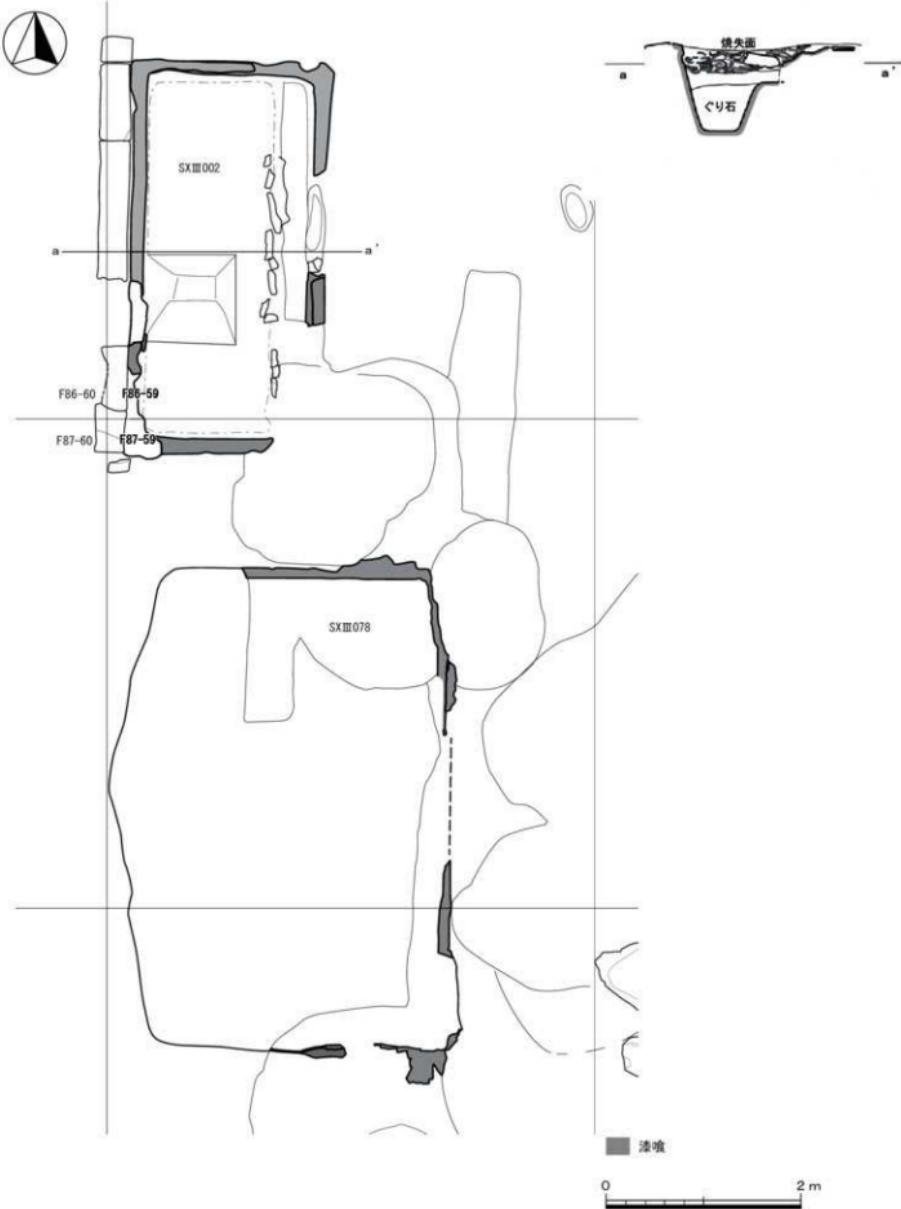
この他に露地では、近代以降の土坑群や建物跡と思われる遺構が検出されている。土坑群（SK III 051~077）は露地の北東部に集中しており、ほぼ近世瓦片のみで埋没していた。II層中位から掘り込まれた瓦の廐棄坑で、掘削・埋没時期に大きな差はないものと考えている。建物跡は、溝状の掘り込みに古い遺構から転用した安山岩・凝灰岩や、ぐり石等を敷き詰めたもので、建物の外周部にめぐらされた布基礎状の遺構と考えている。西廊下前のSB II 001は、溝状遺構の全長が南北8m、東西4mで、東側に瓦質管を用いた排水施設を有していた。その東面に並ぶSB II 002は同じく全長が南北7.5m、東西2.6mに及び、内側で束石様の集石土坑群（SK III 011~013・021~042他）が検出されている。いずれもII層上面からの掘り込みである。他にも全容の不明な溝状遺構も多数存在しており、第六師団に関連する建物跡と考えている。



第141図 遺構実測図94 露地土坑群（近代以降）



第142図 遺構実測図95 露地建物群（近代以降）

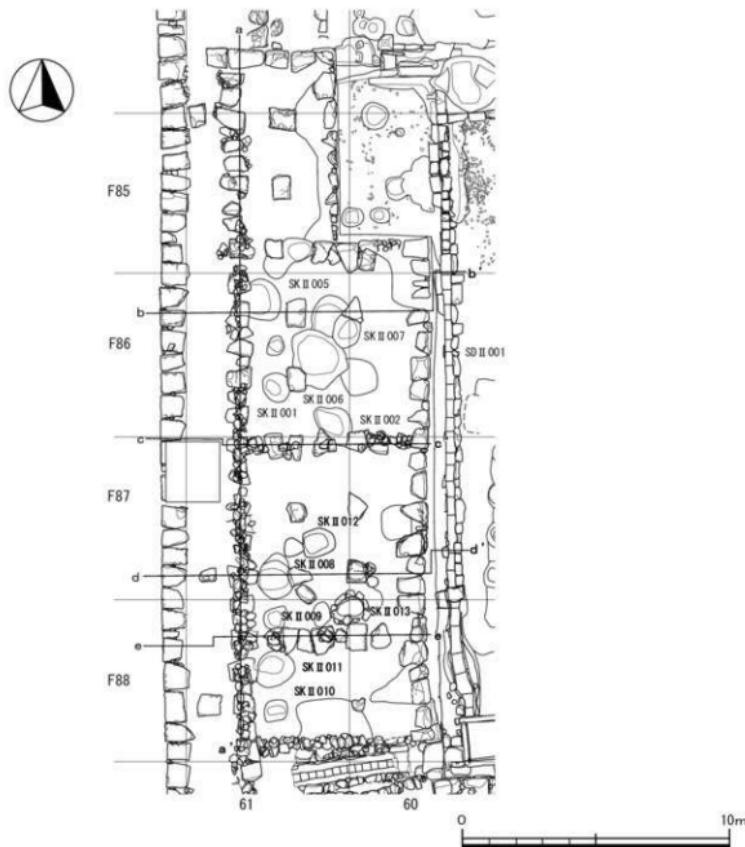


第143図 遺構実測図96 SXII 002・SXIII 078

(7) 西廊下（第144図～第146図）

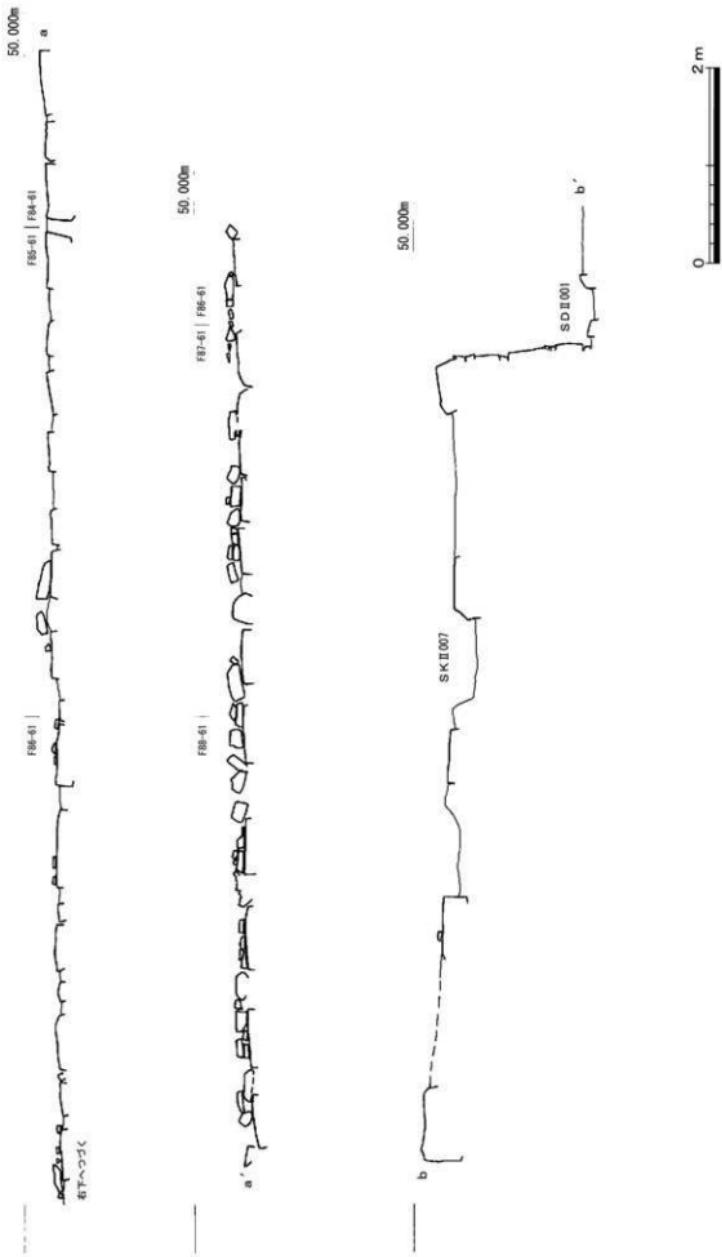
露地の西側に位置する。「御城内御絵図」では、石垣の天端に沿って大広間の拭板から続く幅1間の廊下を有し、棟の南寄りに3間×3間の部屋を3室伴っていた。

検出した石墨の規模は、大広間の縁先に当たる部分から南側へ約5m分は天端上面の東西幅が5.5m、それより南側は東西幅8.2mである。石墨東面における石垣の高さは1.6mで、石垣裾では西廊下の雨落ちを兼ねた溝SD II 001が検出され、石墨上には独立礎石と東西・南北方向の礎石列が残存していた。遺構の配置と「御城内御絵図」との比較から、礎石列はそれぞれ廊下と部屋の間仕切り位置に相当し、礎石の間隔は6尺5寸（約2m）と推測している。石垣天端の高さは北から南へ徐々に低くなっている、標高は北端で49.8m、南端では49.2mである。また、石垣に対して裏込めのぐり石と礎石が大きく沈んでおり、礎石列上では手のひら大から人頭大の割石が多数検出された。割石は、礎石列上に東西2列に並んでおり、石の厚みは列の外側で厚く、内側で薄い。建物の土台と礎石の間に生じた隙間を調整するための挿石と考えている。ぐり石上では、部分的に三和土のような硬化面が認められた。

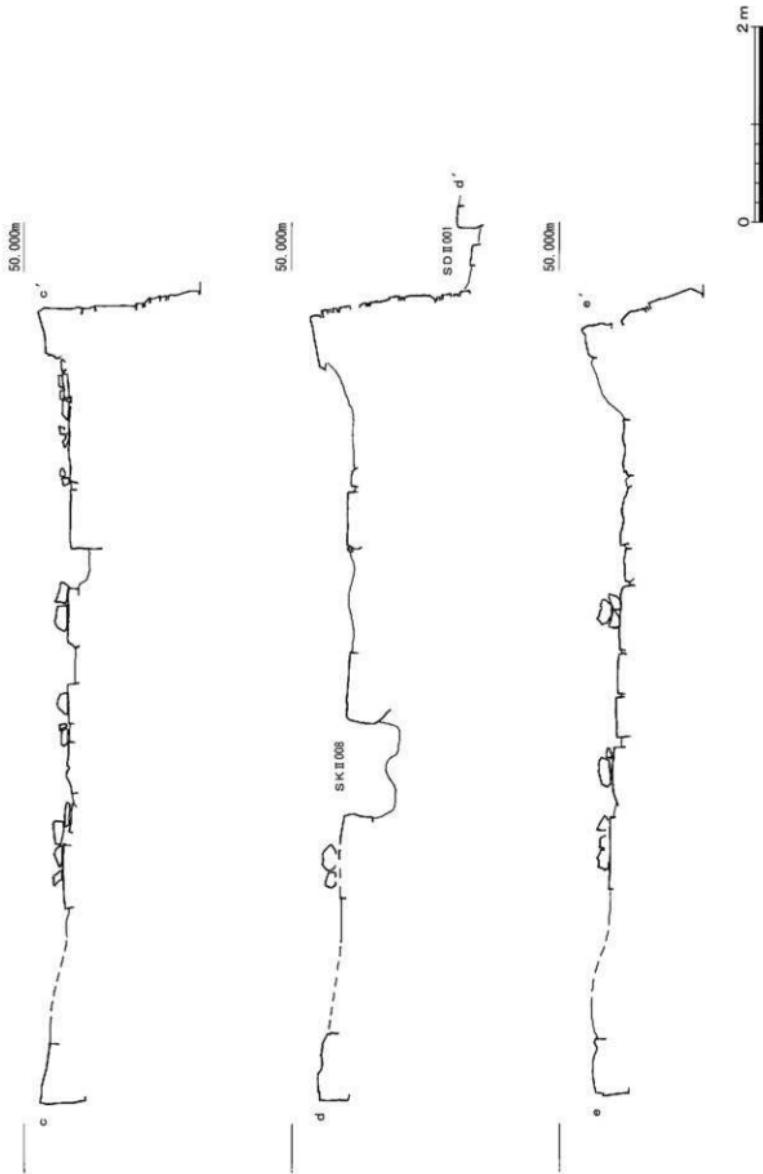


第144図 西廊下全体図

第145図 通構実測図97 西断下断面図1



第146図 通構実測図98 西断下断面図2



(B) 小広間（第147図～第166図）

小広間は、大広間と露地を挟んで対面する建物。調査前は公園整備による日本庭園が設けられていた。

調査では、長方形の建物に対して「コ」の字形の櫓台が検出された。全面に焼土・炭化材がみられ、焼失は明らかである。櫓台上面に礎石はほとんど残っておらず、南端から2mの位置で東西方向に走る幅・深さ共に20cmの溝S D III 001が検出された。溝の周囲と内面は被熱により赤く変色しており、基底面には礎石様の石が約2mの間隔で並んでいた。この部分は「御城内御絵図」での間仕切り位置に相当し、土台か地盤となる横木の抜取り痕跡と推測している。

小広間西端は、北から2間×3間の部屋が二間、3間×3間の部屋が一間の配置で、西端の小広間三階御櫓へつながる。一部の礎石の残存がみられた。小広間三階御櫓の礎石の一部と、南北方向の間仕切りの礎石と思われる。コ字形の小広間櫓台石垣の北西側天端は、部分的に一石はずされている。これは公園整備で設けられた藤棚や石碑への往来の都合のためにはずされたもので、同時に背後のぐり石も削られている。

櫓台の内側は、東西17.8m、南北5.5mの穴蔵であった。穴蔵の内部は、検出した礎石も含め周囲の石垣も非常に被熱しており焼損が激しい。間り通路と同様に、周囲を囲まれた中に上部構造物が落下したこと、被熱が周囲より激しかったためと想定している。炭化材の残存も間り通路に次ぐ量である。穴蔵周辺の石垣は、南面の残存状態は比較的良好だが、天端石ははずされた部分が目立った。東面の石垣は、北隅を中心に築石・ぐり石が大きく外されている。北西側も天端石は全て外されていた。

穴蔵の床面は、焼失時、全面に土間タキが施されていた。この面で、S X III 002・礎石・埋設甕を検出した。S X III 002は、穴蔵の北辺で検出した。小広間の露地に面した部分は、「御城内御絵図」では開放された状態の表現がされている。S X III 002は、その基礎土台である。安山岩・凝灰岩の切石を、穴蔵北辺を塞ぐように東西に並べ、露地に面した北側を中心に漆喰を施している。木質部は残存していないが、本土台は幅約20cmであったようである。ほぼ中央のF89-57グリッドにS X III 002を挟むように南北に凝灰岩切石を置いた部分があり、ここに小広間地下への出入り口があったと考えられる。なお、安山岩・凝灰岩の切石の下部に安山岩の礎石がみえる部分があり、以前のS X III 002は単独の礎石または礎石列であった可能性が高い。S X III 002から南へ約2mで床東と思われる東西方向に並ぶ礎石を検出した。約2mごとに9間あり、長軸が80cmを超える大型の安山岩礎石が配され、東から2・6・8間目には間に長軸60cm前後の礎石が置かれている。礎石上に一辺が約20cmの柱痕跡や炭化材が残ったものがあり、炭化材はマツと鑑定されている。西端の礎石は穴蔵西壁に接している。この礎石は、小広間の間仕切りに相当する部分と思われる。F89-58グリッドのこの礎石列とS X III 002の間からは、長軸100cmを超える長方形に加工した安山岩を検出した。同様の安山岩は、F90-58グリッドの南壁に沿った部分でも検出した。いずれも他の礎石と同様に、地面に埋め込まれ安定している。F90-58グリッドでは、他にも南壁に沿った小振りな礎石を検出している。30cm前後であり、床に置かれたものが多く、床補強のために補足的に置かれたものと判断している。焼失時の地表面下から検出したものもあり、焼失前から礎石を埋める改変があったことがわかる。

穴蔵南側の石垣近くでは直径40cm程の甕を5基検出した。甕の周囲に漆喰を塗った遺構である。東からS J III 001～005とした。S J III 001とS J III 002、S J III 003とS J III 004は、それぞれ近接して設置されており、2基がセットで配置されたようである。西端のS J III 005は1基だが、周囲には2基分のスペースが設けてある。漆喰の表面は甕に向かって下がっており、周囲6か所には礎石様の石を据えた痕跡が認められたため、日字形の仕切りが存在した可能性を想定している。柱を立てて壁をまわし、便所として使用したのであろう。いずれも焼土下からの検出であり、焼失前から設置されていたものである。内部の精査を行ったのはS J III 001・002で、他は上面確認のみである。S J III 001・002の内部からは、魚骨などが出

土している。

小広間の北で S D III 002を検出した。露地の周囲に配された溝で、本来は各建物の雨落ち溝を兼ねており、雨水を後述する S X III 049へ誘導したものである。凝灰岩の切石を組合せた構造で、小広間北側の S D III 002については、検出時は蓋をされ暗渠状であった。本来は雨落ち溝として開渠で水を誘導していたが、焼失後に改変されたようである。小広間から露地は、焼失後に礫や瓦で整地されているが、これを切り込んで S D III 002に達する掘り込みを確認した。暗渠化した際の掘り込み、またはメンテナンスした際の掘り込みであろう。S D III 002と S X III 002の間の焼土からは、大量の板ガラスが出土した。地表面に密着しているものもあり、焼失時に建物が倒壊する前に被熱や建物の変形により破損して落下したものと想定している。このことから、小広間の北面には板ガラスが使用されていたことがわかる。

S D III 002の延長で露地の南西角に当たる部分には S X III 049としたマスが設けられていた。一辺135~150cm凝灰岩板石を組み合わせたもので、露地の雨水等を集約し、S D III 027へ流し飯田丸側へ排出するものである。深さは80~86cmで、底石は2枚の凝灰岩板石を南西に下がるように組み合わせている。北面の西寄りに S D II 001が接続し、東面の南寄りに S D III 002が接続する。西面南寄りの S D III 027との接続を含め、いずれも長方形の穴が穿たれている。壁を構成する板石にはほぞが切られており、接続を強化している。

小広間から露地は、焼失後に幾度も整地されている。焼土層直上の整地層は、焼けた瓦や焼土を多く含む土や、礫を多く含む土で、その上に混入物の少ない整地土が乗る。焼失後の整地である礫層上面で S K III 093~096を検出した。本来の掘り込み面はもっと上位であろう。

小広間三階御櫓

小広間三階御櫓は、本丸の南西端の西廊下と小広間の角に設けられた櫓。小広間櫓台西に拡張された二様の石垣上にある。絵図や古写真では、小広間の屋根を初重とし、これに直交して入母屋屋根を重ねた櫓である。「隈本御城之事」に「小広間西ノ三階」「下重五間四方」とあるが、「御城内御絵図」には5間四方の間仕切りは無い。調査前まで公園整備による藤棚や石碑等があり、それらの基礎により旧地表面や礎石が搅乱されて、一部の礎石は抜かれている。調査の結果、搅乱部分以外は焼土の残存状況は良好で、石垣・礎石・ぐり石の焼損が激しいことを確認した。多層構造物の崩落による燃焼材の多さに起因すると想定している。

櫓の土台は、西面と南面は石垣の天端に乗り、北側は礎石である。東側は小広間土台西端から1間東に礎石を置いているが、北東隅を除いて抜かれたものや元位置でも不安定なものが多い。三階御櫓四隅の標高は、南西49.5m、北西49.5m、北東49.6m、南東49.9mである。三階御櫓南端の石垣は、小広間土台石垣と拡張石垣東端では約40cmの高低差がある。この段差は、小広間土台が北へ向かうにつれて下がり、三階御櫓の北側では小広間側との高低差はほぼ無くなる。櫓内の外側1間に、土間を検出した。土間は、北側は明瞭に残存していたが、西側・南側は近現代の搅乱により残存は部分的である。東側は、土間の有無は不明瞭だが、小広間土台西端天端石垣の櫓外側1間に当たる部分がはずされており、通り抜けの便宜が図られていたようである。

三階御櫓の内側3間四方は、礎石が石列になっている。このうち東側の列は小広間櫓台西端に乗る。西側の石列は西廊下から連続している。東側の列以外は、ぐり石内に埋め込まれており、石列上面とぐり石上面の高さはほぼ同じである。この石列上には、東側の列を除き挿石が乗る。挿石は安山岩と凝灰岩を使用している。挿石は南側の天端石上にもみられ、西側の天端石上にも一部みられる。3間四方の内側は、独立した礎石を4石検出した。一部はぐり石に埋まっていた。いずれも安山岩製で、東柱の基礎になる礎石であろう。挿石がみられるものもある。三階御櫓のほぼ中央から、凝灰岩の板石が複数点出土している。石材の下に焼土が入っていることから、焼失時に床上から落下した可能性が高いものと想定している。

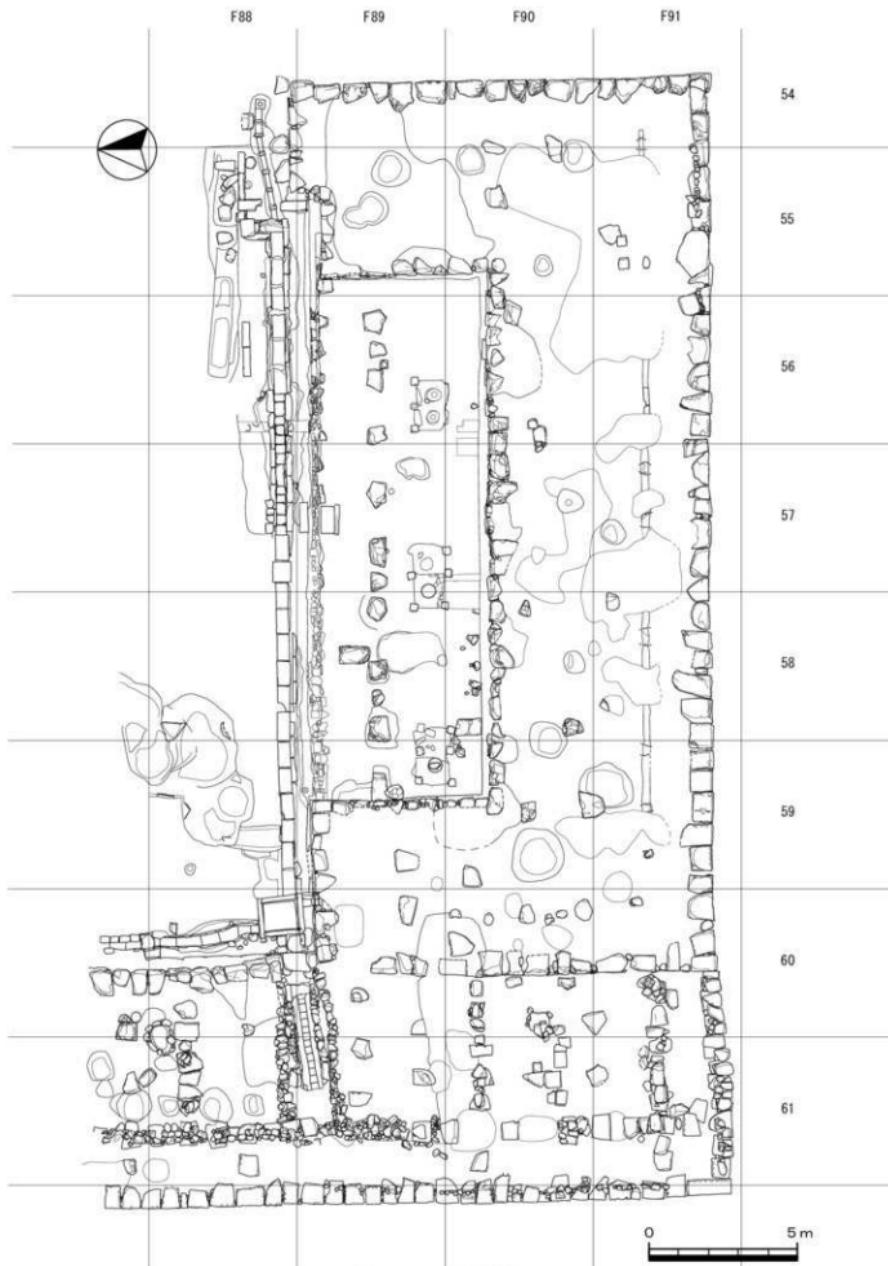
三階御櫓の土台は、大きく小広間櫓台と拡張石垣上に分かれる。小広間櫓台の西端は、三階御櫓内で段差を持ち、築石2段ほどの石垣として露出している。小広間櫓台南西隅の高さと、拡張石垣南端の東西両端の高さは、小広間櫓台南西隅49.9m、拡張石垣東端49.5m、拡張石垣西端49.5mである。拡張石垣東端は挿石上の高さであり、挿石下の本来の天端石の高さは49.1mである。挿石を除いた場合、拡張石垣南端天端は西から東へ40cm下がる。拡張石垣西端の天端は、後述のSDⅢ027付近と比べても南北の高低差はほとんどない。三階御櫓内側三間四方の石列は南側で西から東へ約10cm下がる。西側で北から南へ約20cm下がる。北側は西から東へ約10cm下がる。挿石は西廊下にもみられるが、変異の大きい三階御櫓内側で安山岩築石や凝灰岩板石・ぐり石などの大振りの石がみられる。拡張石垣の沈下による調整用の挿石と想定しているが、設置した時期は不明である。

三階御櫓の北側は、「西之廊下」や「御輪居櫓」と呼ばれた櫓である。三階櫓とSDⅢ027の間に礎石を3石確認した。3石の柱間は芯心で1.7m。

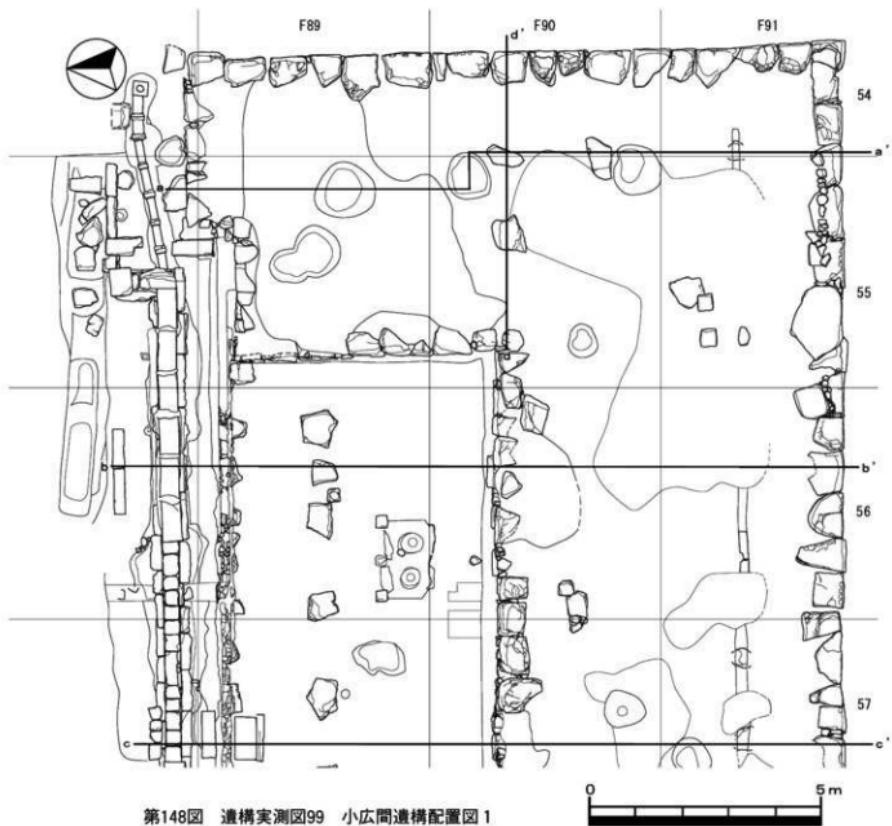
西廊下と小広間の境に、SDⅢ027を確認した。小広間北側のSDⅢ002の延長に当たる溝で、SXⅢ049としたマスに露地の雨水を集約し、飯田丸側へ排出する用途のものである。機能時は、建物の下を通っていた。西廊下土台石垣上面での幅は、上流のSXⅢ049側で約1.1m、下流側で約1.4m。西廊下土台石垣上面からの深さは、上流側で約2m、下流側で3.3m。約18度の傾斜で西側へ下がっている。西廊下土台石垣東側裾から4.8mまでは開渠だが、それ以西は暗渠となり、西廊下西面石垣に開口している。西廊下土台石垣上面から下へ約2mで南北両面に幅約35cmの段を持ち、段以下は幅約70cmとなる。この段から下位については側石に目地漆喰を施している。底面は平瓦を連続して敷いて南北の脇を漆喰で固めている。SDⅢ027の東端は、西廊下東面石垣裾に合致し、開口部は安山岩によって天井と側石が丁形に組まれ、SXⅢ049との間は凝灰岩板石による側石で接続されている。溝底の瓦敷きは、SXⅢ049まで続いている。SDⅢ027の東端から約110cmと約150cmのところで溝底に大きな亀裂がみられ、約150cmの亀裂の部分では西側が約20cm下がっている。

SDⅢ027は、西廊下土台石垣上の焼土が途切れる格好で検出した。焼失時の焼土は、先述のSDⅢ027の段から下位に堆積し、段付近から上位は瓦を主体とした客土で埋められていた。焼失直後は、くぼ地であったと考えられる。焼失後に排水溝として復旧された痕跡は無い。調査時、西側の暗渠入口部分の上位が、SDⅢ027の内部に崩れこんでいた。焼失時に崩落したものである。南北の側壁の石垣も不安定だったため、客土を除去した後で、安全対策のために南北面と西面を一端はずし、焼土屑以下の調査を行った。南北側壁は、安山岩築石で積まれているが、上端はぐり石であった。ぐり石部分の焼損は不明瞭である。SDⅢ027の内部に崩れた石の中に築石大のものは無く、ぐり石としては大ぶりの角礫と川原石であり、暗渠の入口の上部は角礫で組んでいたと思われる。現状では築石を使用して垂直に積み直されているが、本来の組み方や壁面の角度は不明である。また、南北の壁面は、現在整備された状態よりも西側へ続いている。

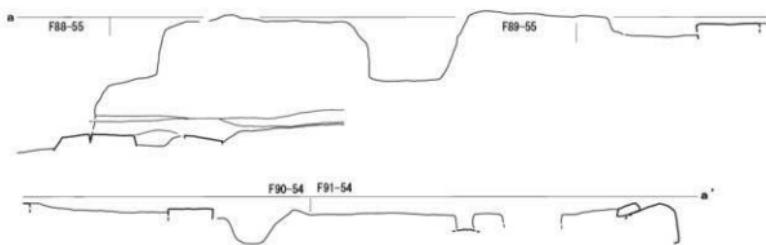
三階御櫓から西廊下の南側にかけては、特殊な遺物が出土している。三階御櫓からは短射銃（第368図87）と時計（第365図82）、西廊下からは「熊本鎮台本營之印」（第387図68）が出土している。印鑑に関しては、石製であり焼失時の熱で破損していた。SDⅢ027の焼土層からはピストル（第359図60）が出土した。本来は上の建物内にあったものである。印鑑が出土した部分とピストルが出土したSDⅢ027は近接している。



第147図 小広間全体図



第148図 遺構実測図99 小広間遺構配置図1



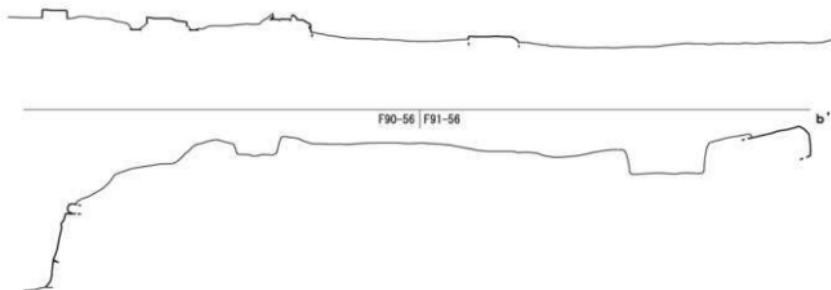
※レベル線は 50.0 m
断面番号は第148図に対応

第149図 遺構実測図100 小広間断面図1

b

F88-56 | F89-56

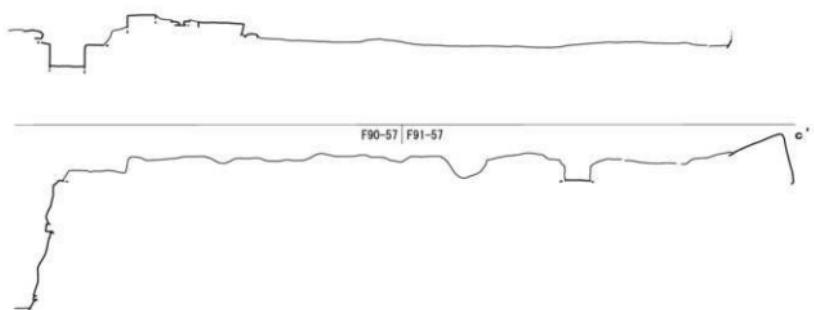
| F90-56



c

F88-57 | F89-57

| F90-57



d

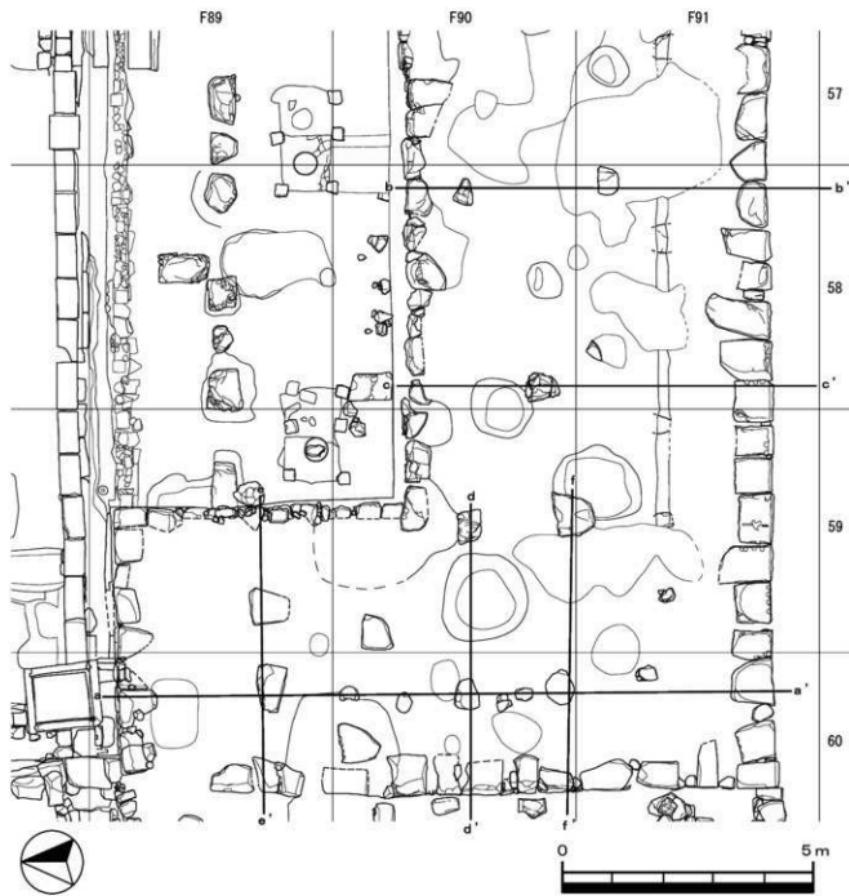
d'

※レベル線は 50.0 m

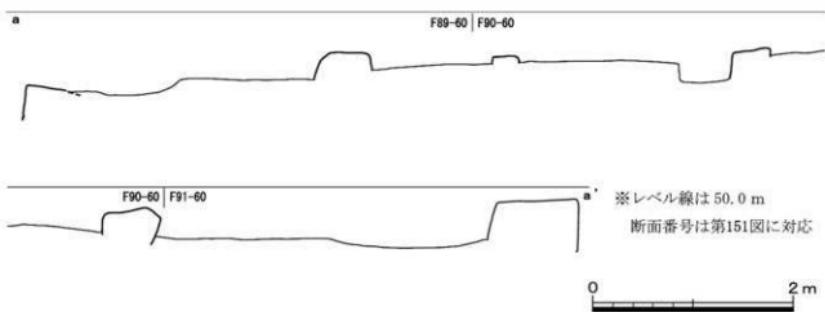
断面番号は第 1 図に対応



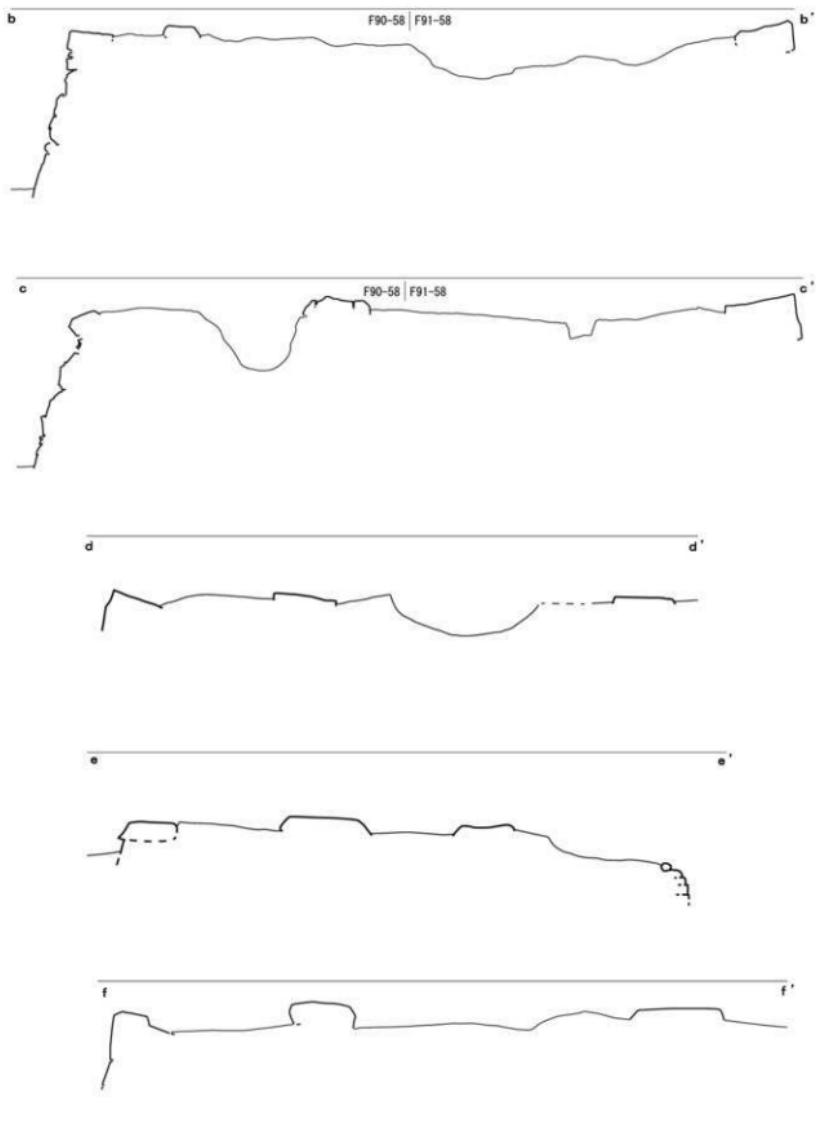
第150図 遺構実測図101 小広間断面図 2



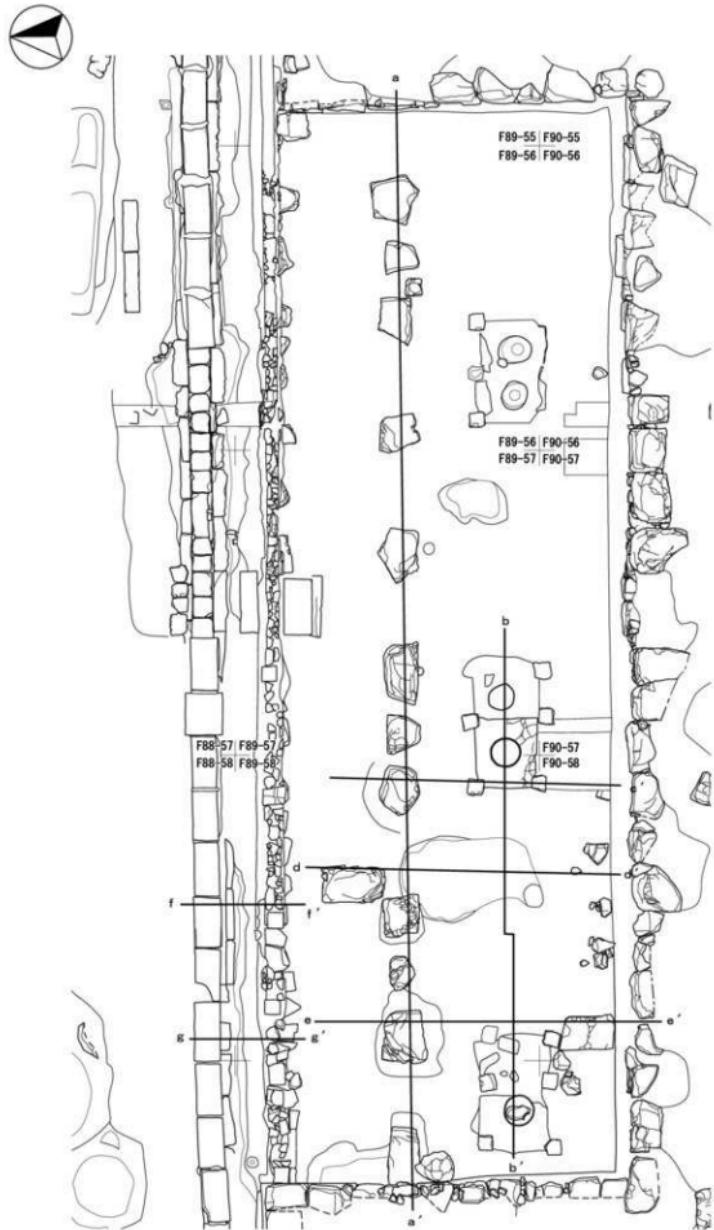
第151図 遺構実測図102 小広間遺構配置図2



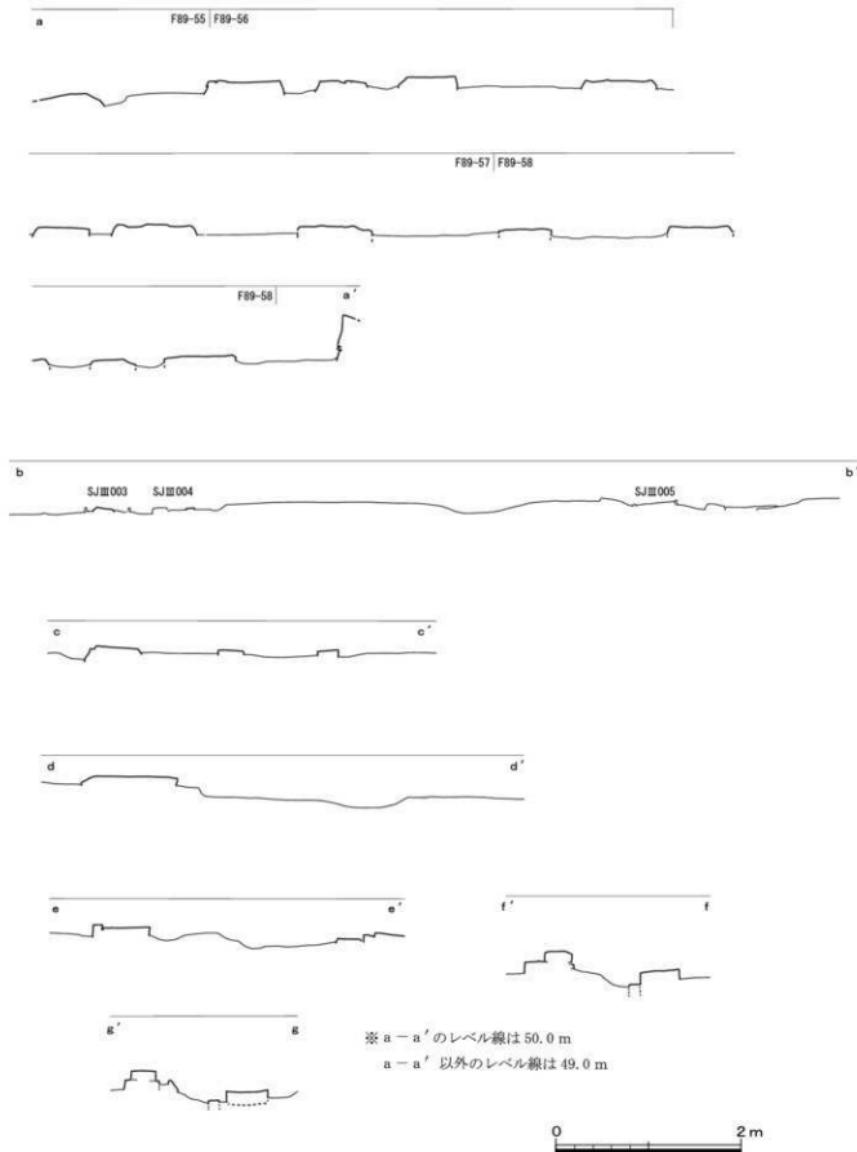
第152図 遺構実測図103 小広間断面図3



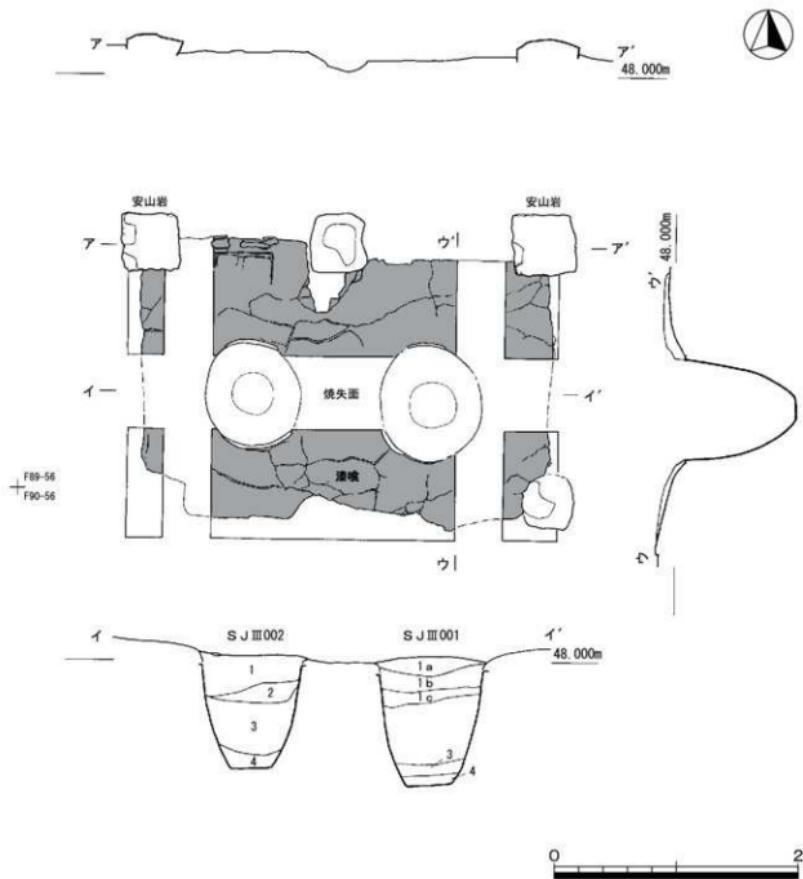
第153図 遺構実測図104 小広間断面図 4



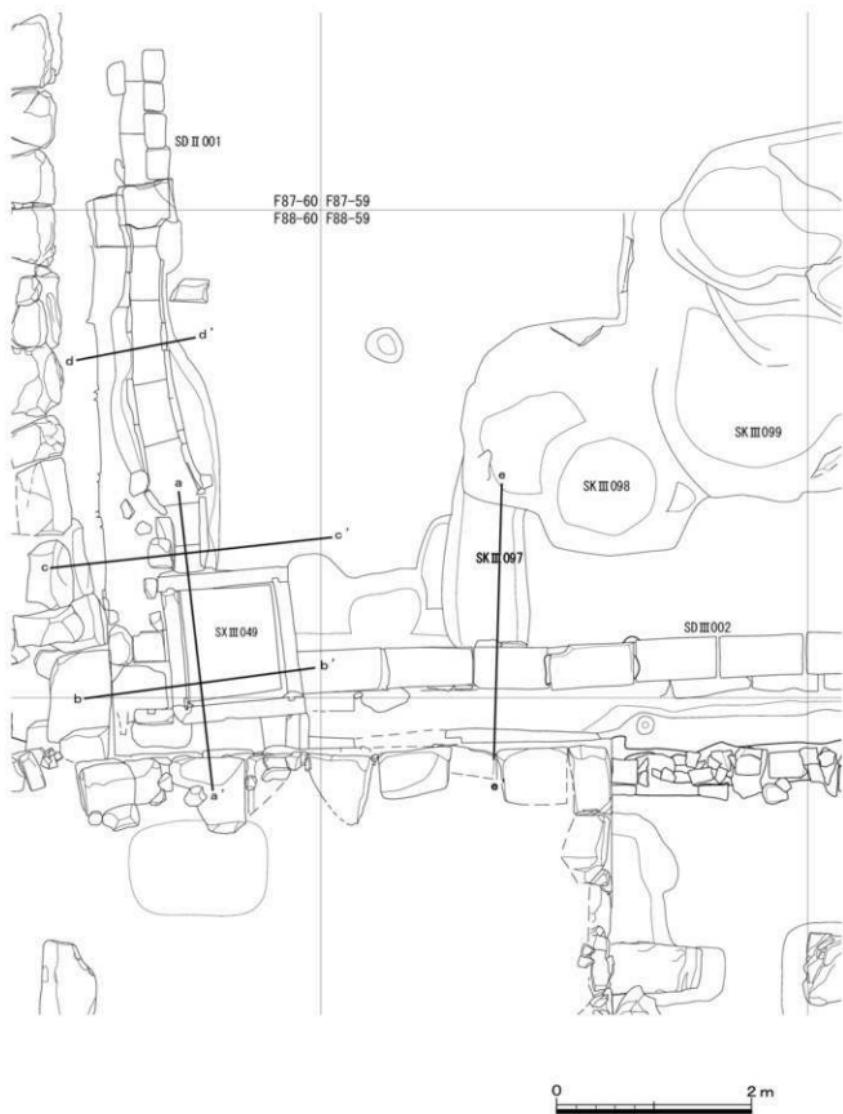
第154図 小広間穴蔵



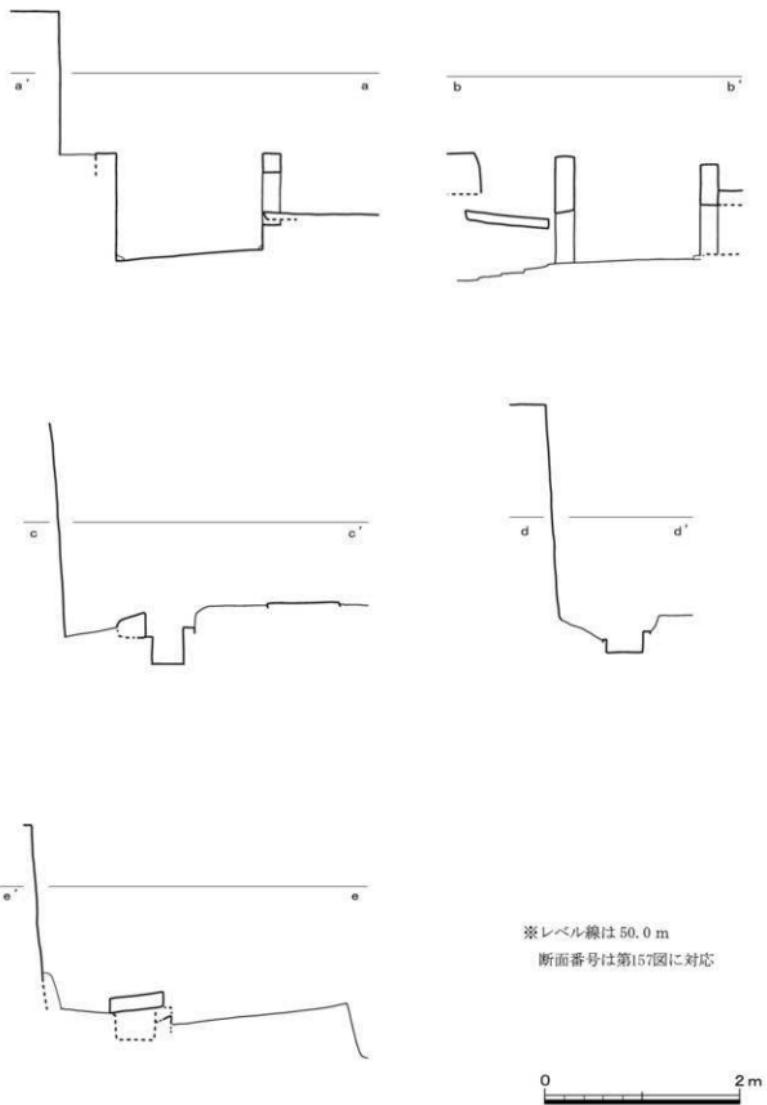
第155図 遺構実測図105 小広間断面図 5



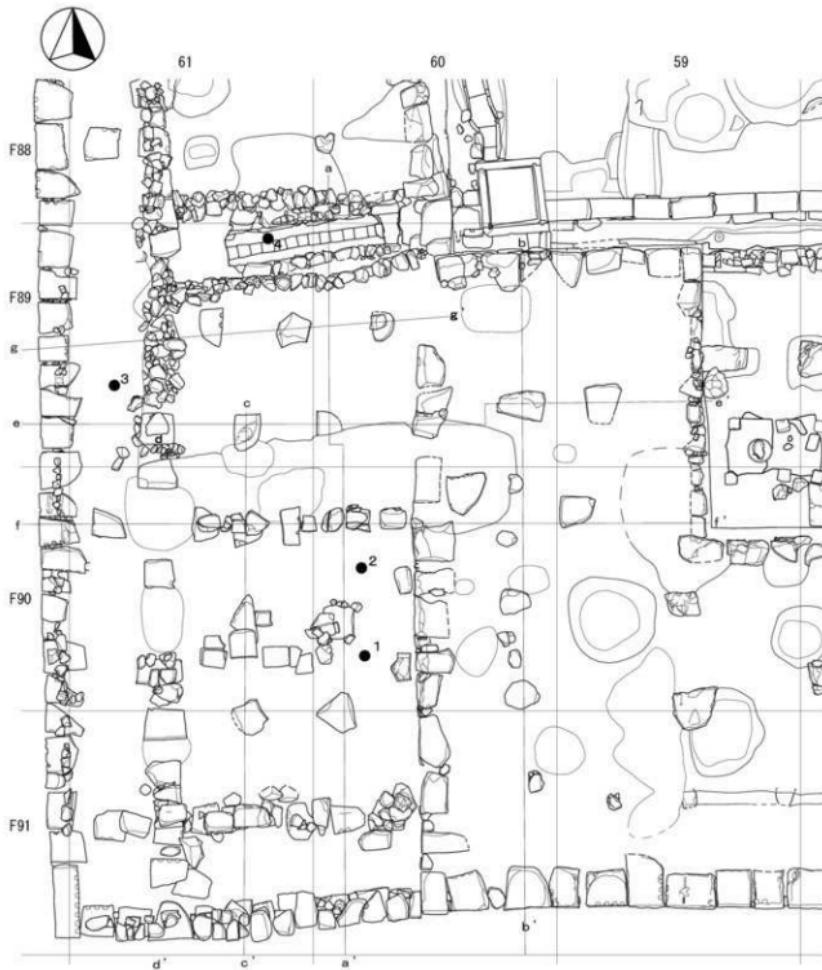
第156図 遺構実測図106 SJ III 001・002



第157図 造構実測図107 SXIII049周辺



第158図 遺構実測図108 小広間断面図 6

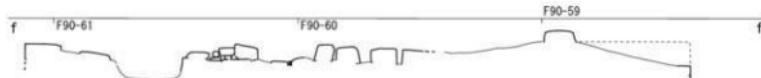
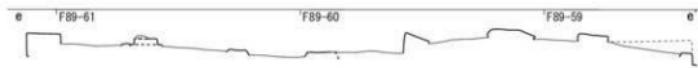
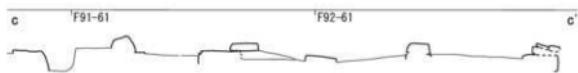
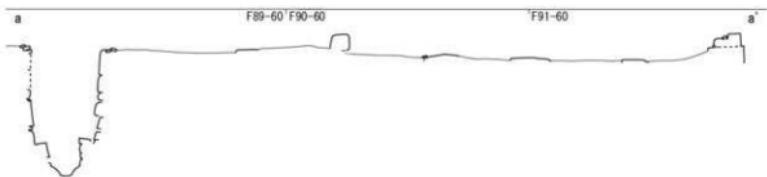


遺物出土地点

- 1 時計（第365図82）
- 2 短射銃（第368図87）
- 3 熊本鏡台本宮之印（第387図68）
- 4 ピストル（第359図60）



第159図 遺構実測図109 三階御櫓付近



※レベル線は 50.0 m

断面番号は第159図に対応

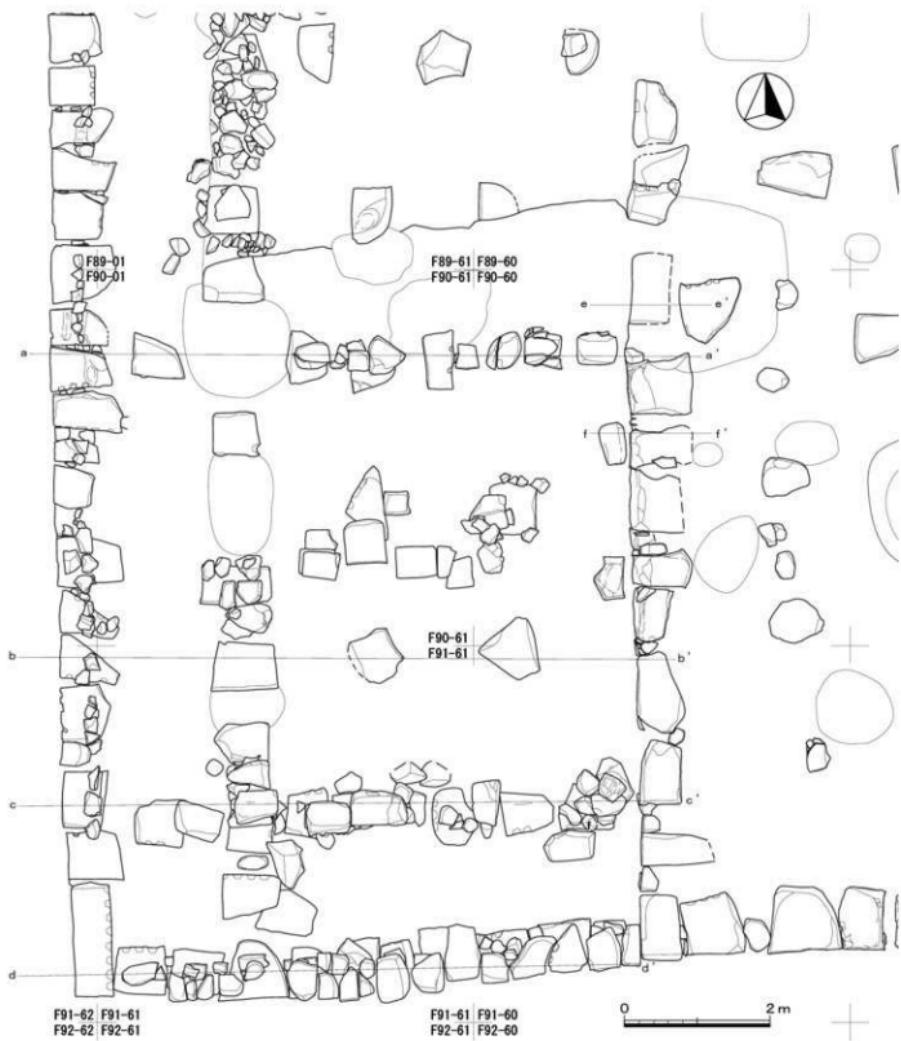


※レベル線は 50.0m

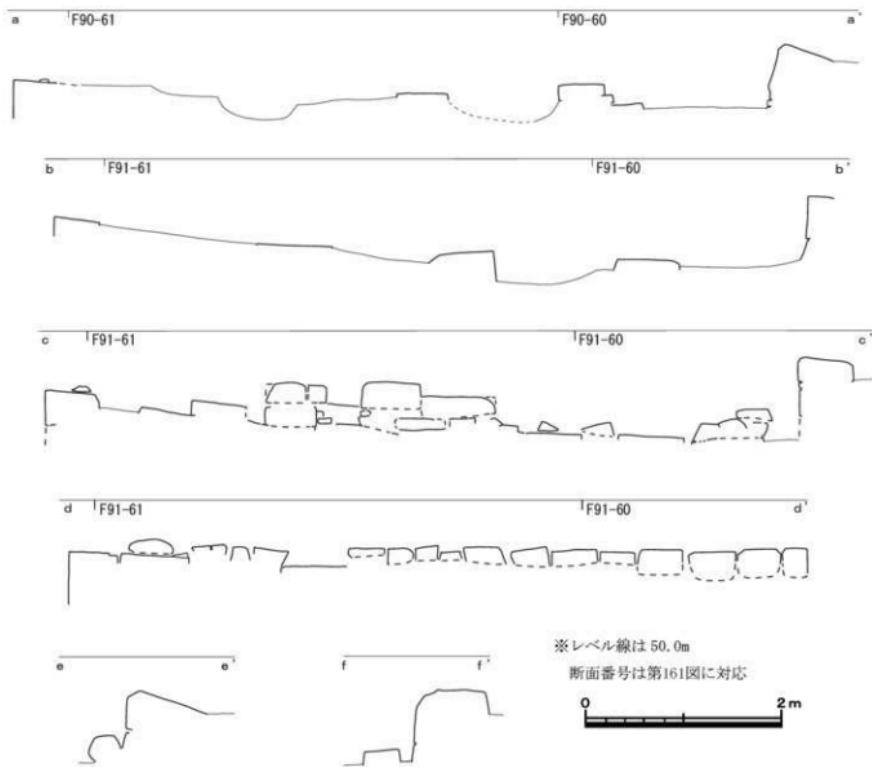
断面番号は第159図に対応



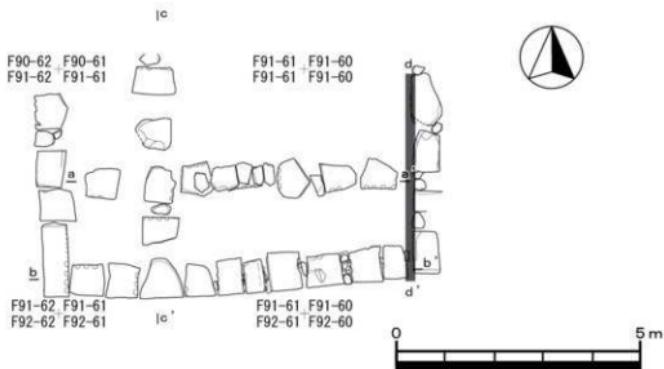
第160図 遺構実測図110 三階御櫓断面図1



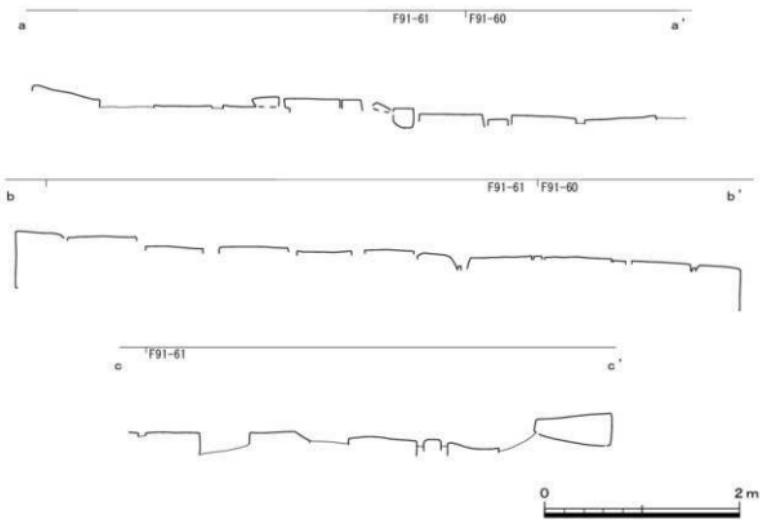
第161図 遺構実測図111 三階御檜平面図



第162図 遺構実測図112 三階御樋断面図2



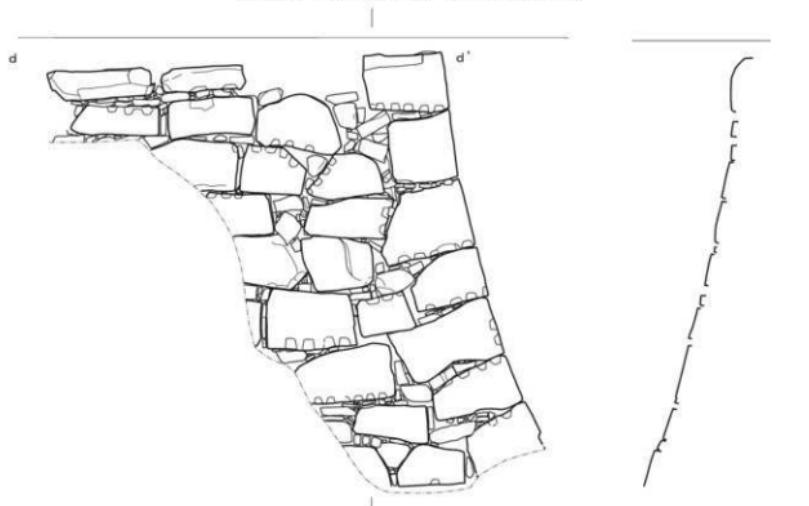
第163図 遺構実測図113 三階御樋撤去後



※レベル線は 50.0m

断面番号は第163図に対応

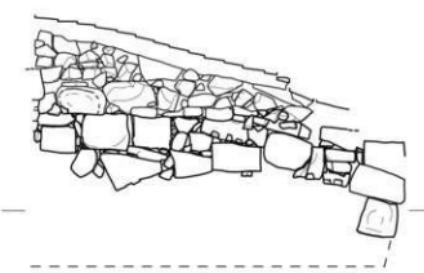
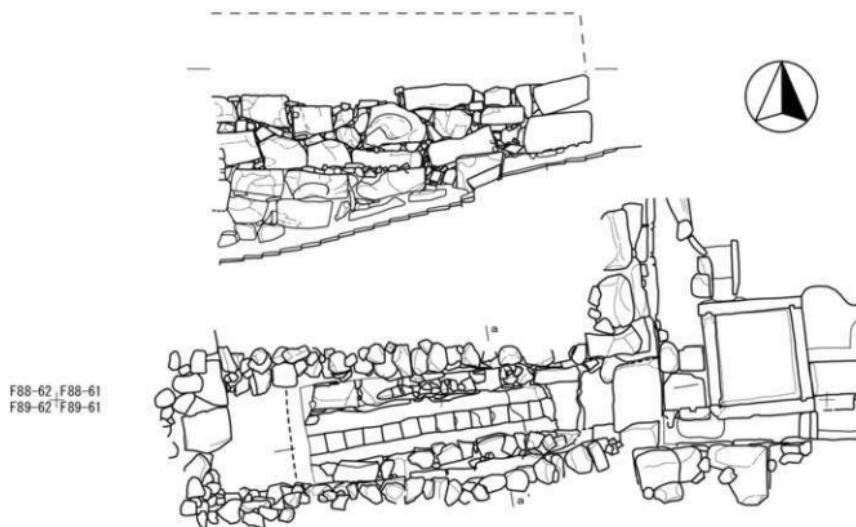
第164図 遺構実測図114 三階御櫓断面図3



※レベル線は 50.0m

第163図の断面番号に対応

第165図 遺構実測図115 石垣立面・断面図



第166図 遺構実測図116 SDⅢ027

(9) 長局御櫓（第167図～第176図）

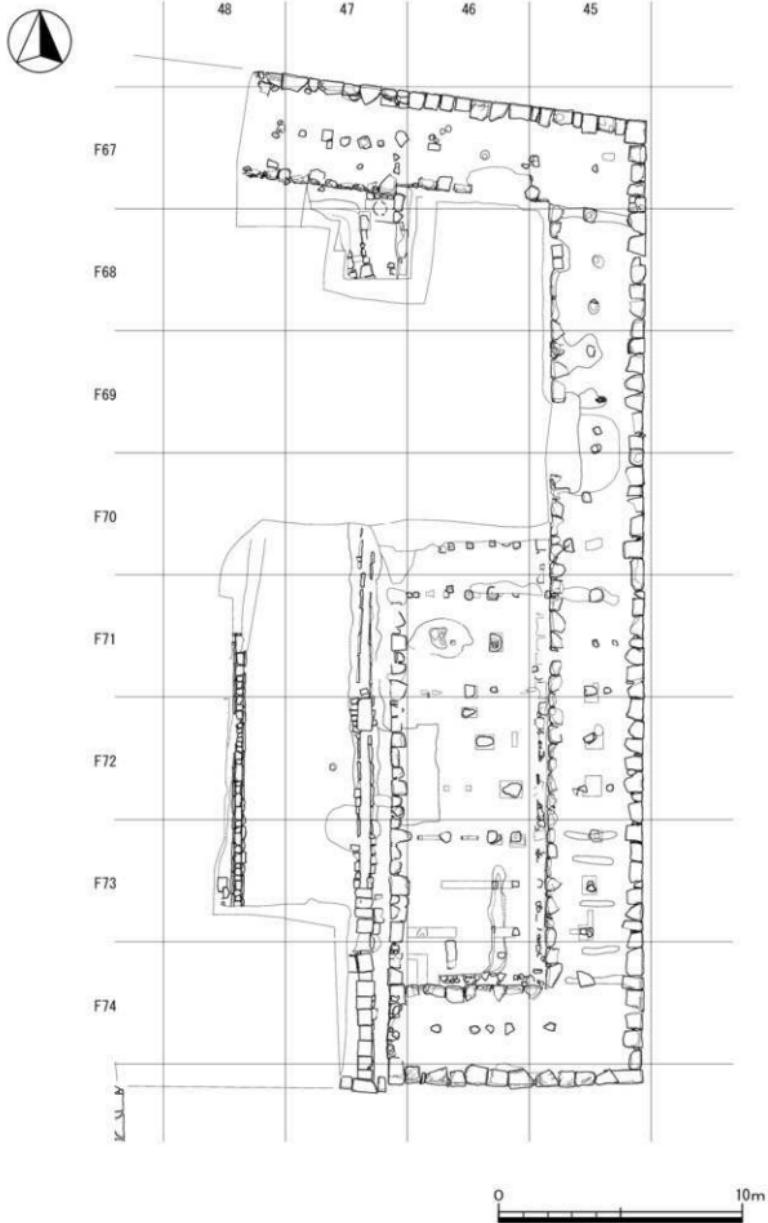
長局御櫓は、「御城内御絵図」の内容と現状石垣から南北20間（約40m）、東西5間（約10m）の平櫓と推測されている。本丸御殿復元整備に伴う電気室等設置の必要性から、櫓の半分を外観復元した。発掘調査は、外観復元を行った櫓の南側2分の1と、北側の櫓台上面を対象とした。調査の結果、全面に焼土層（Ⅲ層）がみられ、検出遺構に被熱の痕跡が認められたこと、焼土中から明治初期の軍用品が多数出土したことから、天守や本丸御殿と同じく明治10（1878）年の火災で焼失したことが確認された。

櫓の土台となる櫓台は平面形が「コ」の字形を呈し、石垣で囲まれた部分に穴蔵状の床下が存在する。櫓台天端の標高は北面で49.9m、南面で50.1m、東面中程の最も低い部分で49.7mである。櫓台上面では約2m（6尺5寸）の間隔で並ぶ礎石状の石が検出されたが、石材の形状や大きさは不揃いで凝灰岩が目立ち、自然面の残る割石もみられた。石の下に本来の礎石と思われる安山岩が検出されたものがあり、上位の石は石垣裏込めの沈下等で高さを調整した挿石と思われる。櫓の西壁の土台は安山岩の石列で、約2m毎に入る大ぶりの石は、「御城内御絵図」の柱位置に相当する。石列の西側には凝灰岩の板石を組み合わせた溝SDⅢ053が並走しており、櫓の雨落ち溝と推測している。部分的に蓋石が架かり、櫓の南面石垣に排水口が認められた。北側は櫓台に沿って折れ、西へ続いていたが、検出部分は焼失以前に埋没していたようである。「御城内御絵図」では櫓の西面に戸の表現があり、床下部分に出入りしていたと考えている。絵図と遺構配置を比較すると、F72・73・47グリッドでSDⅢ053に蓋石の架かる部分があり、絵図に示された戸の位置に相当する。床下部分では、櫓台石垣の裾に沿って木土台のものと思われる炭化材が残存しており、直下に安山岩による石列が検出された。梁間方向に安山岩が約1mの間隔で並ぶ部分が4か所（4列）あり、石の上面には一辺の長さが10～20cmの炭化した柱材が残存していた。F71・46グリッドの2列は、安山岩の並びに沿って厚さ10cmの壁の裾部も検出されており、南側の3列は「御城内御絵図」にみられる間仕切りに使われた礎石である。この2列の間仕切りの中間では、一辺の長さが約20cmの炭化した柱材を伴う単独の礎石と、礎石の抜き取り痕跡と思われる落ち込みが検出された。F72・73・46グリッドでは検出された焼失面が硬化しており、単独の礎石は認められなかった。焼失面は櫓台側に向かって下がっており、床下部分も櫓台の裏込めと同様に沈んだ可能性がある。トレンチを設定し、焼失面下に埋没していた安山岩を検出したが、規則的な配列は認められなかった。

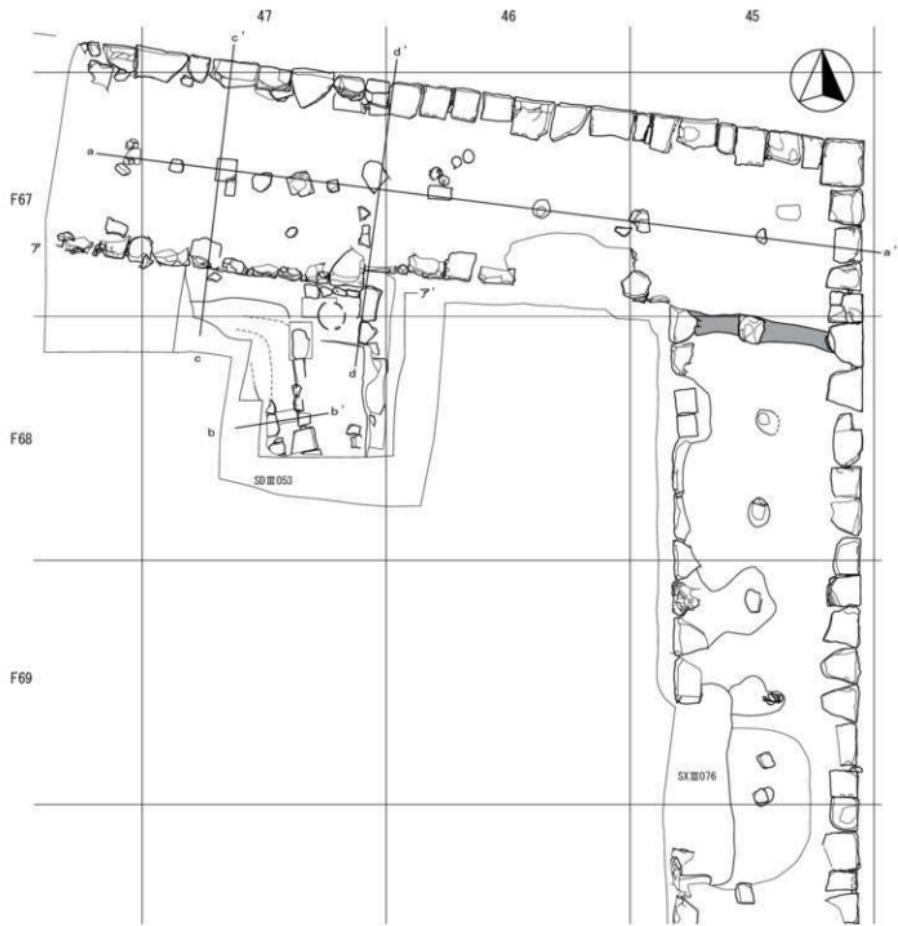
調査区の西端では、南北方向に走る溝SDⅢ054が検出されている。凝灰岩の板石を組み合わせたもので、長局御櫓と平行に走り、F71・48グリッドで東へ折れていた。南側は調査区外へ続いており、御裏御台所に接した溝の可能性がある。

F71・46グリッドで、刀剣類と火縄銃の部品等が出土している。刀、槍と薙刀類、火縄銃の部品と、それぞれ種類別にまとめて出土しており、刀は太刀が2振、刀4振、脇差2振の計8振、槍・薙刀・長巻類は合わせて30本（振）近い数である。槍・薙刀類は床下部分の間仕切りに沿うような状態で出土したため、床下に収納されていたものと考えていたが、直下に板状の炭化材が出土したため、本来は屋内にあったものである。刀も同様に、屋内に束ねて置かれたものが火災で落下したものと考えている。F73・74・45・46グリッドでは、底板と思われる炭化材と鉄製の瓶が出土した。瓶は5セット検出され、樽状の容器が置かれていたものと推測しているが、本来の形状や内容物は不明である。この他に、洋式小銃の銃剣やストーブの破片、草鞋等、多様なものが長局御櫓から出土している。いずれも焼失時に長局御櫓に存在したものである。

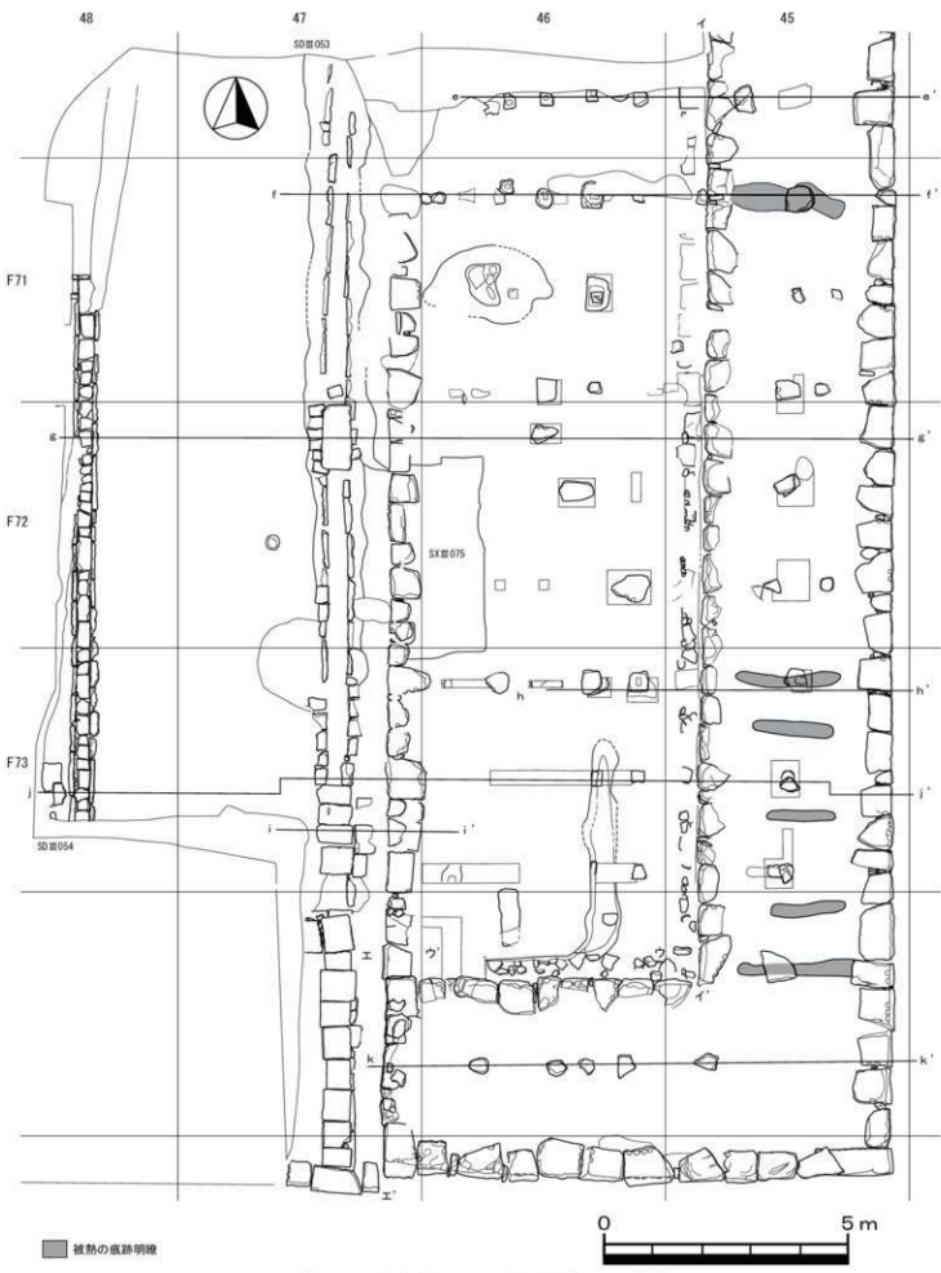
焼失後の長局御櫓跡には、客土（Ⅱ層）上に建物が建てられていたようである。F73・74・45・46グリッドで、SBⅢ014・015とした建物の基礎と思われる礎石の並びを検出した。第六師団等に関連するものか。また、第2次世界大戦時のものと思われる防空壕SXⅢ075・076も検出している。



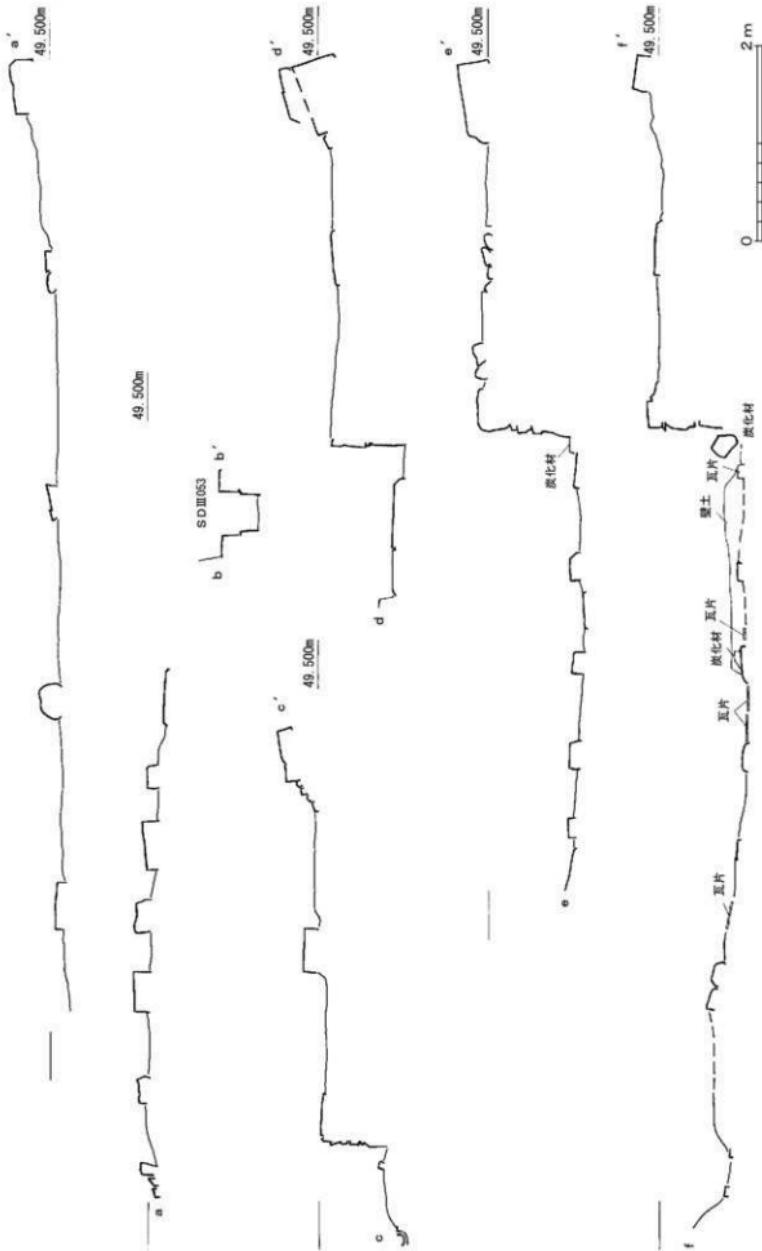
第167図 長局御櫓全体図



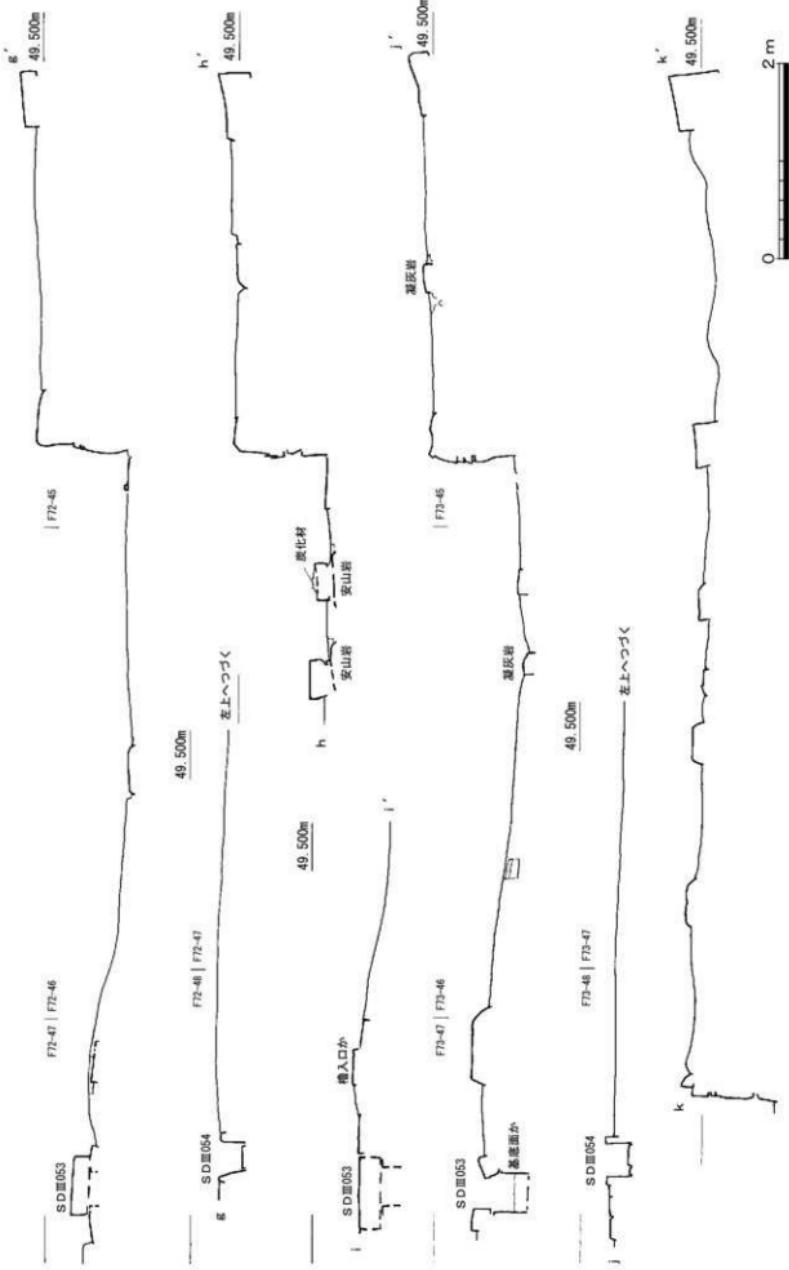
第168図 造構実測図117 長局御櫓平面図（北）



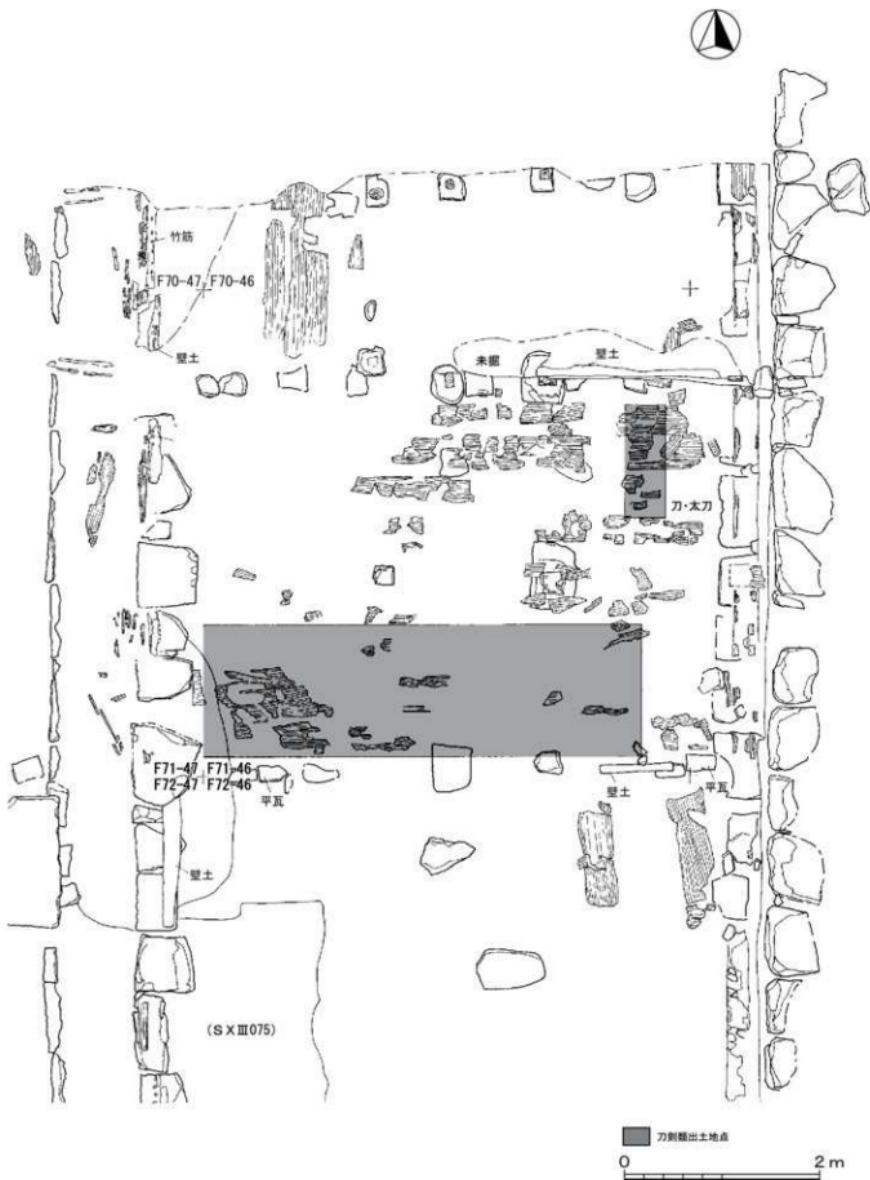
第169図 造構実測図118 長局御櫓平面図（南）



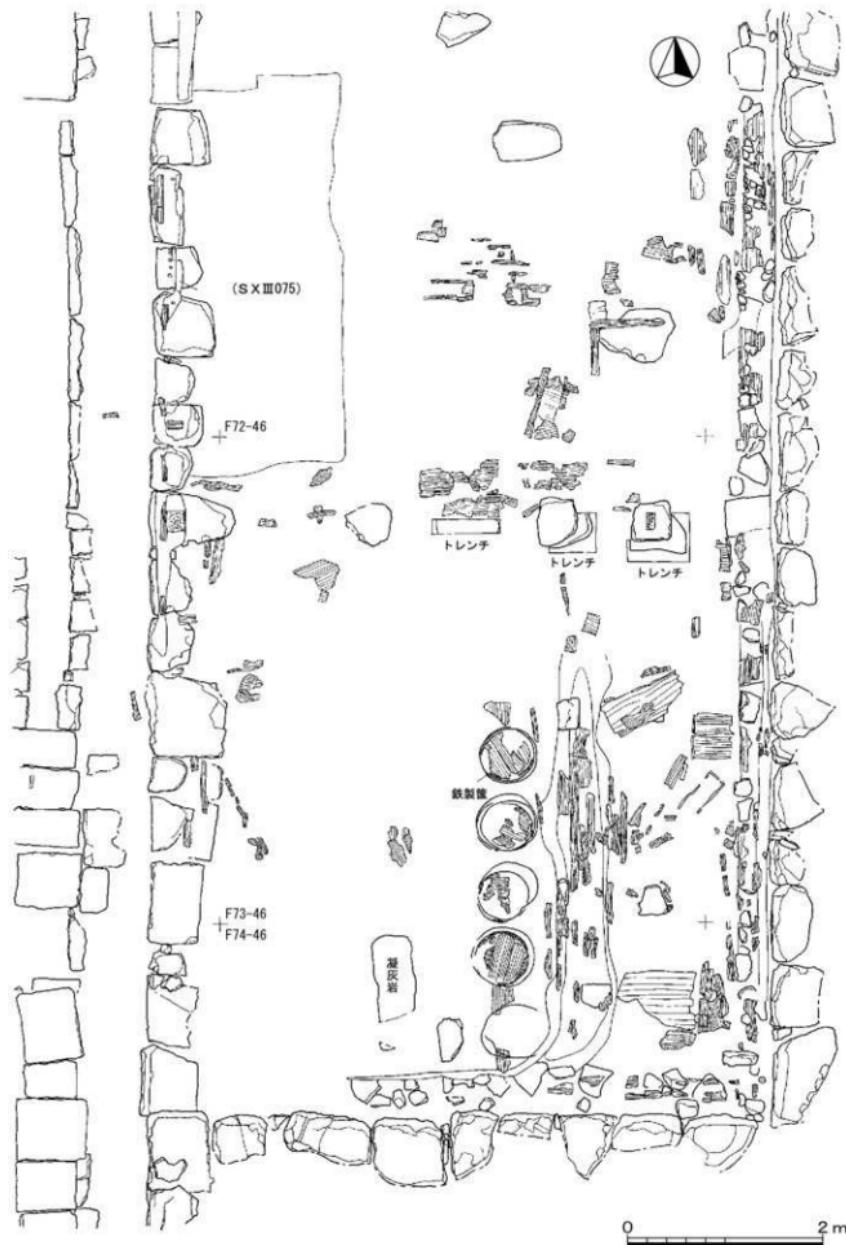
第170圖 通構実測図119 長局御構断面図1



第171図 測量実測図120 長局御構断面図2



第172図 遺構実測図121 長局御櫻炭化材出土状況 1



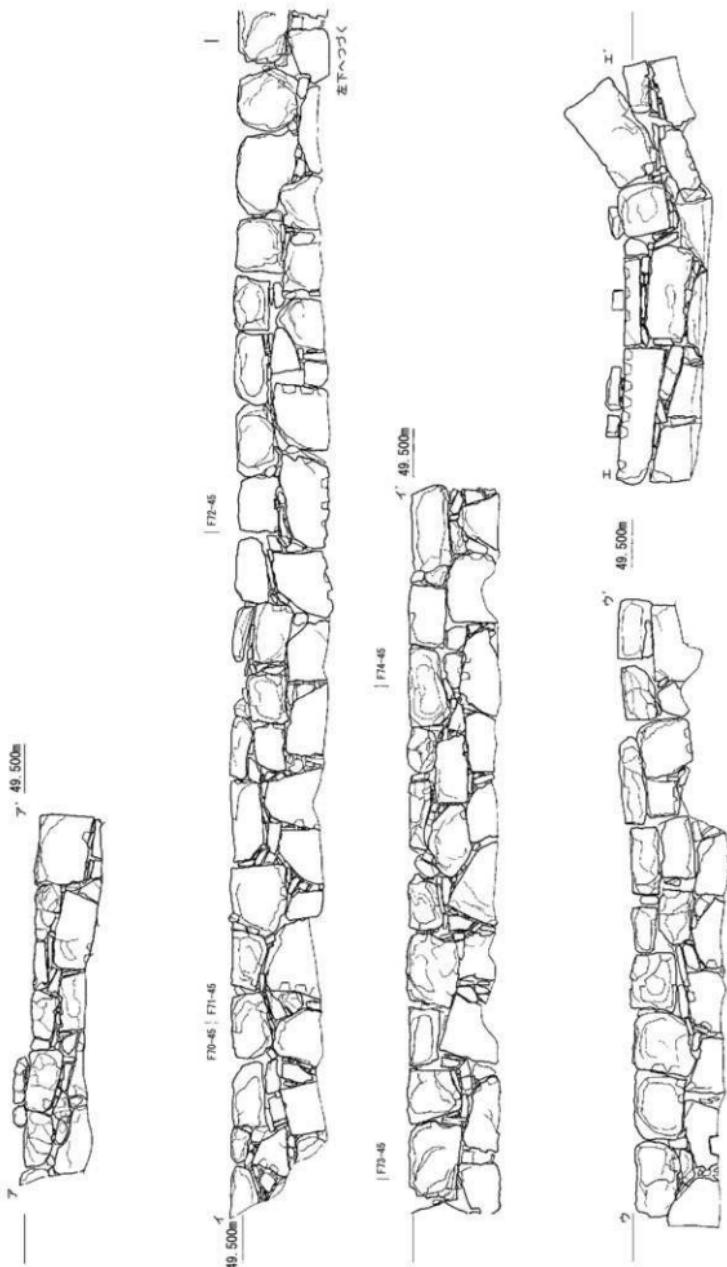
第173図 遺構実測図122 長局御櫓炭化材出土状況 2

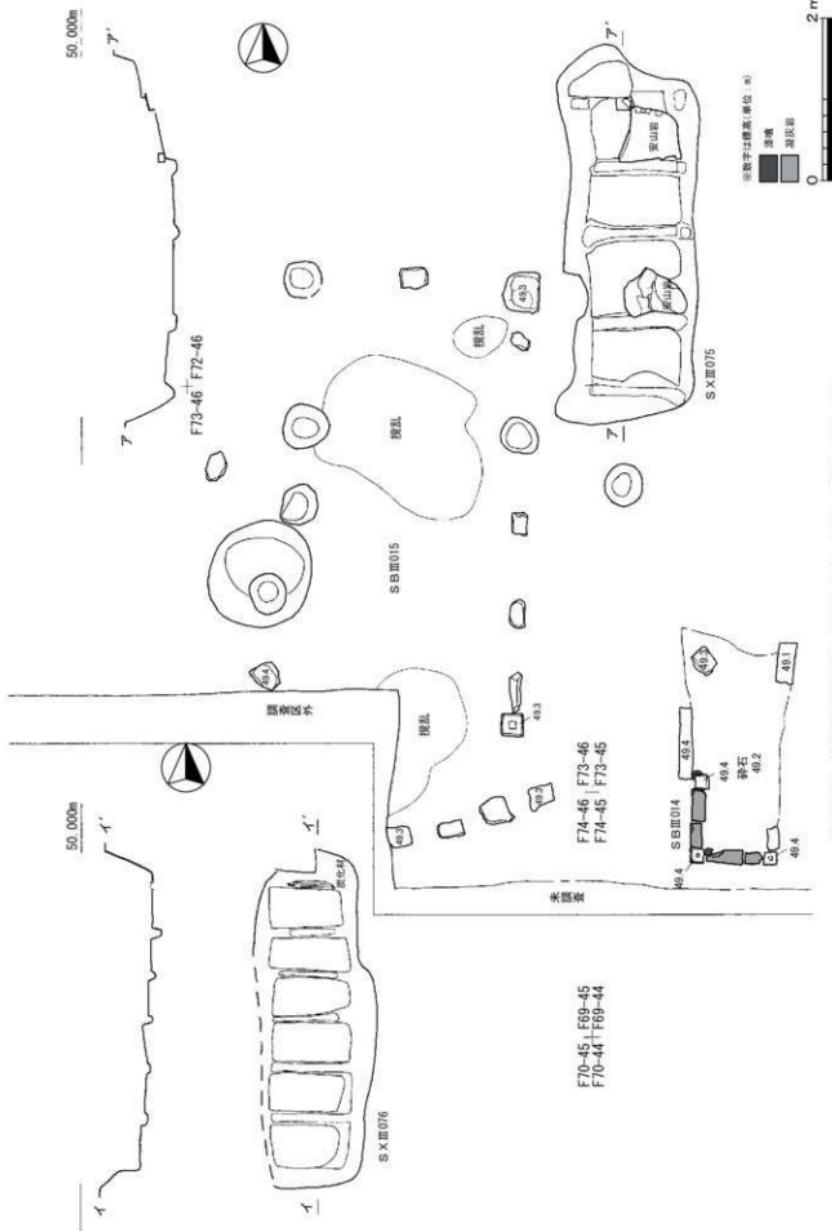
第174図 刀剣類出土状況



第175図 遺構実測図123 長局御墳立面図

0 2 m





第176図 遺構実測図124 SB III 001・014、SB III 075・076

⑩ 御天守廊下（第177・178図）

本調査区は、本丸御殿復元整備工事時の仮設通路設置に伴うもので、大天守南東側に位置する。御天守廊下の南北部分にあたる。御天守廊下は、大天守への本来の進入路の一部で、進入経路は、現在の売店の御天守方口之間から耕作槽御門上を抜け、御礼之間から北に折れて天守前広場の西端の御天守廊下を通り、現在の大天守出口から大天守に入る。現況では、御天守廊下部分は天守前広場と同じ高さだが、本来は天守前広場より高い石垣があり、その上に建物が乗っていた。調査は、仮設通路土台部分のみで、南北8.5m、東西5.5m。部分的に東西方向へ4mのトレーナーを設けた。現況の標高は49.7～50mである。調査後も遺構は保護されている。

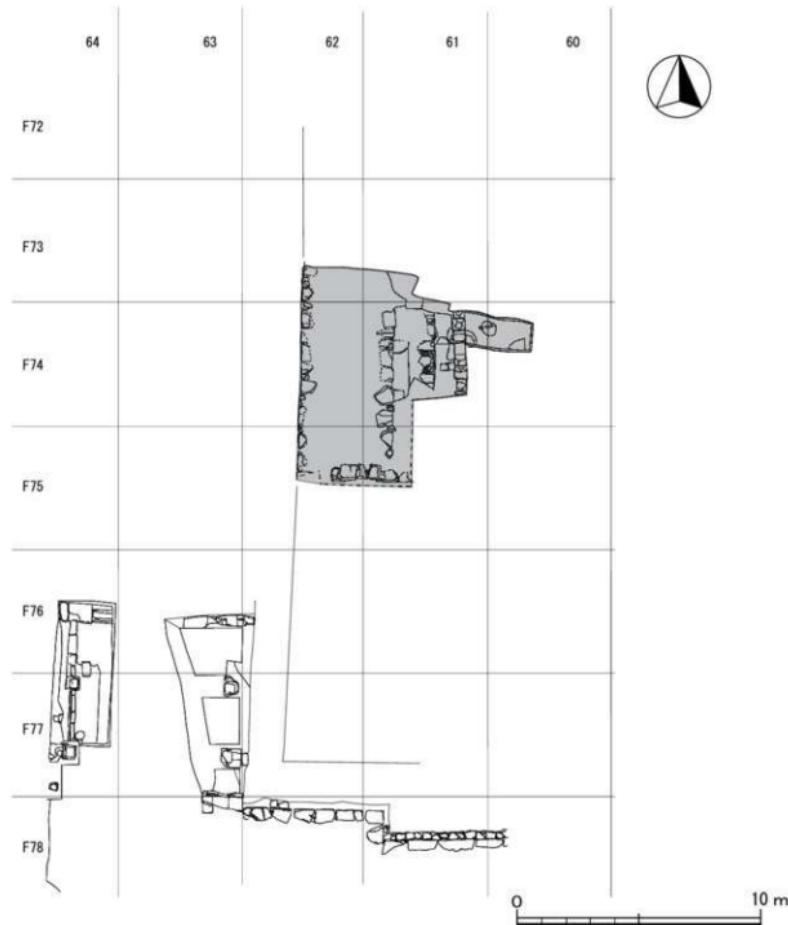
検出した遺構は、南北方向の石垣3条（石垣1～3）、東西方向の石垣1条（石垣4）、南北方向の石列1条（石列1）、東西方向の石列1条（石列2）、礎石4個（礎石1～4）である。最も東に位置する石垣を石垣1とする。石垣1は安山岩による石垣である。調査区内で約3mの長さを検出したが、北側は搅乱され、南側はコンクリート基礎があり、どのように調査区外へ伸びるのかは確認できていない。面を東に向かって、角礫や川原石の裏込めを伴う。上面のみの検出で、深さの確認は行っていない。石垣1東面から西へ1.7mで検出した石垣を石垣2。石垣2も安山岩による石垣である。検出は1段だが、この石垣に先行する礎石（礎石1・2）が石垣下に食い込んでおり、この石垣が根石と考えられる。南北に6mの長さを検出した。北側はさらに北へ延びるようだが、南側は石垣1と同じコンクリート基礎で破壊されている。石垣3は、現在の天守前広場西端の石垣上端である。石垣2と石垣3間は栗石で、栗石の頂部から石垣3の天場までは50～60cmほど下がっている。調査区南端で検出した石垣4は、南に面を向けた安山岩による石垣であり、2段を確認した。西端は1ないし2石分の築石が外されており、石垣3とどのように重複していたのかは不明。石垣2とは重複部分の石が外されているが、石垣4が後出すると想定している。東端は搅乱により破壊されており、石垣1との重複も不明である。

石列1は、表土とその下位の現代の整地層中に安山岩を並べたもので、現表土上面に一部露出していた。公園整備に伴うものと考えられる。石列2は、板状に加工された石を並べたもの。2石を確認している。「御城内御絵図」にある御宝蔵への壁土台石と思われる。礎石は4石検出した。礎石1・2は、石垣2に接して検出した。上面の高さは約10cm異なるが、いずれも石垣2下に食い込んでおり、同じ性格であると判断している。礎石1・2の芯心間は2m。礎石3は石垣1には接している。礎石4は、トレーナーの東端で検出した。礎石3・4は、石垣1を埋めた整地層に置かれており、上面の高さもほぼ同じで、一連の建物の礎石の可能性が高い。芯心間は3m。この礎石3・4を埋めて石列2は設けられている。調査区内の土層は、A-A'である。1・2層は、混入物も多く現代の整地土と判断した。3層は黒褐色土で、1・2層ほど混入物は多くなく、直下に焼土がみられる部分もあることから、焼失後の整地層と判断している。3・4層は、黒褐色土。3・4号礎石を埋めたもので、この層の上面に石列2がある。この層には九曜文瓦が含まれていた。5層は褐色土。石垣1を埋め、礎石3・4を据えている。石垣2・3間のグリ石上には、現在の表土である1層を確認した。石垣1・2間も大半は現代の搅乱層で、これらの石垣を解体した時期は不明瞭である。

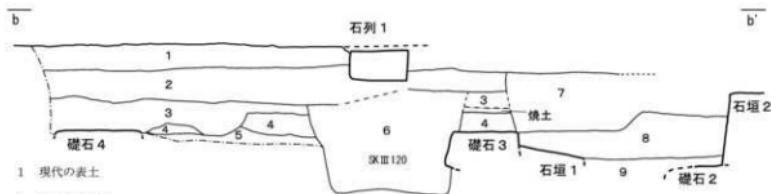
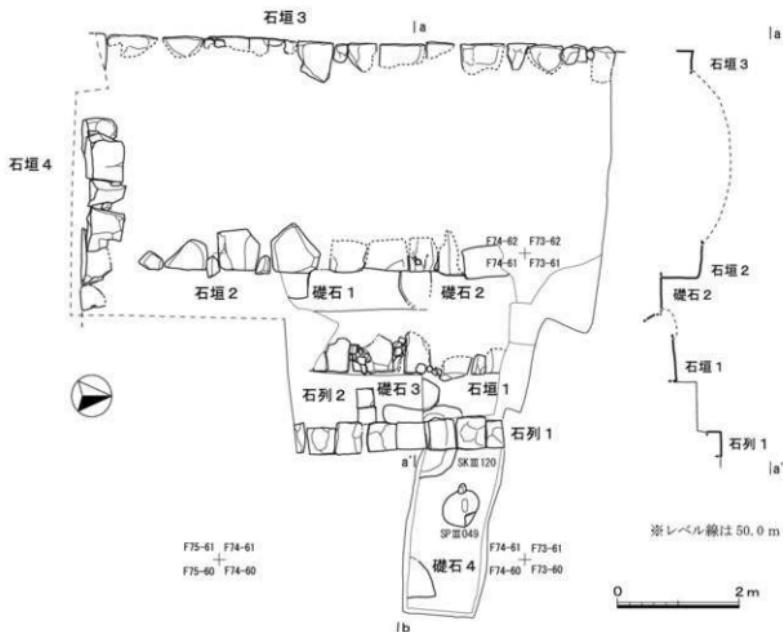
これらの遺構は重複関係にあり、認識できた前後関係をまとめる。最も先行するものは、礎石1・2と、石垣2・3である。石垣2・3は、御天守廊下土台石垣であり、検出面での幅は約3.7m。石垣2に先行する礎石1・2は、御天守廊下以前の建物に付随する可能性もあるが、石垣2構築時に撤去されなかった点と、石垣2との親和性から石垣2構築時に置かれた可能性が高いと考えている。次に石垣2の約1.7m東側に石垣1が設けられ、石垣2と礎石1・2はグリ石で埋められる。石垣1・3の検出面での幅は両端間で5.4m。石垣1が設けられた段階で、礎石1・2は機能を失ったと考えられる。「御城内御絵図」では、御天守廊下の途中が東に1間分、南北5間分拡張されたような表現がある。石垣1は、この拡張によるも

ので、石垣4と一連のものであったと想定する。石垣4の南端に便所の表現があるが、未確認である。石垣1・4を設けた後に礎石3・4が置かれ、さらに礎石3・4を埋めて石列2が設けられている。この石列2上に焼土層がある。石列2は「御城内御絵図」に描かれた御天守廊下と御宝蔵間の壁土台と思われ、焼土はⅢ層の可能性が高いと考えている。焼失時は「御城内御絵図」に描かれた状態と思われるが、描かれる前に幾度も改変が行われていたようである。今回の発掘調査では、御天守廊下の焼失状況については不明である。

御天守廊下の南の御札乃間南には入隅があり、石垣の重複関係がみられる。先行する石垣は縦使いの築石がみられるなど古い要素があり、後出する石垣も算木積が完成していない。この入隅の延長は、本調査区内では確認できていない。



第177図 御天守廊下 調査区位置図



第178図 遺構実測図125 御天守廊下 平面・断面図

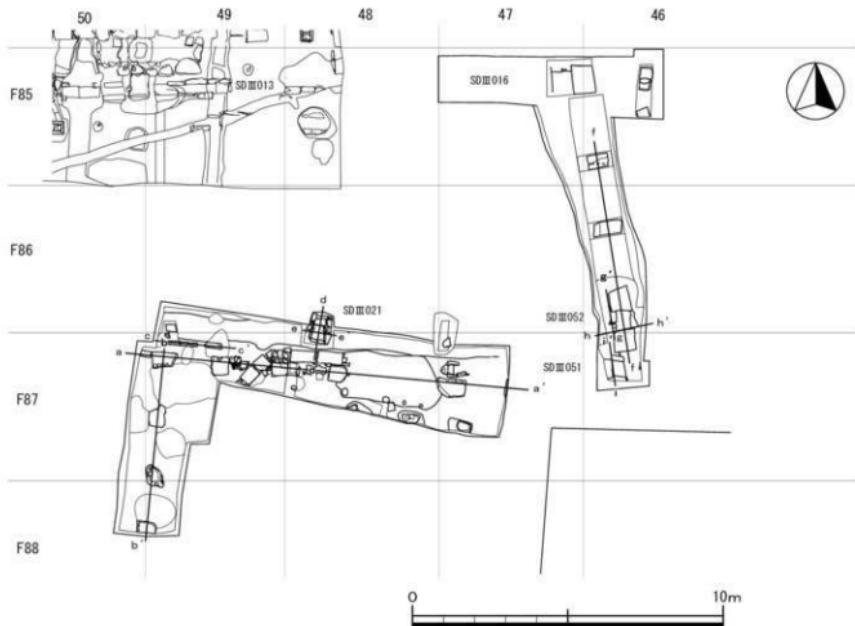
01 その他・トレンチ（第179図～第189図）

月見御台所トレンチ

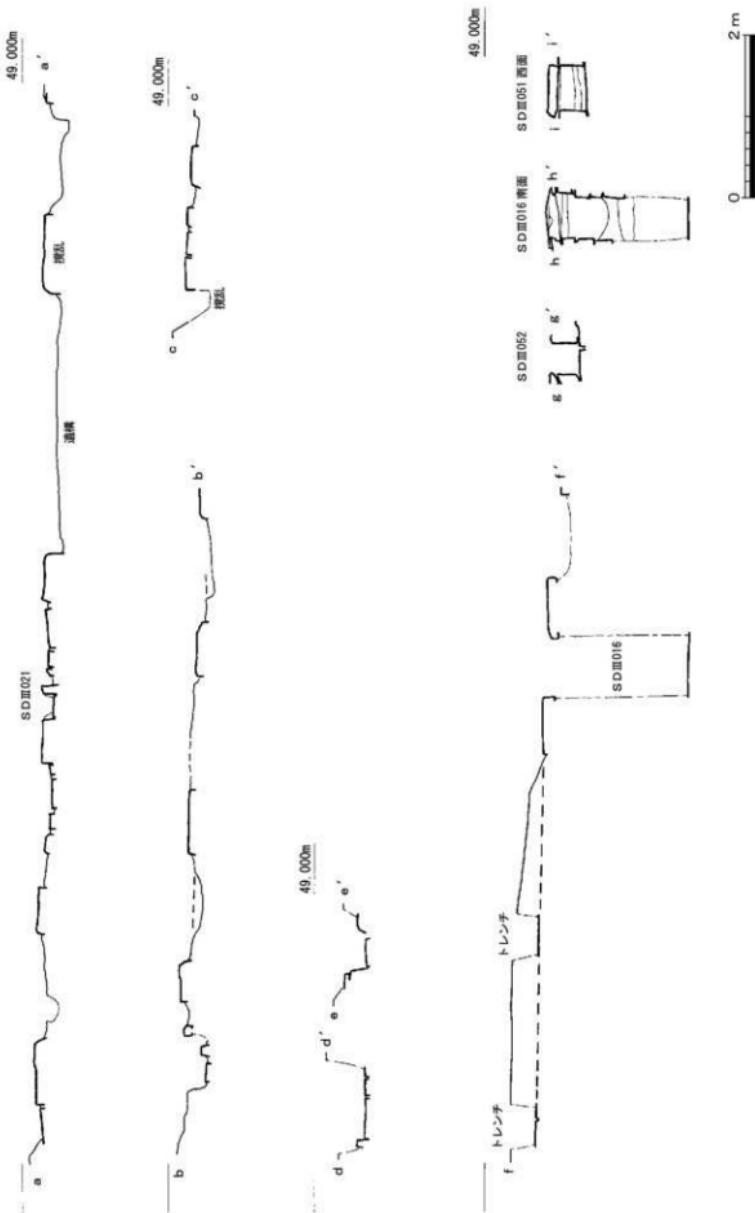
月見御台所の遺構を確認するため、F 86～88-47～50グリッドに東西長6m、南北長4mのL字形のトレンチを設定した。現地表面の標高は約49mである。表土と現代の擾乱を除去した時点で遺構が露出したため、Ⅲ層は掘り下げていない。

東西・南北方向の両トレンチで安山岩の礎石を検出した。「御城内御絵図」との比較から、月見御台所の北壁と間仕切りの土台の一部と考えている。礎石には被熱によるひび割れや剥離が認められたため、月見御台所も明治10年の火災で焼失したと考えている。検出した礎石から推測した柱間間隔は6尺5寸（約2m）であった。

東西方向のトレンチでは、Ⅲ層上面から掘り込まれた遺構も多くみられた。SD III 051は、トレンチ内で南西～北東方向から西～東方向へ向きを変える溝である。幅40cmの蓋石が架かり、内法で幅が25cm、深さが20cmである。石材は凝灰岩が主体で、蓋石の一部に安山岩、基底面には平瓦が使われ、接着剤として漆喰が使用されていた。SD III 051の南側では北～南方向の溝の一部と思われる凝灰岩の石組、北側ではSD III 021を検出した。SD III 021は内法で幅40cm、深さは20cm、石材はすべて凝灰岩である。南端に側石が立ち上がり、SD III 051には接続していなかった。トレンチの中央では長径約3m、短径1.8mの長楕円形の落ち込みを検出した。トレンチの北側では、ぐり石を敷き詰めた溝状遺構、南側では約2mの間隔で並ぶ礎石を検出した。いずれも西南戦争以降に城内を管轄した軍関係の施設に関連する遺構と考えている。F 85～87-46・47グリッドには、東西長約7m、南北長約9mのトレンチを設定した。ここでは、大御台所調査区の暗渠SD III 016が月見御台所東側石垣南面の排出口へ通じており、86～88-47～50グリッドのSD III 051がSD III 016に接続していることを確認した。SD III 016の南端近くには現代の雨水沟が設置され、排出口を再利用していた。



第179図 月見御台所トレンチ



第180図 遺構実測図126 月見御台所断面図

本丸御殿西側石垣の拡張状況をみるために、西側石垣裾に6箇所トレンチを設定した（第181図）。トレンチの名称はグリッド名を冠している。

F 81-66 トレンチ

猿幸之間下の石垣裾に設定したトレンチ。トレンチ規模は、猿幸之間下出隅から北方向に約6m、東西方向に約3m。現表土の標高は、36.0～36.5m。猿幸之間下出隅の石垣は、布目崩して積まれ、築石の形状が不安定なものが多い。間詰石も多く用いられている。北側の入隅の観察では、地蔵門側からの石垣との新旧関係はない。調査時この石垣裾には安山岩の置石が露出していた。この置石は猿幸之間下出隅から北方向に並び、さらに地蔵門側の東西方向の石垣裾にも並んでいる。トレンチ調査の結果、現地表面から40～50cm下で、風化凝灰岩層と灰白色粘質土を確認した。出隅の根石がこの層におさまっており、石垣構築時の基盤層になると判断した。碎石等を含む表土下には、瓦を含む黒褐色土とその下に瓦を含む暗褐色土を確認した。置石は黒褐色土中に収まる。よって、置石は石垣構築後のある段階に補強のために置かれた可能性が高い。置石の裾には川原石の根石が用いられている。他の石垣裾の状況と同じだが、置かれた時期は不明瞭である。

出隅には置石がなく、灰白色粘質土上面で石垣裾の掘形の可能性がある掘り込みラインを確認した。掘下げたところ、露出していた一番下の築石裾で安山岩の間詰石を確認した。これが根石となるようで、底面の標高は35.4mである。なお、この掘形からは縄文時代後期後半の土器片がまとまって出土した。縄文時代の遺構の重複と判断していたが、掘形埋土への混入の可能性もある。出土遺物には時期幅がある。出隅以外の石垣裾の状況は、置石の下であり確認できない。

F 82-63 トレンチ

本丸御殿敷数奇屋下の入隅に設けた。南北約3m、東西約5mで、現表土の標高は35.9～36.1m。トレンチ全体を標高約35.3mまで掘下げ、部分的にさらに掘下げて土層・根石を確認した。遺構はピットを10基確認したが、掘り込み面や埋土から大半は現代のものと想定している。この入隅の石垣は重複関係がみられ、数寄屋下の東西石垣に大広間側の南北石垣が乗る格好が観察できる。東西石垣は、布目崩して積まれ、築石の形状が不安定なものが多い。間詰石も多く用いられている。対して南北石垣は、布目積みで、築石の大きさも小さく、方形に近い形状に加工されている。間詰石も少ない。東西石垣の根石底面には間詰石がみられるが、南北石垣の底面にはみられない。東西石垣は1石、南北石垣は2石分が埋まっており、根石底面の標高は35.3mで東西・南北でほとんど差はない。東西・南北石垣ともに、根石の下は軟質の風化凝灰岩である。部分的に根石下40cm程度掘下げたが変化はない。出土遺物はなく自然堆積か人為層かの判断はできていない。

F 86-63 トレンチ

西廊下石垣の裾で階段の北東側に、南北方向に設定した。南北4.6m、東西1mで、現地表面の標高は35.5m。石垣は、布目積みで、築石の大きさも小さく、方形に近い形状に加工されている。間詰石も少ない。トレンチ中央の表土上に安山岩が1石あるが、これは現代に置かれたもので元位置ではない。トレンチの北端には現代の瓦溜りがあり、一部深掘りをしてその壁面を利用して現地表下1.4mまで土層の観察を行っている。また、南端は階段の天端石の裏側（北側）を現地表下60cmまで掘削し、土層の確認をしている。石垣は、現地表下に2段埋まっており、築石下にわずかに間詰石がみられた。築石の下部の標高は34.7m。築石の下部は軟質の風化凝灰岩で、出土遺物はなく自然堆積か人為層かの判断ができる。風化凝灰岩は西へ斜めに下がっており、その上に現地表面近くまで整地が行われている。南側の階段付近では、この整地層を切り込んで石垣根石付近に礫を入れている。礫は、階段の踏石の裏から連続しており、石垣の構築・整地・礫・階段の構築順が想定できる。このトレンチでは、石垣裾に対して安山岩の置石はみられなかった。

F87-63 トレンチ

階段下の東端に設定した。トレンチの規模は、南北2.8m、東西1.6m。現地表面の標高は33.7mほどである。トレンチ北端の表土直下で、埋没した階段の踏石を1段分確認した。これで踏石は10段となる。埋没した階段踏石は1段のみで、その南には石垣沿いの安山岩置石がみられる。置石は1段で、その下は厚さ30~50cmの版築土と、厚さ30~60cmの暗褐色土。いずれも整地層で、北から南へ緩やかに傾斜している。

F89-63 トレンチ

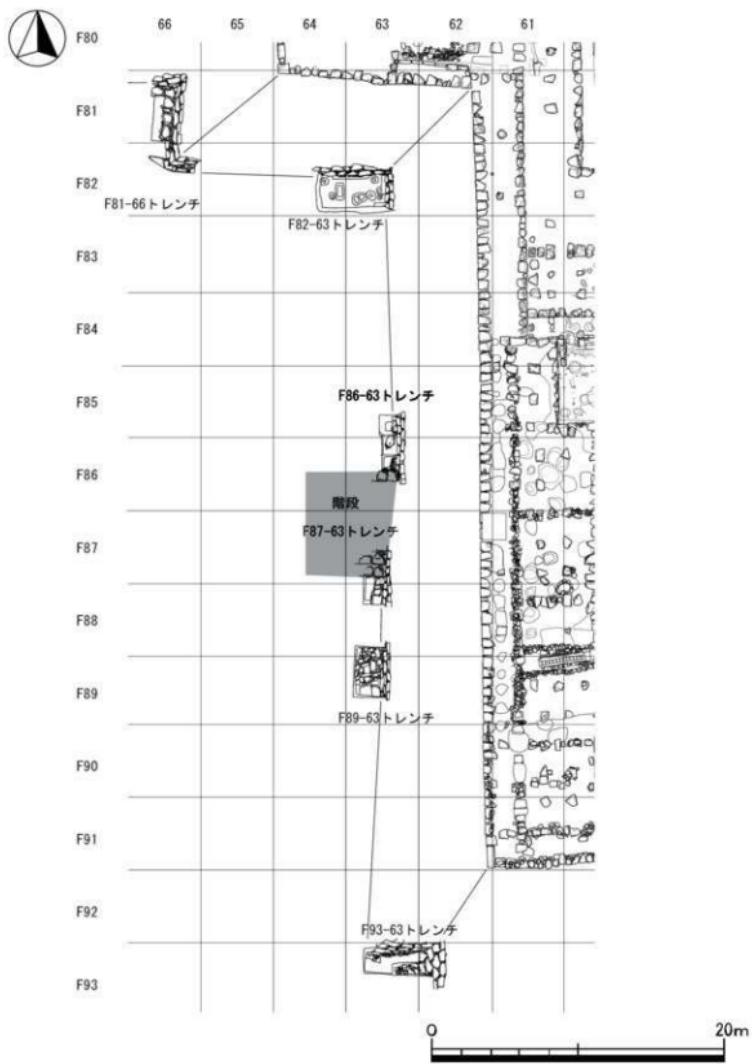
本丸御殿上からの排水口直下にトレンチを設定した。トレンチの規模は南北3.35m、東西2.3m。現地表面の標高は約33.5m。検出した遺構は石垣裾の置石と、溝である。排水口直下には、安山岩が敷かれている。数石が上面を揃えて配されており、東端は石垣に接している。敷石の範囲は南北140cm、東西170cmほどで、南西に向かって緩やかに下がっており、雨水を南西方向に誘導していた可能性がある。なお、この安山岩以下は掘削していないため、これが当時のものかは不明。この敷石上で凝灰岩板石等を側石として使用した溝を検出した。この溝は、敷石を底石として利用した簡易なもので、敷石から浮いた部分もあるなど敷石と一緒に作られたものとは考えられない。南西方向へ雨水を誘導するために設けたものであろう。側石の外側には安山岩や凝灰岩の礫が入れられている。側石の押さえのためであろう。この溝は近代以降の可能性が高い。

石垣裾には、敷石に乗る格好で安山岩置石が並べられている。石垣築造当時のものではない。溝の延長部分の一石は、溝の側石にもたれるほど不安定である。溝を設けた際に動かされた可能性が高い。さらに南には一石分の空間がある。この部分の石は昭和40年代に公園管理上の理由で抜いたとする証言があった。これを裏付けるように、この石の部分には表土が落ち込んでいた。

F93-63 トレンチ

城内で最も著名な二様の石垣裾部にトレンチを設定した。小広間三階御櫓石垣裾の西側出隅から東側入隅まで、東西約4.8m、南北1.7m。入隅での新旧石垣の重複については、東側の古い石垣を旧石垣、西側の新しい石垣を新石垣として区別する。現在の地表面の標高は約33mである。新石垣の出隅は現在地表に露出しているものの下に築石2石を確認した。出隅は三木積みだが、間詰石を多用している。根石となる下位の築石下にもわずかに間詰石がみられた。その他には明瞭な基礎構造はみられなかった。現地表面から根石までは120~140cm。旧石垣は、現地表下220cmで根石を確認した。

現地表下40cmは現代の整地層（1層）で、混入物の多い客土である。その下に25~50cm程の厚さで砂質土と粘質土の互層をなす整地層（2層）がみられる。出土遺物が無く時期は不明瞭だが、新石垣構築時の整地層と想定している。2層の下には凝灰岩風化土を主体とした整地土（3層）がみられる。約130cmの厚さがあり、混入物の差があり互層を成している。新石垣根石掘形は3層上位まで掘り込まれており、根石を設置した後で2層の整地が行われたようである。2層の上位には灰白色粘質土を多く含む。下位には礫が多くなる。3層の下には角礫の集中がみられ、旧石垣の根石はその角礫の上に乗っている。角礫の範囲はトレンチ底の60cm×60cm程度を確認したのみで、分布範囲や厚さなどは確認していない。角礫は、旧石垣の基礎地業で、3層は旧石垣段階の整地層と考えている。2層の上面には新石垣に沿って掘り込みがみられ、ぐり石に使用するような川原石を主体とした礫と土が充填されていた。

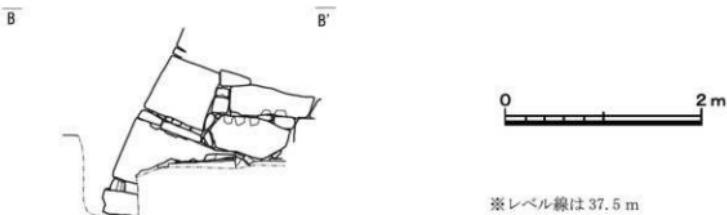
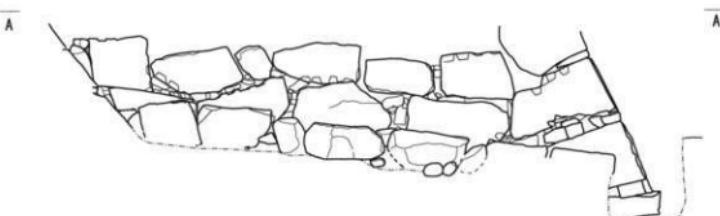
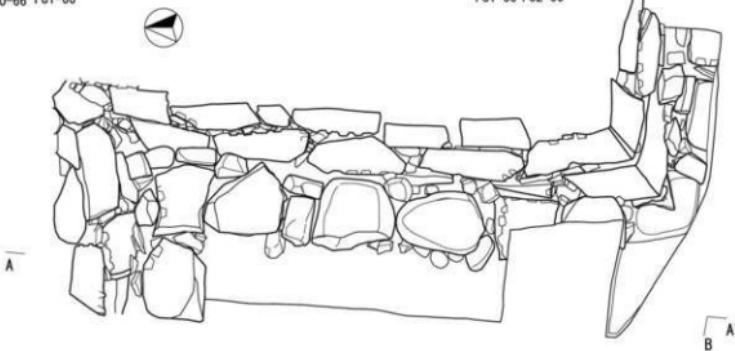


第181図 遺構実測図127 トレンチ位置図

F80-65, F81-65
F80-66, F81-66

F81-65, F82-65
F81-66, F82-66

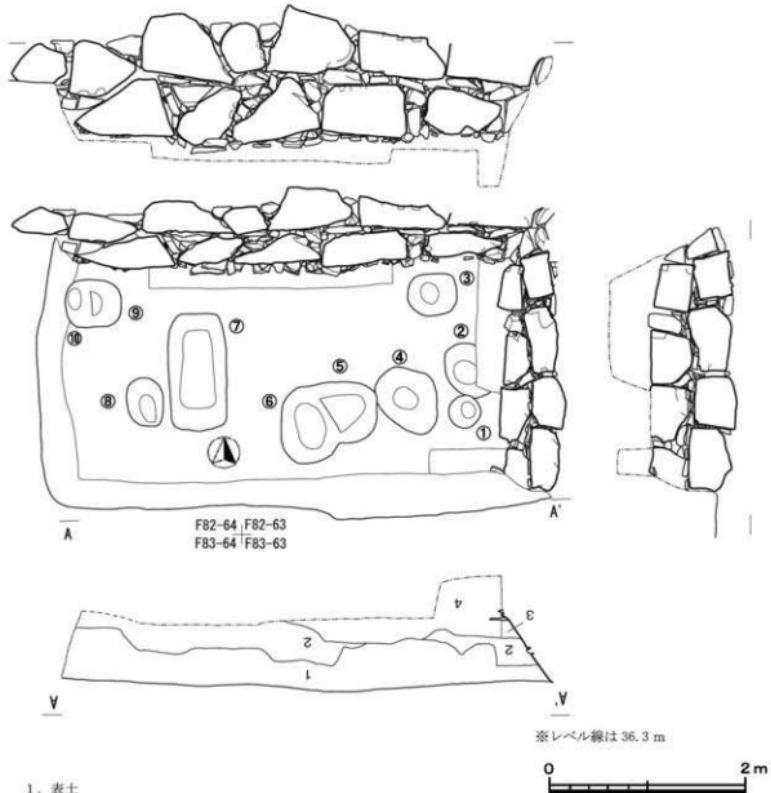
B'



0 2 m

※レベル線は 37.5 m

第182図 遺構実測図128 F81-66 トレンチ

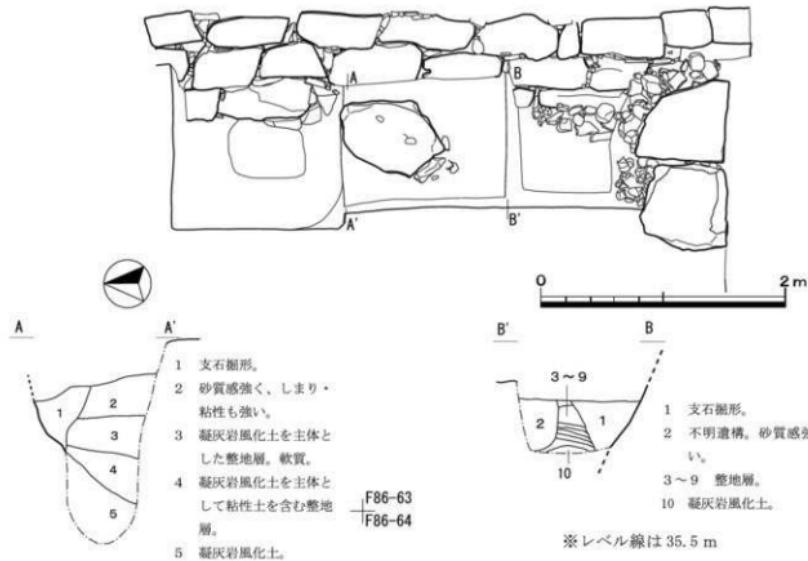


第183図 遺構実測図129 F82-63トレンチ

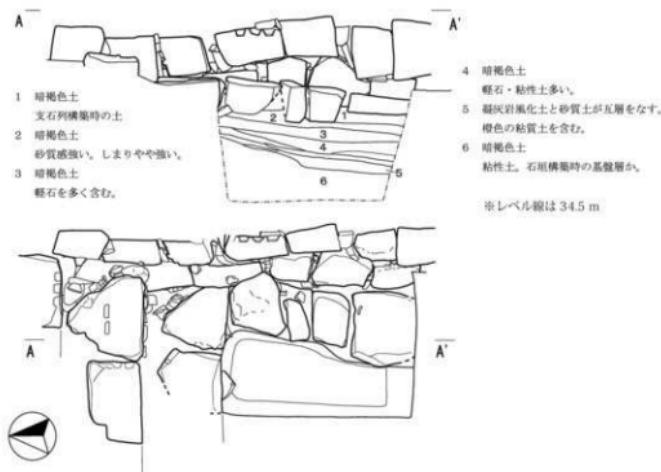
番号	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出高 (m)	下端高 (m)
(1)	S P III 050	32	32	35.3	34.8
(2)	S P III 051	58	(45)	35.3	35.2
(3)	S P III 052	50	42	35.3	35.1
(4)	S P III 053	72	58	35.3	35.2
(5)	S P III 054	(70)	60	35.3	35.2
(6)	S P III 055	78	(60)	35.3	35.1
(7)	S P III 056	118	58	35.4	35.0
(8)	S P III 057	50	38	35.4	35.3
(9)	S P III 058	46	(40)	35.3	35.1
(10)	S P III 059	46	30	35.3	35.1

* () は復元。高さは標高。

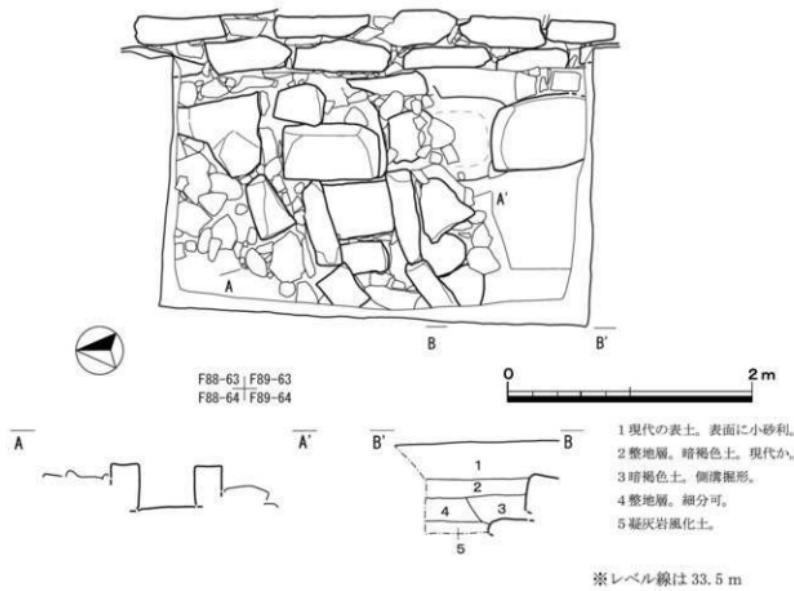
第4表 小穴一覧表



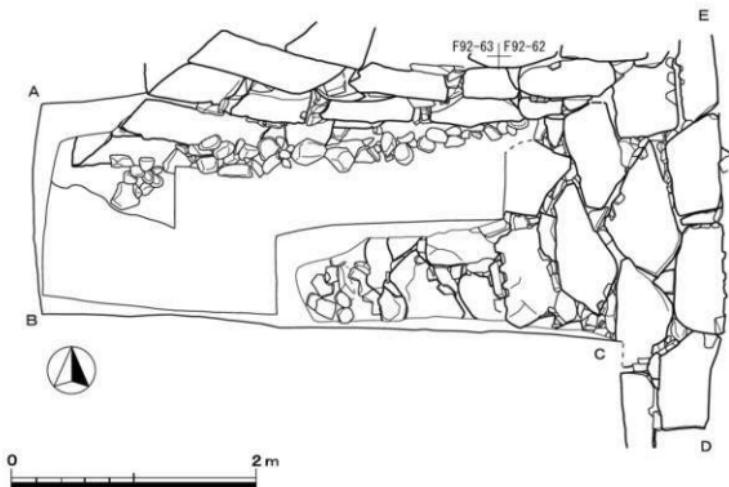
第184図 遺構実測図130 F86-63トレンチ



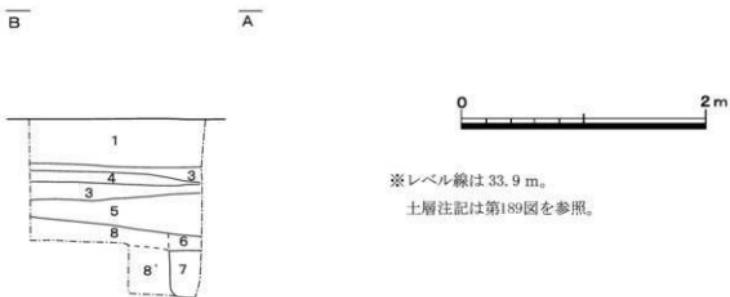
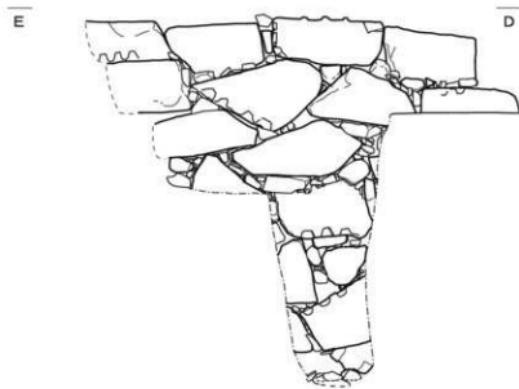
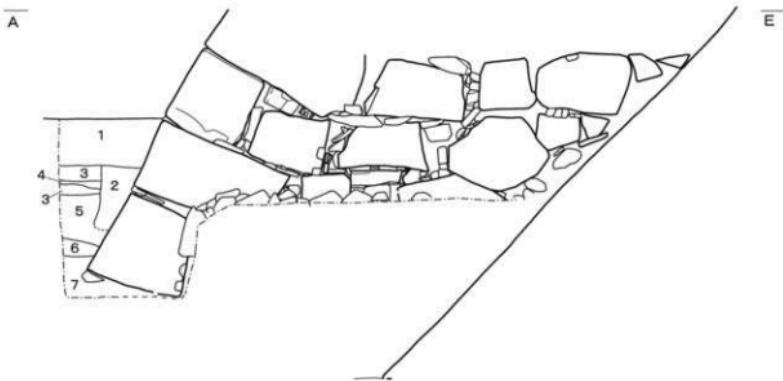
第185図 遺構実測図131 F87-63トレンチ



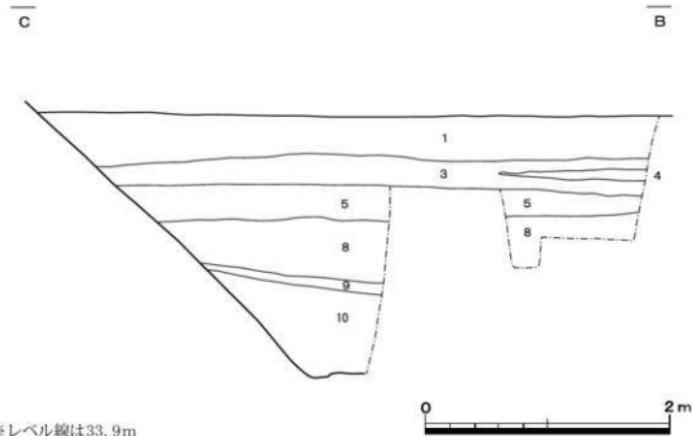
第186図 遺構実測図132 F89-63トレーニチ



第187図 遺構実測図133 F93-63トレーニチ平面図



第188図 遺構実測図134 F93-63トレーンチ断面図1



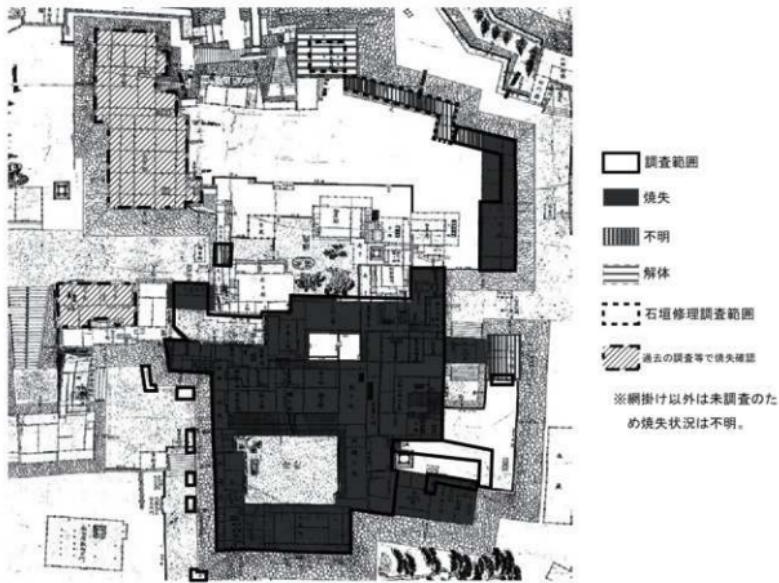
- 1 黒褐色土
現在の表土。表面は砂利で、瓦・焼土・炭化物など混入物多い。
- 2 褐色土
支石を入れた際の掘形。粘性強く。瓦・礫を含む。
- 3 暗褐色土
旧表土か。粘性強く、焼土・炭化物・瓦をわずかに含む。
- 4 3の中には灰白色の粘質土をレンズ状に含む。
- 5 灰黄褐色土
新石垣構築時の整地層か。砂質土・粘質土が互層をなす。
- 6 楪灰色土
砂質土・粘質土が互層をなす。
- 7 灰黄褐色土
粘質土と砂質土が混在。しまり強い。新石垣の掘形か。
- 8 楪灰色土
凝灰岩風化土。薄い粘質土が入り互層をなす。この層以下が旧石垣構築時の整地層か。
- 9 灰黄褐色土
粘土と砂質土が混在。しまり・粘性強い。
- 10 暗褐色土
砂質土を主体とし、礫を多量に含む。

第189図 遺構実測図135 F93-63トレーニング断面図2

01 焼失範囲について

今回の発掘調査で、本丸御殿の大半が焼失したことが明らかになった。焼土とともに多量の瓦や金具が焼けた状態で出土し、建物の部材が「御城内御絵図」と同位置で炭化材として残存しており、これらが本丸御殿建物群であることは確定的で、明治10（1877）年2月19日の火災で焼失した状態である。焼失範囲については、大広間・小姓部屋を含む大御台所・西廊下・三階御櫓を含む小広間・長之間・九曜之間・吉野之間・波之間・長局御櫓・耕作櫓門は確実に焼失している。月見御台所は、トレンチ調査で面的な確認ではないが焼失の可能性が高い。二櫓御門東の三階御櫓は、トレンチ調査を行ったが、近現代の搅乱が激しく焼失については不明である。石垣が焼損しており、二ノ櫓御門は焼失している。松之間は南東隅を確認したのみで面的な確認はできていないが、焼土と礎石の焼損を確認している。御天守廊下は、櫓台の石垣が撤去されており、今回の発掘調査では焼失の根拠を見出せていない。『熊本城跡発掘調査報告書3—石垣保存修理一』に詳述しているが、御裏五階御櫓焼失の根拠はなく火災前に解体されていたと考えられる。御裏五階御櫓から長局御櫓へ続く櫓は、石垣が撤去された部分が多く、焼失の根拠は見出せていない。家老之間や、松之間・御祈持所以北の建物群は、調査対象ではないため焼失状況は不明である。過去の調査や、石垣の焼損の観察から、大天守・小天守は焼失が確認されている。御弓蔵は火災痕が認められているが、古写真で西南戦争前に解体したことか確認できるので、解体後に設けられた建物が焼失した可能性が高い。

焼失状況については、小型の炭化材が多く出土した割りに大型の部材はみられないため、大型の部材は焼け残った上で撤去されたと想定している。大広間・大御台所・小広間・長局御櫓の礎石の焼損がより激しく、被熱は建物の規模に比例する可能性がある。特に間り通路・小広間穴蔵・長局御櫓穴蔵などのくほんだ部分の焼損が激しく、櫓台上よりくほんだ部分が熱の周りが激しかったことが想定される。落ち込んだ部材の量や外気の流入具合などで、燃焼時間にも差があった可能性がある。



第190図 本丸一帯焼失状況

第5表遺構一覧表

※遺構図作成の都合上、省略した遺構がある。また、調査後に遺構ではないと判断したものは
表中に欠番となっている
※石組溝は、幅の外法と内法をそれぞれ長軸・短軸とした。

単位はcm

遺構名	グリッド	調査区	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
S D I 001	F84-55~60	大広間	石組	55~60	18~22	35	
S D II 001	F85-87~60	西廊下	石組	50~88	20~34	25~30	
S D II 002	F86~88-59	露地		60	—	40	
S D III 001	F91-54~59	小広間		—	15	—	ぐり石上面の溝状遺構
S D III 002	F88-54~59	小広間	石組	—	40	16	
S D III 005	F84-50・51	大御台所	石組	48	22	15	
S D III 007	F84-49	大御台所		40	27	15	
S D III 008	F85-51・52	大御台所	石組	50	26	21	
S D III 010	F85-50	大御台所		58	40	25	
S D III 011	F83-84-49	大御台所	石組	64	30	25	
S D III 012	F85-51	大御台所	石組	72	20	22	
S D III 013	F85-49・50	大御台所	石組	62	26	26	
S D III 014	F84-50	大御台所		32	28	14	
S D III 015	F84・85-50	大御台所	石組	25	14	10	
S D III 016	F86-46	大御台所	石組	—	45	185	
S D III 017	F83-49	大御台所		60	18(管径)	—	
S D III 018	F83-48	大御台所	石組	55	40	27	
S D III 019	F88-54・55	小広間		44	18(管径)		
S D III 020	F86~88-53	長之間	石組	60	25	10	
S D III 021	F87-48	月見御台所		72	40	12	
S D III 022	F85-86-52	大御台所		—	30~70	40~50	
S D III 023	F80-52	大広間		—	26~32	40	四ツ辻暗渠
S D III 024	F80-53	大広間		34~40	20~24	10	四ツ辻暗渠
S D III 025	F88-59	露地	石組	40~50	17~22	15	有蓋、石材転用、近代
S D III 026	F88-58	露地		長さ150	幅20~25	15	土管、短い
S D III 027	F88-89-60・61	西廊下	石組	—	60	240~360	S X III 49から飯田丸へ排水する溝
S D III 028	F76-57	大広間(北)	石組	64	46	(20)	松の間東側
S D III 029	F77-57 F78-56	大広間(北)	石組	68	42	40	
S D III 030	F78-58・59	大広間(北)	石組	60	50	65	
S D III 031	F79-54~56	大広間(北)	石組	72.5	40	12.5~25	
S D III 032	F79-54	大広間(北)	石組	70	45	10~20	
S D III 033	F76-53・54	大広間(北)	石組	70	40	—	大銀杏南側
S D III 034	F78-58	大広間(北)	土管	65	30	—	土管
S D III 035	F77-53	大広間(北)	石組	70	25	(20)	石組み、近代
S D III 036	F76-49・50	御小姓部屋	石組	60	30	20	石組み・東西方向
S D III 037	F77-50	御小姓部屋	石組	55	32	20	石組み・南北方向
S D III 038	F76-49・50	御小姓部屋		60	—	10	抜取痕か
S D III 039	F76-49・50	御小姓部屋		(60)	—	8	抜取痕か
S D III 040	F75-49・50	御小姓部屋		20	—	—	
S D III 041	F76-51	御小姓部屋	石組	70	35	15	南北方向(東)
S D III 042	F76-51	御小姓部屋	石組	50	30	—	南北方向(西)
S D III 043	F77-51	御小姓部屋	石組	(60)	(30)	15	東西方向
S D III 044	F79-80・52	間り通路		50	—	15	II層内
S D III 045	F79-52	間り通路		40	28	12	II層内
S D III 046	F78-52	間り通路	一部石組	66	46	15	
S D III 047	F80-53・F81-52	間り通路	石組	70	25	32	II層～III層上面
S D III 048	F82-52	間り通路	石組	60~90	40	30	
S D III 049	F80-59~	間り通路	石組	55	30	20	間通路から間門外へ続く溝
S D III 050	F89-63	石組		90	50	35	
S D III 051	F87-46	月見御台所	石組	—	54	34	
S D III 052	F86-46	月見御台所	石組	—	38	38	
S D III 053	F68~75-47	長局御櫓	石組	80~110	36~48	46	
S D III 054	F70-73-48	長局御櫓	石組	45~50	38	23	
S D III 055	F83-85-52	大御台所	石組	32~40	20~40	5~12	

遺構名	グリッド	調査区	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
S D III 056	F85-48・49	大御台所	石組	62	33	—	埋没した溝
S K I 002	F83-55・56	大広間	—	250	220	156	
S K I 006	F82・83-56	大広間	楕円形	140	120	56	
S K I 007	F83-55	大広間	不整形	200	100	110	
S K I 008	F84-54	大広間	円形	80	80	25	
S K I 009	F84-55	大広間	方形	60	60	35	
S K II 001	F86-61	西廊下	楕円形	92	80	48	
S K II 002	F86-61	西廊下	楕円形	145	93	52	
S K II 003	F85-60	西廊下	楕円形	66	60	25	
S K II 004	F85-60	西廊下	楕円形	60	56	24	
S K II 005	F86-61	西廊下	楕円形	128	124	52	
S K II 006	F86-61	西廊下	不整楕円形	172	160	54	
S K II 007	F86-61	西廊下	楕円形	—	160	57	
S K II 008	F87-61	西廊下	楕円形	118	106	47	
S K II 009	F88-61	西廊下	楕円形	66	60	22	
S K II 010	F88-61	西廊下	楕円形	70	63	36	
S K II 011	F88-61	西廊下	楕円形	124	100	48	
S K II 012	F87-61	西廊下	楕円形	98	86	20	
S K II 013	F86-60・61	西廊下	楕円形	90	68	26	
S K II 014	F88-60	西廊下	楕円形	80	78	76	
S K II 015	F87-60	西廊下	楕円形	80	72	44	
S K II 017	F90・91-59	小広間	楕円形	187	120	18	
S K II 018	F87-60	西廊下	楕円形	82	78	46	
S K II 019	F87-60	西廊下	楕円形	82	78	38	
S K II 020	F87-60	西廊下	楕円形	80	62	46	
S K II 021	F90-58	小広間	楕円形	82	68	39	
S K II 022	F91-58	小広間	楕円形	78	56	20	
S K II 024	F90-58・59	小広間	—	126	120	63	
S K II 025	F90-59	小広間	円形	188	186	37	
S K II 028	F87-59	露地	楕円形	238	160	—	
S K II 030	F85・86-59	露地	円形	124	120	40	
S K III 001	F91-57	小広間	楕円形	86	74	27	
S K III 002	F90-54・55	小広間	楕円形	108	102	21	
S K III 003	F89-55	小広間	不定形	160	76	30	
S K III 004	F89-55	小広間	楕円形	134	120	67	
S K III 005	F90-55	小広間	楕円形	104	90	53	
S K III 010	F84-51・52	大御台所	不定形	320	310	40	
S K III 011	F84-52	大御台所	楕円形	70	60	26	
S K III 012	F83-49	大御台所	楕円形	106	84	33	
S K III 013	F83-49	大御台所	楕円形	146	116	42	
S K III 015	F84-49	大御台所	楕円形	160	150	22	
S K III 016	F84-49	大御台所	不定形	160	120	20	
S K III 017	F85-50	大御台所	楕円形	78	78	17	
S K III 018	F85-50	大御台所	隅丸方形	82	80	24	
S K III 019	F84-49	大御台所	不定形	68	68	8	
S K III 020	F84-49	大御台所	楕円形	74	53	24	
S K III 021	F84-50	大御台所	不定形	62	58	53	
S K III 022	F84-49・50	大御台所	楕円形	88	68	40	
S K III 023	F84-49	大御台所	不定形	110	104	76	
S K III 024	F85-49・50	大御台所	不定形	140	106	90	
S K III 025	F84-51	大御台所	楕円形	150	130	70	
S K III 026	F84-50	大御台所	楕円形	108	102	60	
S K III 027	F85-49	大御台所	楕円形	100	87	40	
S K III 028	F84-48	大御台所	—	50	80	—	
S K III 029	F85-52	大御台所	不定形	170	90	25	
S K III 032	F84-48	大御台所	—	—	—	—	
S K III 034	F85-48	大御台所	楕円形	130	110	27	
S K III 038	F84-48	大御台所	—	90	65	—	
S K III 039	F84-60	大広間	不定形	224	170	38	

造構名	グリッド	調査区	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
S K III 041	F88 - 53	長之間	梢円形	62	51	44	
S K III 042	F88 - 53	長之間	不定形	40	54	44	
S K III 043	F86 - 55	露地	梢円形	98	94	20	
S K III 044	F87 - 53	長之間	梢円形	55	44	40	
S K III 045	F87 - 53	長之間	隅丸長方形	52	42	20	
S K III 047	F88 - 56	露地	不整梢円形	160	156	52	
S K III 048	F85 - 59	露地	不整梢円形	174	150	22	
S K III 049	F86 - 57	露地	梢円形	200	180	20	
S K III 050	F86 - 87 - 57	露地	梢円形	180	80	36	
S K III 051	F85 - 56 - 57	露地	不整梢円形	360	180	35	
S K III 052	F86 - 56	露地	不整梢円形	268	140	46	
S K III 053	F86 - 56	露地	不整梢円形	270	200	43	
S K III 054	F86 - 87 - 55	露地	梢円形	320	238	76	
S K III 055	F85 - 55	露地	不定形	203	200	66	
S K III 056	F85 - 86 - 56 - 57	露地	梢円形	300	200	68	
S K III 057	F86 - 55	露地	不整梢円形	328	248	74	
S K III 058	F86 - 87 - 56	露地	梢円形	208	150	43	
S K III 059	F85 - 56	露地	梢円形	600	390	96	
S K III 060	F86 - 56	露地	梢円形	260	170	123	
S K III 061	F86 - 55	露地	—	—	240	87	
S K III 062	F87 - 56	露地	—	174	90	116	
S K III 063	F86 - 55	露地	—	—	300	62	
S K III 064	F85 - 55	露地	梢円形	—	340	64	
S K III 065	F86 - 56	露地	梢円形	400	260	71	
S K III 066	F86 - 56	露地	隅丸方形	180	180	64	
S K III 067	F85 - 56	露地	不整梢円形	170	120	37	
S K III 068	F85 - 55	露地	—	—	110	—	
S K III 069	F85 - 86 - 55	露地	不定形	270	130	85	
S K III 070	F86 - 57	露地	—	—	75	42	
S K III 071	F86 - 87 - 55	露地	不定形	292	140	100	
S K III 072	F87 - 55	露地	不整梢円形	380	140	67	
S K III 073	F85 - 86 - 55 - 56	露地	—	—	170	—	
S K III 074	F87 - 55 - 56	露地	不整梢円形	354	170	104	
S K III 075	F85 - 55	露地	不定形	290	212	24	
S K III 076	F87 - 55	露地	不定形	262	92	71	
S K III 077	F87 - 56	露地	—	—	60	—	
S K III 078	F87 - 46	月見御台所	—	—	120	17	
S K III 079	F87 - 56	露地	—	—	48	—	
S K III 080	F87 - 88 - 58	露地	不定形	340	340	39	
S K III 081	F88 - 59	露地	—	—	50	—	
S K III 082	F87 - 59	露地	梢円形	174	108	—	
S K III 083	F88 - 58 - 59	露地	不整梢円形	320	240	109	
S K III 084	F87 - 56	露地	梢円形	78	70	62	
S K III 085	F87 - 88 - 58 - 59	露地	不整梢円形	210	170	70	
S K III 086	F88 - 59	大広間	不整梢円形	170	65	86	
S K III 087	F84 - 57	大広間	不定形	285	250	40	
S K III 088	F84 - 57	大広間	円形	96	94	32	
S K III 089	F86 - 57	大広間	円形	98	95	50	
S K III 090	F85 - 57	大広間	不定形	106	60	5	
S K III 091	F82 - 53	間り通路	不定形	320	320	78	
S K III 092	F87 - 56	露地	梢円形	118	86	—	
S K III 093	F89 - 57	小広間	円形	55	55	20	
S K III 094	F89 - 57	小広間	円形	92	86	25	
S K III 095	F89 - 57	小広間	円形	80	80	25	
S K III 096	F89 - 58	小広間	不整円形	200	170	45	
S K III 097	F88 - 59	露地	—	—	—	—	
S K III 098	F88 - 59	露地	—	—	—	—	
S K III 099	F88 - 59	露地	—	—	—	—	
S K III 100	F88 - 59	露地	—	—	—	—	

造構名	グリッド	調査区	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
S K III 101	F79~57	大広間(北)		200	150		
S K III 102	F79~56	大広間(北)		220	75	58	
S K III 104	F75~49・50	御小姓部屋	方形	111	90	61	
S K III 105	F76~50	御小姓部屋		66	34	31	
S K III 106	F76~50	御小姓部屋		72	56	15	
S K III 107	F76~50	御小姓部屋	方形	60	48	19	
S K III 108	F77~50	御小姓部屋	方形	74	54	13.6	
S K III 109	F77~50	御小姓部屋		86	70	10	
S K III 110	F77~50	御小姓部屋		74	60	—	
S K III 111	F76~49	御小姓部屋		250	58	10.7	
S K III 112	F76~49	御小姓部屋	方形	64	54	11	
S K III 113	F77~49	御小姓部屋		112	76	26.5	
S K III 114	F77~49	御小姓部屋	円形	90	74	21.3	
S K III 115	F77~49	御小姓部屋		108	50	27	
S K III 116	F76~50	御小姓部屋		52	30	3.5	
S K III 117	F78~49	御小姓部屋		78	66		
S K III 120	F74~61	御天守廊下	隅丸方形	115	(60)	70	
S K III 121	F85~63			(85)	60	130	
S K III 122	F87~54	長之間		—	—	18	
S K III 123	F87~54	長之間		—	44	15	
S K III 124	F87~54	長之間		50	35	40	
S J II 001	F86~60	西廊下	梢円形	72	70	75	
S J III 001	F89~56	小広間	円形	48	42	45	
S J III 002	F89~56	小広間	円形	42	39	43	
S J III 003	F89~57	小広間	円形	40	—	—	上面確認のみ
S J III 004	F89~58	小広間	円形	45	—	—	上面確認のみ
S J III 005	F89~59	小広間	円形	50	45	—	上面確認のみ
S J III 006	F88~55	長之間	円形	58	54	—	上面確認のみ
S J III 007	F87~53	長之間	円形	50	38	—	上面確認のみ
S J III 008	F87~53	長之間	円形	42	38	—	上面確認のみ
S J III 009	F84~48	大御台所	円形	50	48	30	埋甕
S J III 010	F83~48	大御台所	円形	—	—	40	埋甕
S J III 011	F84~48	大御台所	円形	50	—	—	S D III 018上
S J III 012	F84~48	大御台所	円形	46	44	40	埋甕
S J III 013	F84~48	大御台所	円形	50	—	40	S D III 018上
S J III 014	F79~55	大広間(北)	円形	45	40	—	上面確認のみ
S J III 015	F79~55	大広間(北)	円形	52.5	50	—	上面確認のみ
S J III 016	F78~55	大広間(北)	円形	55	52.5	—	上面確認のみ
S J III 017	F78~55	大広間(北)	円形	55	50	—	上面確認のみ
S J III 018	F78~56	大広間(北)	円形	45	40	5	上面確認のみ
S J III 019	F79~56	大広間(北)	円形	75	80	115	4分の1掘下げ
S J III 020	F80~55	大広間(北)	円形	55	50	—	上面確認のみ
S J III 021	F77~50	御小姓部屋	円形	30	—	20	
S J III 022	F77~50	御小姓部屋	円形	30	—	50	
S J III 023	F78~50	御小姓部屋	円形	30	—	26	
S J III 024	F78~50	御小姓部屋	円形	30	—	32	
S J III 025	F75~49	御小姓部屋	円形	60	—	55	
S J III 026	F75~49	御小姓部屋	円形	50	48	40	
S B II 001	F86~88~59~60	露地	長方形	760	300	—	
S B II 002	F86~87~59	露地	—	(90~130)	—	—	
S B III 002	F84~49	大御台所	—	70	—	S B III 013と一連?	
S B III 004	F85~51	大御台所	—	—	—	—	
S B III 005	F83~48	大御台所	—	56~70	—	S B 06と一連か	
S B III 008	F88~53	長之間	—	60~102	—		
S B III 009	F87~54	長之間	—	78~90	—		
S B III 011	F86~87~58	露地	—	68~86	—		
S B III 013	F83~84~50	大御台所	—	75	—	35	
S B III 013	F85~50	大御台所	—	140	50	—	
S B III 013	F83~85~50	大御台所	—	75~140	35~50	—	

造構名	グリッド	調査区	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
S B III 014	F73・74-45	長局御櫓		260	90	—	配石
S B III 015	F73-46	長局御櫓		540	280	—	配石
S L III 001	F84-50	大御台所	不定形	85	25	—	カマド灰層の径
S L III 002	F84-50	大御台所	不定形	110	28	—	カマド灰層の径
S L III 003	F84-49	大御台所	不定形	88	25	—	カマド灰層の径
S L III 004	F84-49	大御台所	不定形	98	42	—	カマド灰層の径
S P I 002	F81-61	大広間		60	30	22	
S P I 003	F81-61	大広間	楕円形	50	35	18	
S P I 005	F82-55	大広間	楕円形	44	40	78	
S P I 006	F84-55	大広間	楕円形	34	18	14	
S P I 007	F83-59	大広間	隅丸方形	56	52	22	
S P I 008	F83-59	大広間	楕円形	35	26	23	
S P I 009	F83-60	大広間		48	30	16	
S P I 010	F83-60	大広間	隅丸方形	38	38	20	
S P I 011	F83-56	大広間	楕円形	36	24	38	
S P I 012	F83-56	大広間	楕円形	36	32	44	
S P I 013	F83-56	大広間	楕円形	36	30	39	
S P I 014	F83-60	大広間	不整楕円形	60	50	22	
S P I 015	F83-60	大広間	不整楕円形	31	28	28	
S P I 016	F83-60	大広間	楕円形	35	22	18	
S P I 017	F83-60	大広間	(楕円形)	—	36	10	
S P I 018	F83-60	大広間	(楕円形)	—	32	21	
S P I 019	F83-60	大広間	楕円形	30	28	16	
S P I 020	F83-60	大広間	(楕円形)	—	16	23	
S P I 021	F83-60	大広間	(楕円形)	—	16	17	
S P I 022	F83-60	大広間	長方形	50	44	17	
S P I 023	F82-55	大広間	楕円形	86	62	105	掘立柱建物か
S P I 024	F83-55	大広間	隅丸長方形	60	40	—	
S P I 025	F82-54	大広間	楕円形	60	40	98	掘立柱建物か
S P I 026	F83-54	大広間	不整楕円形	76	72	75	掘立柱建物か
S P I 027	F83-54	大広間	不整楕円形	62	54	110	掘立柱建物か
S P I 028	F82-54	大広間	不整楕円形	70	50	115	掘立柱建物か
S P I 029	F83-55	大広間	楕円形	60	57	84	掘立柱建物か
S P I 030	F83-55	大広間	楕円形	64	52	102	掘立柱建物か
S P I 031	F82-55	大広間	楕円形	78	60	110	掘立柱建物か
S P I 032	F83-54	大広間	楕円形	56	50	—	掘立柱建物か
S P I 033	F83-54	大広間	(楕円形)	70	55	—	掘立柱建物か
S P I 034	F82-56	大広間	楕円形	70	64	42	掘立柱建物か
S P I 035	F82-56	大広間	(楕円形)	—	64	45	掘立柱建物か
S P I 036	F82-57	大広間	楕円形	62	56	50	掘立柱建物か
S P I 037	F82-57	大広間	楕円形	46	38	10	掘立柱建物か
S P I 038	F82-57	大広間	(楕円形)	—	48	43	
S P I 039	F82-58	大広間	(楕円形)	70	50	48	
S P II 001	F87・88-60	露地	円形	36	36	60	
S P II 002	F86-60	露地	円形	36	36	20	
S P III 001	F88-56	露地	長方形	16	14	30	
S P III 002	F88-55	露地	長方形	16	14	—	
S P III 003	F88-55	露地	円形	26	26	13	
S P III 006	F84-49	大御台所	楕円形	42	32	47	
S P III 007	F84-49	大御台所	楕円形	44	38	40	
S P III 008	F84-49	大御台所	楕円形	40	32	70	
S P III 009	F84-49	大御台所	円形	34	34	43	
S P III 010	F84-49	大御台所	楕円形	—	40	35	
S P III 011	F84-49	大御台所	楕円形	—	17	—	
S P III 012	F84-49	大御台所	楕円形	—	30	43	
S P III 013	F84-50	大御台所	—	30	20	—	
S P III 014	F85-51	大御台所	—	—	78	50	
S P III 015	F85-51	大御台所	楕円形	50	40	—	
S P III 016	F84-51	大御台所	楕円形	36	32	—	

造構名	グリッド	調査区	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
S P III 017	F84- 51	大御台所	楕円形	30	24	—	
S P III 018	F84- 51	大御台所	楕円形	38	36	45	
S P III 019	F84- 51	大御台所	楕円形	50	36	72	
S P III 020	F84- 50	大御台所	楕円形	—	—	—	
S P III 021	F84- 51	大御台所	—	—	28	18	
S P III 022	F83- 51	大御台所	円形	33	32	40	
S P III 023	F84- 50	大御台所	楕円形	30	26	—	
S P III 026	F84- 50	大御台所	楕円形	44	34	—	
S P III 027	F84- 50	大御台所	楕円形	20	18	—	
S P III 028	F84- 50	大御台所	円形	42	40	—	
S P III 029	F85- 56	露地	—	—	54	6	
S P III 030	F84- 60	大御台所	楕円形	70	60	35	
S P III 031	F84- 60	大御台所	不定形	70	64	35	
S P III 032	F85- 56	露地	隅丸長方形	50	34	14	
S P III 049	F74- 61	御天守廊下	楕円形	60	58	46	
S P III 050~59	F82- 63	トレーナー					第4表参照
S X I 001	F80- 61	大広間	不定形	85	80	15	
S X I 002	F80- 61	大広間	楕円形	90	76	30	
S X I 002	F80- 61	大広間	楕円形	90	76	30	
S X I 003	F82- 60・61	大広間	隅丸方形	—	190	—	
S X I 004	F82- 57	大広間	不整形	300	160	78	
S X I 005	F82・83- 56	大広間	方形	170	170	?	
S X I 006	F83・84- 55	大広間		560	270	—	
S X II 002	F86- 59	露地	長方形	370	170	110	漆喰塗り
S X II 003	F91- 58	小広間	不定形	340	220	—	
S X II 004	F90- 58	小広間	不定形	—	—	—	
S X III 002	F89- 55~	小広間		50	20	—	小広間北壁幅の根固め漆喰
S X III 003	F83- 50	大御台所	不定形	85	75	23	現代マス
S X III 004	F84- 50	大御台所	楕円形	184	180	6	現代ポンプ
S X III 005	F87- 53	長之間	長楕円形	370	150	—	割石等の集石
S X III 007	F87- 54	長之間	長楕円形	100	270	—	
S X III 008	F87- 54	長之間	長楕円形	80	160	—	
S X III 011	F87- 58	露地	楕円形	77	66	43	S B II 002の東石
S X III 012	F87- 58	露地	楕円形	80	78	26	S B II 002の東石
S X III 013	F87- 57	露地	楕円形	80	70	24	S B II 002の東石
S X III 014	F87- 57	露地	—	—	106	23	S B II 002の東石
S X III 015	F87- 56	露地	楕円形	80	75	23	S B II 002の東石
S X III 016	F87- 58	露地	—	—	150	45	S B II 002の東石
S X III 017	F86- 57	露地	楕円形	102	94	18	S B II 002の東石
S X III 018	F86・87- 57	露地	楕円形	124	92	33	S B II 002の東石
S X III 019	F88- 55	露地	楕円形	—	82	14	S B II 002の東石
S X III 020	F88- 56	露地	楕円形	84	68	18	S B II 002の東石
S X III 021	F88- 56	露地	—	—	—	34	S B II 002の東石
S X III 022	F87- 56	露地	円形	70	74	22	S B II 002の東石
S X III 023	F88- 55・56	露地	楕円形	166	110	20	S B II 002の東石
S X III 024	F87- 56	露地	楕円形	98	74	11	S B II 002の東石
S X III 025	F88- 56	露地	楕円形	76	68	22	S B II 002の東石
S X III 026	F87- 56	露地	楕円形	66	57	12	S B II 002の東石
S X III 027	F87- 55	露地	—	—	94	14	S B II 002の東石
S X III 028	F87- 56	露地	—	88	72	25	S B II 002の東石
S X III 029	F88- 57	露地	—	80	66	32	S B II 002の東石
S X III 030	F87- 58	露地	円形	62	60	20	S B II 002の東石
S X III 031	F88- 57	露地	楕円形	76	70	18	S B II 002の東石
S X III 032	F87・88- 58	露地	円形	60	58	25	S B II 002の東石
S X III 033	F87- 58	露地	楕円形	92	74	27	S B II 002の東石
S X III 034	F87- 57	露地	楕円形	82	76	26	S B II 002の東石
S X III 035	F87- 58	露地	楕円形	84	72	6	S B II 002の東石
S X III 036	F87- 58	露地	円形	76	75	40	S B II 002の東石
S X III 037	F87- 57	露地	楕円形	90	78	30	S B II 002の東石

遺構名	グリッド	調査区	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
S X III 038	F87 - 57	露地	楕円形	—	72	23	S B II 002の東石
S X III 039	F87 - 57	露地	円形	90	88	22	S B II 002の東石
S X III 040	F88 - 57	露地	不定形	65	—	23	S B II 002の東石
S X III 041	F87 - 57	露地	—	—	76	19	S B II 002の東石
S X III 042	F87 - 55・56	露地	楕円形	172	110	—	S B II 002の東石
S X III 043	F87 - 58	露地	隅丸方形	66	60	8	S B II 002の東石
S X III 044	F87 - 55・56	露地	—	80	—	13	S B II 002の東石
S X III 045	F87 - 56	露地	楕円形	90	—	17	S B II 002の東石
S X III 046	F87 - 58	露地	楕円形	90	82	30	S B II 002の東石
S X III 047	F87 - 57	露地	楕円形	120	100	—	S B II 002の東石
S X III 048	F87 - 58	露地	楕円形	64	56	21	S B II 002の東石
S X III 049	F88 - 60	露地	方形・石組	—	南北116	85	S D III 002・027間のマス
S X III 050	F89 - 61	西廊下	楕円形・石組	80	60	—	—
S X III 051	F79 - 58	大広間(北)	方形	147.5	120	90	最大長さ150cm 最小長さ125cm
S X III 052	F78 - 58	大広間(北)	—	50	50	58	現代か
S X III 053	F79 - 54	大広間(北)	—	220	90～160	最大80	防空壕か
S X III 054	F78 - 56・57	大広間(北)	楕円形	535	305	—	現代の池
S X III 055	F77 - 49	御小姓部屋	—	—	—	—	—
S X III 056	F75 - 76 - 49	御小姓部屋	—	260	70	—	防空壕か
S X III 057	F80 - 50・51	御小姓部屋	—	330	250	60	—
S X III 058	F76 - 77 - 50	御小姓部屋	—	420	190	90	防空壕
S X III 059	F78 - 50	御小姓部屋	—	298	122	66	—
S X III 060	F79 - 50・51	御小姓部屋	—	380	268	58.5	—
S X III 075	F72 - 45	長局御櫓	—	428	175	72	防空壕
S X III 076	F69 - 70 - 45	長局御櫓	—	415	130	64	防空壕
S X III 077	F84 - 60	大広間	—	70	60	30	石組
S X III 078	F87 - 88 - 59	露地	—	500	350	—	—

熊本城調査研究センター報告書 第2集

熊本城跡発掘調査報告書 2

- 本丸御殿の調査 -

第1分冊

2016年3月

発行 熊本市熊本城調査研究センター

〒860-0007 熊本市中央区古京町1-1

TEL (096) 355-2327

印刷 コロニー印刷

〒860-0051 熊本市西区二本木3丁目12-37

TEL (096) 353-1293